

2012年7月号（第315号）昭和61年7月8日第三種郵便物認可　平成24年6月19日発行　毎月1回19日発行

住宅特集

新建築

315
7
2012
SHINKENCHIKU
JUTAKUTOKUSHU

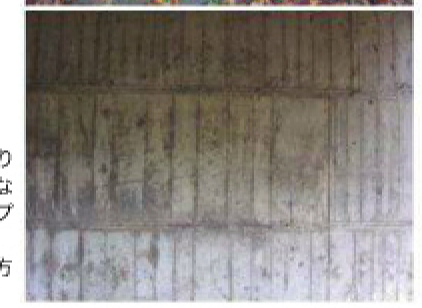
作品／十三題

塚田眞樹子
吉村昭範＋吉村真基　名和研二
矢板久明＋矢板直子
寶神尚史
木村吉成＋松本尚子
谷尻誠　大野博史
山口隆
宇野求＋青木俊実＋竹内晶洋
庄司寛
高山正樹＋岡田美子
相川直子＋佐藤勤
須賀定邦
横内敏人

連載
建築家自邸からの家学び

新連載
家をつくる図面





上：「軽井沢の山荘」。つくり込みすぎないように、さりげなく土に石が埋め込まれたアプローチ。
下：1階ピロティ部分の杉方型枠のコンクリート。



「軽井沢の山荘」全景。丸太が組まれた2階のテラス。／2-3頁写真提供：生田京子

いくた・きょうこ
1971年東京都生まれ／1995年早稲田大学大学院卒業／1995～2001年大林組東京本社設計本部／2002～03年デンマーク王立アカデミー建築学校／2005年名古屋大学大学院博士課程修了／2005～07年名古屋大学助手／2007～08年名古屋大学助教／2008～10年名古屋大学施設計画推進室准教授／2010年～現在、名城大学准教授／「Forest bath」（本誌1111）にて、2008年SDレビュー鹿島賞、2010年INAXデザインコンテスト銅賞、2011年中部建築賞入賞
http://ikutalab.net/



空間に響くディテール

人の使い勝手から、環境と呼応していくための
それと感じさせないディテールを、どのように選び取るのか。

生田京子（建築家）

私自身のディテールに対する態度は、未だ試行錯誤の最中であり、完成されていません。
それでも自分が惹かれ、いつか近付けたらと思うディテールには、確かなスケール感と肌合いが備わっていることを実感します。

1990年代に学生～新社会人であった自分は、槇文彦氏のヒルサイドテラス第6期（『新建築』9206）、ヒルサイドウエスト（『新建築』9905）や、谷口吉生氏の葛西臨海公園　望広場レストハウス（『新建築』9905）、東京国立博物館法隆寺宝物館（『新建築』0105）といったディテールの名作の完成を、リアルタイムに衝撃的に受け止めた世代でした。ヒルサイドウエストの細く軽やかなルーバーや、葛西臨海公園の極限まで削り取られた細い柱、法隆寺宝物館の庇の、きりりとひとつの線を引いたようなシャープなエッジなど……そこではディテールが、極限まで繊細に仕上げられ、新しい物質の可能性を示しているように思えました。その美しさに心を躍らせ、機会があれば真似事のようなディテールを描いていました。その頃から今に至るまで、ディテールを考える場面で無意識的に、繊細かつ研ぎ澄まされたディテールへ向かおうとする自分がいます。また、研ぎ澄まされたディテールを積み重ねていくことで、濁りのない、より澄んだ空間が得られることを体感しています。

それと感じさせないディテール

非常に大雑把なとらえ方ではありますが、ディテールには「魅せる（見せる）ディテール」「消すディテール」「それと感じさせないディテール」の主に3つがあるように思います。私も、空間の抽象度を上げるために、物を即物的に見せずに「消すディテール」などをよく用います。
しかし、現在の私が惹かれ、憧れているのは「それと感じさせないディテール」です。「研ぎすぎない」「肩から力がぬけたかに見える」さりげないディテールです。実際には精密に選ばれ、考え抜かれたディテールに違いなく、あまたのスタディを経ているのでしょうが、空間として立ち現れた時の存在としては、昔からそこに転がっている小石を拾い上げたかのような、角のまあるいまろやかなディテールなのです。
灯篭をつくる世界では、石をピンピンの角で切り出したままかたちをなす場合と、そうではなく、新品を何百年もの風雪に耐えたような肌合いに仕上げる場合があるそうです。何百年もの風雪に耐えたような肌合いを出すためには、硬い石をつかって丹念に細かく掘っていき、石の柔らかさが内部から滲み出てくるまでに、まるで太い指で押さえたかのように欠いていくとのことです。そのようにしてできるやわ肌の灯篭は、早くに苔むし、その場に何百年もの間置かれていたように馴染んでいくのです。

軽井沢の山荘

建築にもそのようなディテールのあり方があると感嘆させられるのが、吉村順三氏の「軽井沢の山荘」です。
「軽井沢の山荘」はせせらぎの音の聞こえる森に、何の違和感もなく溶け込んで存在します。私はもっぱら、こっそり外から眺めるばかりなのですが、「敷地に馴染む」とはこういうことかと、何度訪れてもうっとりとさせられます。
訪れての高揚感は、アプローチの緩やかな坂から始まります。アプローチの路は突き固められた土でできており、中高なこんもりとしたかたちが、踏み進む足の裏に適度な弾力をかえしてきます。
このアプローチの傾斜が作者によってつくられたものなのか、以前からこのようであったのか定かではありませんが、敷地周辺全体から感じる空気感に、おそらく前者ではないかと私は思っています。アプローチに木材や石をこれ見よがしに敷き詰めるわけではなく、ただそこにある土を主としてところどころ隠れるように石が埋め込まれています。土は何もしないままだと湿気でくずれ踏みごたえがなく、ぐだぐだで心地よくなくなっていくところを、しっかりとした弾力まで突き固めている、それだけの簡素な処置が、つくり過ぎない豊かさをもたらしています。しかもアプローチの奥に、山荘の横顔が絶妙な大きさで立ち現れます。このプロポーションをいかにして調整したのか！　街中の建物であれば、敷地模型に周辺の建物を入れて、それらとのバランスを検討していくわけですが、森の中では木々の高さや密集具合とのバランスを取らなければなりません。しかもその森は何十年のうちには枯れたり育ったりと変形していきます。にもかかわらず、50年を経て現在も自然の中に絶妙なプロポーションで建ち続けていることは希有なことに思われます。1階がRCでコンパクト、2階が木造で柔らかに広がる構成が、幹から枝へ広がる木の佇まいに似ているのかもしれません。
外壁は、亜鉛鉄板で一度巻いてからその上に杉板を張って仕上げられていますが、現在では白く風化した杉板が、よく周囲の自然に馴染んでいます。また1階ピロティ部分の、杉型枠のコンクリートの杉板の並べ方も凝っていて、コンクリートを暖かい素材に見せています。
さて山荘に近付くと、鳥籠のようにふわっと宙に浮いた2階を思わず見上げます。見上げた先に見えるのが2階のテラスです。テラスの手摺りは、唐松の丸太でできており、節を隠すことなくそのままに削り出して横たえられています。素材として周囲に育つ唐松と合わせたこともさることながら、その丸太の太さが素晴らしい、回りの木の幹よりは細く、枝よりは心もち太く取られています。すなわち、周囲の木の幹や枝ぶりと比較して、華奢すぎず太すぎずの安定感を生み出す寸法が選ばれていると感じます。丸太は、最低限の3カ所で軽く支えられています。ぽんと重ねただけといったコーナーでの素朴な組み合わせ方も、考え抜かれての処置に違いありません。もしこの角から突き出た丸太の端がなければ、テラスの角張った印象の方が強調されて、丸太が丸太の存在として感じることができなかったことでしょう。しかしここで選ばれたのは、無造作な丸太が一本横たわる状態です。2階居間に座した時に「手の届きそうなすぐそこの自然と自分との間をへだてる境界が、一本の丸太である」その状況がなんと簡素で豊かなことかと感心します。そして、テラスの出はわずかに50cm程度です。凡人の筆者なら、テラス＝人が乗ってくつろぐものと思って、大きなテラスをしっかりつけてしまいそうですが、ここでは人が乗ることが前提となっていないテラスがつくられているのです。もしも、人が乗れる幅広なテラスをつくったとしましょう。居間と自然との距離は遠ざかり、室内から手に取るような自然を享受することはなくなるでしょう。あるいはテラスがなかったとしましょう。2階の居間から、窓一枚で下が見えたなら、しっかりとした手摺りか、ガラスの境界をつけなければならなくなります。選び取られたのは、壁面とは縁を切って少し外側に置かれた、丸太一本という境界であり、わずかに50cmだけ外へ出されたテラスだったのです。さらに、テラスの床材の軽やかさも絶品です。厚さ15mmの檜の床材を透かして軽く置いた納まりにより、光が透けて下の空間に落ちてきます。木陰の光のような、ちらちらとした光の落ち具合に心地よさを感じ、上部にテラスがあるという鬱陶しさをまったく感じさせません。キャンティレバーによって生まれる1階のポーチは、高さが低く抑えられて室内にいるかのようなスケール感で構成されています。そこにある小さな風呂炊き口に火が灯ると、まるで暖炉のようにその場を暖かく照らすことでしょう。キャンティレバーの下はともすれば、非人間的な荒々しい空間になりがちですが、ここでは見事に身体を包むような半外部空間にしつらえられています。
こうしてつぶさに見ていくと、隅々まで考え抜かれたプロポーションと素材と肌合いで納められていること、そしてそれが素朴な姿に昇華されていることに感嘆します。

住まいをめぐるディテールは、難しいけれど面白い。人の使い勝手を支えるディテールから環境と呼応していくためのディテールまで、さまざまな思考が相まってひとつのかたちが選び取られるべきなのです。

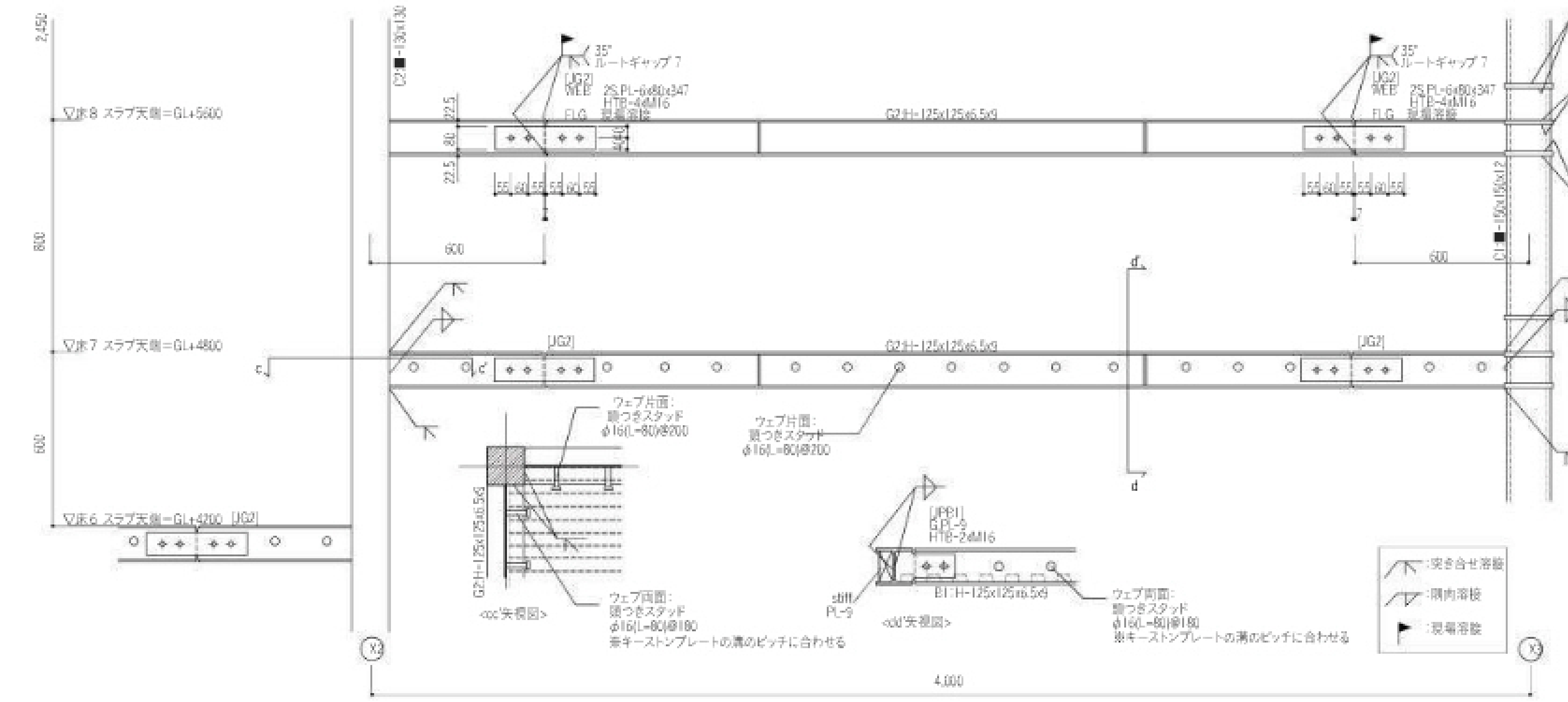
構造計画と建築計画の統合プロセス

坪井宏嗣（構造家）

梅島の建物
設計：齋藤由和／アデザイン
（本誌1205）



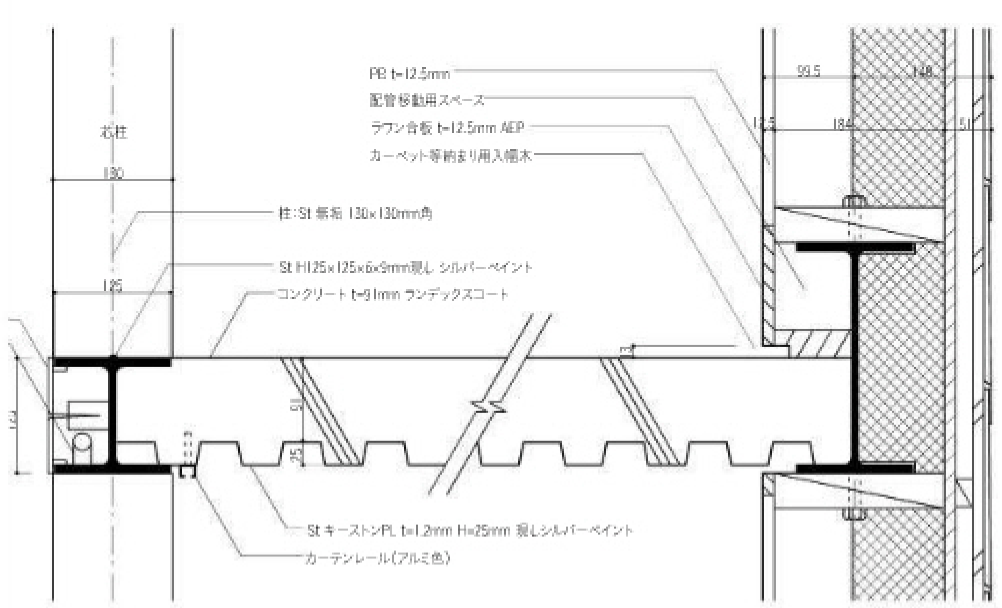
床4でテーブルを囲んで話す満田さん（左）、齋藤さん（中）、坪井さん（右）。



鉄骨詳細図　縮尺1：30
X3通り柱（壁内部の柱）は角型鋼管150×150×12t、X2通り柱（芯柱）は角鋼130×130、ダイアフラムの有無が構造図からも読み取れる。

構造計画を行う際の思考方法は修業を積んだバックグラウンドによりかなり異なるものだ。たとえばブレース構造にするかラーメン構造にするかという基本的な選択においても、明確に違いが出る。今回訪問した「梅島の建物」は満田衛資さんが構造計画をされていたので、僕の中では純ラーメン構造を選択されたことを意外に思っていた。そこで実際に訪問して「梅島の建物」が外周部は角型鋼管、中央部は角鋼と柱を使い分けた純ラーメン構造として計画されるに至った設計のプロセスについて、3つの論点から満田さんと意匠設計の齋藤由和さんに問いかけた。

第一の論点は住宅の規模とコスト、構造形式における建主の理解である。この規模であれば木造でも十分に構造計画は可能であり、コストメリットもあるので建主は木造を望まれるのではないかと思ったのだ。やはり木造も検討されたそうだが、コストメリットはあるもののどうしても必要となる袖壁の存在が設計条件を解決できなかったとのこと。そこで鉄骨造でも躯体を現しとして仕上げを合理化することでコストを合わせる方向で進んでいった。住宅で天井のデッキプレートや梁のボルトを現しにすると、「倉庫のようだ」と抵抗を受けることも多いが、こちらの建主は「確かに倉庫のように見える建築もあるが、このデザインは違う」とはっきりとおっしゃっていた。建主の理解は鉄骨造が選択された大きな要因である。



断面詳細図　縮尺1：10



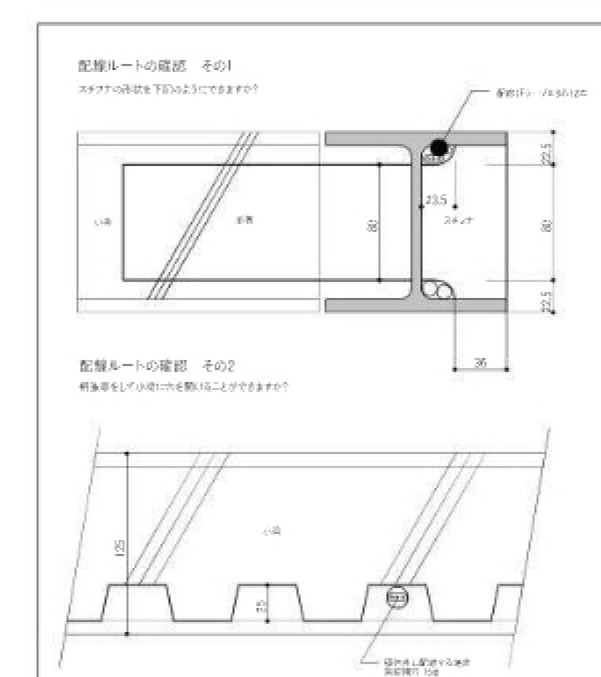
左：アクリル板の覆いを取ってH鋼梁のフランジ内の様子を見る。／右：現場溶接の余盛りは表面はグラインダーで除去。内部にはそのまま現れている。

第二の論点は何故ブレース構造としなかったのか。ひとつには、齋藤さんは鉄骨造の揺れに関してかなり慎重になっており、振動や音の問題への対策から耐火建築物ではないが床にはコンクリートを打設している。満田さんに構造を依頼した理由も「鉄骨を熟知していて、耐震性のみならず使用性にも配慮した躯体を計画してくれる」との信頼感もあったようだ。そうなると地震時の変形（揺れ）を抑えられるというメリットからも、外周部はブレース構造としてもよさそうだが、満田さんはむしろ、ブレースを入れるために小梁が増えてしまうなど無駄の多い計画となるのを避けることを選択のポイントとしている。実際ラーメン構造であってもまったく揺れは感じない。齋藤さんも壁を木下地で組むことを初期の段階から想定していたこともあり、ブレース構造よりもラーメン構造とした方が壁の造作工事が合理化され、トータルでは施工手間が減りコストも抑えられるとの判断であった。



左：架構が組み上がった状態。床6からの見え方。構造現しのため建て方時と竣工後での見え方は大きくは変わらない。／右：竣工後、床4より見る。

第三の論点は要となる中央の角鋼柱。齋藤さんが想定していなかった角鋼柱を満田さんが提案した理由は、大きくは「ダイヤフラムを露出させず柱のエッジをシャープな納まりとすること」と「溶接部（人の手が入る部分）を減らし、施工手間を減らしかつ信頼性を高めること」の2点で、付加的な効果として、スキップフロアのねじれ対策や柱梁接合部パネル部のせん断強度の確保についても意識をされていた。また柱のサイズは、もともと構造上は梁のH-125×125に合わせて125角で計画されていたが、入手が困難であったために130角となったそうだ。しかし意匠上は5mmふけた分でH鋼のフランジに仕込んだ照明を覆うアクリルの仕上げと面を合わせることができたため、このサイズの方が都合がよい。満田さんのこの提案によって、照明のほかディテールや施工性、コストの問題がクリアになり、計画が一気に進み出したという。構造計画により建築が統合される好例である。



設計初期段階に齋藤さんから満田さんへの投げかけ。配線ルートを確保するためスチフナの形状を左図のようにできないか打診している。

以上が齋藤さんと満田さんとの対話を通して明らかになった「梅島の建物」の構造計画と建築計画の統合のプロセスだ。満田さんも笑いながら「見たままでしょ？」といわれていた通り、結果としては単純明快な計画である。しかし、構造計画の過程ではさまざまなスタディをもとに合理的な判断が下されており、それが建築に強度を与えている。意匠側でも、初期段階から電気配線と梁との取合いとのスケッチを描くなど、躯体現し仕上げとすることにかなり戦略的な姿勢が垣間見える。意匠・構造・設備・施工とあらゆる観点から熟考されたうえでの単純なフレームには、合理的な帰結としての明快さが備わっており、単純ではありながら決して退屈なものではなかった。

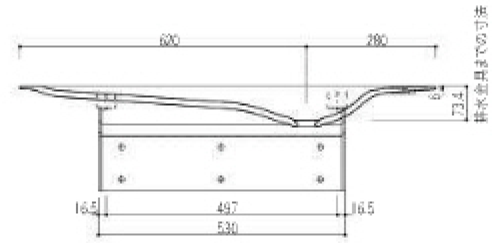
FLAT EGG　設計：横河健



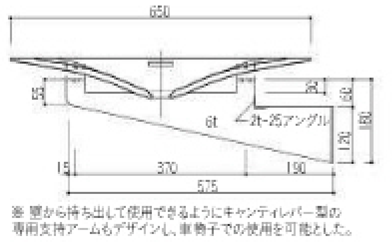


上：洗面カウンター。ステンレスのキャンティレバーが下から台を支える。／下：逆方向から見る。
製作・販売：ABC 商会 179,000 円
2 点写真提供／横河設計工房

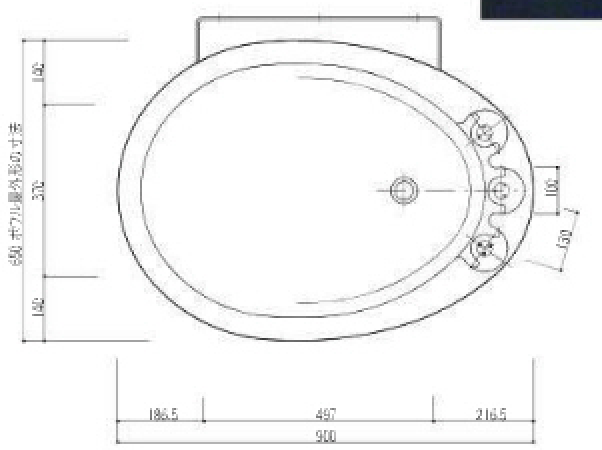
カウンターを汚さない、平たくて大きい洗面器
深くて小さな洗面器より、浅くとも大きくて広い洗面器の方がカウンターを汚さなくてよい。僕は行儀が悪いので、顔を洗っているつもりが、洗面カウンターをいつもビショビショに濡らしてしまう。
だいぶ前に平倉直子さんが INAX で試作していたのをヒントにして、改めて水流が美しく渦ができるようにと考えたデザインを起こし、断面形状は検討を繰り返した。混合水栓は左右どちらにきてもよいように（つまり使い勝手を左右選べるように）長手断面は対称形にしてある。コーリアン（デュポンの人工大理石）なので、成型も美しいカーブに仕上がったと思う。　（横河）



長手断面図　縮尺 1：20



短手断面図



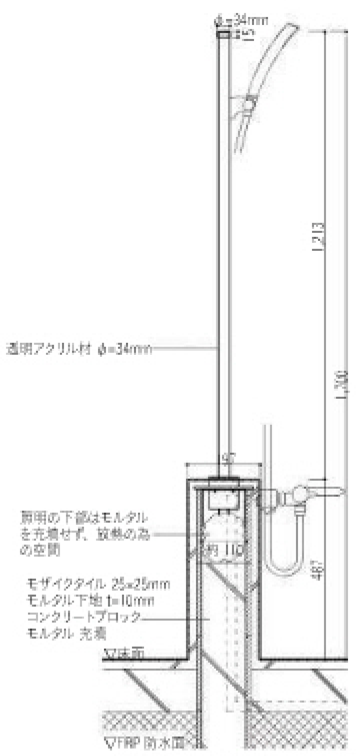
上面図

Shower Pole Light　設計：藤原徹平・岡安泉（本誌1206「等々力の二重円環」掲載）

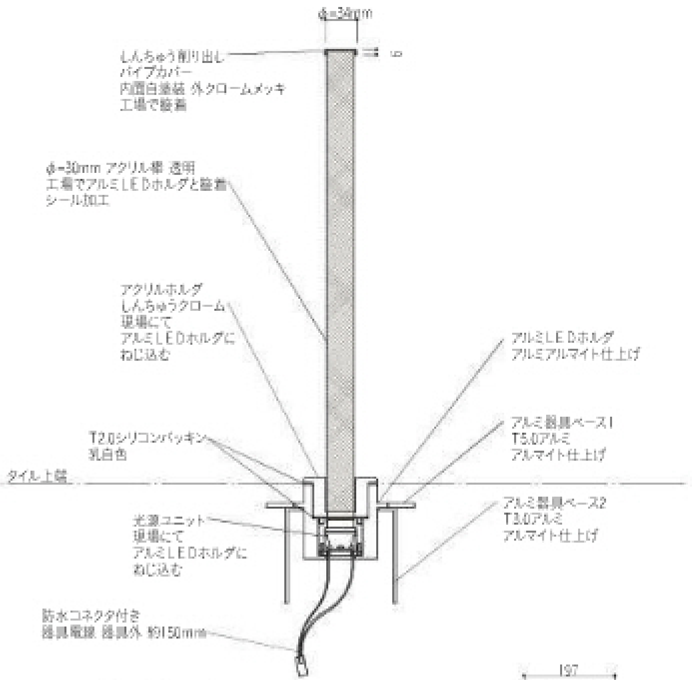
撮影／新建築社写真部



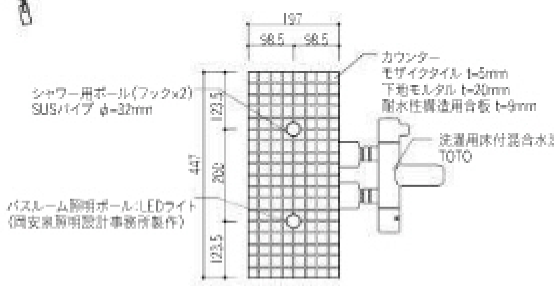
浴室の照明とシャワーポール。



照明設置台断面図　縮尺 1：25



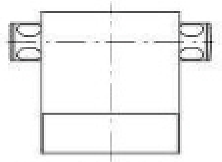
照明機器断面詳細図



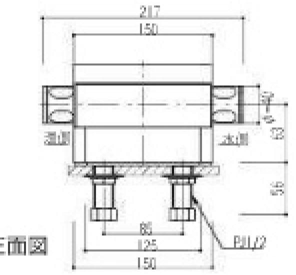
照明設置台伏図　縮尺 1：20

高さ方向に約 1.2m 伸びる浴室の照明柱
住宅はすべて埋め込みのダウンライト照明だが、浴室のみ、シャワーポールと同寸のアクリル柱の下に LED 照明を埋め込むディテールの特注照明器具とした。ガラス張りの中に軸組のグリッドが顕著に現れ、平面全体の回遊動線に導かれるような過ごし方の提案をしている。浴室も均等に軸組の柱が伸び、ガラスに面した開放的なデザインだが、使う時はカーテンを閉めざるを得ない。すると急に空間が閉鎖的になるので、この照明によって「狭さ」ではなく「求心性」が生まれるようにと考えた。　（藤原）

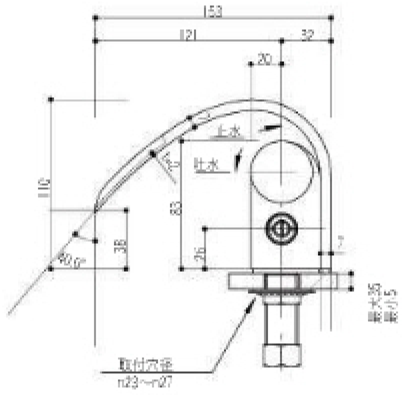
EDDIES　設計：鈴木エドワード（本誌1202「もみじの家」掲載）



平面図　縮尺 1：10



正面図



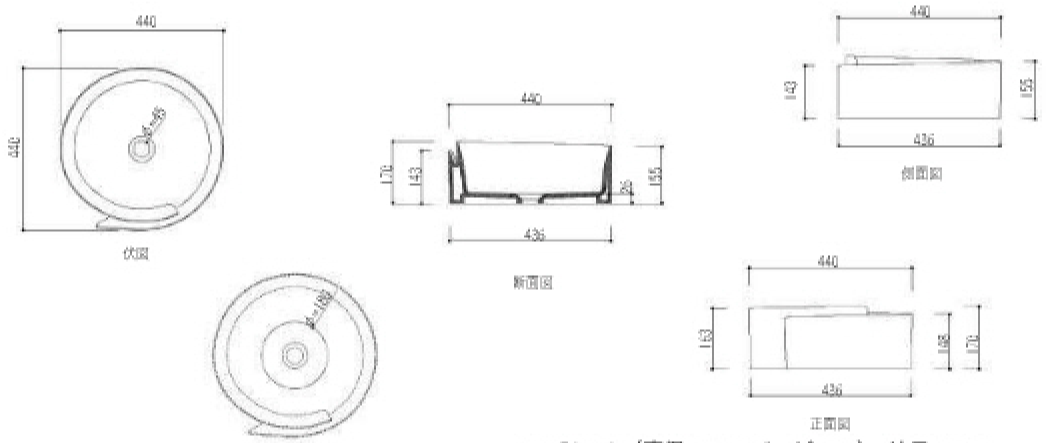
側面図　縮尺 1：6

水が「面」になって流れる水栓金物
滝の周りにはマイナスイオンが発生し、身体のみならず精神にもやすらぎと癒しを与えてくれる。「EDDIES」は小さいながらも、こうした「滝」となることを狙いとしている。
循環する生命の源泉ともいえる滝＝水を、絹糸のごとくやさしく、やわらかく、そして気持ちよく感じてもらえるように、「流れ」をデザインした。水の流れに幅をもたせて「面」をつくることにより、肌だけではなく目にもやさしく、日常の営みの中で光の遊びを楽しんで欲しいと思う。　（鈴木）



浴槽へ取り付けられたEDDIES。水が幅をもって流れ出る。
製作・販売：三栄水栓製作所 90,000 円（税抜）
撮影／新建築社写真部

ROLL　設計：佐藤オオキ／ nendo



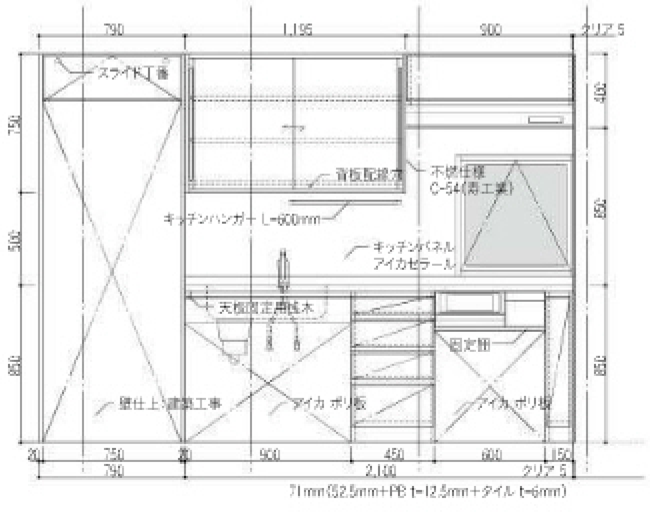
art. RL44L（直径 44cm バージョン）　縮尺 1：25

水を受けるための「器」という意識ではなく、一枚の紙をくるりと巻くようにしてできた、水の「境界」としての洗面器。

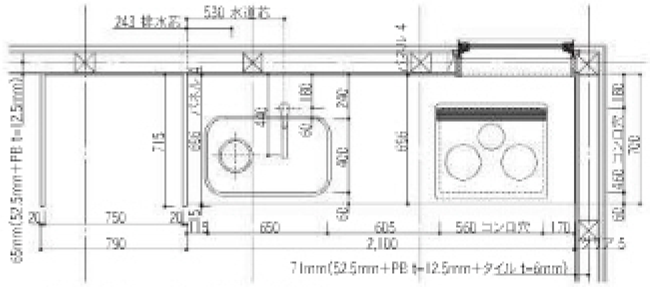


製作：フラミニア　販売：セラトレーディング 76,000 円～（税抜）
写真提供／ nendo

i_worksキッチン　設計：伊礼智（本誌1102「i-works・15坪の家」掲載）



システムキッチン展開図　縮尺 1：50



システムキッチン上面図　縮尺 1：50

プロダクト化を目指す小さなキッチン
幅2,100mm、奥行700mmの中に食洗機とオーブンの置き場を設けている。シンク下はゴミ置き場、その横に雑巾掛け用のバーが取り付けられる。背面には食器入れ、収納を上下に分けることで炊飯器などの設置スペースを確保。パントリーは小さいながらも生活するには十分な収納量をもち、和室2への抜け道になっている。キッチントップはステンレス、扉はシナベニヤにウレタンかOP塗装で仕上げる。現在、「i-works project」（標準化された家づくり）の標準キッチンとして設計を詰めている。　（伊礼）

キッチン近景。　撮影／新建築社写真部



新建築
住宅特集

2011年度 新建築賞
読者推薦作品 募集

吉岡文庫育英会が主催する「新建築賞(旧吉岡賞)」は、1986年から始まり今年で29回目を迎えました。
28回目までの審査は、掲載された誌面を主な審査資料として、審査委員の皆様の議論により、賞を決定してきました。
今年は、読者の皆様と共に住宅の意味を考え、受賞対象となる若手設計者との対話も実施しながら、さらに議論を深めて受賞を決定します。
そこで、2011年度新建築賞では、読者の方が推薦する作品を広く募集致します。

★募集対象
『新建築住宅特集』2011年1月号〜12月号に掲載された住宅
『新建築』2011年1月号〜12月号に掲載されている住宅および集合住宅
(※若手を対象とした賞ですが、その条件は審査委員の判断となります)

★募集期間 6月19日(火)〜7月17日(火)

★推薦方法
推薦者お一人につき、3作品まで。作品名、設計者名、推薦理由(300字以内)を明記し、推薦者の方の住所、氏名、年齢、所属、連絡先を明記し、メール、もしくはfaxにてご送付ください。

★送付先
『新建築住宅特集』編集部
jt@japan-architect.co.jp fax.03-6205-4387

© 新建築住宅特集 2012年7月号/第315号
2012年6月19日発行 毎月1回19日発行
定価2,000円 本体1,905円
振替:00150-6-30658

[編集発行人] 吉田信之
[編集長] 中村光恵

[表紙・誌面フォーマットデザイン監修] K2
[発行所] 株式会社新建築社
東京都千代田区霞が関三丁目2番5号
霞が関ビルディング17階 〒100-6017
tel. (03)6205-4380 (代表/総務・出版)
(03)6205-4381 (編集部直通)
(03)6205-4382 (広告部)
fax.(03)6205-4386 (代表/総務・出版)
(03)6205-4387 (編集部・広告部)
e-mail jt@japan-architect.co.jp
URL http://www.japan-architect.co.jp
写真部:
東京都文京区湯島2-30-8 5階 〒113-0034
tel. (03)3811-9132
fax.(03)3816-2589
[印刷所] 凸版印刷株式会社
[取次店] トーハン 日販 大阪屋 中央社
栗田 鍬谷 協和 太洋社 西村

表紙の写真 Tunnel House
設計:塚田眞樹子建築設計
撮影:新建築社写真部

新建築
住宅特集
315 2012.07

CONTENTS

作品

012 Tunnel House 塚田眞樹子建築設計
022 K HOUSE 吉村昭範+吉村真基/D.I.G Architects 名和研二/なわけんジム
032 PATIO 矢板建築設計研究所
042 論考:今更何を、あえて言おう 理想・調和・プロポーション 矢板久明
046 house I 日吉坂事務所
058 K 木村松本建築設計事務所
084 深川の家 谷尻誠/Suppose Design Office+大野博史/オーノJAPAN
092 パラメトリック・フラグメント 山口隆
100 ヨシダセカンドハウス 宇野求 青木豊実 竹内晶洋
110 吉川の家 庄司寛建築設計事務所
118 甲州街道の家 エトルデザイン
126 埼玉の家/O邸 相川直子+佐藤勤/あいかわさとう建築設計事務所
132 目神山のいえ 須賀定邦
140 ヒメシャラの森の家 横内敏人建築設計事務所

連載

068 建築家自邸からの家学び 第10回 後編 松原の家
企画・監修 真壁智治 調査 東京都市大学大学院手塚貴晴研究室
文 中山英之 古田陽子 協力 内藤恒方

076 家をつくる図面
第1回 敷地の活かし方 回帰草庵 石井修
企画・監修 伏見唯+図面表現懇親会
インタビュー 竹原義二 石井智子

新建築 住宅特集

315 2012 07

CONTENTS

コラム & エッセイ

002 コラム：住宅の設計力　生田京子

004 エッセイ：住宅を読む視線　坪井宏嗣

006 建築家のプロダクト（水回り）
横河健　藤原徹平・岡安泉　鈴木エドワード　佐藤オオキ　伊礼智

PROCESS VIEW

152 K HOUSE　吉村昭範＋吉村真基／D.I.G Architects　名和研二／なわけんジム

153 PATIO　矢板建築設計研究所

155 K　木村松本建築設計事務所

EXHIBITION

157 「伊丹潤展　手の痕跡」開催中／「大辻清司フォトアーカイブ　写真家と同時代芸術の軌跡 1940 〜 1980」開催中

BOOKS

158 橋本愛子　永井大介 著『ねじれた家、建てちゃいました。建築家アトリエ・ワンとすすめた家建て日記』／挟土秀平 著『【ソリストの思考術】第五巻　挟土秀平の生きる力』／伊礼智 著『伊礼智の住宅設計「標準化」から生まれる豊かな住まい』／大迫弘和 文と詩　高松伸 絵『がっこう』

NEWS

159 JIA近畿 第7回関西建築家新人賞発表／第8回（平成23年度）中国建築文化賞発表／第32回 東北建築賞作品賞発表／ゼロ・エネルギー住宅に補助金

TOPICS

160

PROFILE・編集後記

162

TUNNEL HOUSE

東京都杉並区

塚田眞樹子建築設計
Makiko Tsukada Architects

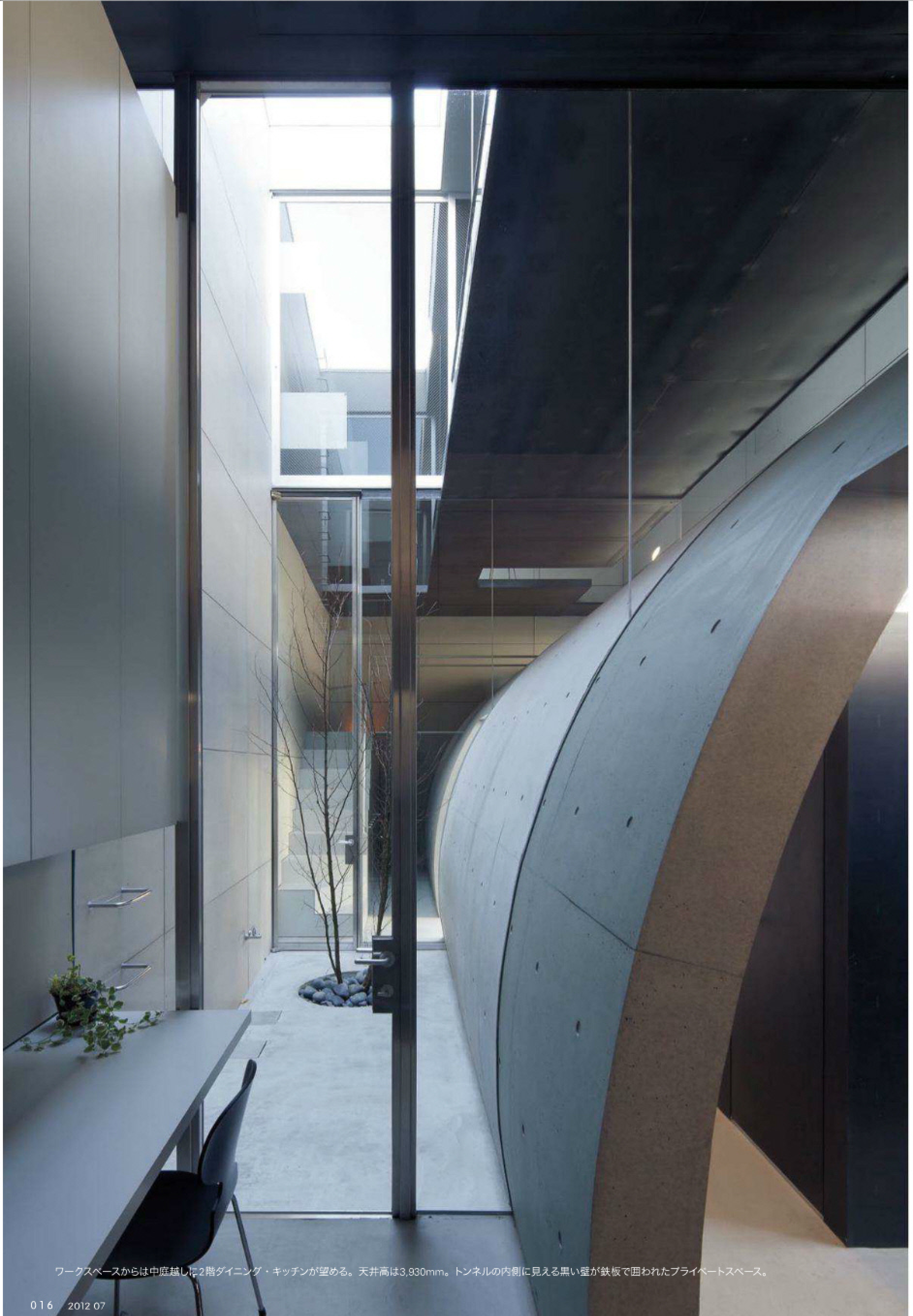




北側外観。T字路の突き当たりという立地ながら建物がトンネル状に刳り貫かれているため視線は先へと抜けていく。右頁：トンネル内側を見返すとエントランス越しに外を、トンネル外側にワークスペースが見える。トンネル壁はモルタルこて仕上げ、床はコンクリート金ごて仕上げ。



ステップギャラリーから長手方向を見渡す。トンネル上部のスリットと中庭からの光に満たされ、内部でありながら外部のような開放感が感じられる。天井は1.6mm厚のスチールプレートの黒皮仕上げ。



ワークスペースからは中庭越しに2階ダイニング・キッチンが望める。天井高は3,930mm。トンネルの内側に見える黒い壁が鉄板で囲われたプライベートスペース。

トンネル形状に刳り貫く

敷地はT字路の突き当たりにある。その特徴を生かし、道路からの視線に行き止まりを感じさせず、あたかも十字路があるかのような奥行をつくり出したいと考えた。

そこで前面道路とのつながりを生み出し意識をその奥へと誘うように、建築をトンネル形状に刳り貫くことにした。トンネル形状はそのウチ・ソトの空間を豊かにする新しい構図としての可能性があると考えたからだ。

やじろべえのようなバランス構造

構造は、立体的な自由度を高めるため鉄骨造を採用。柱は外周のみに配置し、2階床は9mmの鉄板とリブ材で形成し、屋根から構造材をむき出しのまま吊っている。

トンネルシタを駐車スペースとして使用するためハーフトンネルにして、隣地境界側から柱を取り除いた。ハーフアーチ形状の柱は、建築の奥行すべてに連続して並べ、その上部をつなぐ梁をさらに上層から吊っている。これを実現するため、「やじろべえ」のようなバランスの構造を採用したが、そのおかげで駐車スペースだけでなく、水回り周辺からも柱が取り除かれ、猫が回遊する場所を確保することができた。

トンネル部分の柱にはコンクリートを打設し構造的な負担をさせ、同時に仕上げを兼ねた。外周には内外ともフレキシブルボードを張り、仕上げ材としている。

トンネルウチから始まる空間

外部からのアクセス空間であるトンネルウチは、内部に入ってもガラスを透過した外光で満たされ開放的である。さらにその中に鉄板で囲った小さなふたつの箱を並べ、隙間をつくり出した。ハーフトンネルの迫り上がる形状とその先の光、そして隙間のような場所がこの建築のスケールを微妙に狂わせ、小さな建築の中の閉じた空間の中にいることを忘れさせる。



トンネルの内側にあるプライベートスペース。高さ2,050mmまで壁を立ち上げ外周を3.2mm厚のスチールプレートで覆い黒皮仕上げとしている。

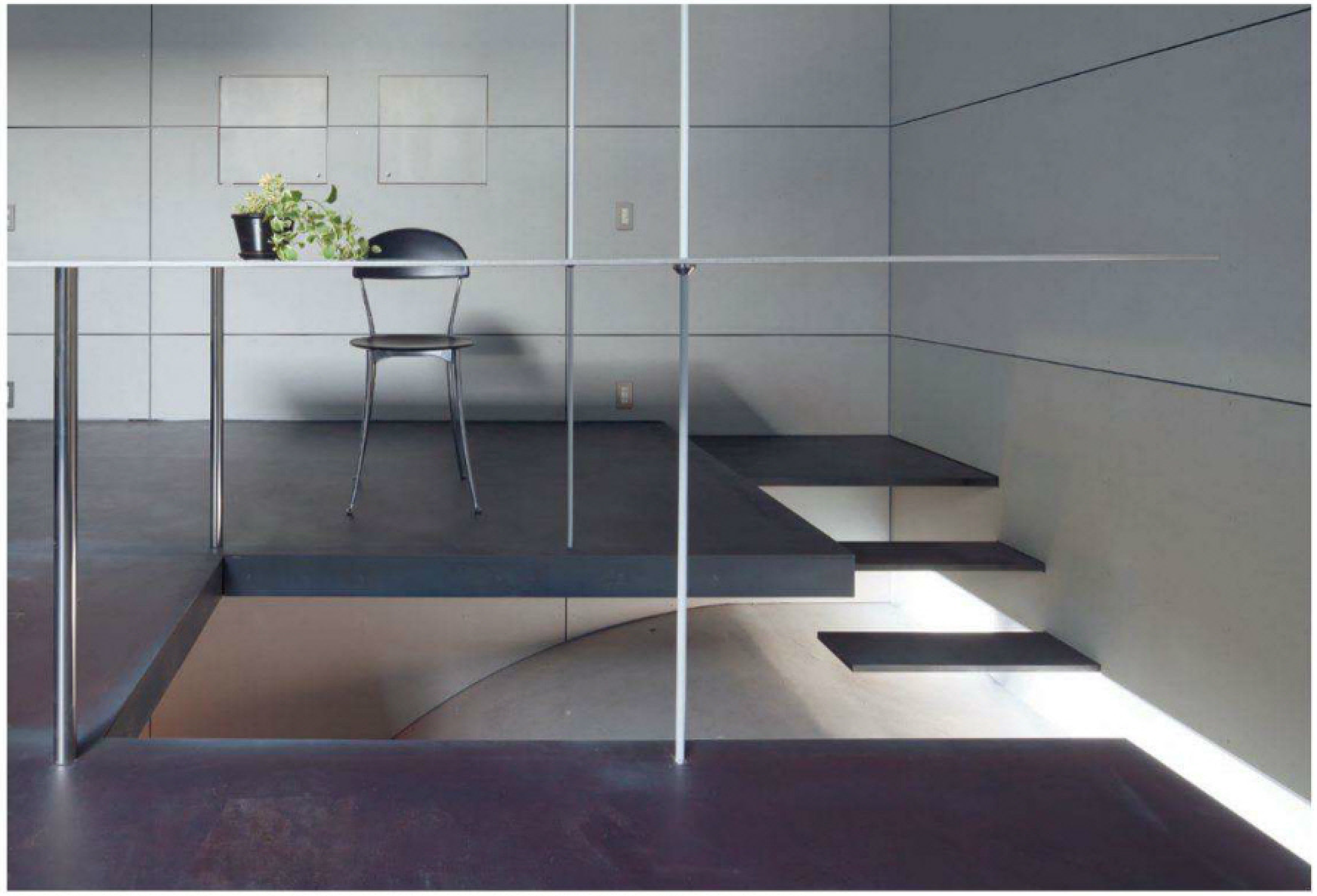
このトンネルの横孔を抜け出ると、湾曲したコンクリートの上部から滑り降りてくる光と中庭の上空から降り注ぐ光が立体的に交差するトンネルソトが広がる。中庭は内部と同じ仕上げ材で貫いている。見上げの曲面をたどる視線と中庭越しに抜ける視線は実際以上の距離を感じさせ、トンネルシタとは違う開放感を生み出している。

上階（キャットウォーク）へは、トンネルソト全体を見通しながら階段を登り、黒い床の裂け目から抜け出るように顔を出す。裂け目のすぐ上に見えるミラーは床と一緒に天井から吊られたステンレスのダイニングテーブルで、それらはトンネルのコンクリートの存在感とは対比的に、質量を感じさせる金属でありながら、あたかも空中に浮いて見えるように工夫した。キャットウォークに至ると、これまで通り抜けてきた場所とは対照的に、静かな光が薄いプレート（床やテーブル）により拡散され、心地よい浮遊感に包み込まれる。

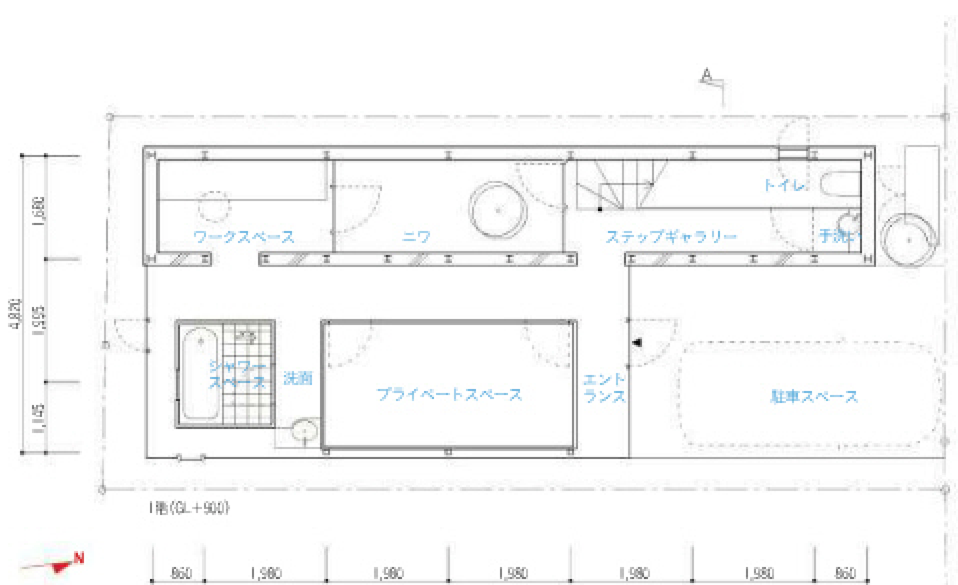
常に外部を感じさせる

Tunnel Houseを訪ねた知人が「トンネルのウチもソトも、機能的には内部にありながら、常に外部にいるような裏切りの感覚をもたらす」と感想を伝えてくれた。

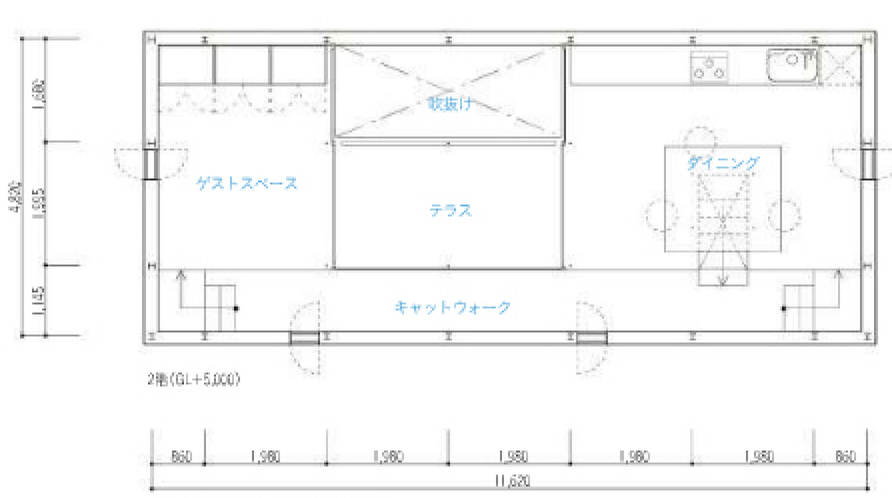
トンネル形状の採用により内外が反転を繰り返す空間をつくり出すことに成功したように思う。そしてそれがあるからこそ、上階へと抜け出た場所は、落ち着いた居心地のよさを感じさせてくれるのかもしれない。　（塚田眞樹子）



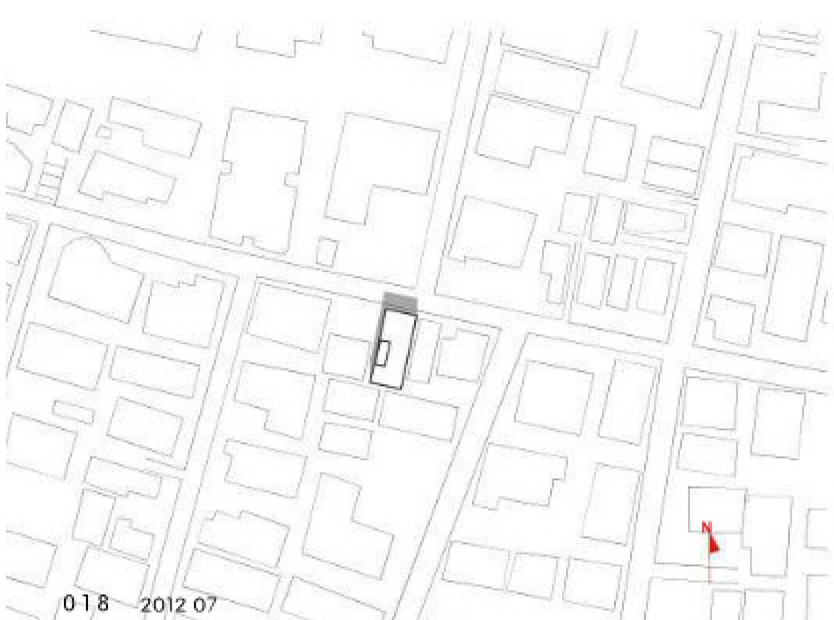
浮遊するような2階のダイニングテーブル。厚さ6mmのステンレスプレートを天板とし、2階床と共に屋根から吊っている。



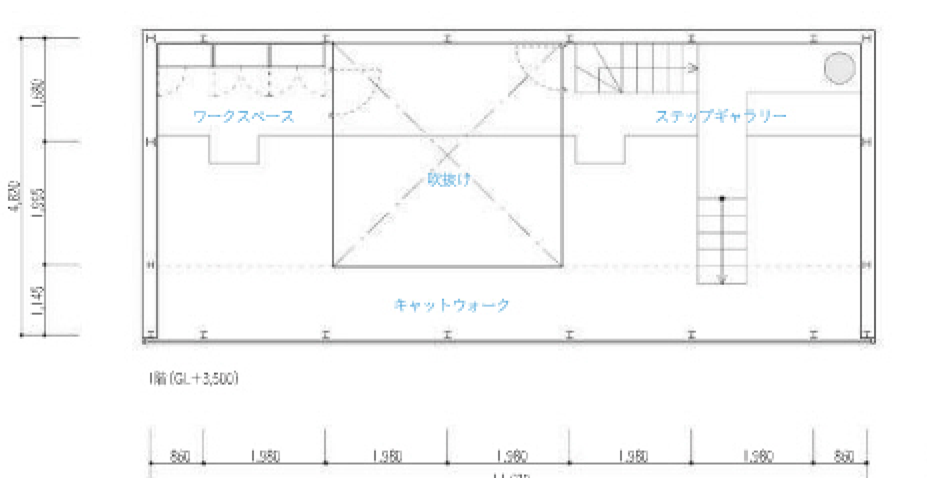
1階（GL＋900）平面図　縮尺1：150



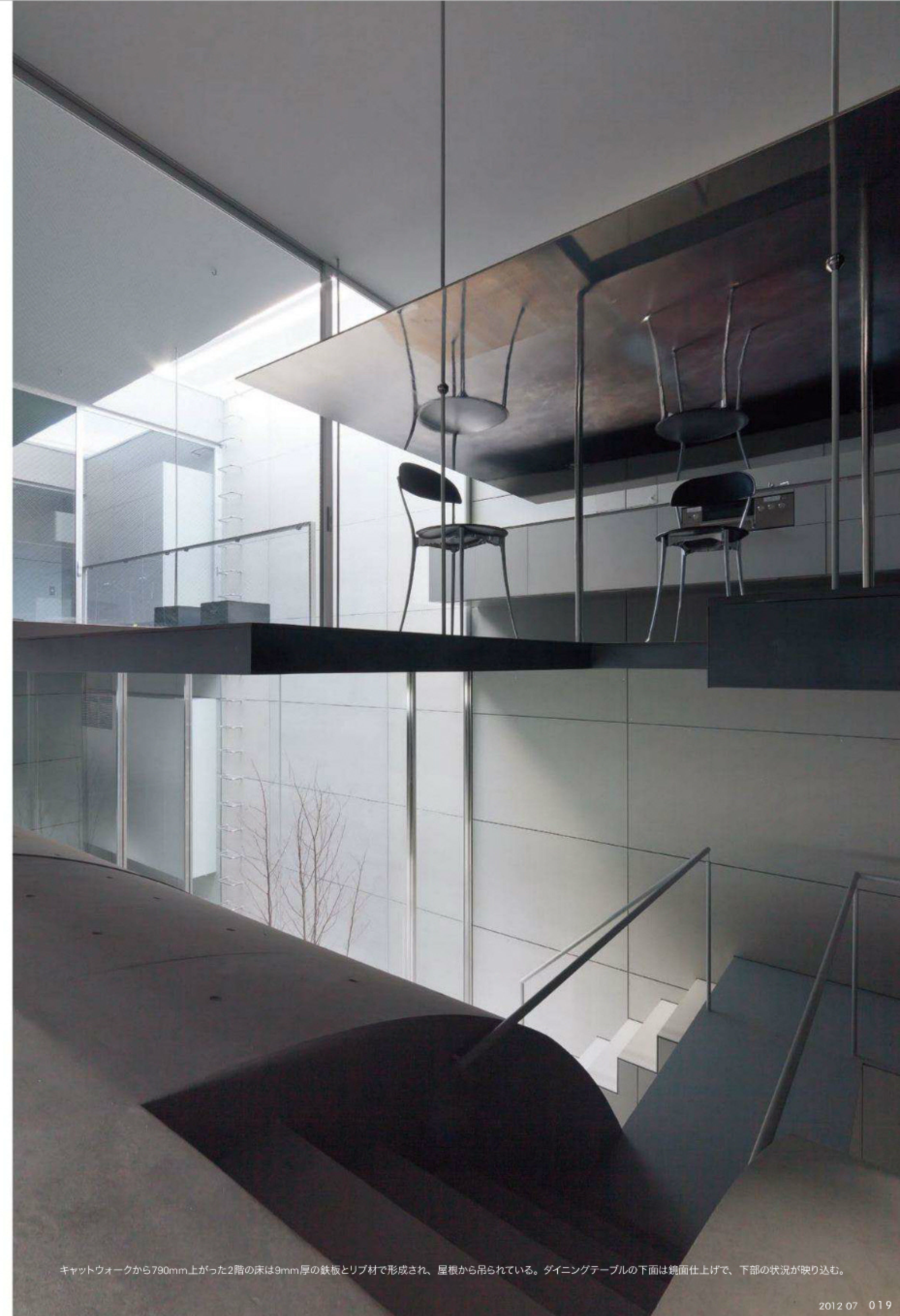
2階（GL＋5,000）平面図



配置図　縮尺1：1,500



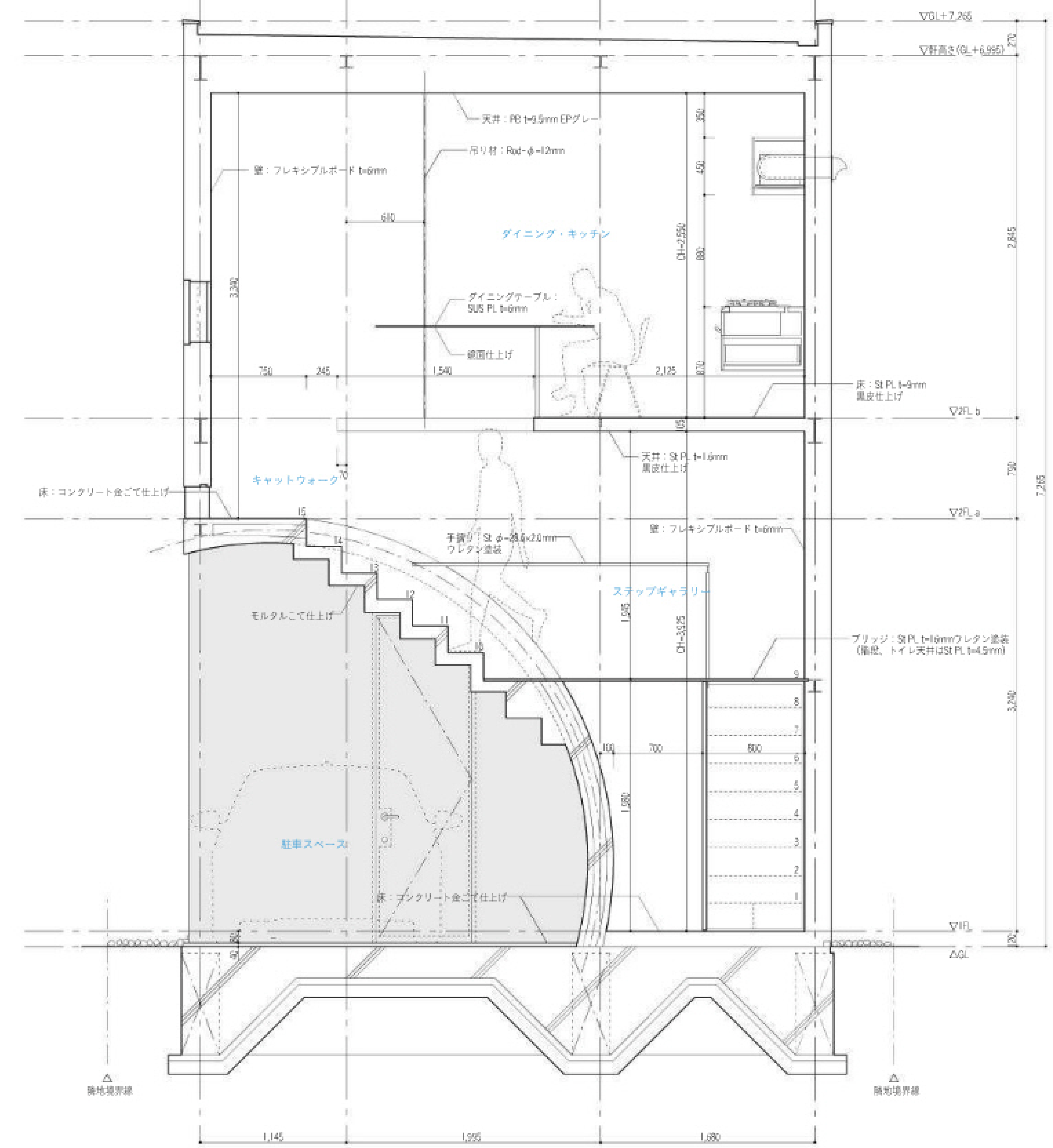
1階（GL＋3,500）平面図



キャットウォークから790mm上がった2階の床は9mm厚の鉄板とリブ材で形成され、屋根から吊られている。ダイニングテーブルの下面は鏡面仕上げで、下部の状況が映り込む。



トンネル内部のふたつの箱の隙間にある洗面。鏡にトンネルが映り込む。猫が回遊する場所でもある。



AA'断面図　縮尺1：75

Tunnel House

所在地／東京都杉並区
主要用途／兼用住宅
家族構成／ひと2人　ねこ3匹

設計

塚田眞樹子建築設計　担当／塚田眞樹子
　内海勇樹　松林大輔（元所員）
構造　ニエダ+ヒサエダ アーキテクツ
　担当／贄田泰然　小松泰造

施工

日南鉄構　担当／鹿島正　加賀山豪士
電気　YamaDen　担当／山田順一
給排水衛生設備　増根住設　担当／増根章宏
空調換気設備　ホサカ　担当／保坂光一
TES設備　北英リビング　担当／池田敬一
型枠工事　永元組　担当／永元秀和
鉄筋工事　永和産業　担当／大田弥
鉄骨工事　日南鉄構　担当／山下始
鋼製建具　総伸工業　担当／藤原秋夫
　SUSPRO　担当／大谷計
ガラス工事　吉井ガラス　担当／吉井隆一
建具工事　池田建具製作所
　担当／池田ヤソシ
家具工事　正和建装　担当／川岸克海
金物工事　岡村金物店　担当／山瀬修
塗装工事　有田ペインティング
　担当／有田正
防水工事　光防水　担当／保坂光洋
植栽工事　シミズグリーン　担当／清水博

構造・構法

主体構造・構法　鉄骨ブレース構造
　一部SRC造
基礎　べた基礎

規模

階数　地上 2 階
軒高 6,995 mm　最高の高さ 7,266 mm
敷地面積　82.39 m^2
建築面積　49.35 m^2
　（建蔽率 59.89 % 許容 60 %）
延床面積　87.17 m^2
　（容積率 105.80% 許容 150 %）
　1階　55.80 m^2（対象面積 43.65 m^2）
　2階　43.52 m^2

工程

設計期間　2010 年 1 月～ 2010 年 12 月
工事期間　2011 年 1 月～ 2011 年 12 月

敷地条件

地域地区　第一種低層住居専用地域　準防火
　地域　第一種高度地区
道路幅員　北4.0 m

外部仕上げ

屋根／歩行用シート防水
外壁／フレキシブルボード t=6mm
　ランデックスコート
開口部／スチールドア　アルミサッシ
外構／那智石

内部仕上げ・使用機器

ダイニングキッチン　ゲストスペース
床／スチールプレート t=9mm 黒皮仕上げ
壁／フレキシブルボード t=6mm
天井／ PB t=9.5mm EP
厨房機器
　ガスコンロ／東京ガス RN-BP3BR-X6SSL
　換気天井扇／パナソニック FY-32BK7H/19
ワークスペース　ステップギャラリー
床／コンクリート金ごて仕上げ
壁／フレキシブルボード t=6mm
　コンクリート打放し
天井／スチールプレート t=1.6mm 黒皮仕上げ
トンネルウチ（エントランス　洗面　通路）
床／コンクリート金ごて仕上げ
壁／スチールプレート t=3.2mm 黒皮仕上げ
壁・天井／カルダンモルタル
プライベートスペース
床／コンクリート金ごて仕上げ
壁／カラーフィットメラミン 白 接着貼り
シャワースペース
床／ 200mm角タイル t=9mm（INAX サーモ
　タイルピュアフロアII）
壁・天井／ FRP防水 トップコート白

設備システム

空調　冷暖房方式／空冷ヒートポンプエア
　コン+床暖房（TESシステム）
　換気方式／第三種換気
給排水　給水方式／公共上水道直結
　排水方式／公共下水道直結
給湯　給湯方式／ガス給湯器

撮影／新建築社写真部

K HOUSE

愛知県日進市

吉村昭範＋吉村真基／D.I.G Architects
名和研二／なわけんジム
AKINORI YOSHIMURA＋MAKI YOSHIMURA
／D.I.G Architects
NAWAKENJI-M



北側から見る外観。平地部分は前面道路から約2mまでしかなく、その先は急傾斜地。地盤の掘削を最低限に抑えるよう窪みにコンクリートを打設し、張り出した鉄骨造の架構を支えている。



玄関より内部を見渡す。右手のブリッジ状のロフトからエントランス、1階のLDKへとフロアが展開する。
西側に開けた景色をそのまま室内に取り込めるよう、天井・壁を多面体で構成し無柱空間を実現している。



LDK。西面（高さ3,550～4,500mm、幅7,900mm）は全面開口とし、日進市を一望する。右手ラワンのパーティションの向こうに寝室と納戸が納まる。

傾斜地に建つ小さな住宅の計画である。敷地は愛知県日進市にあり、町全体が丘状で起伏に富んだエリアである。敷地は平たい場所が2mほどの幅しかなく、それ以外はすべて斜めの崖のような敷地だった。できるだけ元の地形を活かしたいと考え、その斜めの地面を最低限掘ることで生活の場をつくろうと考えた。崖にある窪みや隆起から生まれる小屋のような、あるいは洞窟のような住処がぴったりくる。

立ちすぎてもいけないし、埋もれてもいけない。急な斜面に「最も効率よく座る」方法を模索することになった。

同時に自然のかたちに呼応するような不定形さをもった、あくまでも地形に応答する空間が敷地の魅力を引き出せると考えた。スタディの始まりはふたつの正方形が連なったかたちだったが、前面道路の蛇行に合わせてそのふたつを回転させ、多角形のプランとした。

斜面に対しては最小限地面を掘って崖の中腹にベンチのような基壇を設けることにした。掘ってつくった崖の平場にテントのような、船の帆のような外皮をかけた。「ベンチ」は土留めを兼ねてRC造としているが、床が足りない分は鉄骨で延長している。鉄骨外皮の構造的なイメージは、多面体のような安定して閉じた系が崖にアンカーされることで開かれた系になる、というのが一貫したイメージである。

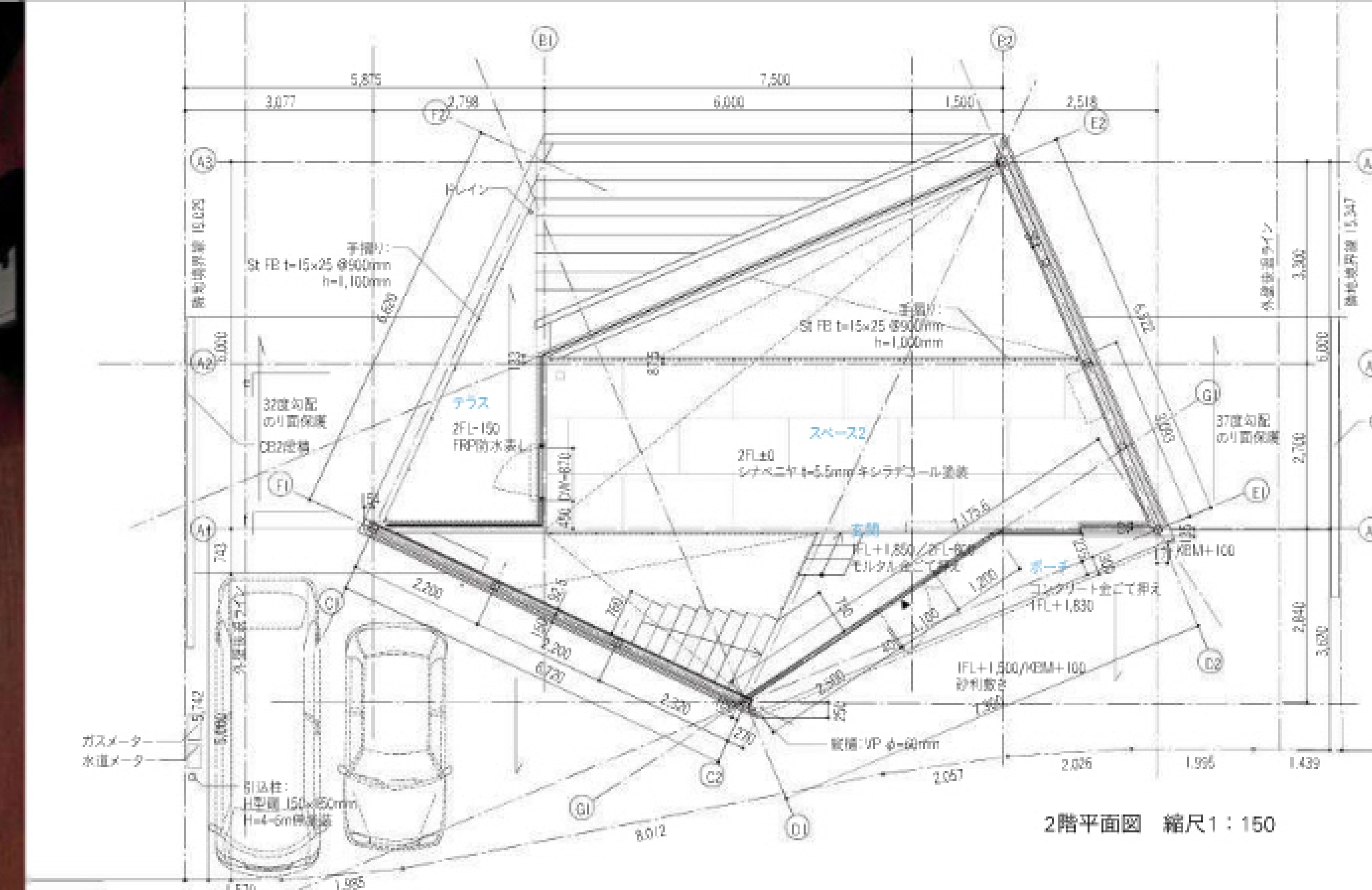
地面を掘ってつくられた内部空間の空中に、土から離れたまっすぐな水平面をかけた。土に張り付き囲われた生活の中でも時には地面から切り離された床が必要なのではないかと考えたのだ。この床面上のスペースはロフトのようなもので、さしあたって割り当てられている用途はないが、将来的には居室になるであろう。また建物全体を屋根／壁／床ではなく、基壇／外皮という大きな分節でとらえるためにこの床スラブの厚みにこだわり、仕上げまで含めて270mmと壁と同程度の厚みで納めている。階や間仕切などの明快な分節も極力なくした。

ガランとした空間を横切るデッキとそのレベル差によって抜ける視線が外の風景とつながることを大切にした。敷地周辺の自然環境と同じように直接的に身体に呼びかけるような住宅であってほしいと考えている。　（吉村昭範＋吉村真基）



リビングからテラスを見る。FIX開口部の見付けは30mm。

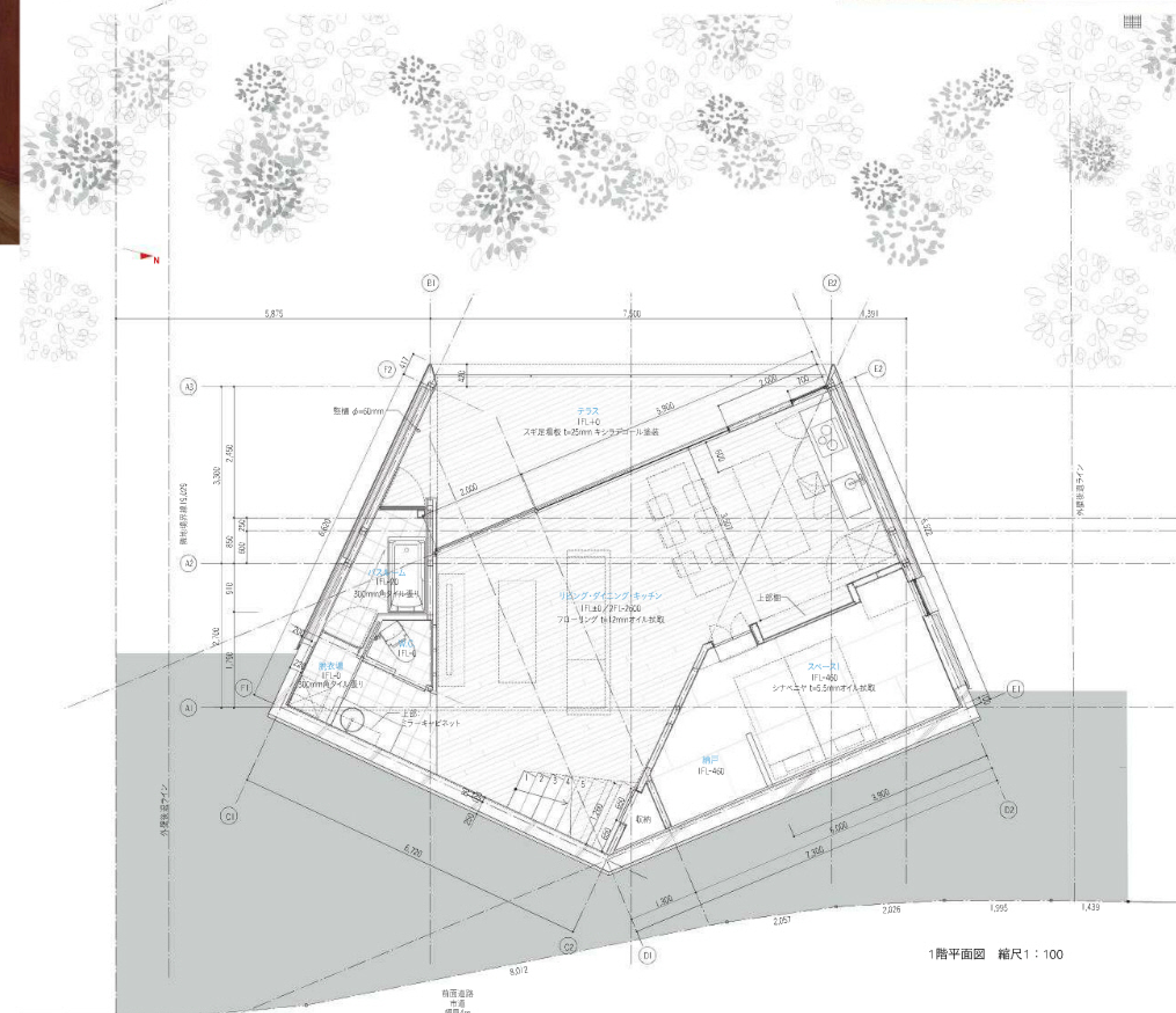
傾斜地を覆う多面体



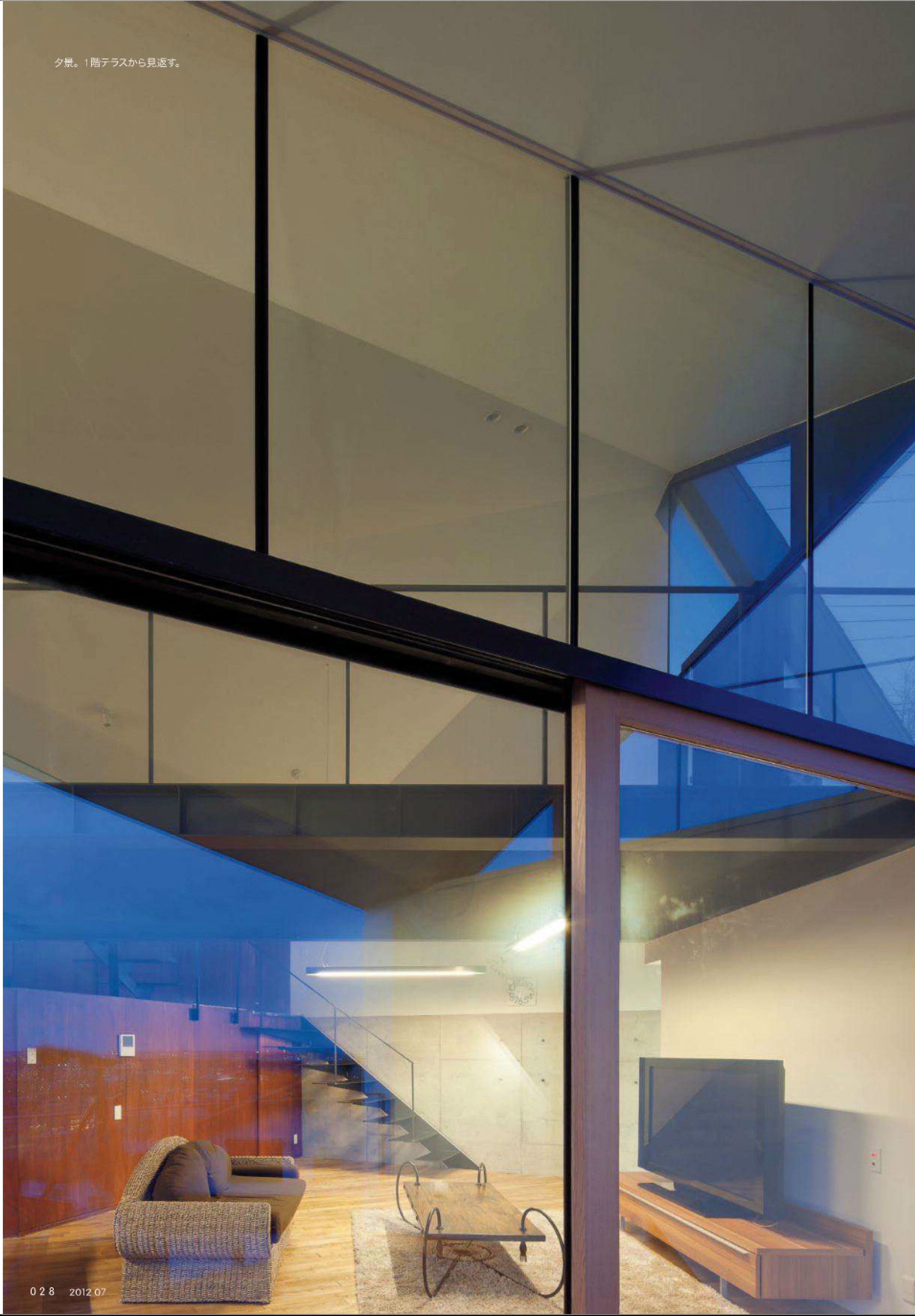
2階平面図　縮尺1：150

南東から見る外観。

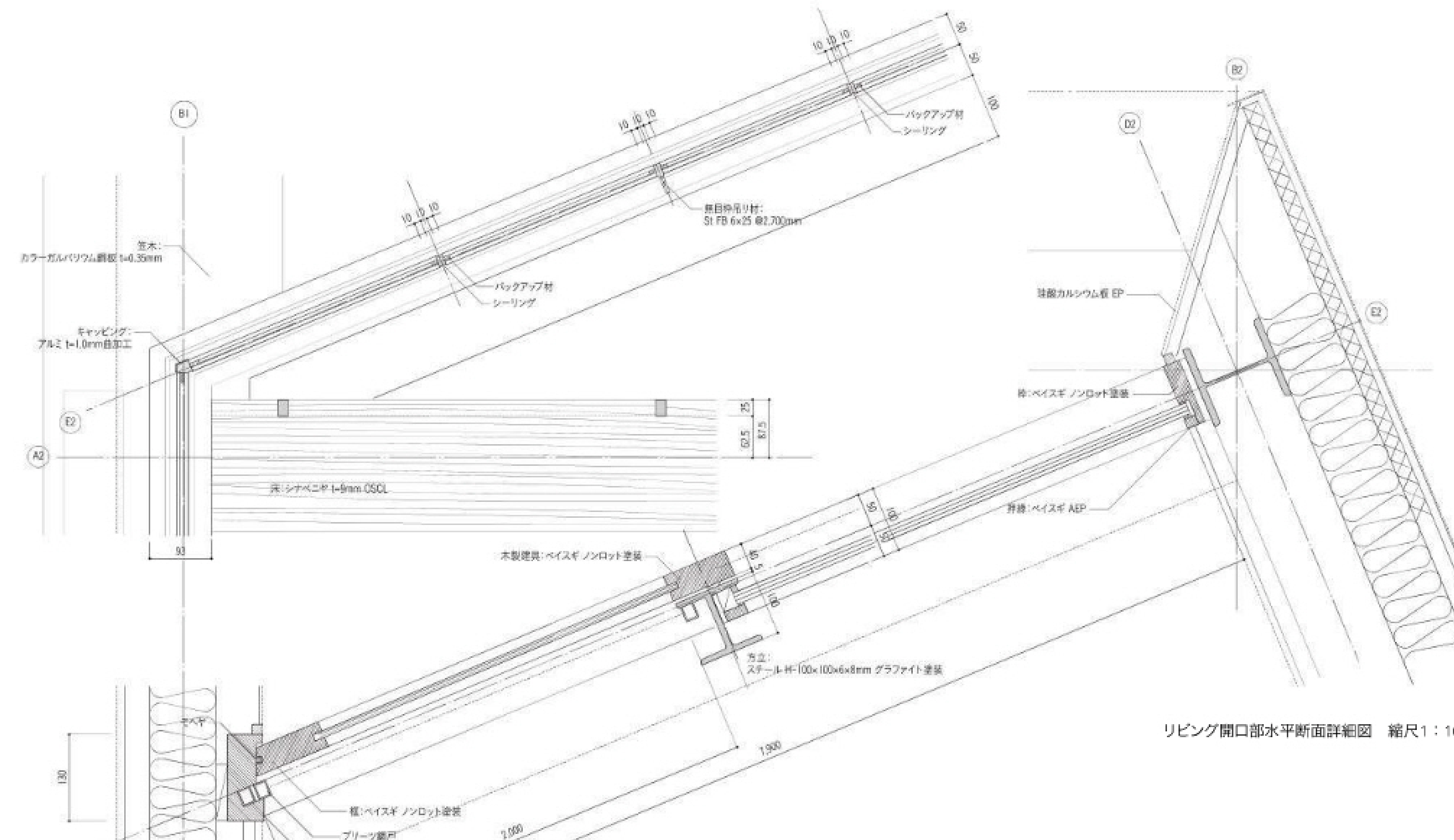




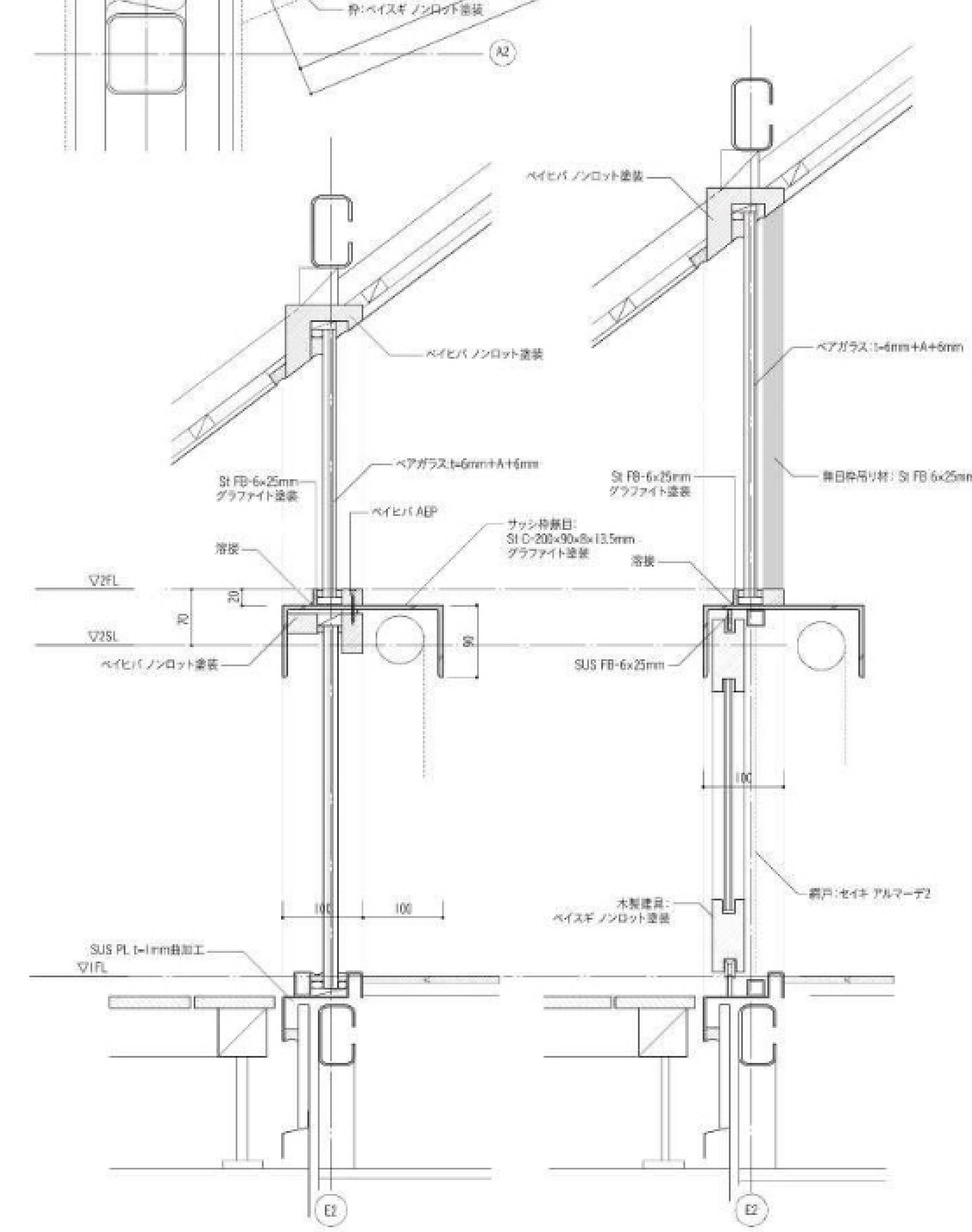
1階平面図　縮尺1：100



夕景。1階テラスから見返す。



リビング開口部水平断面詳細図　縮尺1：10



リビング開口部垂直断面詳細図　縮尺1：10

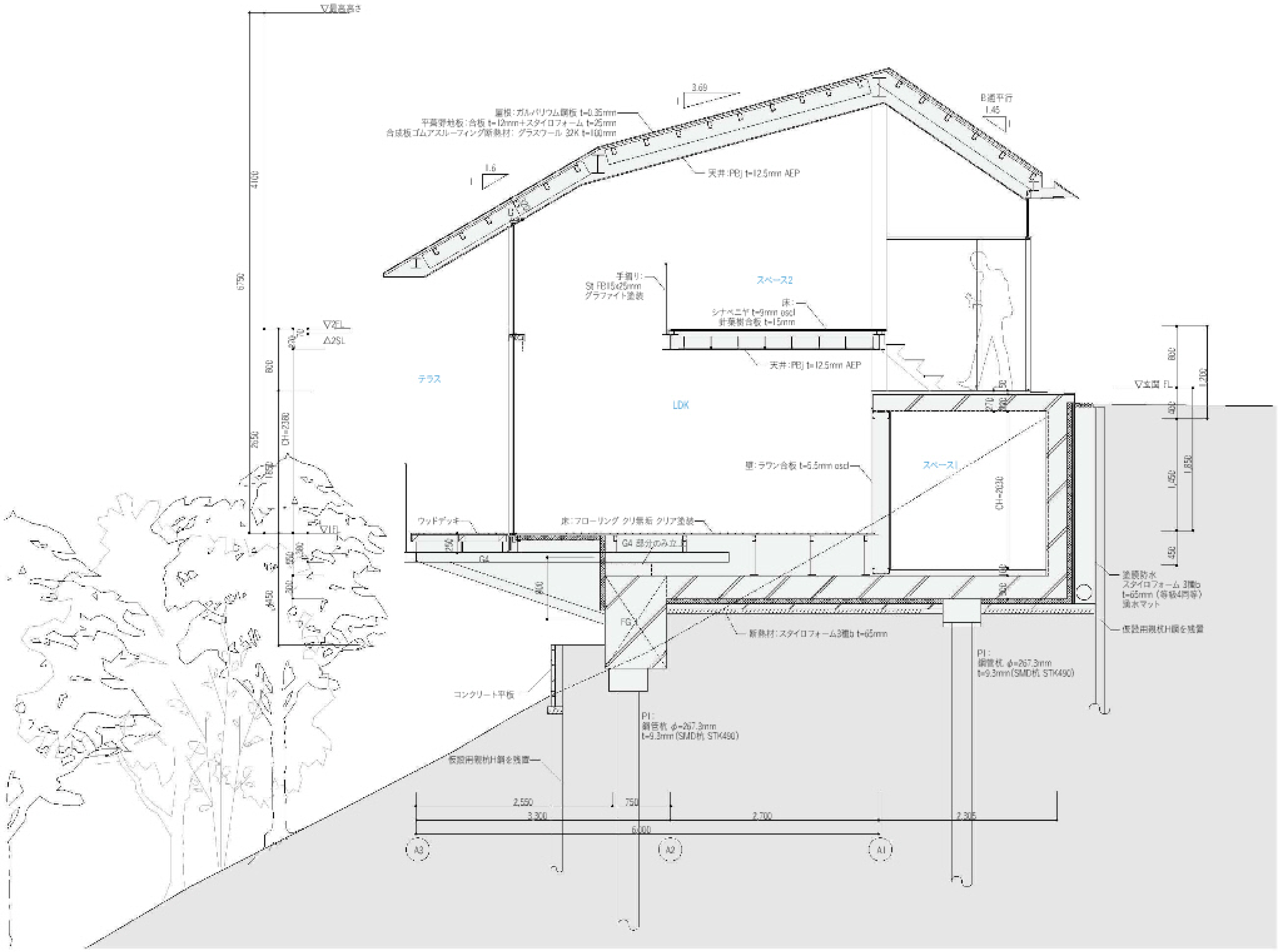
呼応するサッシの見付けと手摺りの線材

西側の大開口は、鋼製の造作サッシを鉄骨工事で製作した。内と外のつながりを大切にし、無目の200×90mmの溝形鋼を「スペース2」側面の鉄骨梁と対応すべく同じ高さレベルに設定し、塗装も同じ仕様とした。ガラスのジョイントはシーリングだけにして見付けを30mmとし、「スペース2」の手摺りSt FB 15×25mmと近い寸法と色合いにして、内と外、あるいは遠近感を曖昧にすることを意図した。また7.9mに及ぶ無目のC型鋼のたわみ止めとして用いた吊り材もSt FB 6×25mmとして「スペース2」の手摺りと対応させた。

（吉村昭範）

スペース2から2階テラスを見る。スチールのフラットバーの手摺子は15×25mmとし、西面のサッシとも呼応する。床はシナベニヤにOSCL塗装。





断面図　縮尺1：75





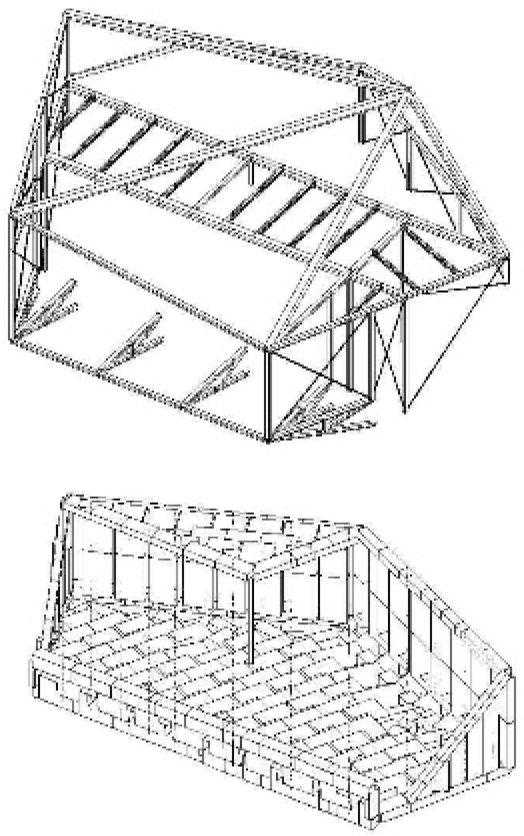
断面配置図・配置図　縮尺1：1,000

傾斜地に最小限の窪みをつくる

斜面地をひとつの個性として積極的に受け入れ、平面配置、部材の構成、床レベルを設定した。まず、敷地上部道路側の狭い平地部から施工可能な範囲に杭位置を定め建物配置を決定した。次に掘削した窪み部分は谷側にせり出した部分を支える重心を確保するためRC造とし、斜面より飛び出した部分は10m強のスパンを成立させ重量的にも軽い鉄骨造を選択。床レベルもRC部と地上の鉄骨部の関係から地下に埋まる2層とした。なお窪みに掛けられたような佇まいとするため、鉄骨屋根部の架構は柱等を室内におとさず外周部のみで構成した。　（名和研二）



窪み部分にコンクリート（1階スラブ）を打設したところ。



窪みにアンカーされたスラブと鉄骨の多面体のアクソメ

K HOUSE

所在地／愛知県日進市
主要用途／専用住宅
家族構成／夫婦＋子供1人

設計

D.I.G Architects
　基本設計　担当／吉村昭範　吉村真基
　実施設計・監理　担当／吉村昭範
構造　なわけんジム　担当／名和研二
設備・電気・外構　D.I.G Architects

施工

長瀬組　担当／吉田昌平
設備工事　佐藤総合設備　担当／岡田英成
電気工事　加藤電気工事　担当／加藤聖治
鉄骨工事　誠和工業　担当／鈴木智佳夫
木工事　シゲマツ　担当／菱田哲也
木製建具　建成　担当／瀬尾吉男
金属工事　アライ　担当／島克巳
板金工事　エスメタル　担当／小川謙二
塗装工事　キバケン　担当／木場久悦
D.I.G Architects　担当／村瀬久美子
　野倉勇樹
硝子工事　中島硝子店　担当／中島要
内装工事　名東産業　櫻本勇治
協力／浜本史郎　杉山孝之

構造・構法

主体構造・構法　鉄骨造
基礎　杭基礎

規模

階数　地下1階　地上1階
軒高 5,400mm　最高の高さ 6,900mm
敷地面積　335.09m^2
建築面積　79.23m^2
　（建蔽率24％ 許容60％）
延床面積　89.4m^2
　（容積率27％ 許容200％）
　地階　65.8m^2　1階　23.6m^2

工程

設計期間　2009年11月～2011年3月
工事期間　2011年5月～2011年12月

敷地条件

地域地区　建築協定により壁面後退1mと高さ制限12m
道路幅員　東側4m　　駐車台数　2台

外部仕上げ

屋根・外壁／ガルバリウム鋼板 t=0.4mm 平葺き
　一部ベイスギ板張り t=10mm
開口部／スチールサッシ　アルミサッシ
外構／砂利敷き
手摺り／St FB15×25mm グラファイト塗装

内部仕上げ・使用機器

LDK

床／クリ無垢フローリング t=15mm
壁／PB t=12.5mm EP　ラワンベニヤ OSCL
天井／PB t=12.5mm EP
厨房機器／サンワカンパニー プレーンK
　換気扇カバー／シナベニヤランバー t=15mm EP
　家具／タモフラッシュ t=20mm
　照明／NIPPO シームレスライン
　アルミカバー t=3mm 曲げ加工
建築金物
　ダボレール／ロイヤル　チャンネルサポート
　棚受／ロイヤル　木棚板水平ブラケット

浴室

床／300mm角磁器質タイル（フォンテトレーディング 29-29-WT001）
壁／FRP防水 トップコート（白）
天井／珪酸カルシウム板の上ウレタン塗装
洗面水洗／フォンテトレーディング　埋シングルレバー壁出洗面混合栓キット（BX-6509K）
洗面器／フォンテトレーディング　カウンタートップ 洗面器（B1-A406）
バスタブ／フォンテトレーディング
　T55 - 140Eco
シャワー水栓金物／フォンテトレーディング
　CS2-3541C

寝室

床／シナベニヤ t=24mm
壁・天井／PB t=12.5mm EP
照明／埋込ソケット E26レセップソケット埋込
建築金物／サッシ：三協立山アルミ

ロフト

床／シナベニヤ t=24mm OSCL
壁・天井／PB t=12.5mm EP
照明／埋込ソケット：E26レセップソケット埋込

設備システム

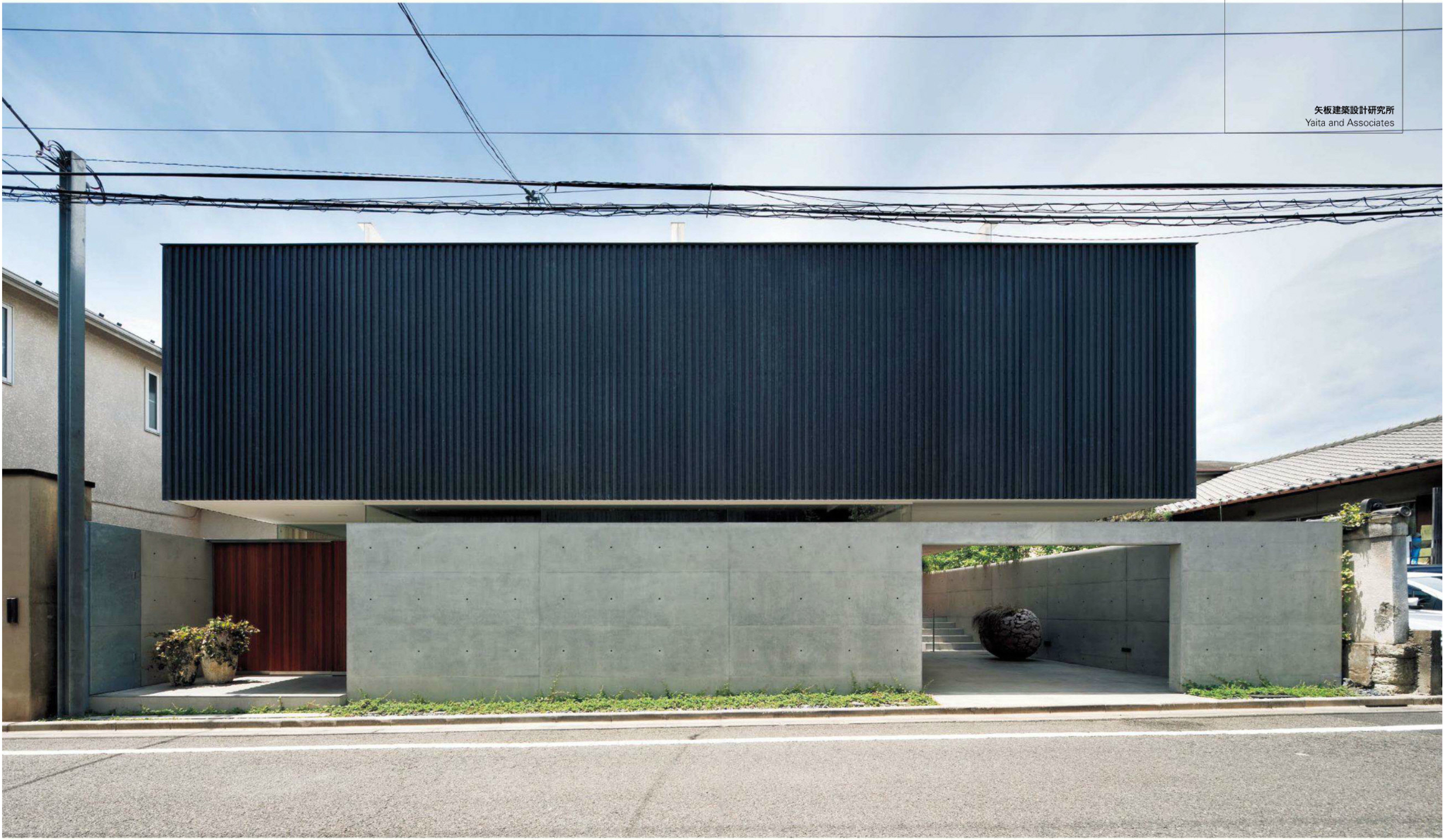
空調　暖房冷房方式／ルームエアコン
　換気方式／自然換気
給排水　給水方式／上水道直結
　排水方式／下水道直結
給湯　給湯方式／ガス給湯

撮影／新建築社写真部

PATIO

東京都

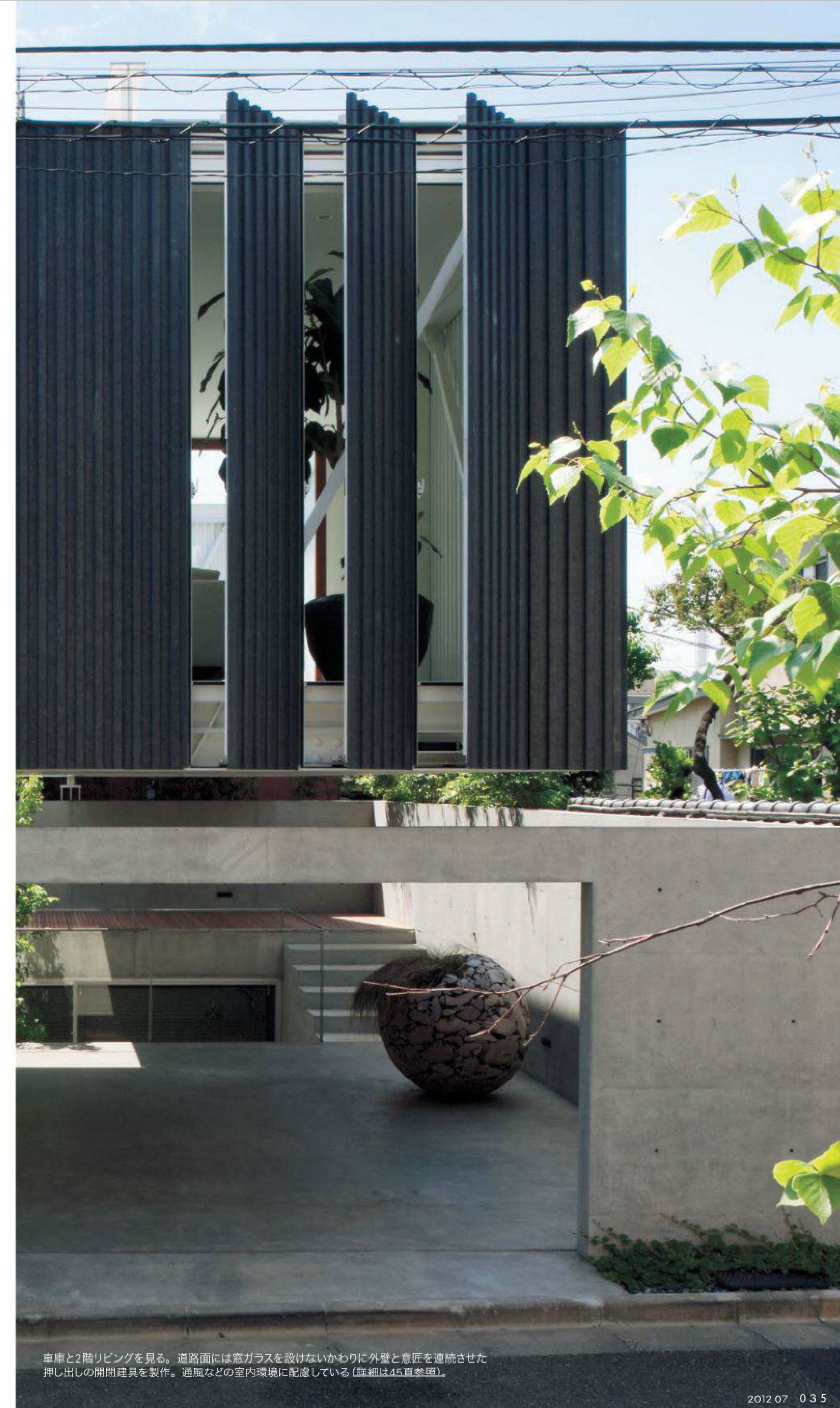
矢板建築設計研究所
Yaita and Associates



東側外観。中の気配が外に伝わらないような家をという建主の希望から、外に対して閉じている。RFLは5,430mmと低く抑えられたプロポーション。屋根上部に3本のH鋼大梁が乗る。



玄関を見る。階段を登ると1階ルーフテラスへと向かう。上部外壁はキーストンプレート t=1.2mm、溶融亜鉛メッキの上にリン酸処理を施したもの。



車庫と2階リビングを見る。道路面には窓ガラスを設けないかわりに外壁と意匠を連続させた押し出しの開閉建具を製作。通風などの室内環境に配慮している（詳細は45頁参照）。

外へ閉じ、中庭へ開く

敷地は都市部には珍しく低層の家がゆったりと建ち並ぶ住宅地にある。建主は外からは覗けないが内部に開放的な空間が　開する、シンプルなかたちの住宅を望んでいた。しかし隣家との距離は近く、ここで高いプライバシーを確保するには特別な工夫が必要だった。この要望がこの家のすべてのデザインをつくり出したといってもよい。

まず主空間であるLDKは光を取り込みやすいよう最上階に配置し、この空間が外から覗かれないように中庭＝Floating Patioと一緒に壁で囲い、1階の和室の構造体の上に浮かぶように置いた。地下にも2階の中庭と連続するよう、もうひとつの細長い中庭＝Sunken Patioをつくり、地下にありながらも十分に光の入る寝室と浴室など私的な空間を配置した。

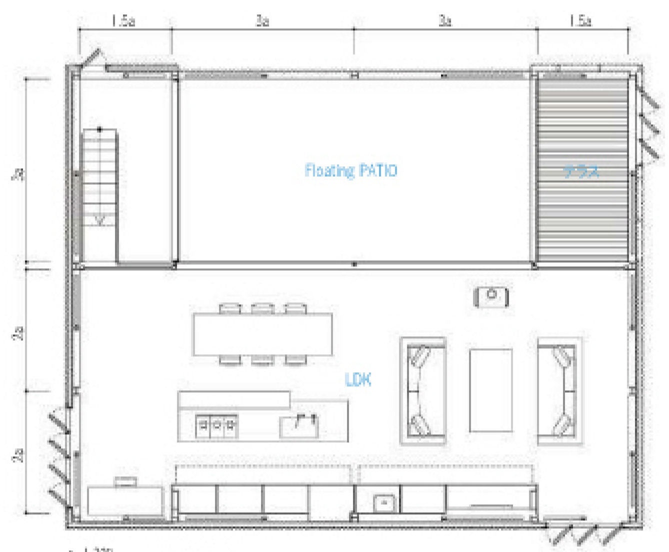
これら上下のふたつの私的な空間に挟まれた1階は、上下の階よりも外界とのつながりの強い空間として扱い、ここに置かれた和室はお茶会もできるようデザインされている。宙に浮いた2階の架構は1階の空間にとっては大きな屋根となり、和室を囲む構造体の回りには開放性に富む流動的な空間が生まれた。この空間は茶庭に例えると露地であり、和室は露地に置かれた茶室になる。この3層にわたる中庭は、これに接してある地下の躯体を少し上にずらすことで、地下のSunken Patioを1階の露地とつなげ、さらに1階の露地を上のFloating Patioと連続させることで一体となり、流動性の高い空間を内包する中庭＝Patioへと変貌した。

その結果Floating Patioからの光は、1階の露地空間を満たしてSunken Patioまで導かれる。外の寡黙な表情の外観から一変して、一歩足を踏み入れると、内部には光に満ちた別世界が開することとなった。

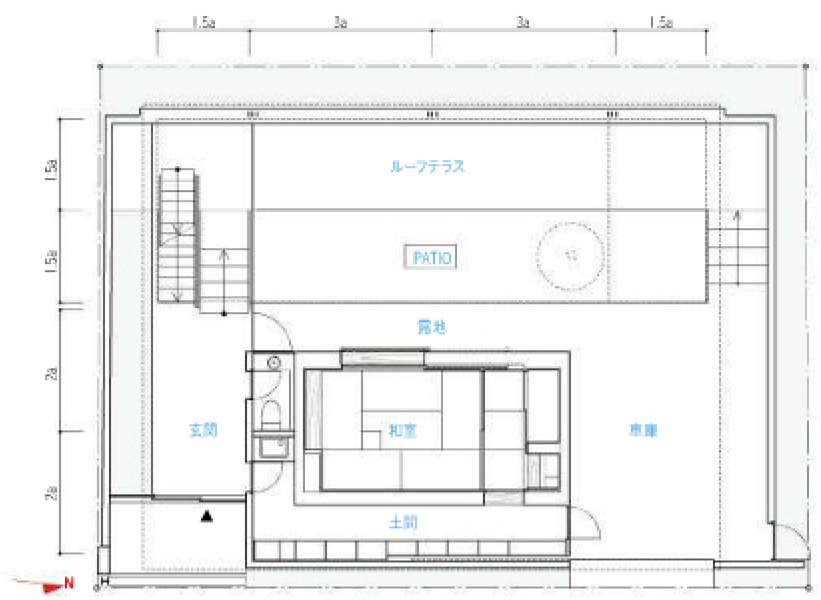
この建物の中にいると、目に入る外界は、雲の流れる空だけとなり、外は林の下に木陰が続くようにも思えてくる。外から見えない家というテーマは、内部の充実という別の価値を得ることになった。　　　　　　（矢板久明＋矢板直子）



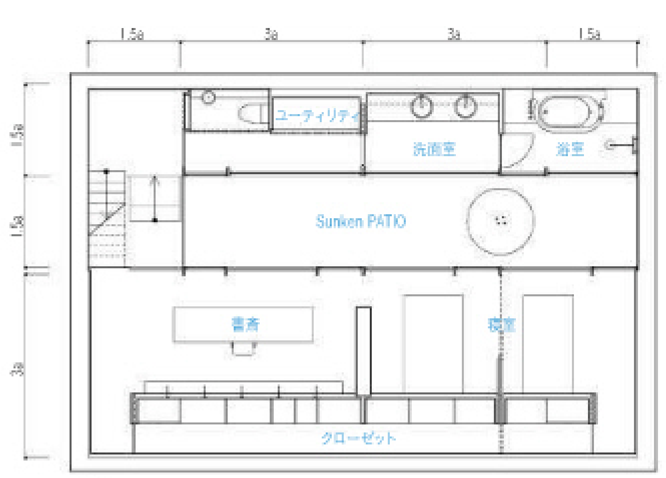
配置図　縮尺1：1,000



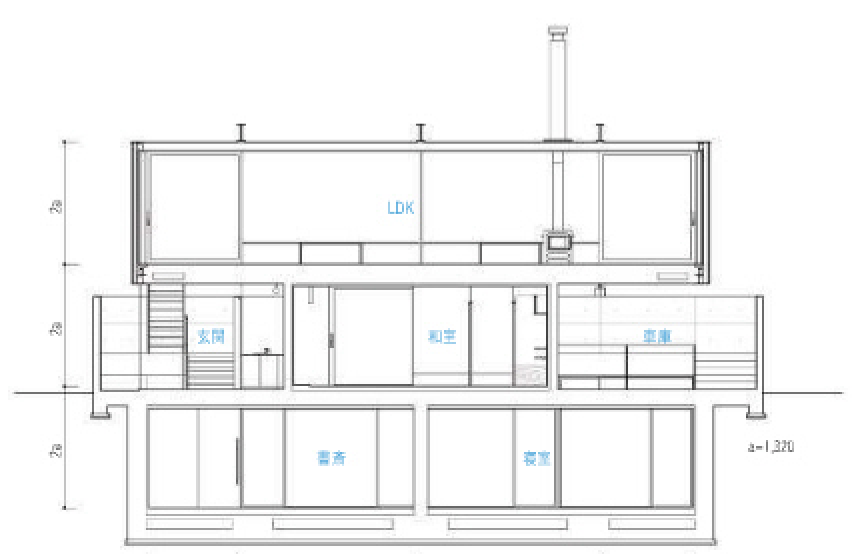
2階平面図



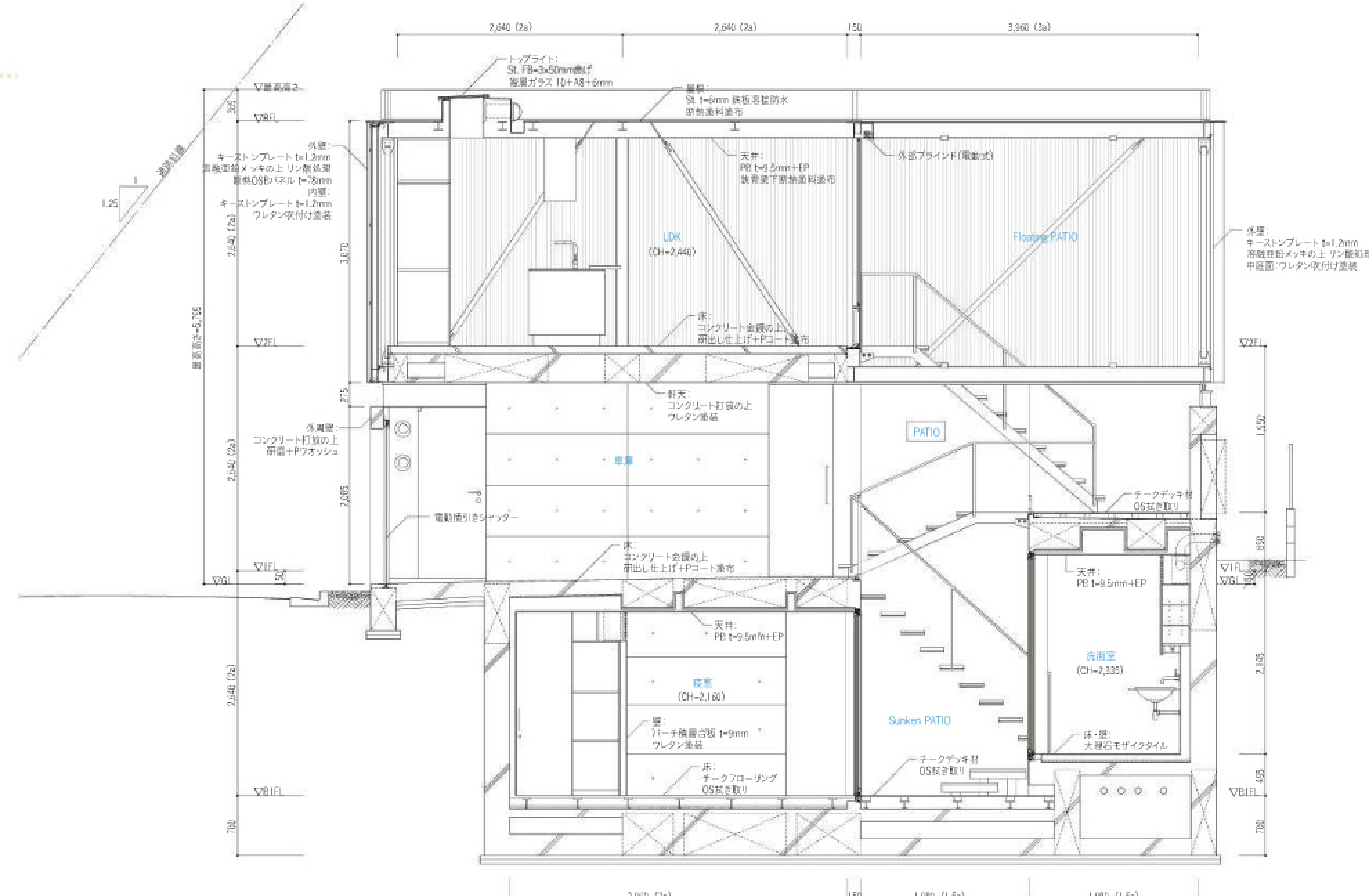
1階平面図　縮尺1：200



地階平面図



長手断面図　縮尺1：200



短手断面図　縮尺1：75



Sunken PATIO。上部に視線が抜けた先には空のみが見える。



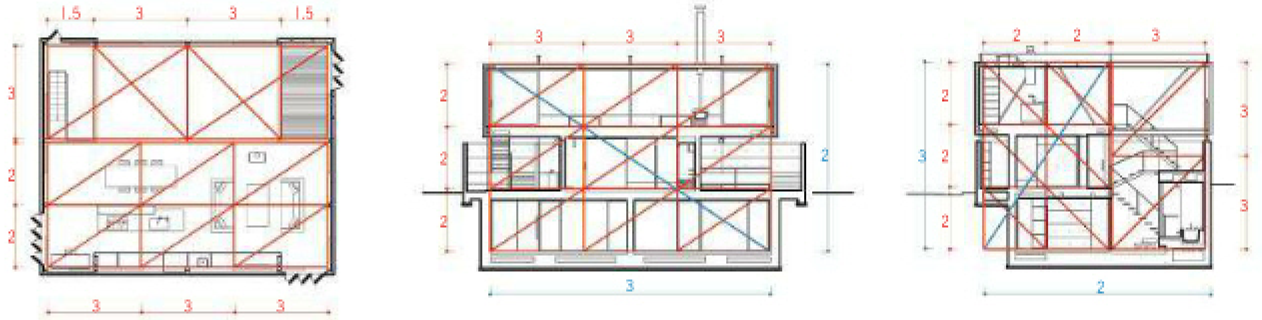
2階テラスから見る。キーストンプレートが四方を囲んでいる内部には、劇的に開かれた空間が広がる。
左に2階リビング・ダイニング、その下に和室と露地、地階の寝室という3層構成となる。PATIOと呼ばれる中庭を介して、右側がルーフテラス。



2階キッチン・ダイニングを見る。トップライトは6mm厚の屋根の鋼板と一体となって施工されている（詳細は153頁PROCESS VIEW参照）。
床はコンクリート研ぎ出し仕上げ。

今さら何を、あえて言おう
理想・調和・プロポーション

矢板久明



左から「PATIO」平面図、長手断面図、短手断面図。赤ラインと文字は比率を示す。



左：2階Floating PATIOからリビング方向を見る。中心の梁からシンメトリーに空間が展開する。
右：2階階段室から見る。中庭と居室の階層を超えた連続性を生み出す。

正対して見ると古典、斜めから見ると近代

古代ギリシャから伏流水のように流れ続けているもの、それは真理を求め続ける心である。宇宙の構造が解き明かされ、最小単位の世界まで手の内にしたかに思える今、真理などということを建築界で聞くことはほとんどない。視覚情報が溢れ、消費され、本物と見まごうばかりの仮想空間がコンピュータ上に構築されていく中、これまで受け継がれてきた真理に近付かんとし、見えざる価値を尊ぶ心はほとんどなくなってきているように思われる。

そんな中「PATIO」は、再び古典的世界に思いを馳せることとなり、そこに流れる思想の意味を改めて再認識する機会となった。それは建築家の米田明氏が「PATIO」に立ち寄ってくれた時のこと。彼は「正対して見れば古典、斜めから見れば近代の空間がある」という、大変興味深い感想を述べた。一見スタティックなフレームの中に、流動性の高い空間をつくったル・コルビュジエの建築がこれにあたるそうだ。意味深長な言葉である。私もこれまで考えてきたことが、「PATIO」でひとつの成果として立ち現れてきており、目指す空間の一端が生まれていることを感じていた。彼の言葉はそんな私の頭の中をかけめぐり、いろいろな思考の過程を振り返るきっかけとなったのである。

理想、あこがれ、麗しきもの

学生の頃、コーリン・ロウの著作やロウの師であるR・ウィットコーワーの著作などを心踊らせながら読んだ。過去の偉大な建築家たちがどのように建築を考えていたのか。そして、何を心の拠り所としていたのかを垣間見たような気がしたものである。

コーリン・ロウは『理想的ヴィラの数学』[1]で、連綿と続く西欧思想としての数的宇宙観を提示した。その著書でパラディオの「ヴィラ・マルコンテンタ」とル・コルビュジエの「ヴィラ・ガルシェ」が双方とも類似した比例関係を用いていることを指摘し、近代建築の旗手であるル・コルビュジエが、確実に西欧の哲学的伝統を引き継いだ精神的な古典主義者であったことを示した意義は大変大きかった。

もともとこの論は、R・ウィットコーワーが『ヒューマニズム建築の源流』[2]で、ルネサンスが音楽比と空間比を同一視する思想を根底にもつと指摘したことに端を発する。この『ヒューマニズム建築の源流』で、脈々と続く西欧の数的神秘主義の流れが明らかにされた。ルネサンスの思想は協和音なるものが単純な整数比によって決定されることを発見したピタゴラスの思想を源流とし、その後、プラトンの「現世は善なるイデアの投影である」とする二元論的世界観のイデア論へと引き継がれ、ローマ時代に入り「現世もイデアも一者から〈流出〉した善き存在である」とする一元論的なプロティノス[3]による新プラトン主義に変貌し、後に、この思想が15世紀にフィッチーノたちに受け継がれ、ルネサンスとして大きく花開いた。この『ヒューマニズム建築の源流』は、その後コーリン・ロウを通じてルイス・カーンにも直接手渡されたという[4]。

古典とは、数的宇宙観に源流をもつ思想

『建築へ』[5]の中でル・コルビュジエは「建築は優れた芸術であり、比例の取れた関係によってプラトン的偉大さ、数的秩序、調和の思考と知覚という状態に達する」と述べた。

ピタゴラスの「万物は数なり」ととらえる数的宇宙観に端を発し、プラトンが『ティマイオス』[6]で述べた「宇宙は幾何学的充実体である」とする哲学は、「宇宙はデミウルゴスの意思により現れ、意図せざるものはない」という確信に基づくものであった。その思想を受け、ル・コルビュジエは「精神的なるものは美しく、美しいものは幾何学的精神の直接の反映であることを固く信じて建築をとらえる」[7]という一貫した態度であった。彼にとって数的宇宙というイデアの世界は、もはや単なる知識ではなく、ありありとそこにあるものとしてとらえていたはずである。筋金入りの神秘主義者であったといってよい。

建築は目を閉じて理解するもの

数的秩序を論じること、そこにあるのは精神である。現象世界で勝負する建築でも、それは変わらないはずだ。それはコーリン・ロウが「透明性」[1]の中で、美学者G・ケペッシュの言葉を引用し「透明性とは、空間的に別のところにあるものを同時に認識すること」と述べている。この透明性も、昨今、目に見える世界だけで論じられることが多く、もはや精神性の欠如としかいえない状況である。ここで論じている数的比例を通しての建築の認識は正にこの透明性の獲得なのである。

それでは、建築における数的宇宙の歴史を少し紐解いてみる。

パルテノン神殿［図1・2］は6つの2：3の矩形からなり、正面は基壇下部からコーニスの高さの2倍の幅となっている。有名な黄金比は破風の頂部で成立している。ル・コルビュジエのロンシャンの教会［図3］は自由奔放に見える形態にもかかわらず、単純な幾何学が基礎となっている。ル・コルビュジエ財団にある図面の平面にはふたつ正方形が描かれ、高さも平面の正方形の一辺の1/2を一辺とするふたつの正方形が示されており、空間のヴォリュームとして8つのキューブが置かれていることが分かる。ルイス・カーンの場合、私の研究によれば[8]ここに挙げるイエール大学アートギャラリー［図4・5］以降、ほぼすべての彼の建物に黄金比の近似である5：3と正方形が採用されており、サーバントスペースとサーブドスペースも、これらの矩形や正方形が重なり合った部分に現れてくる。ここで挙げた3例とも、ヴォリュームとして比例が用いられており、比例的関係を通じて建物を3次元の概念としてとらえていることが重要であると考える。

浮かび上がる数的秩序—PATIOの場合

「ルネサンスの建築家は、常に左右対称を理論上の必要条件と見なしていた」[1]とコーリン・ロウは述べている。球を究極的な幾何学立体とするプラトン的宇宙観では、対称形を理想とすることは、より完全なかたちを希求する意識からも自然なことであったと思われる。

偉大な建物を言及した後で僭越であるが「PATIO」についても述べてみよう。建物長手方向での構造フレームは左右対称となっている。これは1階の開放性を高くするため、和室を囲む構造のみを置き、地下の寝室と書斎の間の柱を建物長手中央に置くという提案を、構造家の杉浦克治氏から受けたことに端を発する。やじろべえのように構造的バランスを取る、という重力を意識したごく自然な態度が、この建物に軸線を与え、シンメトリーが生まれた。建築がかくありたしと語り出したのである。これは自然の摂理を受け止めた結果であり、宇宙の理と呼応したように感じた。断面では各階とも同じ高さが与えられ、長手方向では9つの2：3の矩形で整えることが相応しく思われた。平面でも2：3の矩形が現れ、2階のリビングは6つの2：3の矩形で、その短手断面は2倍正方形である。このリビングの数的ヴォリュームはパルテノン神殿と同じものになっていた。なんとも不思議である。

「規制線の選択は霊感の決定的瞬間」とル・コルビュジエは述べている。私も設計が大詰めを迎え、全体の数的秩序が現れる時、不思議な感覚を覚える。そしていつも思う、「あっ、そうだったのか」と。

数的秩序を与えることは、自由さの獲得

プロポーションを与えること自体が、縛られるような印象を受ける人も多いかもしれない。しかしそれはまったく逆であり、自由さを獲得し、空間がふくらみを得る時であり、建築が意志を獲得したと思う瞬間である。比例で調整するのはあくまで秩序を発見することで、最初は意識をしない。建主の要望に耳を傾け、さまざまな条件に対して最善と思える答えを出していった後、最後にすがすがしい秩序との出会いが待っている。それまで頭を悩ましていた問題は美学へと昇華し、跡形もなく消え去っていく。後に残るのは目を閉じても心に残る秩序であり、それはいつまでも変わらない普遍的なるものである。

未来に向けて今思うこと

調和を目指すベクトルと、進歩、発　を目指すベクトルはクロスする。両立させることは難しい。視覚情報の氾濫する現在ではより新しいこと、革新的なことを求めるのは自然なことかもしれない。しかし、我々に深い感動を与え続けてきた建築を思い起こす時、それらをつくった人びとの精神と彼らの信じた世界へ、もう一度目を向ける時ではないだろうか。

イデアに近付き、真理へと向かう扉のひとつが数的宇宙観であった。特にル・コルビュジエの一途さは特筆に値するものであり、また作品すべてに黄金比を使い続けたカーンの強靭な精神は驚異ですらある。彼らは調和と発　というふたつのベクトルを止揚したのだ。それを実現させたのは、人類の真なる幸福を願う心であり、真摯にイデアを見つめ続ける謙虚さであったように思う。未来に向けて求められるのは、まさにこの姿勢に違いない。

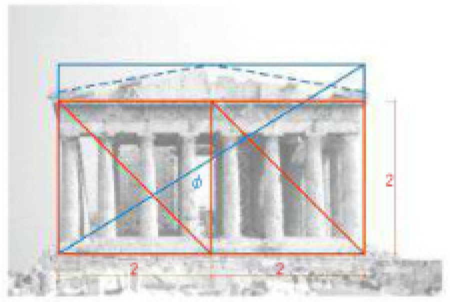


図1：パルテノン神殿 断面図

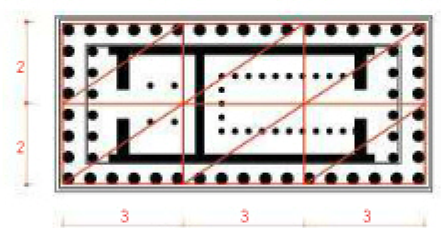


図2：パルテノン神殿 平面図

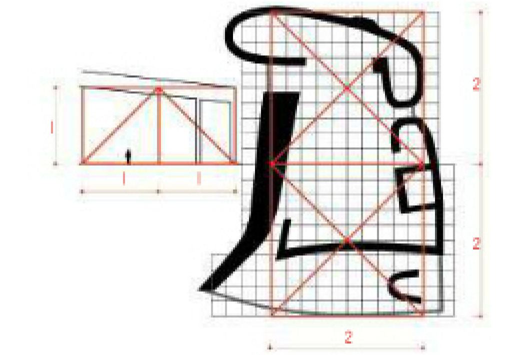


図3：ロンシャンの教会 断面図・平面図

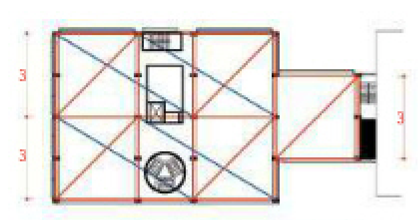


図4：イエール大学アートギャラリー 平面図

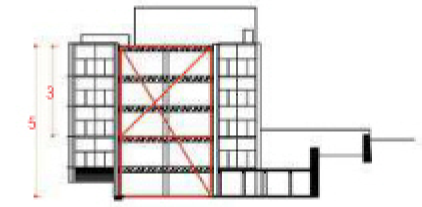


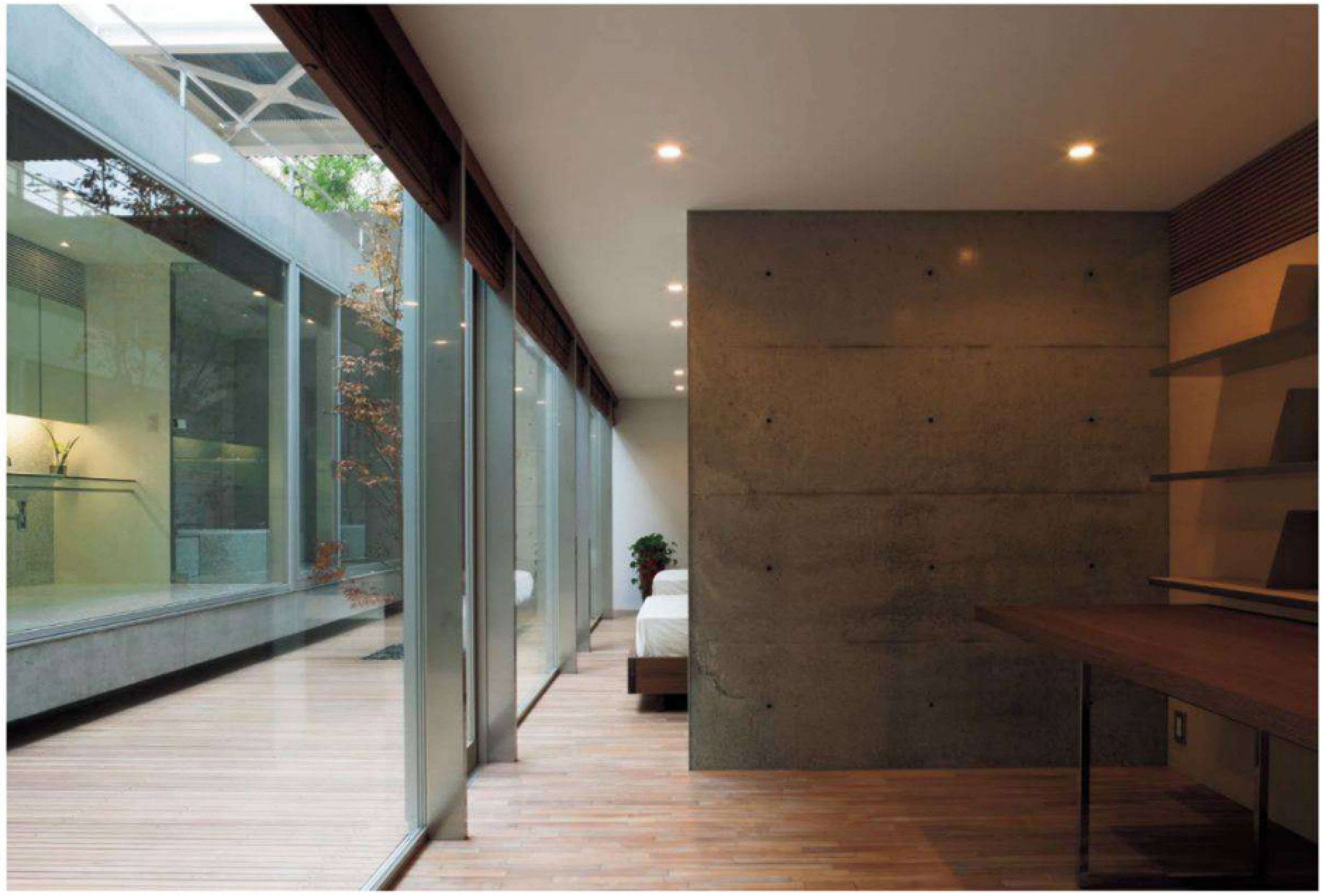
図5：イエール大学アートギャラリー 断面図

参考・引用文献

[1] コーリン・ロウ著　伊東豊雄・松永安光訳『マニエリスムと近代建築』1947年・1981年　彰国社
[2] R・ウィットコーワー著 中森義宗訳『ヒューマニズム建築の源流』1949年・1971年　彰国社
[3] プロティノス著『エネアデス』（プロティノス全集）A.D.3世紀・1987年　中央公論社
[4] D・G・デ・ロング著 東京大学香山研究室監訳「第2章リアライゼーションへと開かれる心」『ルイス・カーン 建築の世界』1992年　デルファイ研究所
[5] ル・コルビュジエ著 樋口清訳『建築へ』1923年・2003年　中央公論美術出版
[6] プラトン著 種山恭子訳『ティマイオス』（プラトン全集 第12巻）B.C.4世紀、1975年　岩波書店
[7] 広部達也著『凝視するデミウルゴス』1985年　建築学大系6　彰国社
[8] 矢板久明著 東京大学修士論文『空間算法試論』1982年
[9] 加藤道夫著『ル・コルビュジエ』2011年　丸善

図版

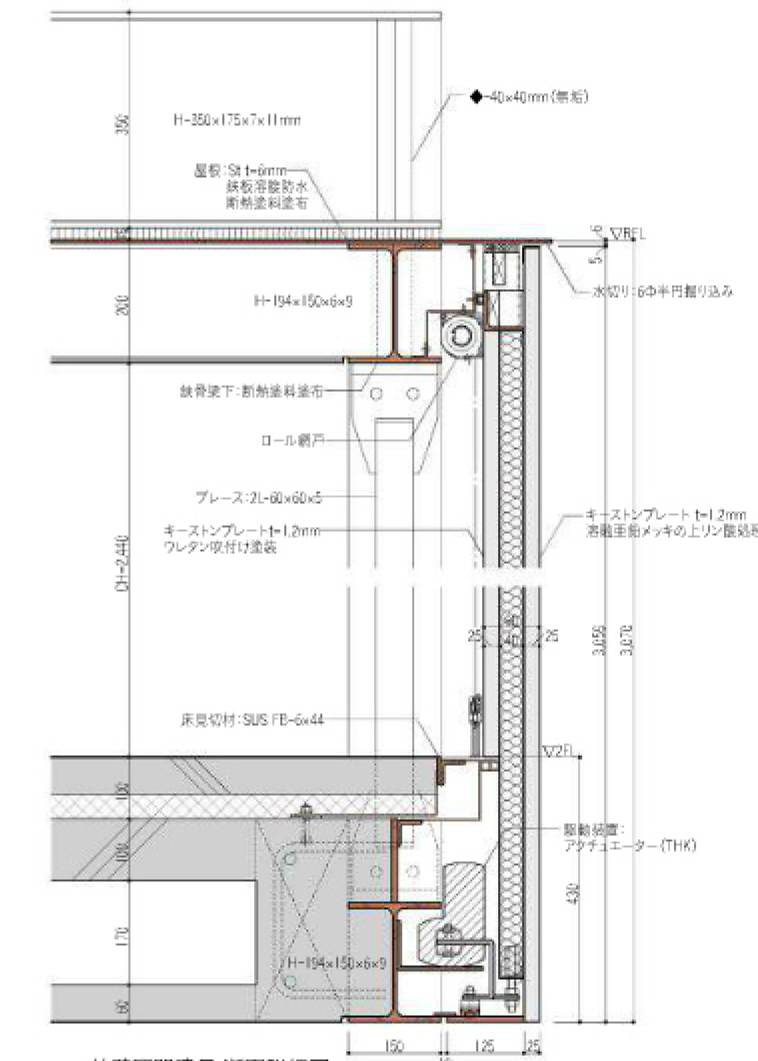
＊図面はすべて筆者作図、図2以外は筆者分析
[図1] 筆者撮影
[図2] Henri Stierlin「GREECE from Mycenae to the Parthenon」p.191を参考
[図3] ル・コルビュジエ財団FCL7455を参考
[図4・5] ETH「LOUIS.I.KAHN　complete work 1935-74」p.66を参考



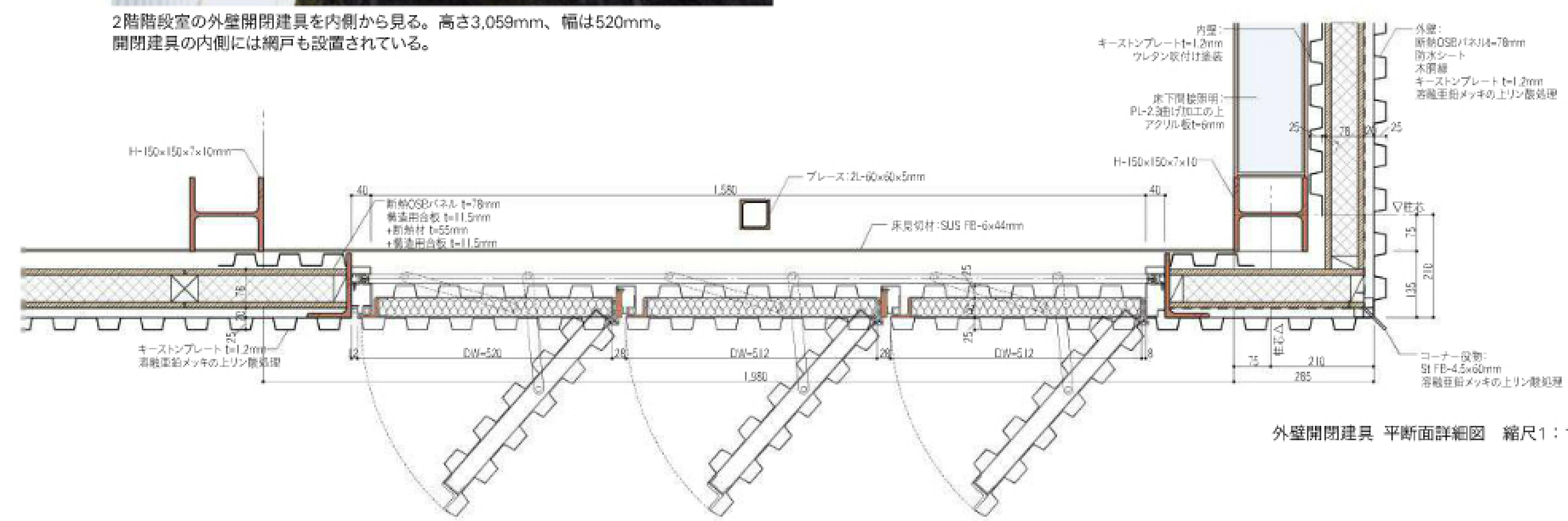
地階書斎から寝室を見る。左はSunken PATIOと洗面室、浴室。中庭からの光が満ち、地下にいることを感じさせない。



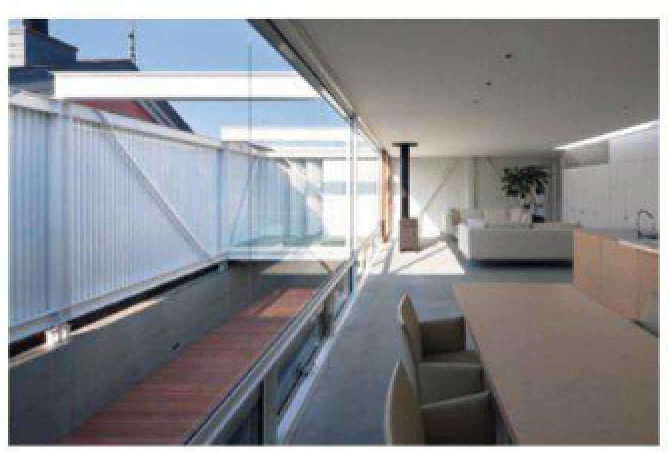
2階階段室の外壁開閉建具を内側から見る。高さ3,059mm、幅は520mm。
開閉建具の内側には網戸も設置されている。



外壁開閉建具 断面詳細図



外壁開閉建具 平断面詳細図 縮尺1：15





左：2階リビング・ダイニングとFloating PATIO。／中央：1階和室。茶会ができるよう、また空間に見合った端正な床の間をもつ。

PATIO

所在地／東京都
主要用途／専用住宅
家族構成／夫婦

設計

矢板建築設計研究所
担当／矢板久明　矢板直子　栗原佳子
大久保元彰*　石川周*　安井尚*
*元所員
構造　担当／構造設計社　杉浦克治
設備・電気　島津設計　担当／島津充宏
コーディネート　ザ・ハウス

施工

日南鉄構　担当／鹿島正　加賀山豪士
大工　担当／佐久間勉
土工事・型枠　永元組　担当／永元秀和
衛生設備　増根住設　担当／増根章宏
空調設備　ホサカ　担当／保坂光一
電気　川見光電社　担当／川見光
金属工事　サスプロ　担当／林浩二
駆動装置　THK　担当／小片尚志
木製サッシ　モローズ　担当／両角今朝敏
硝子　安斎特殊硝子　担当／安斎亮一
建具　千葉木工製作所　担当／千葉信彦
家具　アオキ家具アトリエ　担当／青木隆
置き家具製作　コアド&マテリアルズ
担当／木本浩司
塗装　有田ペインティング　担当／有田正
外構・造園　箱根植木
担当／大平暁　保永博文
コンクリート研出し　パーフェクトウォッシュ
担当／吉川和助
コンクリート補修　赤坂左官　担当／赤坂義語
ブラインド／空間、JBS　担当／沼澤幸喜
外部ブラインド　日本オスモ　ヴァレーマ
担当／西村好弘

構造・構法

主体構造　鉄筋コンクリート造　一部鉄骨造
基礎　直接基礎

規模

階数　地下1階　地上2階
軒高5,424mm　最高の高さ5,799mm
敷地面積　172.19m²
建築面積　79.41m²
（建蔽率46.12％ 許容50％）
延床面積　134.40m²
（容積率78.05％ 許容150％）
地階　81.45m²　1階　73.76m²
2階　71.65m²

工程

設計期間　2006年 5月〜2009年 6月
工事期間　2009年 7月〜2011年 11月

敷地条件

地域地区　第一種低層住居専用地域
準防火地域　第一種高度地区
道路幅員　東15.41m　駐車台数 1台

外部仕上げ

屋根／ St. t=6mm 鉄板溶接防水 断熱塗料塗布
外壁／ 2階：断熱OSBパネル t=78mm
キーストンプレート t=1.2mm溶融亜鉛メッキリン酸処理
地階・1階：コンクリート打放し 撥水材塗布
開口部／ 1階・2階：特注スチールサッシ　木製サッシ　アルミ製電動横引きシャッター（横引きシャッター）
地階：特注スチールサッシ　アルミサッシ（三協立山アルミ）
外構／コンクリート研ぎ出し仕上げ

内部仕上げ

リビング　ダイニング　キッチン

床／コンクリート研ぎ出し仕上げ
壁／キーストンプレートt=1.2mm UP吹付け
天井／ PB t=9.5mm EP
照明／山田照明 DNライティング（床下間接照明）
家具／ソファ ダイニングチェア（B&B ITALIA）
ダイニングテーブル・リビングテーブル・ライティングデスク：特注（コアド&マテリアルズ）
薪ストーブ／ Classic4（DLD）
厨房機器／アムスタイルキッチン
ドア化粧材／フィンランドバーチ積層合板
ワークトップ／ SUS t=6mm バイブレーション仕上げ
換気扇（シェード）／ FABER
シンク水栓金物／ GROHE

浴室

床／大理石モザイクタイル（ADVAN）
壁／大理石モザイクタイル（ADVAN）　一部コンクリート打放し　一部モルタル金ごて押さえUP
天井／フレキシブルボード t=6mm 2枚張り UP
バスタブ／ jaxson Aperta
シャワー水栓金物／ DORNBRACHT リラインス
空調機器／浴室暖房乾燥機

和室

床／畳敷き t=35mm
壁／ PB t=12.5mm アイカジョリパッド三河白土撫切り仕上げ　湊紙張り（東京松屋）
天井／ PB t=9.5mm 土佐和紙張り
地板・床板等／スギ板（もくもくサンワ）
建具／障子両面貼り切り引手（東京松屋）
和室金物／西村健一商店

書斎・寝室

床／チークフローリング t=15mm OS拭き取り（コアド&マテリアルズ）
壁／ PB t=12.5mm EP　一部バーチ積層合板 t=9mm
天井／ PB t=9.5mm EP
家具／書斎机・ワゴン：特注（コアド&マテリアルズ）
ベッド（arflex）

設備システム

空調　暖房方式／空冷ヒートポンプ式
薪ストーブ
冷房方式／空冷ヒートポンプ式
換気方式／第三種換気方式
床暖房／ガス温水式床暖房
給排水　給排水方式／上下水道直結
給湯　給湯方式／ガス給湯器

撮影／新建築社写真部



house I

東京都武蔵野市

日吉坂事務所
Office Hiyoshizaka

引き戸を開けると前庭が広がり、玄関へと続く。制作の木製建具は、窓枠を小割にすることで、さまざまなサイズやプロポーションをもつ建物の開口部に統一感を与えている。

作家である御主人と、一緒に仕事をする奥様、そして子供ふたりが暮らす仕事場を併設した住宅である。敷地は閑静な住宅街にあり、周囲にできるだけ圧迫感を与えないよう、小さな切妻屋根が連なる形式とした。また、仕事場と生活の場ができるだけ距離感をもち、また動線距離を生むためにも平面計画は中庭形式とした。

建物の内部には、豊富な蔵書を楽しむ読書部屋、奥様の作業部屋など役割を細分化した結果生まれた、通常の住まいにはない小部屋が多くある。また寝室や子供部屋などサイズを圧縮することで小部屋化したものもある。それらは、その小部屋とその外まで含めた時に使い方が充実してくるような役割のもたせ方になっている。

これらの小部屋を建物内に配していくのに際し、われわれは小部屋の配置が生み出す構成と、外形がもたらす室内形状、そして在来木造による構造体という3つの要素に並行して向き合うこととした。
具体的には、構成や外形、構造のどれかに明確な主導権を引き渡すのではなく、むしろ場面ごとに主役が切り替わっていくような、主従関係の揺らぎが動的に体感されるような場をつくり出すことを考えた。
その結果、緩やかに連続する場の中にあって、ある場所では小部屋の構成による空間の立体感を強く感じたり、別の場所では立ち現れた構造柱が空間に思わぬ効果をもたらしていたり、あるいは屋根形状を生かした屋根架構を強く感じる場が現れたりと、構成、外形、構造という3要素が次々と濃淡を変化させる場ができ上がった。

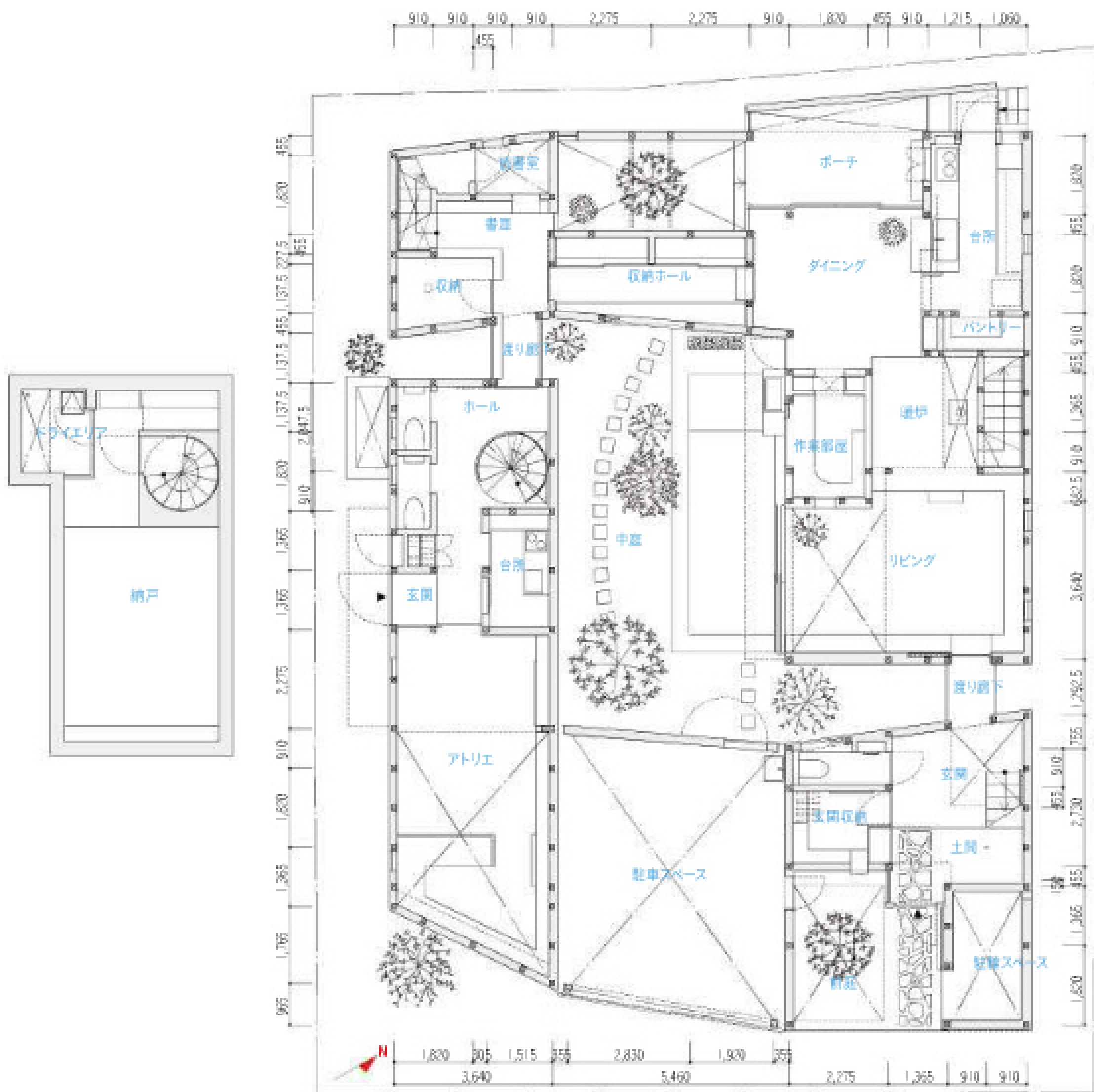
建築を扱う思考において、単純な統合、帰結をもたせないことで生まれる豊かさを手にできればと考えた。　（寳神尚史）

配置図　縮尺1：1,500

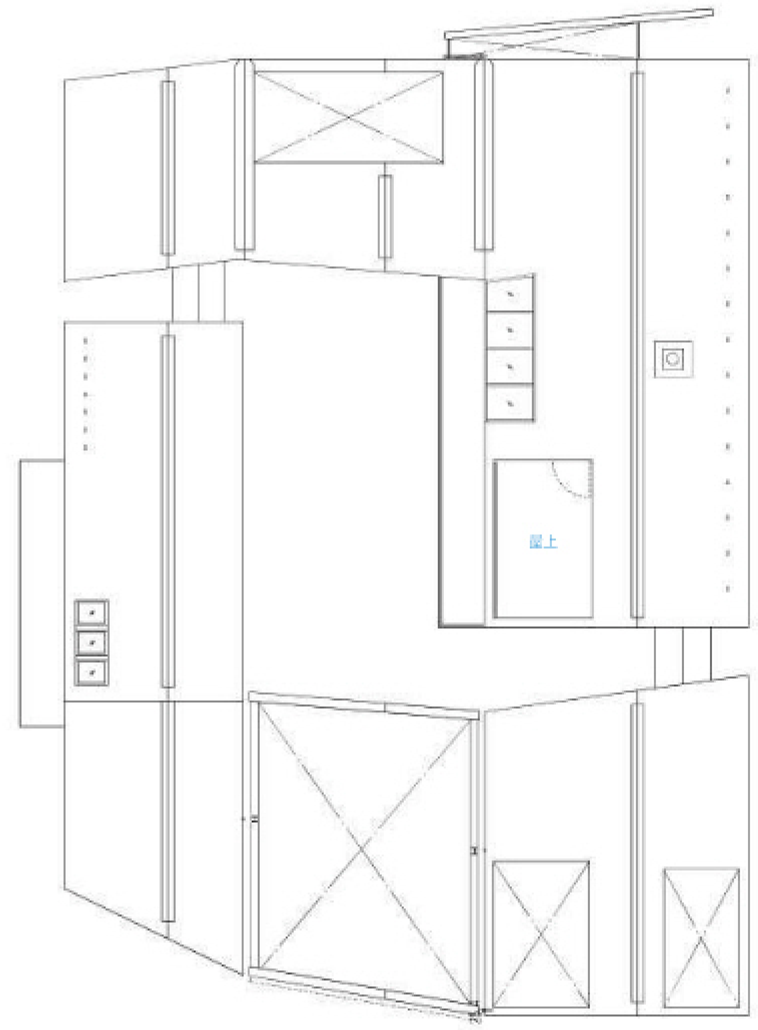




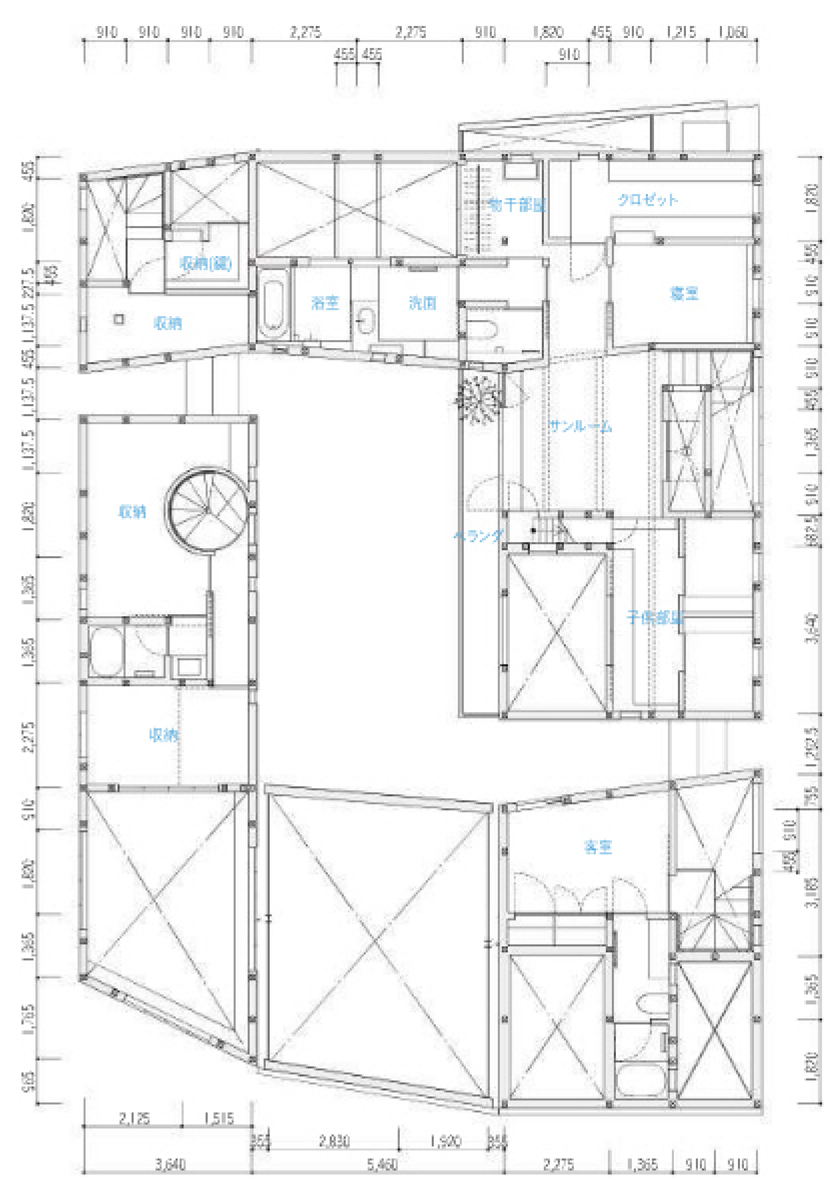
視線は抜けつつもダイニングからリビングにかけての空間が作業部屋により柔らかく分節されている。機能を特化した小部屋の内部は、家具や壁・天井に施された色彩によって特徴付けられる。



1階平面図　縮尺1：200



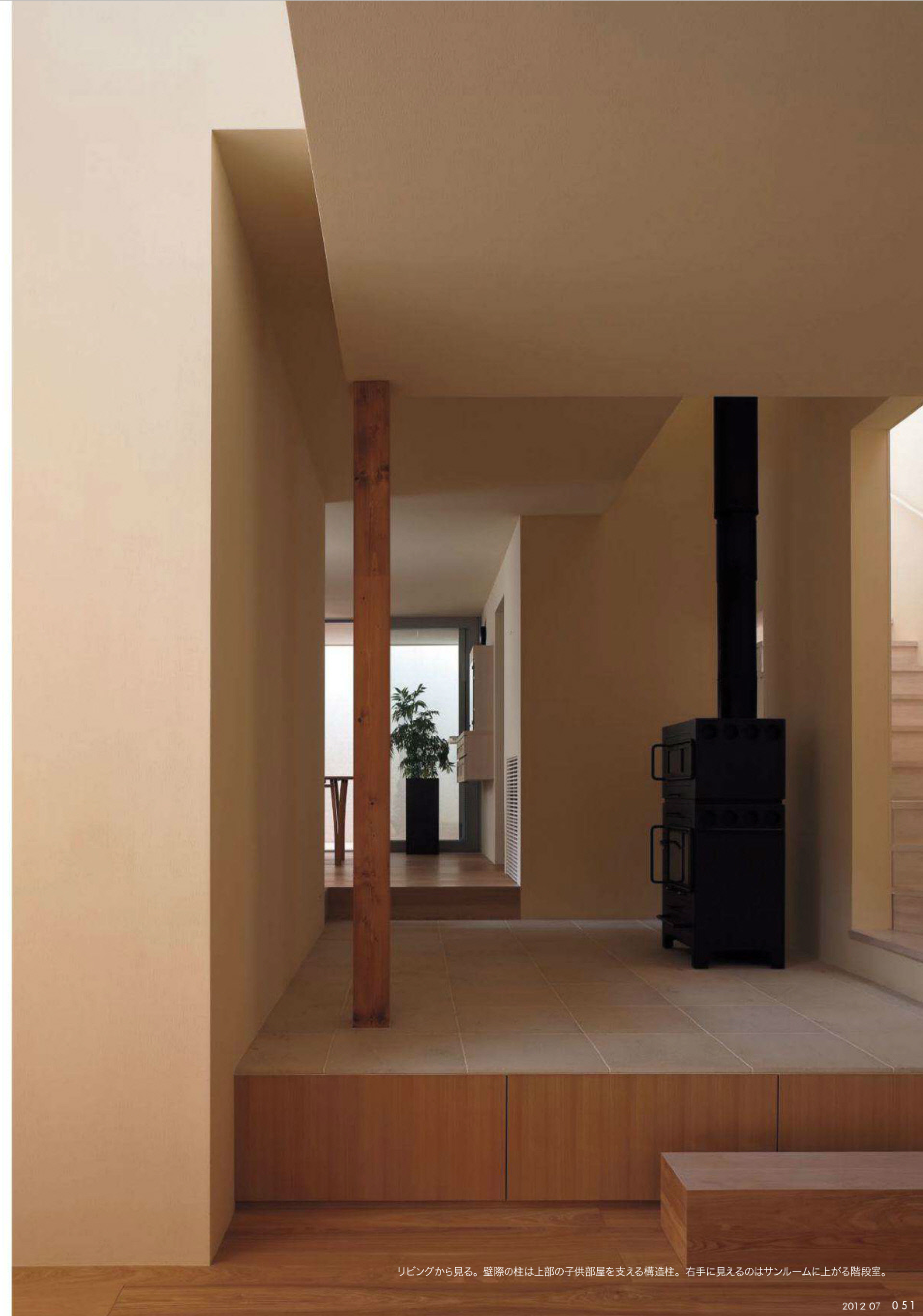
屋上平面図



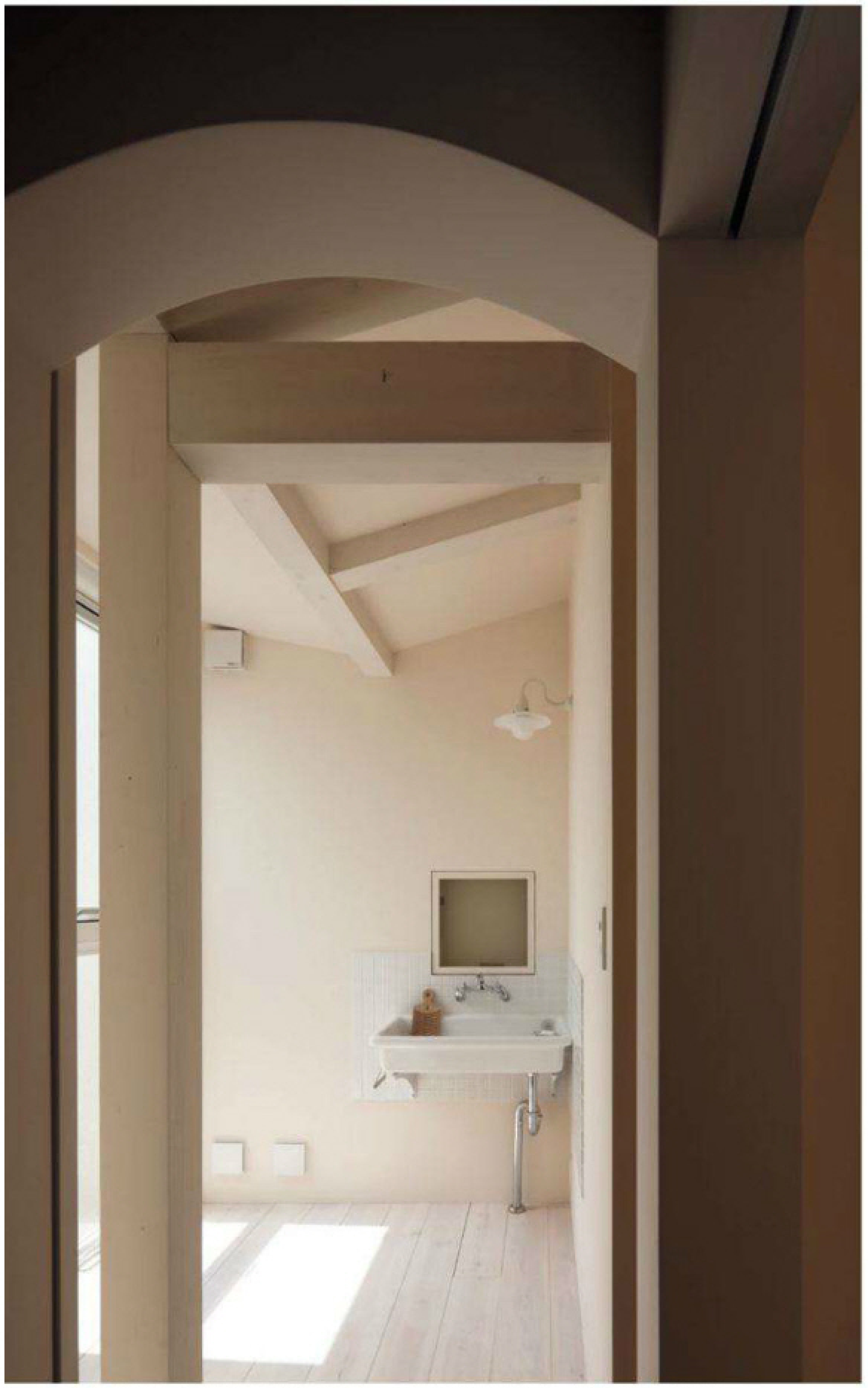
2階平面図



リビングの大開口を開けると中庭と一体となる。



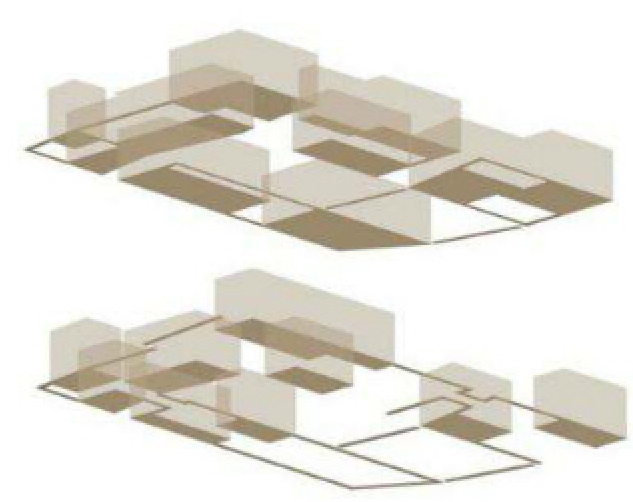
リビングから見る。壁際の柱は上部の子供部屋を支える構造柱。右手に見えるのはサンルームに上がる階段室。



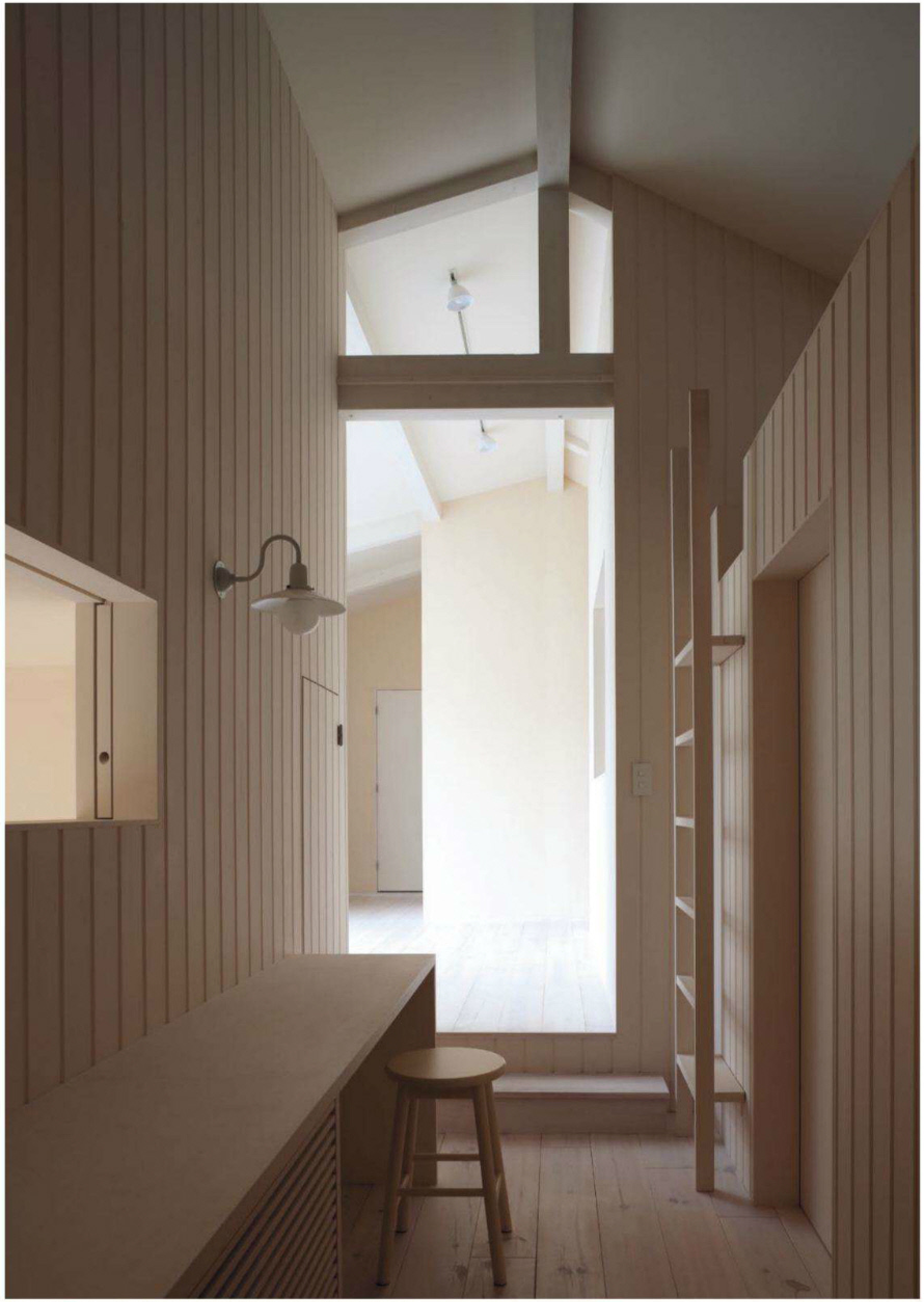
物干し部屋。空間構成と構造それぞれがあるべき状態として計画された結果、壁際に柱が現れている。



2階サンルーム。切妻屋根による天井勾配とその架構のもつ表情を生かすために、壁面は他所に比べてラフに仕上げている。天井高は2,668mm〜3,334mm。



小部屋の配置を手がかりに生み出された空間構成



子供部屋よりサンルームを見返す。先の空間へと誘うように明暗がコントロールされる。



手前の洗面室から寝室を見る。室内に施された色彩は彩度を合わせることで、統一感をもたせている。



アトリエ。外部の状況や時間帯にかかわらず安定した状態を確保するため4面とも上部に開口を設けている。



屋上から見るルーフスケープ。周囲に合わせた屋根の連なり。

house I

所在地／東京都武蔵野市
主要用途／仕事場兼用住宅
家族構成／夫婦＋子供2人

設計

日吉坂事務所　担当／寳神尚史　穐吉彩加
構造　金箱構造設計事務所
　担当／金箱温春　内山裕太
植栽　江田俊子

施工

青　担当／片岡大　八木康輔
木製サッシ　モローズ　担当／両角今朝敏
塗装　ポーターズペイント　担当／伊藤省太郎

施工

主体構造・構法　木造在来工法
基礎　べた基礎

規模

階数　地下1階　地上2階
軒高 6,045mm　最高の高さ 7,100mm
敷地面積　419.79m²
建築面積　167.68m²
　（建蔽率39.94% 許容40%）
延床面積　292.48m²
　（容積率69.67% 許容80%）
地階　27.44m²　1階　162.08m²
2階　130.40m²

工程

設計期間　2010年6月〜2011年5月
工事期間　2011年6月〜2012年3月

敷地条件

地域地区　第一種低層住居専用地域
　第一種高度地区　法第22条区域
道路幅員　南東4.0m　駐車台数2台

外部仕上げ

屋根／ガルバリウム鋼板 t=0.35mm
　竪はぜ葺き
外壁／アクリル系壁仕上げ吹付　リシン吹付
開口部／木製サッシ　アルミサッシ
外構／植栽　砂利敷き　タイル

内部仕上げ・使用機器

キッチン

床／タモ複合フローリング t=15mm
壁／ 50mm角タイル　100×200mmタイル
　漆喰塗装
天井／ PB t=9.5mm AEP
厨房機器／
　食洗器／パナソニック NP-P45MD2W
　IHコンロ／パナソニック KZ-J75HS
　換気扇（シェード）／サンウェーブ MCFED-941TW
照明／ FUTAGAMI 明星小
　パナソニック HGW2410 EP
シンク水栓金物／ INAX JF-1450SX

浴室

床／ 200mm角タイル INAX
壁／ 95×20mm角タイル
　アクリル系壁仕上げ吹付
天井／アクリル系壁仕上げ吹付
照明／笠松電機 KS-50WW
バスタブ／大和重工 CASTIE
シャワー水栓金物／ CERA

洗面

床／パイン無垢フローリング t=21mm
壁／ PB t=12.5mm ポーターズペイント
天井／ PB t=9.5mm ポーターズペイント
照明／パナソニック HGA1362KC

リビング　ダイニング

床／タモ複合フローリング t=15mm
壁／ PB t=12.5mm 漆喰塗装
天井／ PB t=9.5mm 漆喰塗装
照明／コイズミ照明 XDE 951 378
　MAXRAY MB5707-01

サンルーム　子供部屋

床／パイン無垢フローリング t=21mm
壁／ PB t=12.5mm 漆喰塗装 パイン羽目板
天井／ PB t=9.5mm AEP
照明／ MAXRAY OP0722-81＋OP0726-00

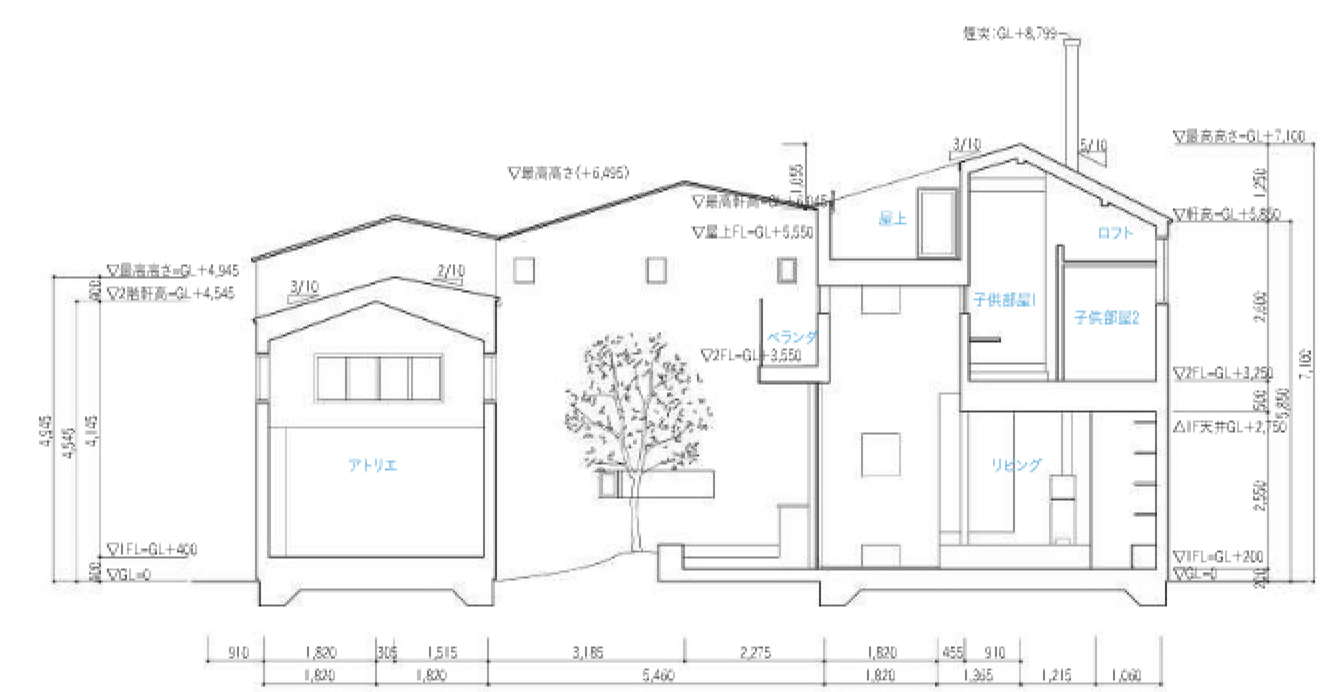
アトリエ

床／タイルカーペット
壁／ PB t=12.5mm 漆喰塗装
天井／ PB t=12.5mm AEP

設備システム

空調　暖房方式／ガス温水床暖房
　PS暖房　暖炉
　冷房方式／ルームエアコン
　換気方式／ロスナイ換気　第三種換気方式
給排水　給水方式／上水道直結
　排水方式／下水道直結
給湯　給湯方式／ガス給湯器

撮影／新建築社写真部



断面図　縮尺1：150

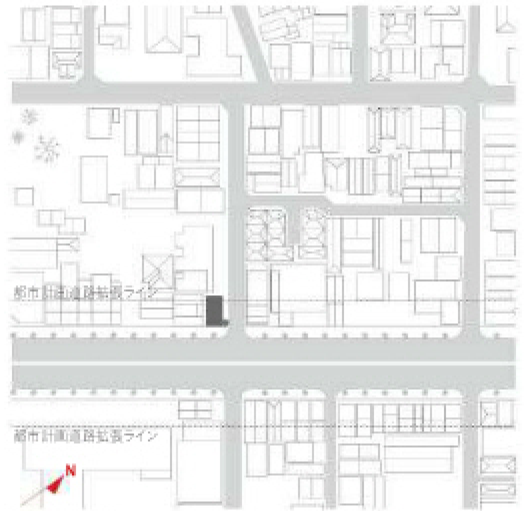


南東側外観。ファサードは3つの切り妻が連なるように壁を立て、左手のアトリエのヴォリュームをセットバックさせて町並みとのバランスを取っている。

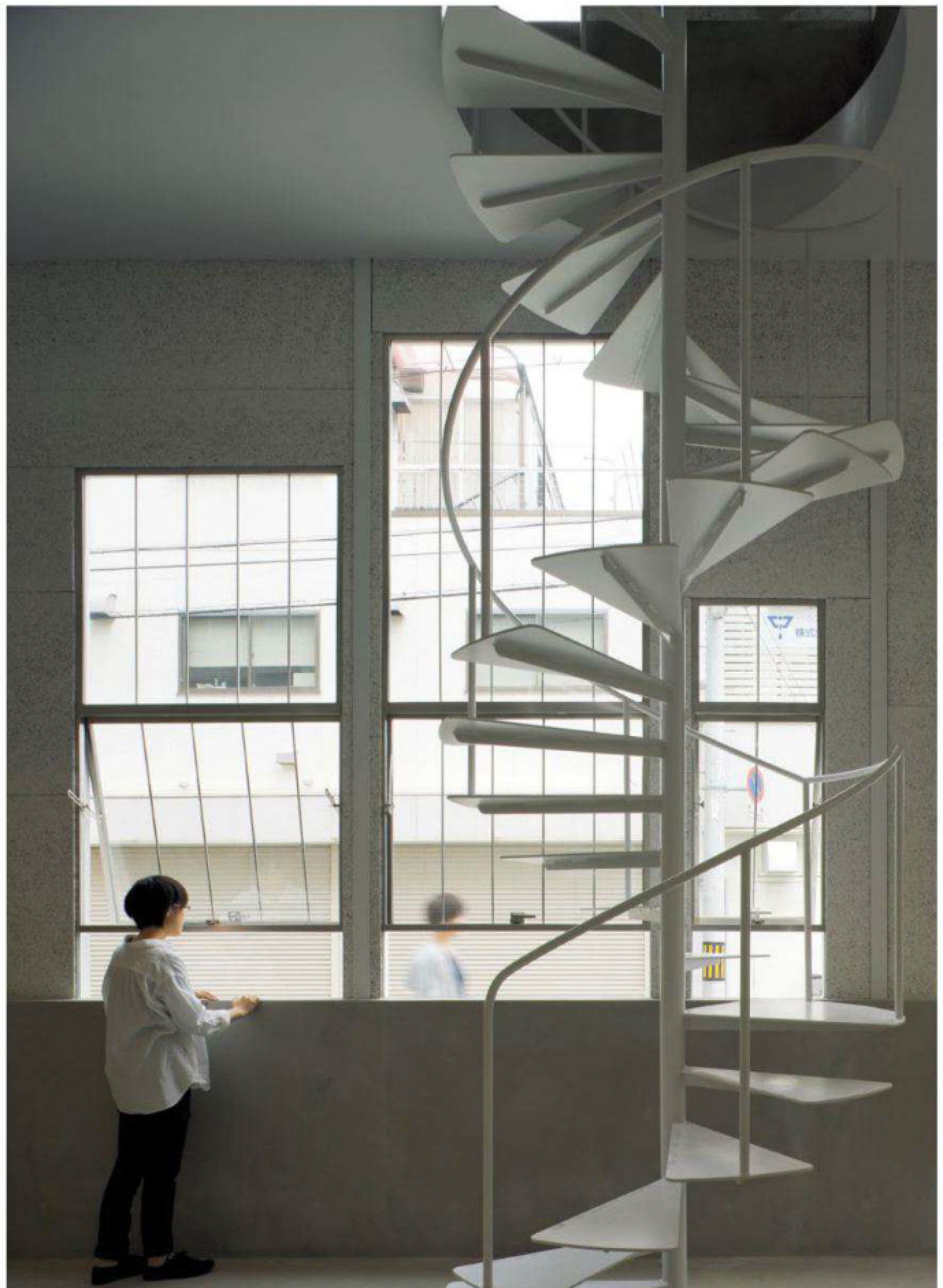
K

大阪市住吉区

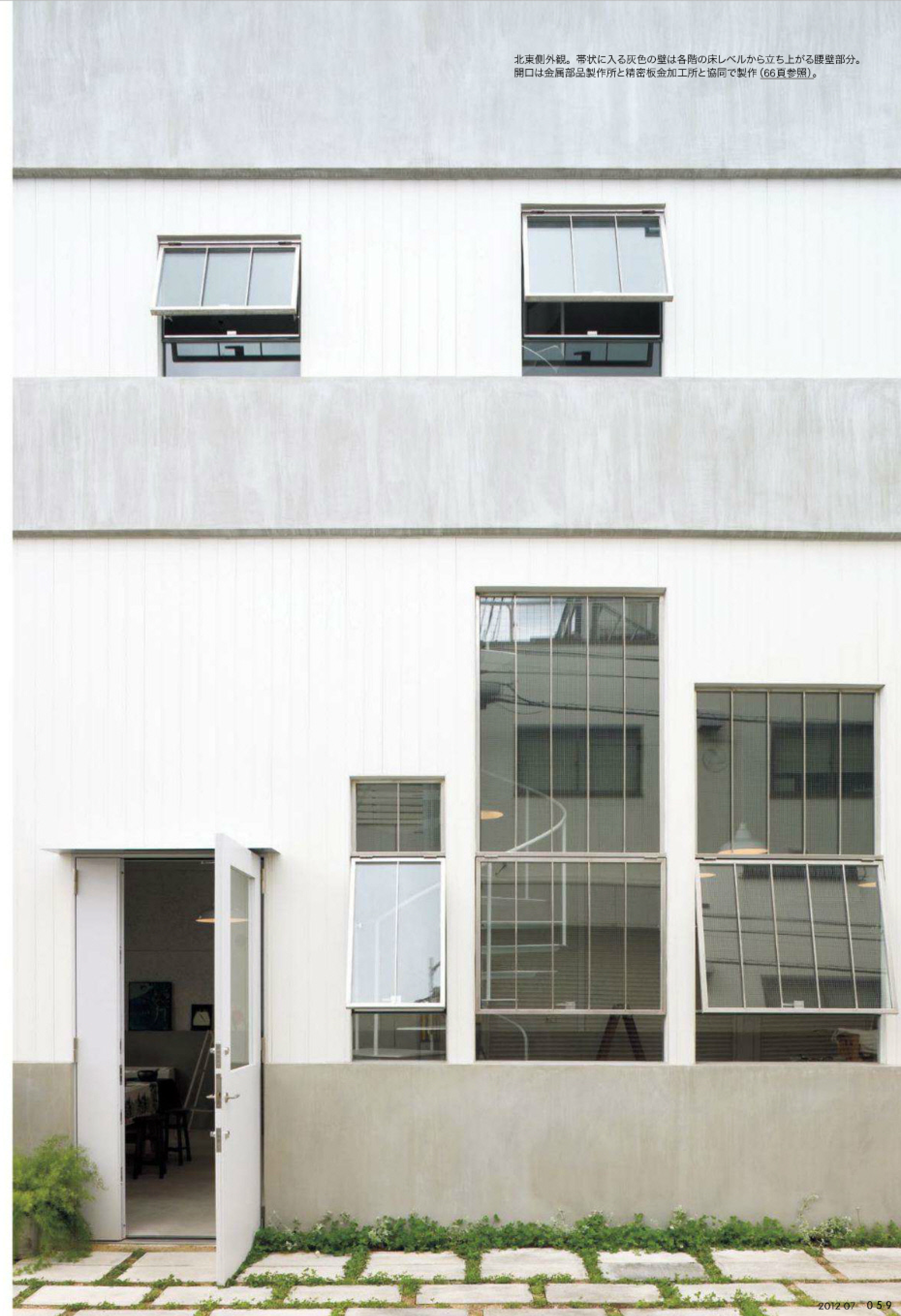
木村松本建築設計事務所
KimuraMatsumoto Architects



配置図　縮尺 1：3,000



1階室内より北東側道路を見る。腰壁は基礎の立ち上がりで高さは約1,100mm。



北東側外観。帯状に入る灰色の壁は各階の床レベルから立ち上がる腰壁部分。
開口は金属部品製作所と精密板金加工所と協同で製作（66頁参照）。



ギャラリーやアトリエに使う1階は天井高4,450mm。
腰壁に根巻きした75mm角の鉄骨無垢柱を3層分の高さで立ち上げ、H型鋼でつなげ、ブレースを入れている(65頁展開図参照)。

まちに住むこと

大きな幹線道路沿いの敷地周辺には小規模なギャラリー・工房が点在していて、音楽祭が催される大きな池が中心の公園もある、そんなまちだ。作家であるクライアントと、このまちに住むことについて話し合いながら、住宅/アトリエ/ギャラリー・イベントスペース・ショップなどがやや複合的に混ざり合った状態を考えた。まず、建物ヴォリュームを南隣地側寄りに置く。空いたスペースが西側集合住宅のセットバックとつながり、狭い道路側にパーキングとしての、あるいはオープンスペース/開放的な庭としての広がりが生まれた。

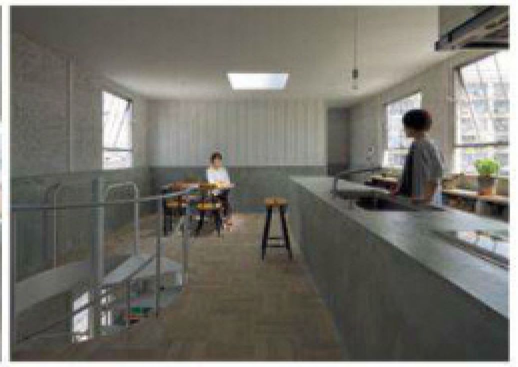
他人の庭

まちの99%は他人の場所だ、ある時そんなことをふと考えた。私に属する場所の外側にある場所の連なり、そこはすべて私以外の誰かの所有感が強くどうも関わる機会はなさそうである。そのように、私のものとそうでないものの区分がはっきりとしている場所が「まち」といえそうだ。
だけどそんなまちも歩いていると物理的に入れないが開放的に感じる場所に出会う。たとえば視線を遮らない程度で手をかけたり寄りかかったりできる低い塀に囲まれた他人の庭、そこは所有区分を越えた広がりをまちにもたらしている。
「建築をつくること」、それはある区分/境界を立ち上げることであるが、その境界の状態を「他人の庭」がつくり出す開放性にならってみることにした。

境界の傍

前の道路幅、隣家の起伏や距離、作品、コンサート、創作に用いられる材料、日常の生活など、そんな行為やものからなるいろいろなスケールを横断的に用いながら3つの高さの階をつくる。各階にはしっかりした厚みをもつ腰壁を設えた。腰壁の高さは行為・身体/まちのスケールに合わせて各階で変化させ、その上に「置く」ように配置された開口部が人と近しい存在感をもちながら、FIXガラス越しに見える、厚みをもった腰壁天面の連続が境界を際立たせている。そして腰壁の上の壁は対比的に薄く、柱の大きさは造作の寸法に近く、階段や手摺りは家具のフォルムに似ている。この場所はそのようなスケール調整と限られた素材からかたちづくられている。立体的にも豊かな変化をもつまちの中で、中と外をしっかりと分ける安心感と共に人の行為の往来を許容する、境界の傍での生活をさまざまに想像した。　(木村吉成+松本尚子)

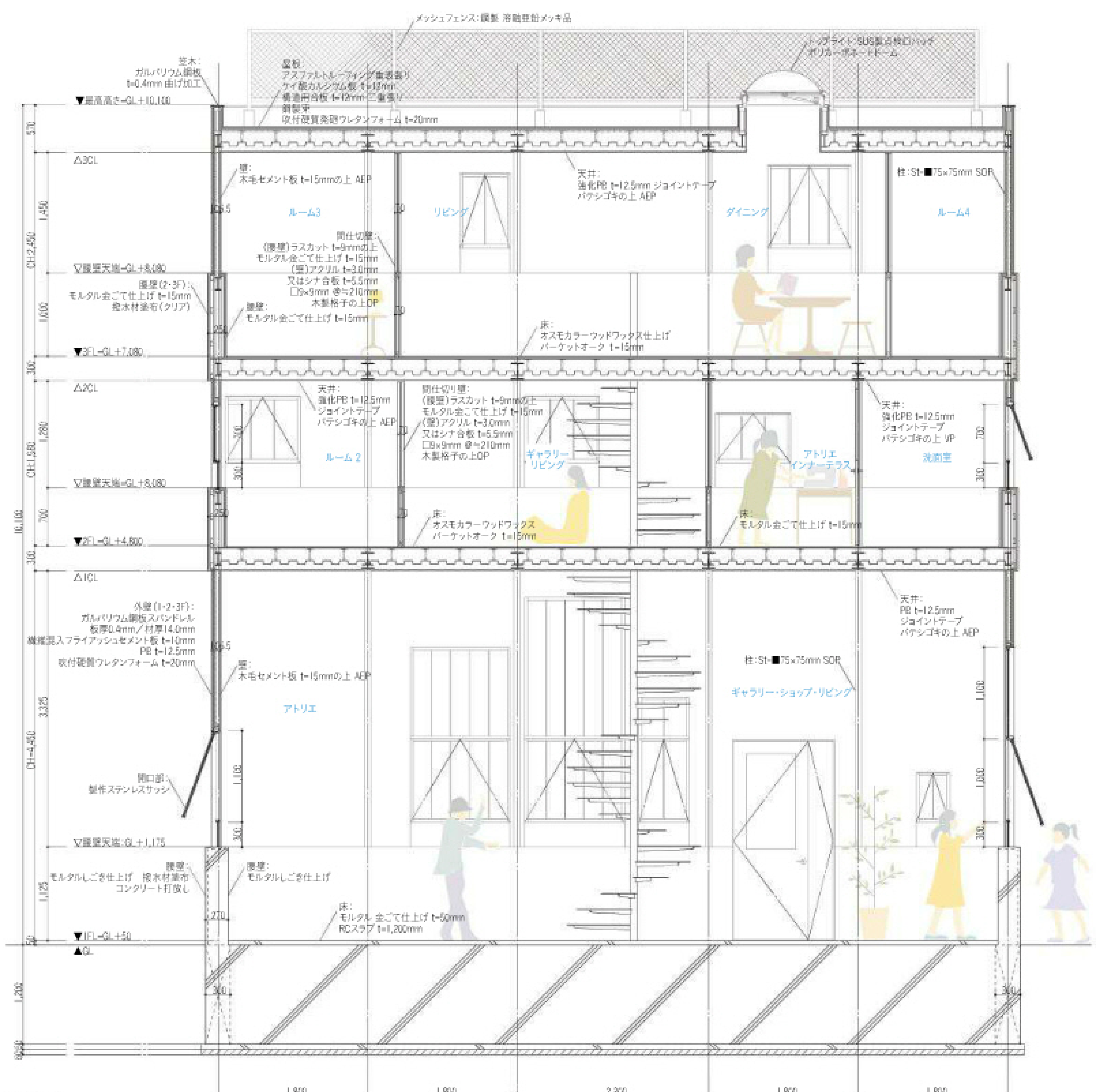




左：2階ギャラリー・リビングからインナーテラスを見る。2階は天井高1,980mm。
右：3階は天井高2,450mm。

階高4,715mmの3階建てを75mmの柱で支える

建築家からの構造上の要望を構造的に記述すると、「軸力最大の階の座屈長を長くしつつ柱断面2次半径を可能な限り小さくしたい」となる。柱細長比200以下の制約条件は動かせないため、階高が定められる以上、断面サイズを求めるこの構造設計学的問題の難易度は高くない。1階腰壁を根巻柱脚的に利用し座屈長を制御、固定荷重を軽量化し長期軸力を低減、壁面にフラットバーによるブレースを用い必要保有水平耐力や必要剛性を確保するなどし、結果的に外周面の柱・梁・ブレースの構造厚さを仕口を含めすべて75mm以下に抑えている。むしろ、軽量化に伴う交通振動対策として地盤改良をやめ基礎耐圧版を厚くしたことや、鉄骨製作工場選定に際して精度管理条件の厳格化、基礎配筋時の柱アンカーボルト誤差の徹底管理など、構造的美しさの背景づくりに注力したプロジェクトであった。　（満田衛資）



断面図　縮尺1：75

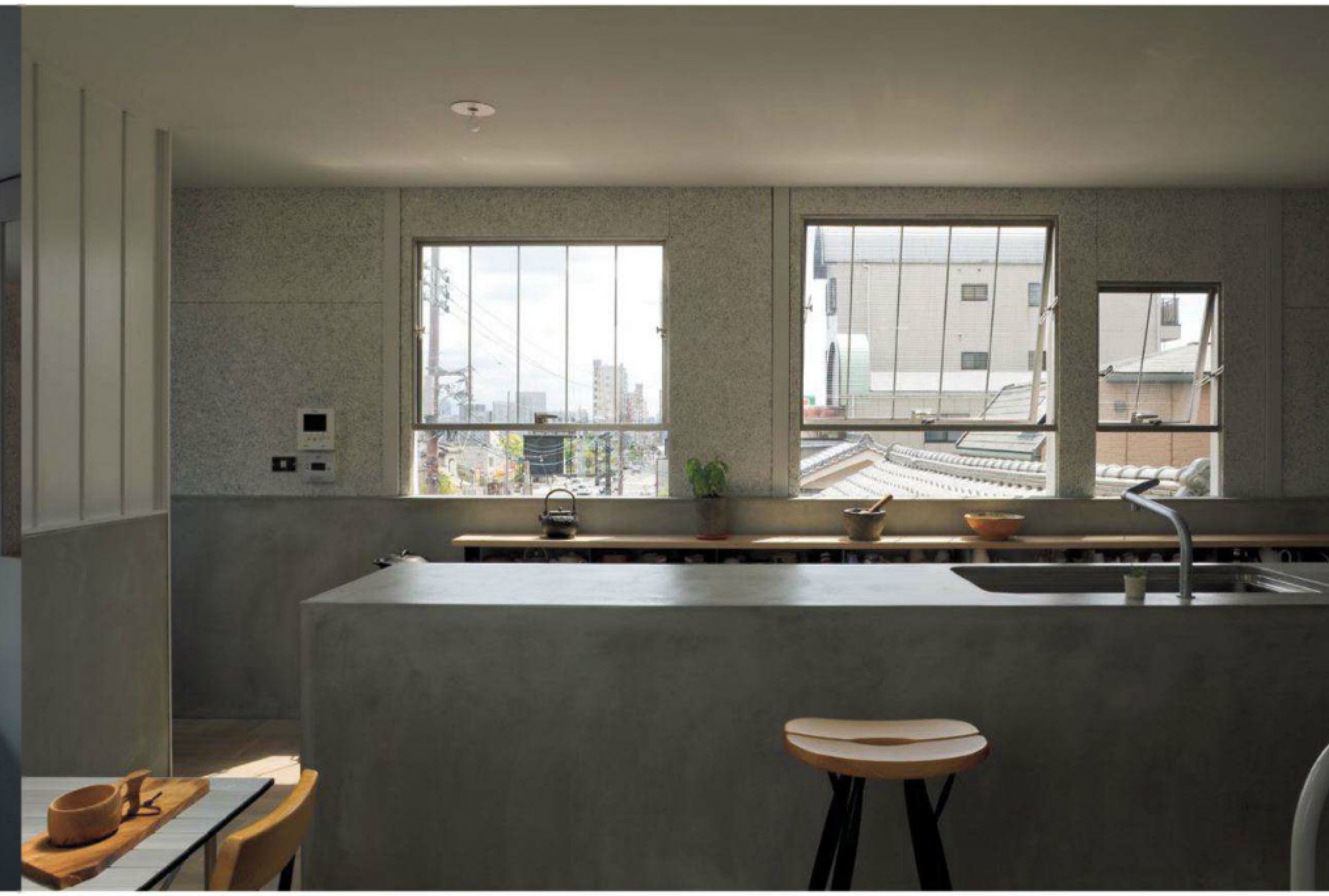


異なる天井高の階が積層する室内。250mmの腰壁に対し、上部の壁は105mm。
腰壁の高さは階ごとに変化させている。

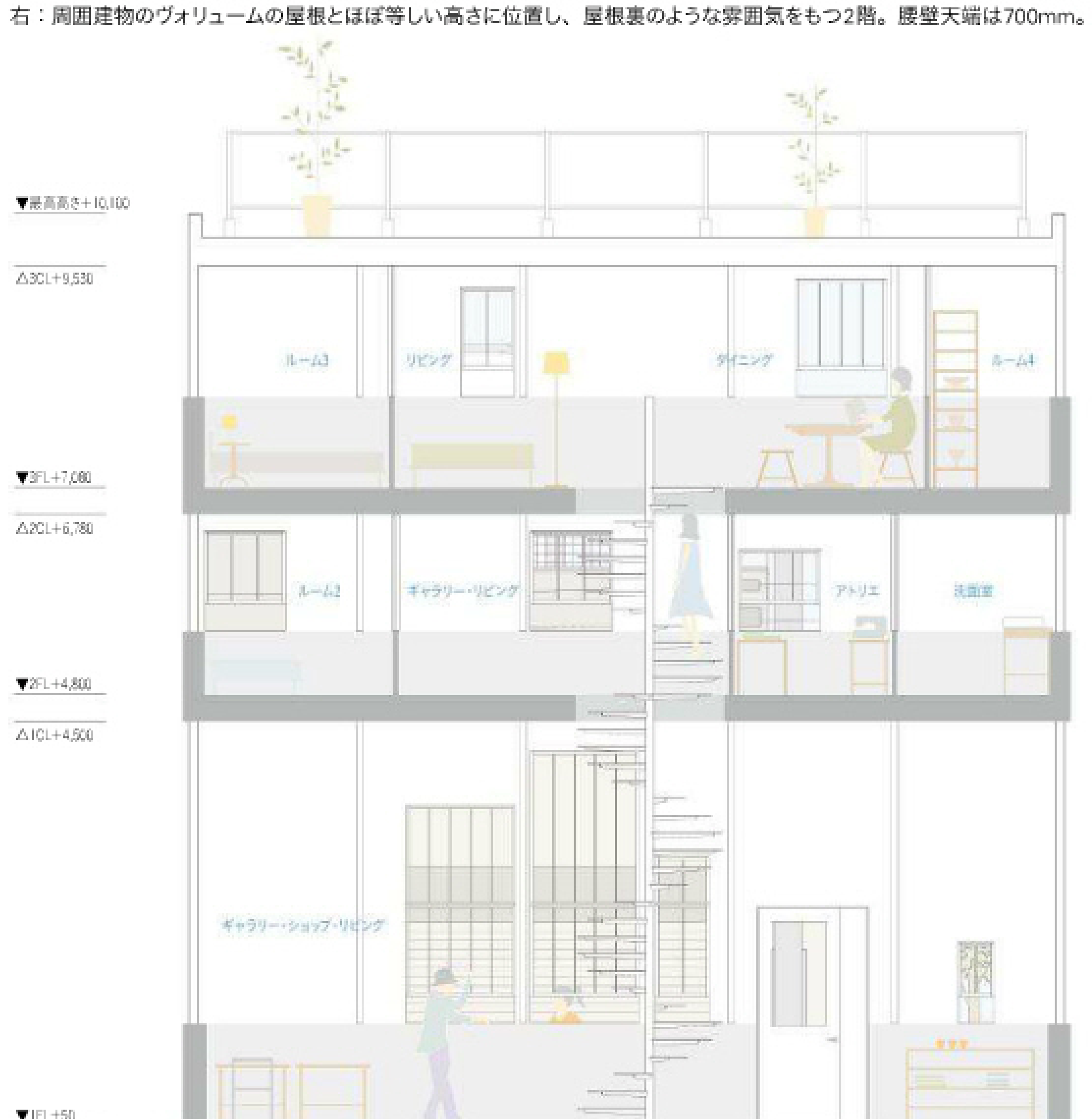




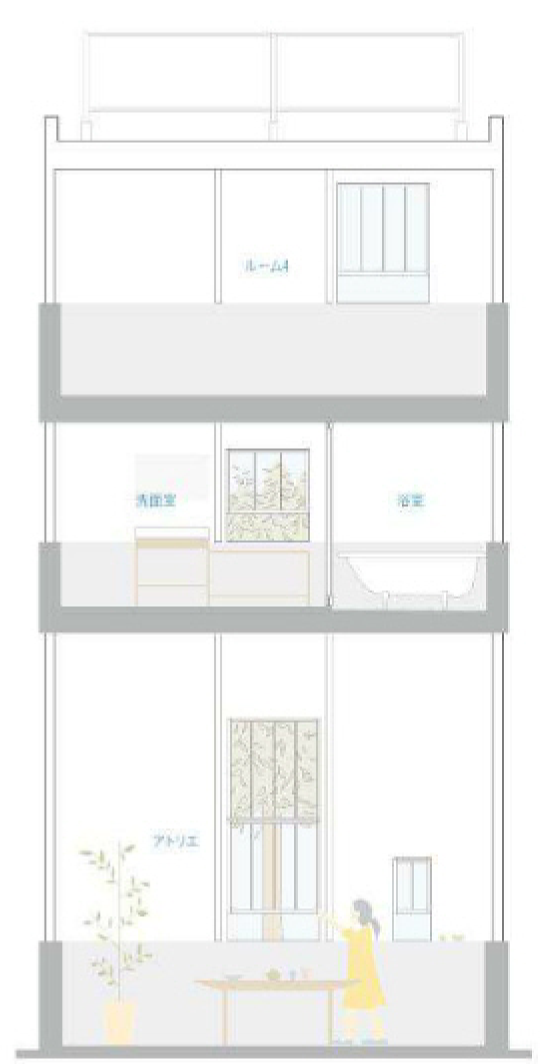
左：1階は腰壁と上部の壁の厚みの差を利用して、室内側の腰壁天端（w=122.5mm）に作品を飾り、まちからの視線を室内に導く。
右：周囲建物のヴォリュームの屋根とほぼ等しい高さに位置し、屋根裏のような雰囲気をもつ2階。腰壁天端は700mm。



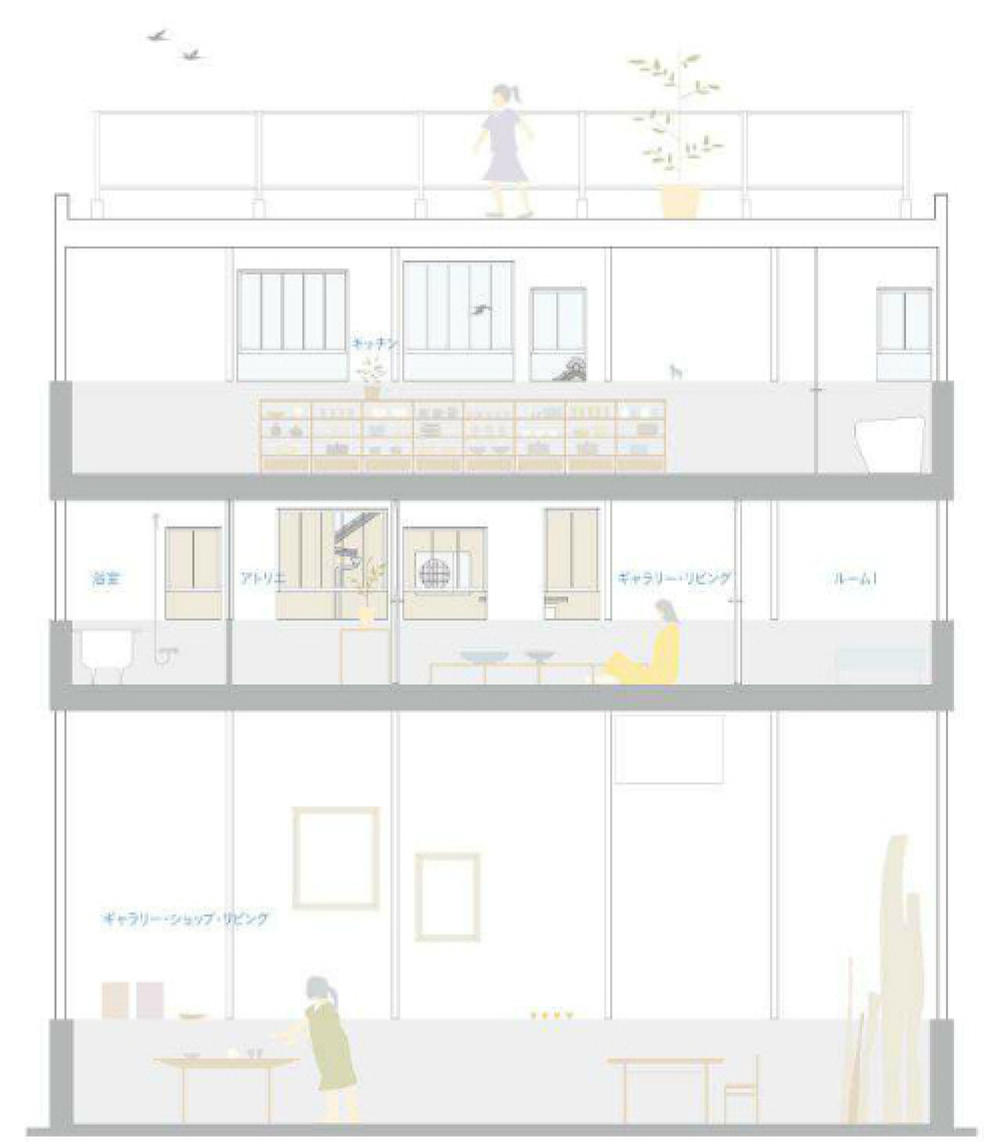
周辺建物より高い3階の窓からは視界が抜ける。腰壁は高さ1,000mm。



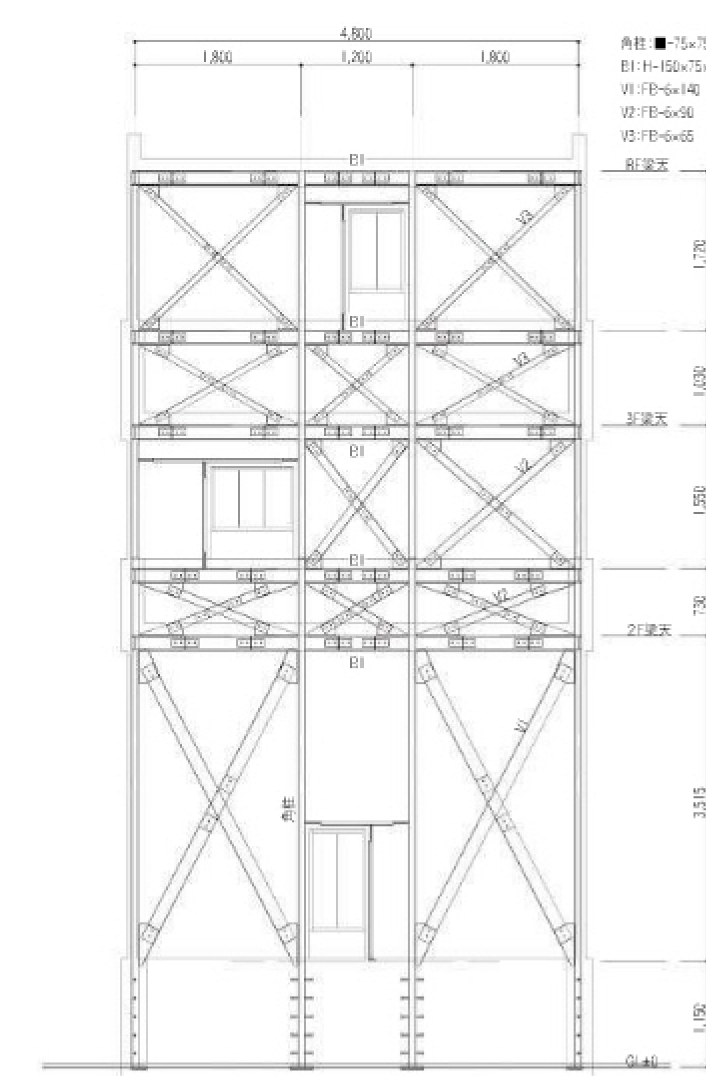
北展開図　縮尺1：100



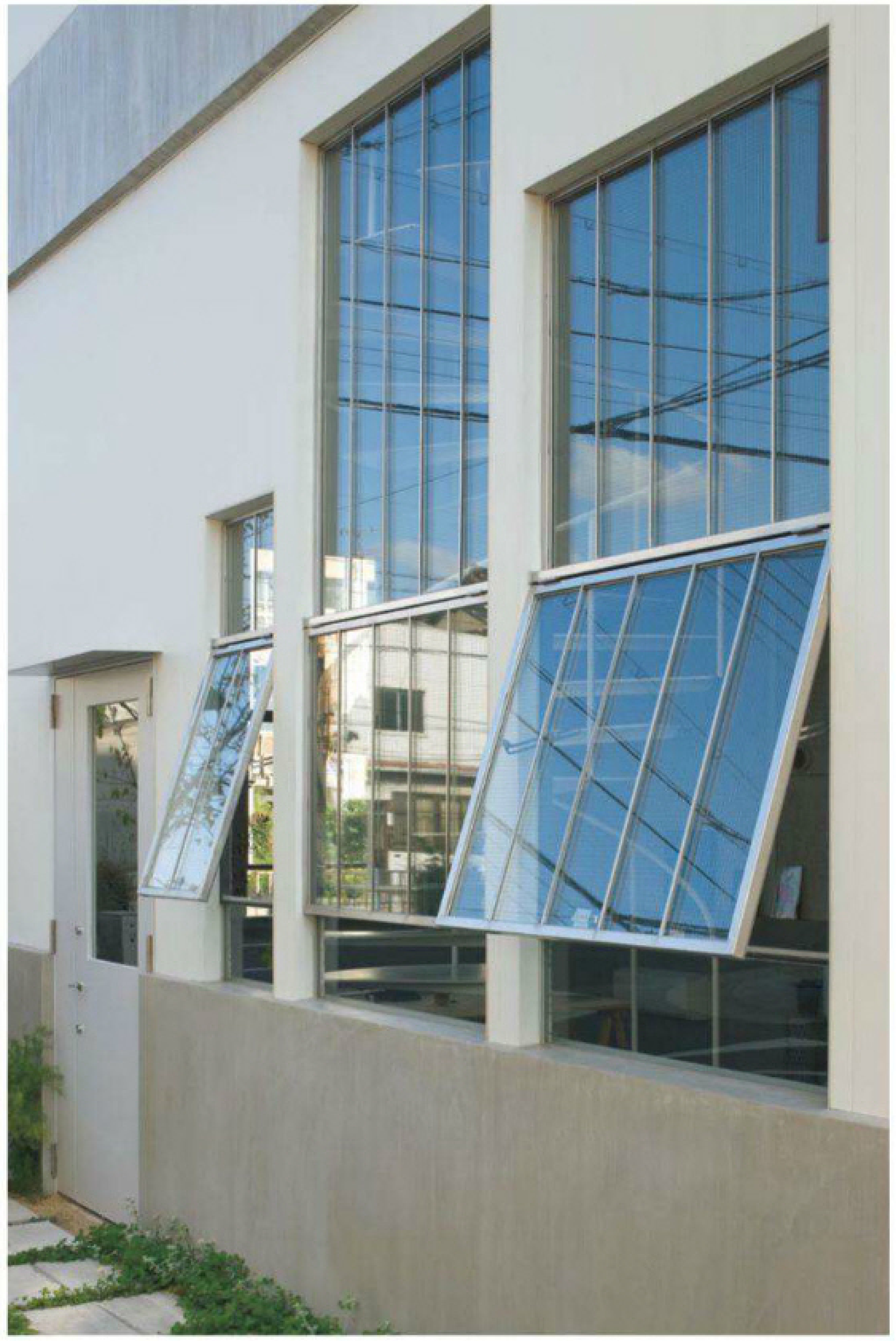
東展開図



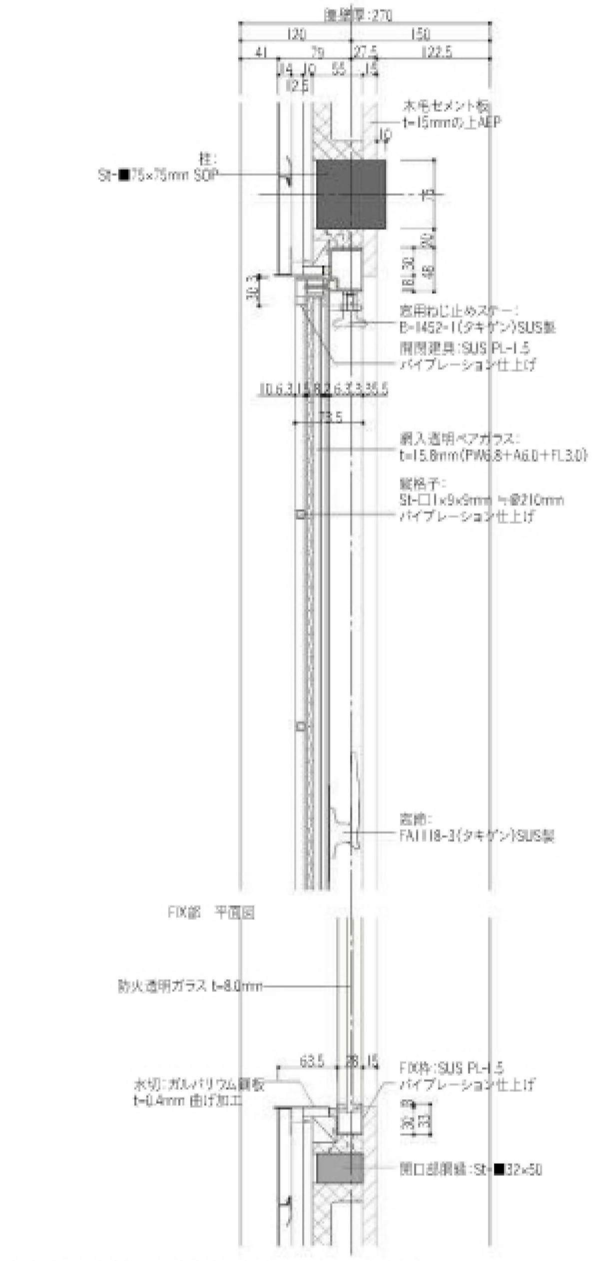
南展開図



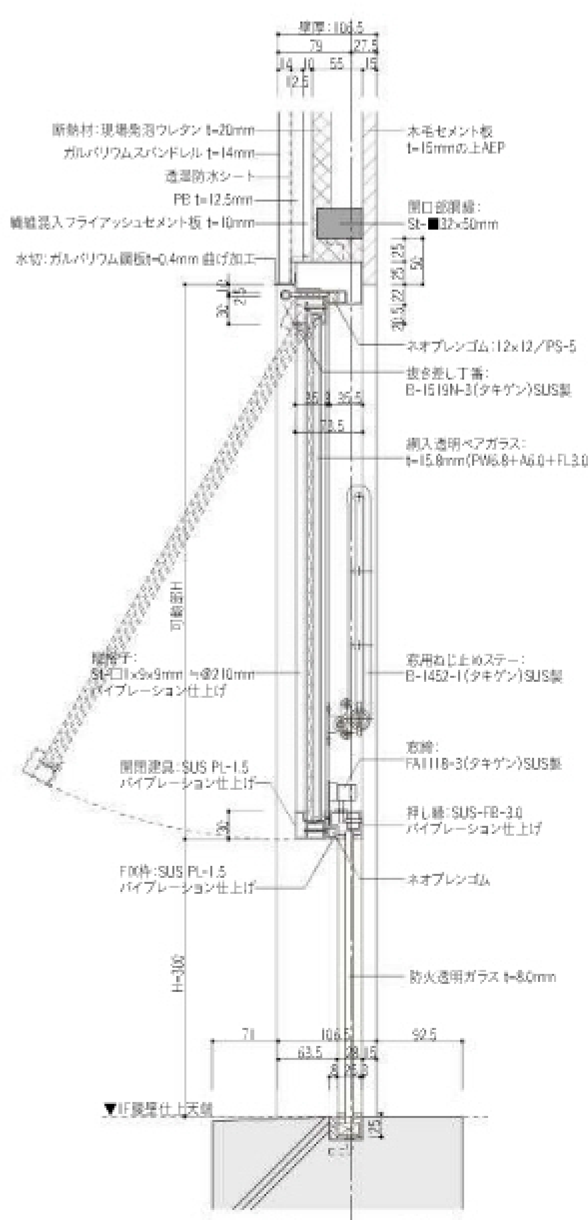
西面構造図（施工については155頁参照）



開口部は下端から300mmまではFIXで、上部は開閉できる。全部で14種類の開口部を製作。



開口部平面詳細図（上に開閉部、下にFIX部）



開口部断面詳細図　縮尺1：10

開口部がつくる開放的な佇まい

複合的な住まい方となるこの建物にふさわしい状態として「腰壁」でかたちどられた境界のあり方を私たちは考えた。腰壁上の壁は対比的に薄くし、開口部についてはそのどちらにも含まれない自立性と身体に近しい距離感を併せもつことがふさわしいと考え既製品でなく製作を選択した。材質は厚さ1.5mmのステンレス、形状はFIX部によって腰壁から浮いているように設えられた開閉窓とした。製作にあたったのは専門的なサッシメーカーではなく、金属部品製作所と精密板金加工所と私たちからなるチームである。基本方針となる詳細な製作図をこちらで描き、細部については何度も意見交換を行い、スケッチ、模型、モックアップを行き来させてつくり上げていった。

まちの垂直性／連続性への知覚をアシストする縦格子と腰壁上のはめ殺し窓により、建ち続けた古ビルのようでいて、そして「閉め切っていない」ような様相が、人やまちを受け入れながら生活をする場としてのキャラクターを体現している。

（木村）

K

所在地／大阪市住吉区
主要用途／ギャラリー＋アトリエ＋住宅
家族構成／夫婦＋子供2人

設計

木村松本建築設計事務所
　担当／木村吉成　松本尚子
構造　満田衛資構造計画研究所
　担当／満田衛資　柳室純

施工

コハツ　担当／衣川明彦　衣川隆博
大工　安田工匠　担当／片桐誠二
　井上建設　担当／井上保
設備　村尾商会　担当／村尾憲昭
電気　有宏電気　担当／平子正弘
製作家具・外構・造園　KOKKOLOYA
　担当／岡田圭司
鋼製建具　吉村金属工業　担当／吉村信太朗
　テックワン　担当／吉田明弘

構造・構法

主体構造・構法　鉄骨造
基礎　べた基礎

規模

階数　地上3階
軒高 9,744mm　最高の高さ 10,100mm
敷地面積　75.71m²
建築面積　45.60m²
　（建蔽率60.23% 許容90%）
延床面積　136.80m²
　（容積率180.67% 許容400%）
　1階　45.60m²　2階　45.60m²
　3階　45.60m²

工程

設計期間　2009年4月～2011年6月
工事期間　2011年7月～2012年2月

敷地条件

地域地区　商業地域　準防火地域
　長柄堺線沿道地区
道路幅員　東23.64m　北5.45m
駐車台数　1台

外部仕上げ

屋根／耐水合板 t=12＋12mm　珪酸カルシウム板 t=12mm　アスファルトルーフィング張り
外腰壁／モルタル金ごて仕上げ t=15mm 撥水材
外壁／ガルバリウム鋼板 スパンドレル t=14mm
開口部／製作ステンレスサッシ
外構／コンクリート平板敷き　植栽

内部仕上げ

1階(アトリエ　ギャラリー　ショップ　リビング)
床／モルタル金ごて仕上げ t=50mm
腰壁／コンクリート モルタルしごき仕上げ
壁／木毛セメント板 t=15mm AEP
天井／ PB t=12.5mm AEP

2階(リビング　ギャラリー　ルーム1　ルーム2)

3階 (リビング　ダイニング　キッチン　ルーム3　ルーム4　W.I.C)
床／パーケットフローリング t=15mm
　ウッドワックス
腰壁／モルタル金ごて仕上げ t=15mm
壁／木毛セメント板 t=15mm AEP
アクリル板 t=3.0mmまたはシナ合板 t=5.5mm
　木製格子□9×9 @210mm OP
天井／ PB t=12.5mm AEP
厨房機器／
本体／製作：モルタル金ごて仕上げ 撥水材
IH ／三菱電機 CS-G30HNWS
食洗器／三菱電機 EW-DP45SM
換気扇／ CONFALE CON-3L-602

インナーテラス
床・腰壁／モルタル金ごて仕上げ t=15mm
壁／木毛セメント板 t=15mm AEP
　アクリル板 t=3.0mmまたはシナ合板 t=5.5mm
　木製格子□9×9@210mm OP
天井／ PB t=12.5mm AEP

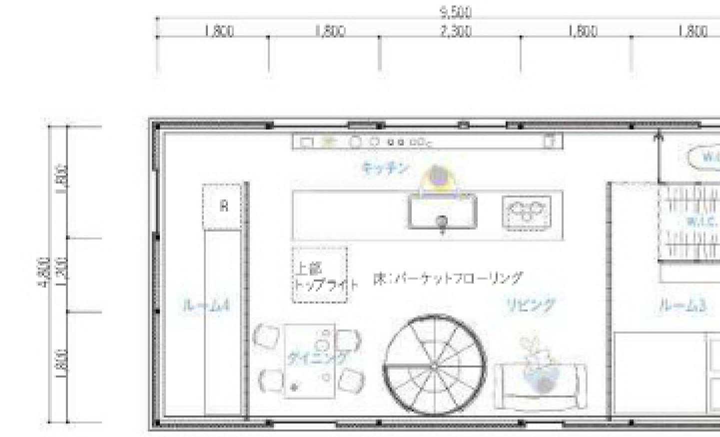
洗面室
床／パーケットフローリング t=15mm
　ウッドワックス
腰壁／モルタル金ごて仕上げ t=15mm
壁／木毛セメント板 t=15mm AEP
　アクリル板 t=3.0mmまたはシナ合板 t=5.5mm
　木製格子□9×9 @210mm OP
天井／ PB t=12.5mm VP
洗面器／ IKEA LILLÅNGEN
手洗い水栓／ HANSGROHE フォーカスS

浴室
床／モルタル FRP防水
壁／耐水合板 t=12＋15mm FRP防水
天井／珪酸カルシウム板 t=6＋6mm VP
バスタブ／ Tform FLN72-4373
シャワー水栓／ HANSGROHE 1001SL

設備システム

空調　冷暖房方式／ルームエアコン
　換気方式／第三種換気
給排水　給水方式／上水道直結
　排水方式／下水道直結
給湯　給湯方式／電気給湯器

撮影／新建築社写真部



3階平面図



2階平面図



1階平面図　縮尺1：150

敷地は計画道路である大きな幹線道路に接し、敷地は拡張範囲にかかるため、階数や構造に規制があった。



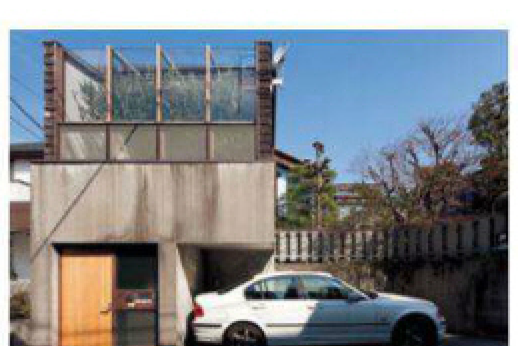


5戸の住戸が共有する中庭。スペースフレームの奥は母屋が建っていた頃からある植栽。

連載

建築家自邸からの家学び

前編では内藤恒方さんの奥様、婴子さんにお話を伺いました（本誌1206）。今回は東京都市大学手塚貴晴研究室の調査をもとに、研究室の学生、手塚貴晴さん、そして設計者である内藤恒方さんによる座談会を行いました。真壁智治さん、古田陽子さん、またエッセイ（本誌74頁）を担当された建築家の中山英之さんも同席されました。（編）


南側外観。道路と庭は高低差約1,000mm。

座談会

家と庭が共存し、住まいとなる

内藤恒方（建築家）×手塚貴晴（建築家）×東京都市大学大学院手塚貴晴研究室

アメリカ建築全盛期の渦中で学ぶ

学生1　内藤さんの設計の根底にある考え方を探ってみたいと思い、当時の海外建築家の住宅を見て学び、何が主題とされてきたのか探ってみました。「松原の家」を見て僕たちがまずいき当たったのはチャールズ・ムーアです。 ムーアの敷地に対する考え方のうち「同化・自己主張・対面・包囲」の4点を挙げてみました。「松原の家」との思考の共通点を考えると、庭を尊重しながら住宅を建てている点で「同化」が当てはまるのではないかと思います。

次はルイス・カーンのエシェリック邸です。この作品もやはり窓と庭との関係、内部と外部の関係が重要なキーワードになっています。この家の北側立面には、道路に対して閉ざす小さな窓と光を取り入れる大きな窓が組み合わされたT字型窓が配置され、内外の関係性を明確化させているのが特徴だと思います。「松原の家」には他住戸が共有するサンクンガーデンと平行に配された開口と、そこから45度振られた他住戸からの視線を制限する開口のふたつが中庭に対して置かれ、これらが互いに異なる内外の関係性（パブリックとプライベート）を生んでいる点がエシェリック邸との類似点ではないでしょうか。

そして住宅単体から庭園まで考え方を拡大するべく、ルイス・バラガンの住宅を挙げました。バラガンの庭はとても特徴的です。たとえばエフライン・ゴンザレス・ルナ邸では「庭には親密さと生き生きとした感覚がなければならない」という考えのもとに各部屋が庭とつながる、あるいは庭を通して各部屋が視覚的につながるという手法を用いられています。周辺環境からの見え方、また4つの要素「光・水・空・木」によって構成されている点で、内藤邸の庭との類似点が見い出せると思います。

そしてトーマス・チャーチは西洋的な庭園、つまりは軸に対しシンメトリーなものではなく、左右対称を壊した新たな庭園を提案しました。彼は「庭に始まりと終わりがあってはいけない。家の中からだけではなく、あらゆる角度から見てもそこに心地よさ、喜びがあるべきだろう」と発言しています。これは「松原の家」をもっとも端的に表現している言葉だと思います。

手塚　ここは内藤さんが学ばれた建築の集積ですよね。この住宅を見るだけで大学の教科書を見ているようです。

真壁　それくらい付帯的な学習ができますね。非常に雑多ないい方をしますと、アメリカの建築の舞台は西海岸からニューヨークに移り、ポストモダンになり、現在に至る。僕はその中でも60、70年代の西海岸の時代に見られた大地を踏みしめる「グラスルーツ」の思想を今、見直すべき時期なのではないかと思います。その点、「松原の家」は当時の西海岸の知性が色濃く出ていますよね。まさに「シーランチ」を彷彿とさせるようです。

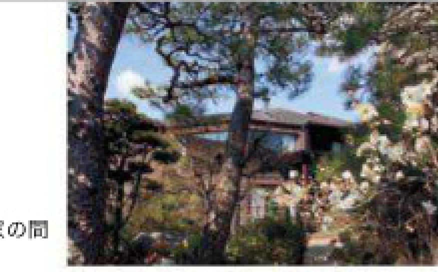
内藤　私がバークレー校に入学した時にちょうどチャールズ・ムーアが教鞭を執っていたので、まさにその影響を受けました。彼の授業を1年間受講して、自邸にもいきました。あの頃の建築は西海岸、特にカリフォルニアが全盛の時代でしたね。若い頃にその渦中にいたのは、貴重でした。ものの考え方が固まってないから、学校や事務所での経験が積み重なり、自己が形成されるのでしょうね。ニューホープにはアントニン・レーモンドが古い牛小屋を改築した家やルイス・カーンのエシェリック邸もあり、エシェリック邸には突然訪ねていったりしました。

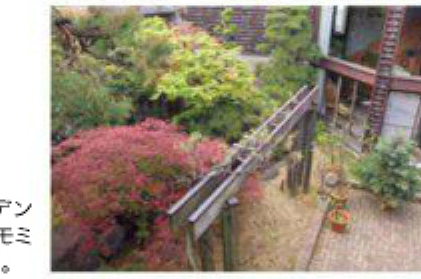
手塚　私がエシェリック邸について、とても印象に残っているのは、オーナーが代わっていないことです。建築家が設計した家を多く訪ねましたが、たとえばフランク・ロイド・ライトが設計した家のほとんどは、最初のオーナーが2年くらいしか住んでいない。ところがカーンの住宅は最初のオーナーが亡くなられても、お子さんやお孫さんが住み続けているのです。また、ライトの住宅は家具の置き場があらかじめ定められ、常に整然としている。しかし、エシェリック邸は冷蔵庫に子供の写真をマグネットで貼っているような生活感に溢れた家なんですよね。それがいいな、と思います。

内藤　家を“estate”として見ているか、“home”として見ているか、家に対する概念が違うのですね。

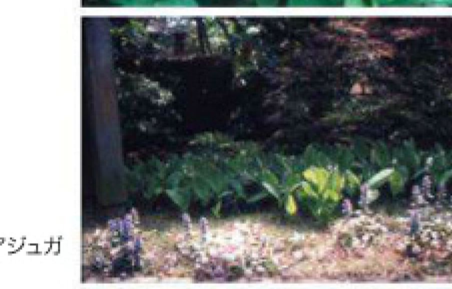
バークレー校では建築設計よりもランドスケープの勉強を重点的にしていました。ランドスケープアーキテクトには、私が大学に入学した年に教授になられたガレット・エクボ（1910〜2000年）がいました。エクボは、私の修士論文のチェアマンをしてくれた人です。日本に帰国してからも、日本での開発の仕事を一緒に行い、「日本には忘れられない信頼できる友人がいる」と手紙をくれました。

1920年代初頭、ハーバード大学がエコール・デ・ボザール流の左右対称のデザインばかり教えていたのに対して、彼をはじめダン・カイリー（1912〜2004年）などのランドスケープアーキテクトがアメリカらしいランドスケープをつくらなくては、とストライキを起こしたのです。そこでトーマス・チャーチ（1902〜78年）のフリーハンドで描いたプールをアメリカらしさを表現したデザインとしました。またエクボは「ランドスケープとはなんだろうか？」と考え、『景観論』（1969年）という本にまとめ体系化を試みました。そうして彼らが近代的なランドスケープデザインの礎を築いていったのです。加えてそこから現代までアメリカの造園家の考え方の変化が書かれた本がピーター・ウォーカーの『見えない庭—アメリカン・ランドスケープのモダニズムを求めて』（1997年、鹿島出版会）です。この本を読めば、どのようにアメリカのランドスケープデザインが変わってきたか分かります。そのカテゴリーに入らないのが1年間


3月
弟の家と貸家の間に咲くウメ。


3月
サンクンガーデンのショウジョウモミジの葉が色付く。

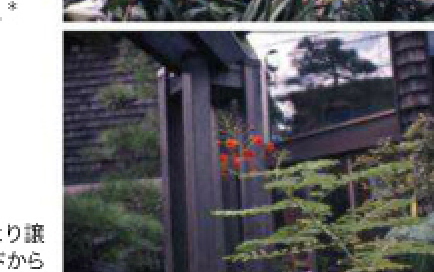

4月
サンクンガーデン脇に咲くボタン。*
*写真提供：内藤恒方

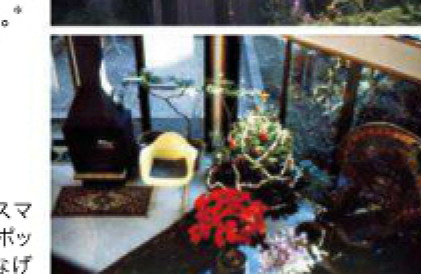

4月
すずらんとアジュガの花。*


7月
敷地東側に位置するじゃがいも畑。*


7月
リビングからの開口脇には山野草が咲く。写真ははんげしょうの花。*


7〜9月
はまゆうの花。*


8月
西澤文隆氏より譲り受けたインドからの種子による花。*


12月
内藤家のクリスマス。ツリーにはポップコーンをつなげたオーナメント。*


内藤さんの教え子であるランドスケープアーキテクト、トム・ボーロからのレリーフ。今はウメの木に付いている。*



リビングでの座談会の様子。中央奥に内藤さん、右回りに手塚さん、中山さん、古田さん、真壁さん、手塚研究室の学生。

かけてシーランチの生態系調査を行い、「シーランチ・コンドミニアム」(1965年)のマスタープランを担当したローレンス・ハルプリン(1916〜2009年)でした。彼にも影響を受けましたね。

真壁　内藤さんはヨーロッパ的な庭園を拒否した人たちの流れに入っているのですね。

内藤　そうですね。当時私は、空間をつくることに大変興味がありました。その点でジェラルディン・スコット(1904〜89年)から日本と西洋の空間のつくり方の違いなどを学びました。またフィリップ・シールからは、「空間はスラブやパーフォレーテッド・ウォール(有孔壁)によって囲まれているか、抜けてつながっている。その中に独立したオブジェクトが存在し、動きと共に変化する視線により動景感を感じ取ることができる」と学びました。これを記録することがノーテーション(ノートする、書き付ける)です。ノーテーションにより都市の視覚的構成を調べたハルプリン、さらに彼の研究を進めまとめられたケヴィン・リンチの『都市のイメージ』(1960年)、ポール・D・スプライレゲンの『アーバン・デザイン——町と都市の構成』(1966年)、また同時代に著された芦原義信さんの『外部空間の構成』(1962年)からも多くのことを学びました。

真壁　ハルプリンは“motion”と“notation”をくっつけて、“motation”という概念をつくりましたね。「松原の家」の玄関からリビングまでの見え方はまさにモーテーションによるデザインです。動くことを通した空間体験で、建築や環境をつかまえようとしたわけですね。

複雑化しているものをそのまま理解する

学生2　正直にいうと、「松原の家」に最初に伺い外観を見た時に「普通の住宅だな」と思いました。しかし、家の中に入り、この空間を体験した途端にその考えが一変しました。では普通の家との違いを何が生み出しているか、それを僕たちはうまく言葉で説明できないので、材料の色やディテールまでをできる限り再現した30分の1模型をつくり、検証しました。模型をつくり込むうちに、方角や中庭との関係で開口が決まっていて、その配列が心地よさを生み出していると考えました。

内藤　僕もこの住宅を設計する時に、20分の1模型をつくり、壁の位置など検証しましたよ。そして開口部ごとに内と外をつなぐ軸を定め、人が動くと景観が変化していく「動景感」を大事にしました。この「動景」によりどういう空間になるか、とことん考え抜いた結果、開口部は大きなものになりました。

中山　「松原の家」は、確かに住宅単体を眺めていてもなかなか解読できないかたちをしているけれど、たとえば45度に振られた開口の軸を見てみると、緑の奥行が最大になる庭の対角線が浮かび上がってきますね。

真壁　今、中山さんがいわれた「対角線」は、ワシリー・カディンスキー(1866〜1944年)の「点構成」に見るように、モダンデザインの中でも「動き」を検討していく時に基準線的な役割をもつ重要な定式方法でもあります。建築家はプランニングの際に敷地に対して軸を多数設定してスタディする。その時に定式的に行うのが「対角線」のスタディですね。水平方向だけでなく、垂直の軸もあるでしょうし。

玄関から階段を上り、サンルームへ出る。
(70〜71頁の写真は玄関から2階に向かうまでの視界の変化を連続的に示したもの)



サンルームの花壇には当初イチゴを栽培したがうまく育たず、現在ではムラサキツユクサとオリーブが育つ。

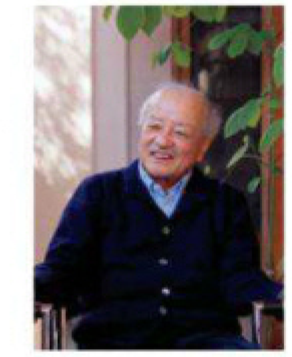


中山　また開口から何が見えるかと同じくらい、何が隠れているかも重要ですよね。内藤さんが「動景感」といわれたように、動くにつれて見えない範囲がどんどん開けていくこの住宅では、「見せたいところをトリミングするように開けた窓」というよりは、「ブラインドとなるところを並べていった結果として残った窓」とも感じられるところが面白い。

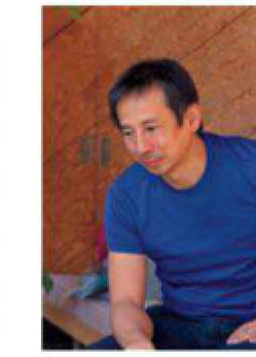
それからもうひとつ興味深く感じたのは、この住宅が明快な秩序よりも、むしろ混沌をつくり出そうとしているように感じられるところです。庭の対角線だけでなく、大小さまざまな軸がとてもたくさん隠れているので、一見して分かるようなシステムは見えてきません。内藤さんのつくった仕組みのようなものは、むしろ家具やものの何気ない配置によってふと気付くように扱われていると感じました。内藤さんのいらした頃の西海岸には、同じ時期にケーススタディハウスに代表される、工業化を前提とした、明快なシステムに対する美学もあったように思いますが、その影響はあまりなかったのでしょうか?

内藤　アメリカにいる時はランドスケープの仕事ばかりで、帰国してはじめての設計がこの家だったので、9年アメリカにいる間に学んだ「空間」、「動景感」、さらに「家」と「庭」のつながりに対する思考が盛り込まれたのだと思います。

手塚　僕は内藤さんの住宅は分析するとまったく意味がなくなると思います。ばらばらに存在するさまざまな要素を分析し体系化することは、数値化したりシステムとして分解してしまうということです。この住宅はそのばらばらなものが並列していることに意味があるので、複雑化したままで理解するのが大事なのです。建築家はアカデミックに研究しようとするので、矛盾がとめどなく存在する内藤さんの作品は分析しにくいわけですよ(笑)。でも、とめどもなく複雑化しているものを内藤さんと奥様による生活が取りまとめている。最近では体系化しにくい、複雑な出来事をいかに楽しみながら表現できるかがいちばん重要なんじゃないかと思っています。



ないとう・つねかた
1934年京都府生まれ/1958年東京藝術大学建築学科卒業/1966年カリフォルニア大学バークレー校環境デザイン学科ランドスケープアーキテクチャー学部大学院修士課程修了/1966年ササキ・ドーソン・ディメイ・アソシエイツ ボストン事務所勤務/1969年ニューヨーク州立大学シラキュース校林学および環境科学部ランドスケープアーキテクチャー学科助教授/1972〜80年大阪芸術大学環境計画学科助教授/1972年〜アルプ設計室主宰/1994〜2002年長岡造形大学環境デザイン学科教授、その間私立大学講師を多く務める



てづか・たかはる
1964年東京都生まれ/1987年武蔵工業大学卒業/1990年ペンシルバニア大学大学院修了/1990〜94年リチャード・ロジャース・パートナーシップ・ロンドン/1994年手塚建築研究所を手塚由比と共同設立/1996〜2003年武蔵工業大学専任講師/2003年〜武蔵工業大学准教授/2005〜06年ザルツブルグ・サマーアカデミー教授/2006年UCバークレー客員教授/現在、東京都市大学教授

学生3　だからこの住まいで人が何をしているかを描いてみることが大事だと思い、今回の調査では断面図、平面図によるスケッチにもち物がどのように置かれているのか、またそのもち物のエピソードを書き込みました。建築的な言葉にしてしまうと体験の味わいが失われてきてしまうので具体的な話に落としていくことで、説明しにくい、説明できない要素を見せることがこの建物の本質だと思います。

真壁　おそらくそれは快適や心地よさというものを全面的に主題にした家だからこそですよね。

手塚　また体系化しにくい多様性の中で面白いのは家具の存在ですよね。先ほども話題にしたのですが、フランク・ロイド・ライトの住宅が好きでアメリカにいる時にわくわくしながらたくさんの作品を見にいきましたが、人が住み続けていないことにとてもがっかりしたのです。それに対してルイス・カーンの住宅はみんな深い思い入れをもって管理されています。置いてある家具はルイス・カーンがデザインしたものではなく、住まい手が住みながら集めたもので、それに感動しました。「松原の家」も内藤さんはそれぞれの家具にまつわるさまざまなエピソードをお話になりますよね(本誌1206 104、105頁および本誌72、73頁参照)。

インテリアと建築の関係と、建築とランドスケープの関係は似ていると思いますが、両者間に自由度がありながらも成立していることが理想的な関係だと思います。だから建築家が設計した住宅にいろんなデザイナーの椅子があるととても豊かに感じるのです。

内藤　庭と住宅の関係も同じですよね。お互いが存在しているからこそ、その変化を楽しみながら生活できるのです。

手塚　建築家によっては、家は人が住まうための場ではなく、自分の生活とまったく切り離された表現の場でしかないと考える人もいますよね。たとえばミース・ファン・デル・ローエが自身がデザインするミニマルな建築に対し、自分はデコラティブなビクトリアンハウスに住んでいたということは有名な話です。僕は学生時代に「建築とは、どこまで建築家の欲求を入れて、どこまで施主の要求を許容するのか、そのせめぎ合いだ」と先生にいわれ、長い間悩みましたが、しばらく経ってそれは違うな、と実感しました。以来、建主や施工主、建築家など関わったみんながこぞって「自分が考えたものなんだ」というくらい全体が調和するものがよいと考えています。

内藤　そのような建築ができることは建築家としては幸せなことですよね。

(左から)隣家に育つサクラの花が見える位置に階段脇の開口を配置。/階段を上ったスペースにある奥様のミシンスペース。サンルームの開口と庭に面した開口が連続するように見える。壁にはスーパーグラフィックが描かれている。/2階の天井高は2,300〜3,000mm。リビングにかけて切妻型の屋根が架かる。/ミシンスペース脇から1階を見下ろす。

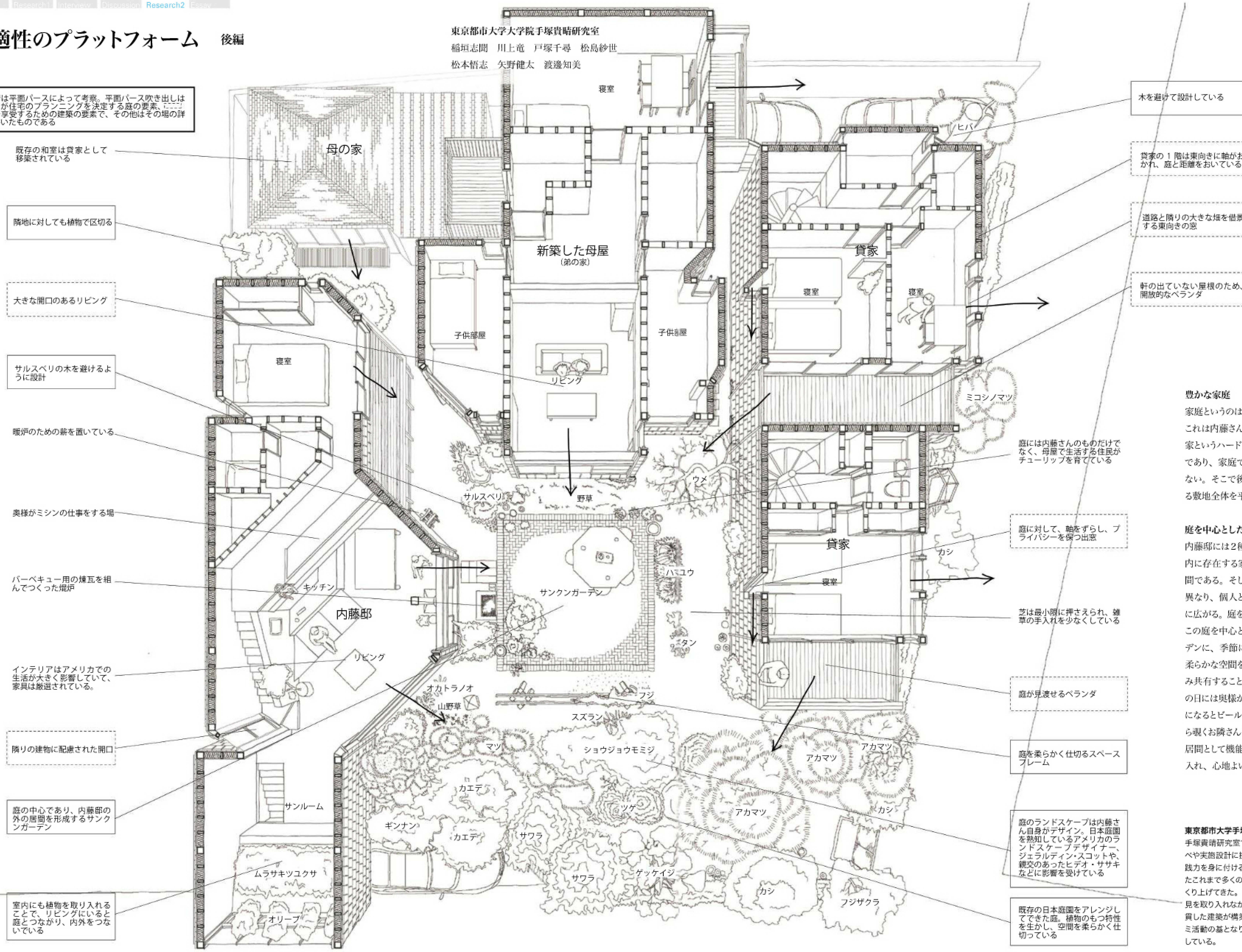





快適性のプラットフォーム　後編

東京都市大学大学院手塚貴晴研究室
稲垣志間　川上竜　戸塚千尋　松島紗世
松本悟志　矢野健太　渡邊知美

後編では平面パースによって考察。平面パース吹き出しは▭が住宅のプランニングを決定する庭の要素、⬚が庭を享受するための建築の要素で、その他はその場の詳細を書いたものである



豊かな家庭

家庭というのは「家」と「庭」のふたつからできている。これは内藤さんの住宅に対する重要な考え方である。家というハードのみではなく、庭を含めた生活が住宅であり、家庭である。よって内藤邸は庭なしで成立しない。そこで後半では、自邸と母屋・貸家と庭のある敷地全体を平面図を描き、考察した。

庭を中心とした町

内藤邸には2種類の居間が存在する。ひとつは各棟内に存在する家族団らんの場所としての個人的な居間である。そしてもうひとつは庭である。家の中とは異なり、個人と公共の両者が同居する居間空間が外に広がる。庭を囲むように建てられた内藤邸の生活はこの庭を中心として始まる。煉瓦敷きのサンクンガーデンに、季節によって表情を変えるたくさんの草木が柔らかな空間をつくり出す。各棟が庭の空間を取り囲み共有することにより、ひとつの町を形成する。晴れの日には奥様が入れたコーヒーをふたりですすり、夜になるとビールを飲んだり。そんな様子をベランダから覗くお隣さんも、いつの間にか加わる。庭を各棟の居間として機能させることで庭の魅力を最大限に取り入れ、心地よい生活を生み出している。

東京都市大学手塚貴晴研究室

手塚貴晴研究室では、すべての学生が多くの国内・国際コンペや実施設計に挑戦する。コンペを勝ち取り、実施設計で実践力を身に付けることは手塚研究室の大きな目標である。またこれまで多くの建築を建築家手塚貴晴と共に学びながらつくり上げてきた。その経験を通し、多くの仲間のさまざまな意見を取り入れながらも、ひとつのコンセプトに基づいて首尾一貫した建築が構築されることを学ぶ。これは手塚研究室のゼミ活動の基となり、多くのコンペ・実施設計などで成果を出している。



東に面する貸家から「松原の家」を見る。リビングを囲まれた空間にするため面の勾配を揃えた切妻屋根が全体に架かる。
勾配はプロポーションを考えて緩やかにしたが、コロニアル葺きの屋根面に風で飛来した畑の土がつまり、一度葺き替えた。



世界中から集めたものが置かれるインテリア。それぞれの家具にまつわるエピソードは、本誌1206 104、105頁の手塚研究室の調査を参照。

生態学的ランドスケープ

文・中山英之

“「ランドスケープ・デザイン」といった時、どこからどこまでのことだと思う?”

そう話しながら、内藤さんは僕のノートにIan Mchargという綴りを書いてくれました。
帰り道に買った『デザイン・ウィズ・ネーチャー』(イアン・L.マクハーグ著、集文社)は、それまで外構デザインや造園のことでしかなかったランドスケープ・デザインを生態学的な視点から定義した壮大な本で、出版されたのは1969年。ちょうどその頃、内藤さんがランドスケープ・デザインを学び、教えていたアメリカでは、たとえば環境問題を扱ったレイチェル・カーソンの『沈黙の春』(1962年)が大ベストセラーになり、マクハーグとも協力関係にあったラルフ・ネーダー(1934年〜、アメリカの社会運動家)は、巨大企業を向こうに回して世界初の消費者運動を　開していました。ニューヨークでは、1964年に「建築家なしの建築」が開催され、西海岸では、あのシーランチ・コンドミニアムが1967年に竣工。なんというか、ひげぼうぼうのお兄さんやタフなお姉さんたちが、いよいよ姿を現しつつあった大きくて新しいシステムに、本気でここを入れようとしていた。内藤さんは、そんな空気のどまん中にいた人なのです。
帰国してすぐ、1973年に竣工したこの住宅は、押し開きの玄関が道と唐突に接し、庭と居間が特大のサッシ1枚であっけなく隣り合った、庇のない多面体でした。もともとあった和風の庭木やいろいろな様式の家具の間を、囲うでも避けるでもなくカクカク進む平面形は、成長過程のいびつな結晶のようです。本にあったマクハーグの言葉どおり、形態は(機能ではなく)プロセスに従うのなら、エントランスをポーチで飾ることなく、そうかと思えば小枝をスッとかわし、時にはガラスの製造限界いっぱいまで伸び上がりもするこの家は、周辺環境の微妙な差異に応答しつつ、あらゆる部分の生成プロセスが同時進行する結晶にも似た、生態学的なランドスケープそのものといえるのかもしれません。
ところで「ランドスケープ・デザイン」といった時、それはどこからどこまでのことをいうのでしょうか。マクハーグは「生態学的には分水嶺まで」と書き、「都市にあっては社会学的検証を要する」と付け加えました。生態と社会。40歳を迎えようとしているこの住宅と一緒に、僕たちは『沈黙の春』の序文を書いたアル・ゴアが撮った『不都合な真実』(2006年)を観ることになりました。そのゴアとラルフ・ネーダーがなぜだか同時に立候補した挙句、票を食い合って「環境の世紀」を打ち上げそこねた大統領選は、12年前の話です。どこまでも居心地のよいリビングについつい長居をしてしまった帰り道、買ったばかりの本を透かした先に思い返す内藤さんの家は、半世紀前に打ち込まれたここが、どこか遠くの別の世界の出来事でない、その証左でもあるように思われてなりませんでした。



なかやま・ひでゆき
1972年福岡県生まれ／1998年東京藝術大学建築科卒業／2000年同大学大学院修士課程修了／2000〜07年伊東豊雄建築設計事務所／2007年中山英之建築設計事務所設立／現在、東京藝術大学、東北大学、昭和女子大学非常勤講師

近年、建築図面のアーカイブが進められています。建築図面は建築のつくり方がもっともよく表れている資料で、建築の技術や思想など、さまざまなことを伝えてくれます。放っておくと失われていく可能性のある資料をアーカイブとして後世に伝えることはたいへん重要なことだと思います。また一方で、保存される資料にはどのような魅力や価値があるのか、その点を発見しておくことも必要です。そこで、言葉や建築物そのものだけではなく、生産の過程である図面表現から、設計者の作風を読み解く連載を掲載していきます。
初回のテーマは《敷地》。家を建てる敷地の特色は、住空間に大きな影響を与えると思います。今回は、敷地の活かし方を、《自然との共存》を求め続けた故・石井修氏の自邸「回帰草庵（目神山の家1）」（1976年）の原図から読み込んでいきます。「回帰草庵」の設計時に美建設計事務所に所属されていた竹原義二氏（無有建築工房主宰）と、ご息女の石井智子氏（石井智子美建設計事務所主宰）のおふたりにお話しをうかがいました。　（聞き手・伏見唯／図面表現懇親会）

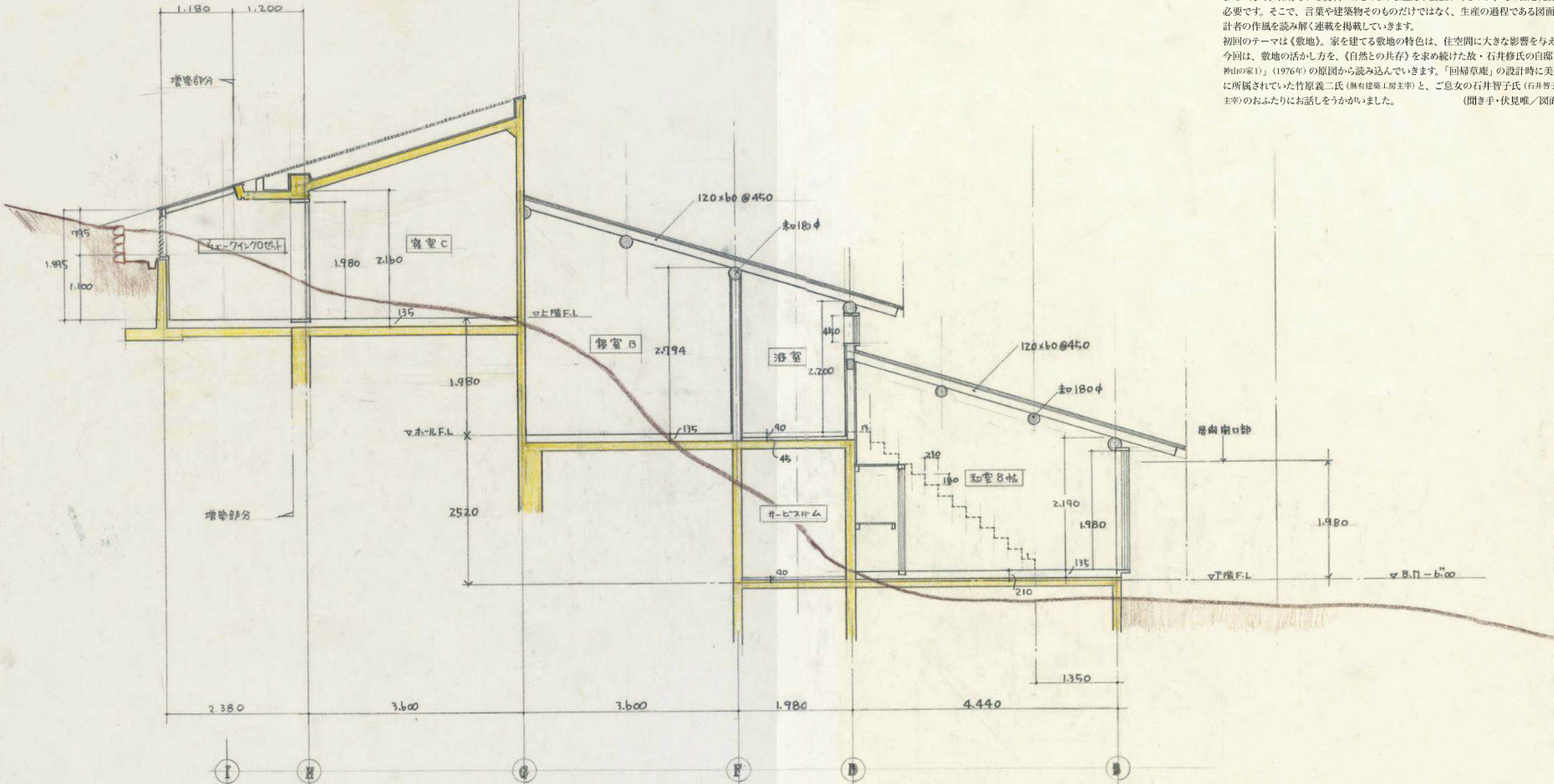


図1：「回帰草庵（目神山の家1）」の断面図（寝室、和室部分）。地形が茶色い線で描かれている。基礎が途中から描かれていないのは、設計初期の段階で構造計画が終わっていないため。原図はA2用紙に縮尺1/50で、1975年9月15日に描かれたもの。1988年の増築時に寝室Cの隣のウォークインクロゼットの部分が描き加えられている。（以下、【A2：1/50：1975.9.15および1988.2.29】と表記）。
［本連載の図面縮尺は、原図を掲載サイズに合わせて縮小している］

新連載

家をつくる図面

企画監修　伏見唯＋図面表現懇親会

第1回　敷地の活かし方　回帰草庵 ――石井修

インタビュー　竹原義二　石井智子

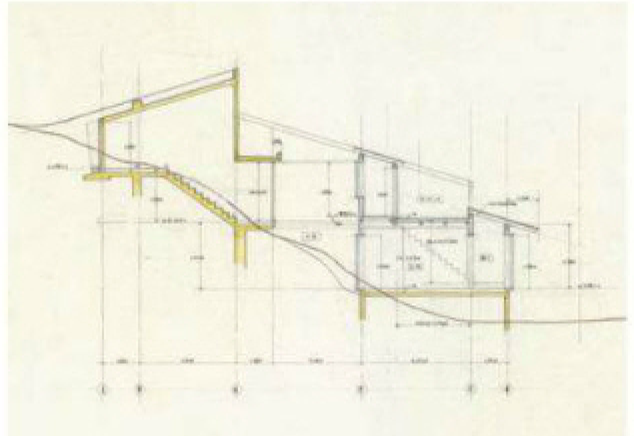


図2



写真1

急斜面の高低差を
複数の断面図で検討する



石井修
(いしい・おさむ)
1922年奈良県生まれ／1940年吉野工業学校建築科卒業後、大林組、海軍建築部、陸軍航空隊などを経て／1956年美建・設計事務所設立／2007年逝去／1986年「目神山の一連の住宅」で日本建築学会作品賞受賞／1987年「目神山の家8」(『新建築』8402)で吉田五十八賞受賞／1997年「日本ビソー入道浦研究所」(『新建築』9708)で甍賞受賞／2002年「目神山の家1(回帰草庵)」(『新建築』7702)でJIA25年賞大賞受賞／著書に『家家』(共著、1984年、学芸出版社)、『住空間と緑』(1988年、建築資料研究社)、『入江の結晶』(1998年、建築資料研究社)、『緑の棲み家』(2000年、学芸出版社)

図2：「回帰草庵」の断面図(中庭、廊下部分)。図3と同様に地形が色線になっている。
【A2：1/50：1975.9.15】

写真1：目神山の遠景。斜面上に「目神山の家2」、下に「回帰草庵」がある。
(1976年、撮影／新建築社写真部)

写真2：インタビュー風景。左に竹原義二氏、右に石井智子氏。「回帰草庵」の居間でデジタル化した原図を見ながらインタビューを行った。

──図面表現の話をする前に、まずは「回帰草庵」(『新建築』7702)の特徴から話をはじめたいのですが、おふたりはこの住宅について、どのような点が重要だと考えていますか。

石井智子(以下、石井)　身内ですので、父が考えていたことはお伝えできますが、作品について私が客観的に話すのは難しいです。

竹原義二(以下、竹原)　僕が石井修先生にはじめて敷地に連れてきてもらった時のエピソードをお話したいと思います。第一印象は「こんなところに家が建つのか」と感じるほどの斜面と緑でした。西宮市の山手にある目神山は今でこそ宅地として知られていますが、先生が自邸を建てようとした1975年頃は、自治組合による共同所有で山が管理され、山の入口は鉄格子のゲートがあって、部外者は入ることができませんでした。先生とタクシーで敷地に向かおうとした時、ゲートより奥の山中に住宅用の敷地があるなんて信じられない、という面持ちの運転手の表情を覚えています。

石井　父は自邸を建てる20年近く前から目神山に土地を所有しており、私が小学生の頃に家族や友達とハイキングに来たのを覚えています。宅地というより、ハイキングするような山だったんです。

竹原　つまり、建物が建つとは想像し難い急斜面で、鬱蒼とした樹木の中に敷地がありましたから、そうした敷地を読み解いて建っていることが、この住宅のひとつの特徴です。そしてこの住宅の敷地の読み解きをさらに難しくしたのが、土地を友人と共同で購入し、後から分筆したうえで、2棟の住宅を同時に設計しているところです。

石井　父は目神山という場所をすっかり気に入って土地を購入したくなり、売りに出ていた400坪ほどの土地を親しい友人と一緒に買いました。両家は家族構成や年齢が似ていたこともあり、土地を買い求めてから20年近く後の1975年頃に、父が両家のふたつの住宅を同時に設計することになったのです。ひとつはこの「回帰草庵」で、もうひとつは隣にある「目神山の家2」です。計画の当初から父の頭の中にはだいたいの配置計画があったようですが、いざ設計がはじまると厳密に土地を分筆する線を引く必要がありました。

竹原　先生は不平等にならないように土地を分けなくてはならない、と仰っていました。都心の平地ではありませんから、単純に面積を等分するだけでは平等とはいえません。山の上下もありますし、ふたつの住宅の建ち位置も考慮しなくてはならない。また緑や風景などの接し方にも好みがありますから、どのように分筆すると平等になるのかを考える必要がありました。隣地同士とはいえ、周囲と平等に調和することを当初より考えていたことが、その後の目神山全体の方向性に影響を与えたのではないかと思います。しかし、ただでさえ急斜面という難条件にも関わらず、二棟間の関係も意識しなくてはなりませんから、この敷地を読み解くのには先生と一緒に苦労しました。

──図面上ではどのように検討されていったのでしょうか。図面1～6ではいかがでしょうか。

竹原　これらは各通芯の断面図に山の傾斜を色鉛筆で描き加えたものです。図面にはいくつかの目的がありまして、まずは窓からの風景を想像する時に、床と地面のレベル差を分かりやすく表現しようとしました。たとえば、「回帰草庵」の和室(図1)はほぼ地面と同じレベルで、廊下(図2)では地面が少し下がり、「目神山の家



写真2

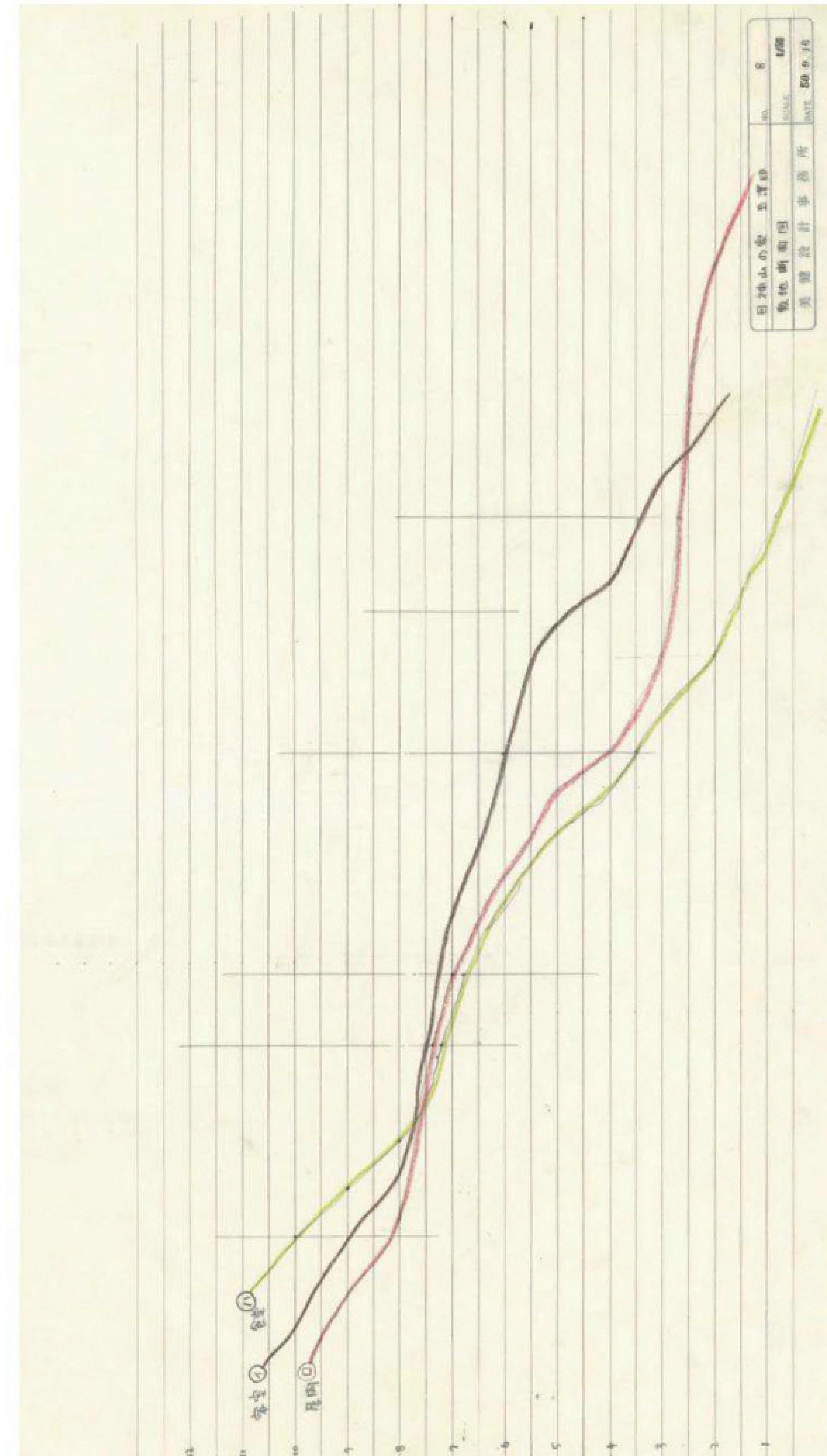
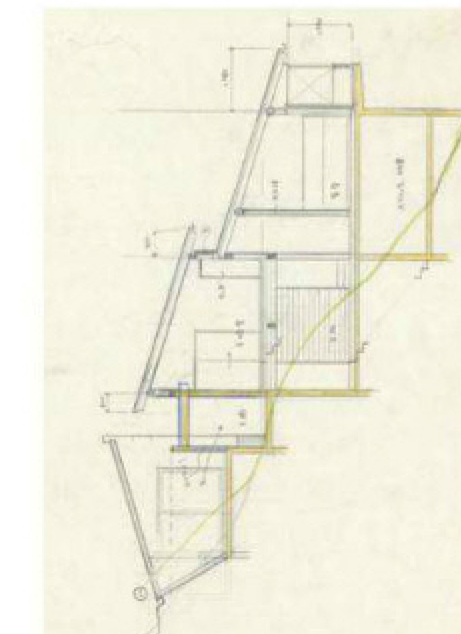
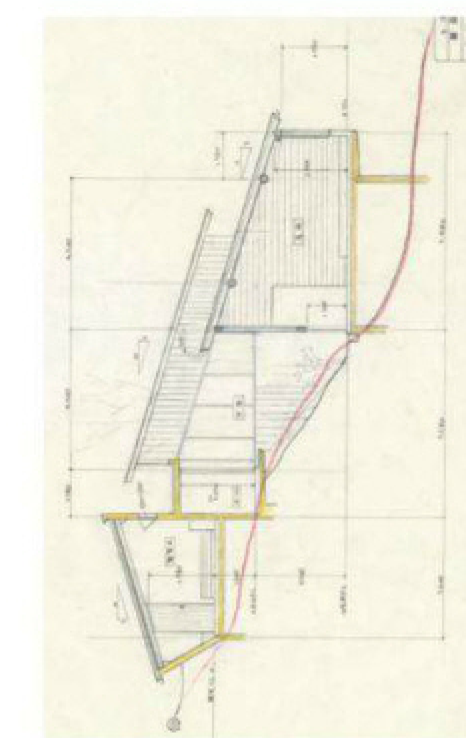


図6

図3・図4・図5





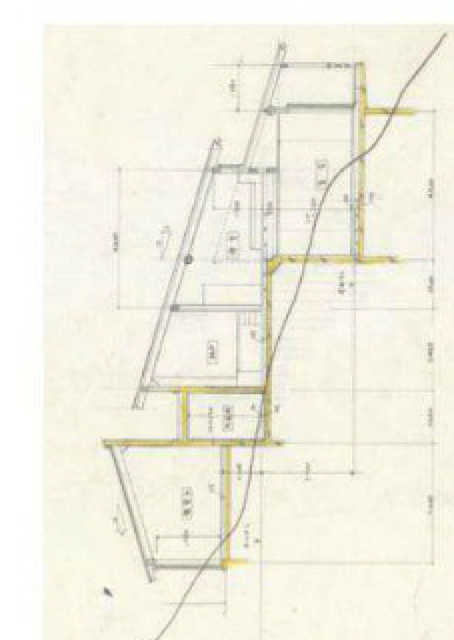


図3～5：「目神山の家2」の断面図。各図で地形がそれぞれ茶、紫、緑の三色の線で描かれ、イ、ロ、ハの番号が伏せられている。図3は客室部分の断面図でイ、図4は居間部分の断面図でロ、図5は食堂部分の断面図でハ。
【A2：1/50：1975.9.16】

図6：図3～5の地形の線をひとつの図にまとめたもの。0.5m単位で罫線が引かれ、イロハの通芯間の高低差が一目で分かる。
【A2：1/50：1975.9.16】





写真3・写真4

周辺環境と共生する建築を目指した敷地分析

2」の食堂（図5）はかなり高い所にあって風景を見下ろすかたちになるのが、よく分かるかと思います。傾斜地なので窓からの風景の見え方が平面では分からないため、先生に断面図を何枚も描かされました。また、友人宅は先生の自宅の山上にありましたから、上から自宅がどう見えているのか気にされていました。そのためにも断面図が必要でした。

もうひとつは、各通芯の間でどれだけの高低差があるかを検討する目的があります。たとえば、「回帰草庵」の図1と図2を重ねて茶色い線を比べれば、廊下から和室にかけての地形の落差が分かります。そうすると、基礎の立ち上げや、部屋間の段差の有無や寸法を検討することができます。重ねてもはっきり分かるように色付きで太く描いています。「目神山の家2」の方では傾斜の色線にイ・ロ・ハ（図3〜5）の番号を付し、かつ色分けをしています。こちらも図面を重ねて傾斜の高低差を見てもよいのですが、等高線断面のようなかたちでひとつの図面にまとめたのが図6です。イ・ロ・ハの落差がほぼないところに廊下を配置しているのが分かると思います。

また、傾斜の色線と断面を見比べると、造成時にどれだけの土量を削ったり、盛ったりしなければいけないかも分かります。自然との調和や水はけの関係で、できるだけ山の形態を変えないようにしたかったので、土量の調整も必要でした。

このような敷地の高低差が分かる図面と平面図を比べながら、徐々にこの敷地を読み解いていきました。逆にいえば、こういった図面をつくらないとこの複雑な地形を読み解くことはできなかったのです。先生に平面をつくる時は断面が重要だ、とよくいわれました。平面図を見ると整然と部屋が並んでいるように見えますが、床下のこれだけ複雑な地形を調整しているのです。

――それでは、ふたつの敷地はどのように平等に分けられたのでしょうか。図7などの敷地図に表れていますか。

竹原　この敷地図の等高線をよく見てもらうと分かると思いますが、この敷地は道路から下がる急斜面と、上がる急斜面だけで、平地がまったくありません。敷地を見に行った後に、どのように分けるとどちらにも平等になるか、と先生に問われました。まずは、この図でも分かるように敷地の間口である接道長さを等分にし、敷地面積もだいたい半分に分筆しました。問題は、山の上下をどう分けると平等になるのかということ。先生は、設計者である自分は日の当たらない方の斜面を降りていき、友人は日の当たる方へ斜面を昇っていくようにすべきだ、と仰っていました。山の上の方が、日がたくさん当たるし、緑が眼下に広がる眺望も得られる敷地でしたから、そちらを友人にと考えられたんですね。設計する自分を後回しにすることで、不平等にならないようにした。なるほど、と思いました。この図7でも、友人宅である「目神山の家2」だけが配置されています。敷地のスタディは常に「目神山の家2」の方を優先して考えていました。自宅は後回しです。これらは面積はほぼ等分ですが、ちょっとだけ友人宅の方が広いんです。あまりに急斜面なので、この分筆のラインは実際に効果がある訳ではなく書類上のものですが、このあたりにも先生の性格が出ていると思います。

石井　確かに父は友人宅が上で、自宅が下だと決めていたようですが、そのことを基本計画の最終段階までいわなかったそうです。ふたつの家の模型ができた段階で、どちらか好きな方を友人に選んでもらったのです。結局、友人は上の住宅を選ばれましたが、父は自分の思い通りの結果になり、ほっとしたそうです。自分が先に決めてしまうのは筋ではない、という父なりの流儀だったのだと思います。ただ、父は自己を犠牲にして下を選んだ訳ではなくて、自邸は緑の中に沈み込む暗い家にしたかったようです。

竹原　先生が好んだのは地面に外観が埋もれ、緑に近接した自然と共生する佇まいです。そうした《地に潜っていく志向》が、この頃先生が設計した建築の特徴でした。「回帰草庵」より約2年前に設計した「天と地の家」（『新建築』7502）あたりから、その特徴がはっきりし始めます。



図1と2を重ねて茶色の線を比べると高低差が分かる。

写真3：「回帰草庵」の下階居間。8,100mm角の正方形平面になっている。

写真4：「天と地の家」の屋上庭園。下階の屋上は平坦だが、上階の屋上には傾斜がついている。
（写真2〜4：いずれも2011〜2012年に撮影　提供／図面表現懇親会）



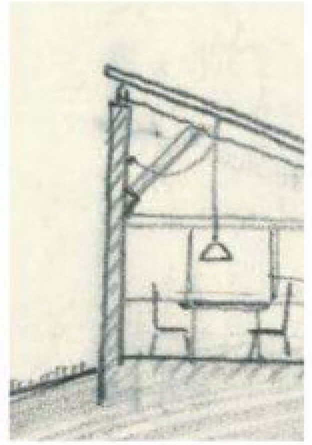
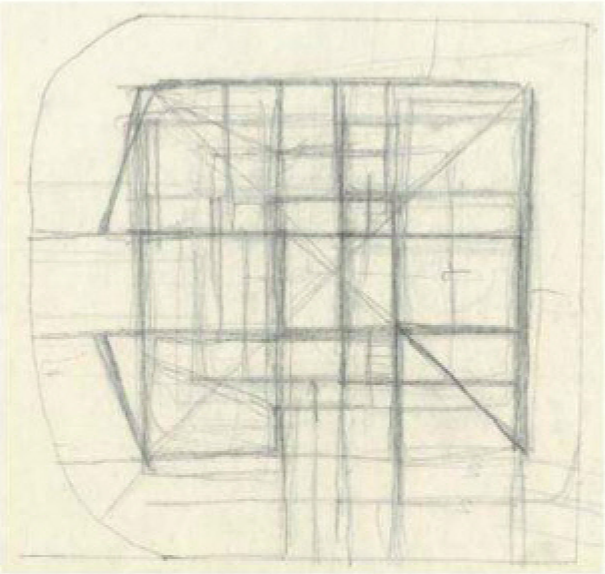


図7・図9

図10



――石井修さんご本人も、緑や街並みのことに関心が強くなったのは「天と地の家」の頃からと書かれていますが、それはどういった画期だったのでしょうか。

竹原　先生が設計事務所として出発した初期の建築は、「T氏邸」（『新建築』6211）や「山名さんの家」（1964年）など、高床式住居のように大地から浮いているピロティ形式の住宅ですが、「画家の家」（『新建築』7402）や「天と地の家」の頃から、地面に潜り込んでいく建築をつくりはじめました。僕はちょうど「天と地の家」が完成した頃に入所し、急になぜ潜るものをつくりはじめたのか、と先生に聞いたことがあります。すると先生は、「天と地の家」の敷地を見に行った時、敷地全体がクローバーで埋め尽くされていて、それがとても美しかったので建築はつくらない方がいいと思った、と話してくれました。それで、建築を地に潜らせたのですね。

石井　父はひな壇状の宅地造成を非常に嫌っていました。「天と地の家」は千里ニュータウンに続いて開発された泉北ニュータウンにありますが、その削られた丘陵地を見て、失われた自然環境を元に戻したかったようです。当時「天と地の家」が建ち並ぶ街並みを提案しています。

竹原　建主の名前や「西向きの家」（『新建築』7101）など、比較的ニュートラルな名前を住宅に付けていた先生が突然「天と地の家」ですから、大きく違う方向を目指す宣言のようにも感じました。

――今回のインタビューにあたって、「回帰草庵」のルーツともいえる「天と地の家」の図面も拝見しました。《地に潜っていく志向》は、たとえばこの断面スケッチ（図8）に表れていると思いますが、いかがでしょうか。

竹原　地面だけでなく、屋上庭園の土も朱で塗って、いかにもこの住宅が地面に潜っているのだと示しているように見えます。コンセプトが直に表れている図面は描いていて楽しいんですよね。この住宅で用いられたコンクリート造の片流れの屋根の上を屋上庭園にし、山のような斜面の芝生をつくる方法は、「回帰草庵」の上階にも引き継がれていきます。

――図9を見ると、当初の案では上階の屋根は木造だったのですね。以前、竹原さんは美建設計事務所に入られて混構造のおもしろさを知ったと語られていますが、その観点で見るとこの図面はいかがですか。

竹原　僕は「画家の家」や「石壁の家」（『新建築』7408）で使われていたコンクリートの壁の上に木造の小屋組が載る混構造を見た時、とても衝撃を受けました。学校で勉強したものや、当時のほかの建築家がつくる混構造とは全然違ったのです。何故屋根だけ木造なのかと先生に問うと、木造の屋根は朽ちたら取り替えられるけれども、コンクリートの壁は骨格として残るようにしたいと仰っていました。古い遺跡を見てそういう考えを持たれていたようですが、むしろ僕には新しい建築の方向性のように感じていました。

「天と地の家」は最終的には純コンクリート造ですが、図9によると、元々は同じような混構造で考えられていたということかもしれませんね。そうだとすると、小屋組を木造にする方法ではなく、屋根をコンクリート造にして全面屋上緑化するに至った「天と地の家」に、従来の設計方法を変えてでも宅地の自然を再生しようとする強い想いを改めて感じます。

図7：敷地高低および配置図。左右の敷地で、接道長さを等分しているのが分かる。北側の友人宅「目神山の家2」だけが配置されている。
【A2：1/100：1974.6.20】

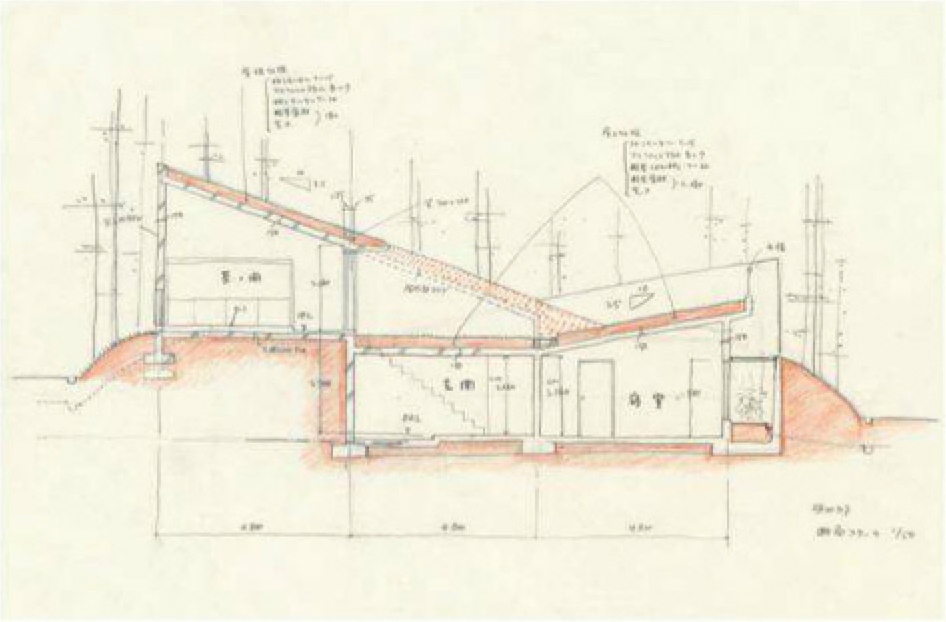
図8：「天と地の家」の断面スケッチ。土の部分が朱で塗られている。
【A2変形：1/50：日付なし】

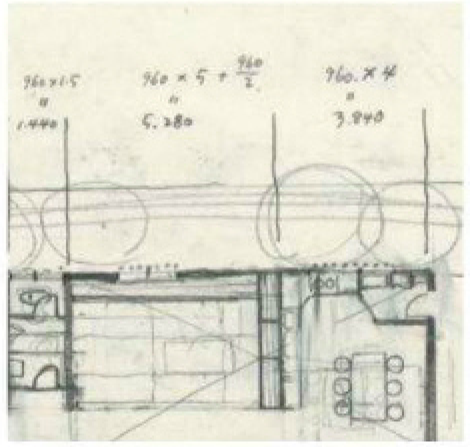
図9：「天と地の家」の断面スケッチ（部分）。上階はコンクリート壁の上に木造の小屋組が載る構造。方杖なども描かれている。
【A3変形：縮尺なし：日付なし】

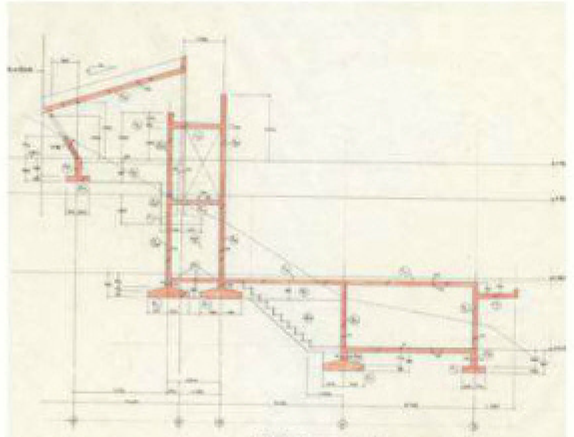
図10：「天と地の家」の平面スケッチ。正方形を分割している。
【A3変形：縮尺なし：日付なし】

石井修図面展
会期：2012年7月25日〜8月6日
会場：渋谷ヒカリエ「8/」CUBE
入場無料

図8







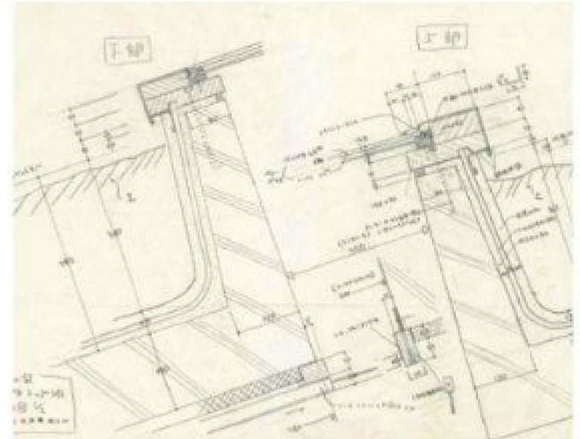


図11
図12
図13

太い線ではっきりと描けば、つくりたいものが伝わる

「回帰草庵」図面
【図面枚数】　124枚
【日付】
1975.9.1 ～ 1976.8.15、
1987.9.3 ～ 1988.2.29、
1993.5.10
【縮尺内訳（縮尺：図数）】
1/1：10
1/2：16
1/5：5
1/10：13
1/20：26
1/30：2
1/40：2
1/50：19
1/100：18
1/200：1
無記入：15
【原図中のタイトル】
石井邸、回帰草庵、目神山の家

「目神山の家2」図面
【図面枚数】　108枚
【日付】
1974.6.20、
1975.9.16 ～ 1976.11.12、
1991.8.25 ～ 30、
1993.2.25 ～ 9.11、
1994.3.12
【縮尺内訳（縮尺：図数）】
1/1：7
1/2：8
1/5：5
1/10：6
1/20：14
1/30：3
1/40：3
1/50：30
1/100：18
無記入：20
【原図中のタイトル】
建主名、三層の家、目神山の家

「天と地の家」図面
【図面枚数】　71枚
【日付】
1973.4.25 ～ 11.27、
1974.5.25、
1991.11.06 ～ 12.12
【縮尺内訳（縮尺：図数）】
1/2：2
1/5：7
1/10：2
1/20：1
1/50：17
1/100：5
無記入：41
【原図中のタイトル】
建主名、古代への回帰、土と緑に埋る家、天と地の家

図面提供：石井智子美建設計事務所

――さて、そのほかにも図面表現に関わることをいくつかおうかがいしたいと思います。まずは平面についてですが、竹原さんは以前、「回帰草庵」は正方形の組み合わせでプランが構成されているとおっしゃっていますが、それは石井修さんがよく使われる平面計画の方法なのでしょうか。

竹原　そのことは先生が仰っていたわけではなく、所員であった当時も意識していませんでしたが、後になって気付きました。たとえば、「天と地の家」の図10を見ると大きい正方形に9つの矩形が納まっているのが分かります。間取りを見ても、増減はありますが4,800mm角が基本になっている。美建設計事務所では960mmを寸法のモデュールとして使っていました。その倍数である960（クンロク）、1,920（イチクニ）、2,880（ニッパッパ）、3,840（サンパシ）、4,800（ヨンパー）という寸法が頻出します。

石井　在来の910mmでは小さすぎるので960mmとなったようです。この寸法は2と3で割れますから、その倍数も2と3で割れて、寸法の調整に都合のよいモデュールです。たとえば、図11の「天と地の家」の茶の間では、960×5である4,800に、960の半分である480を加えて5,280にするスタディを行っています。吉村順三さんもこの960を使われていたそうで、父は吉村さんに「アメリカーナビル」（1966年）や「露木邸」（1966年）の監理を任されていましたから、その時に学んだのかもしれません。

竹原　急傾斜で整然とした配置が難しい「回帰草庵」でも、正方形を基本とし、それを廊下で繋ぐ構成を採っています。正方形をずらしたり、斜面に載る位置を断面で検討しながら、組み立てました。一番大きな居間は、2,700mmの柱間が3つで計8,100mm角になっていますね。もしかしたら、寸法は違えど、こうした正方形の間取りの考え方は、神代雄一郎さんの九間論の影響を受けているかもしれません。三間×三間（九間）の空間が人間の身体にとってしっくりくる原初的なサイズだとする考えです。先生と神代さんは同い年で、長く交友があったそうですから。ただ、おふたりに影響を受けたという話は聞いたことがなく、こうしたら綺麗でしょう、と仰るだけでした。

――図面は、いずれの建物もA1、A2のトレーシングペーパーがほとんどでした。縁ありのものと、縁なしのもの、また規定外のサイズに切り取られたものなどがあります。また、定規で線を引いたものとフリーハンドのもの、スケッチ風のものが混在しています。それぞれにどのような役割があったのでしょうか。

石井　厳密に使い分けていたわけではないと思いますが、縁ありのものは青焼きして設計図書として製本するための図面で、縁なしのものは現場用の施工図が多いです。図12はコンクリートの軸組と山の傾斜を書いた軸組図、図13は天窓の詳細図ですが、いずれも施工図面です。

竹原　普通は施工会社がつくる施工図をどうして設計事務所がつくっていたかというと、この頃の施工を担当していた中野工務店には現場監督がいなくて、全員が大工でした。施工図を描く人がいないため、こちらで施工図を作成する必要があったのです。原寸や二分の一の詳細図をフリーハンドで、パッと書いて大工に渡しました。基準線だけは三角スケールで引くこともありましたが、フリーハンドでもスケール感が染み込んでいたので、正確に描けるんですよね。

石井　現場監督はいなくても、ひとりひとりの大工さんが棟梁級の技能をもっていたので、父はとても信頼していました。この家も、もう築35年以上になりますが、歪みなくしっかり建っています。ローコストで安い材料しか使っていませんから、この質は大工さんの力量のおかげでしょう。後に監督がいる現場でも、美建は施工図をつくっていました。施工図をこちらがどんどん描いて、細部まで父の考え通りにつくりたいと考えていたようです。

竹原　「回帰草庵」の現場では、中野工務店と工夫して施工しました。急斜面でしたので、敷地に櫓を組んで一度水平な基準面を空中につくって、そこから下に向かって墨付けをしていきました。水平なところがない敷地でしたから、基準面を人工的につくらなくてはいけなかったのです。

石井　施工図だけでなく、お施主さんに見せる図面もフリーハンドで書いていました。この平面図（図14・15）もそうです。定規で描くより柔い印象で、味が出ますよね。

竹原　規定外の大きさの図面はエスキスの時に描きなぐった図面だと思います。僕の入所した頃は、昔からの所員が辞めた直後で、先生と僕と若い福田真一君の3人しかいない状況でした。その時、先生と僕は大きな机の隅で、やぶいたトレーシングペーパーを広げて図面をかきなぐってスタディをしていました。規定外のものはその時のものかもしれません。保存されていた「回帰草庵」の図面はほとんど福田君が清書した最終形です。エスキスの図面はほとんど残っていないようですね。今思えばもったいないことです。

――これらの図面の中に、石井修さんが描かれた図面やスケッチはありますか。

竹原　図16は先生が描いたものです。実施案とは異なるようですが「天と地の家」の平面スケッチですね。動線が描き込まれています。先生はとても太い芯を使っていましたから、先生が描いたかどうかすぐ分かります。太い線ではっきり描くことで、相手につくりたいものが伝わる、という考えがありました。手で描かれた図面の醍醐味ですね。青焼き図面をもっていくと、その上にこの太い線でたくさんチェックが入って、何度も書き直したのを覚えています。青焼きの上なので、そのエスキスチェックも残っていませんね。各建物で100枚前後しか図面が残っていないようですが、もっと膨大に図面を描いていたと思いますよ。

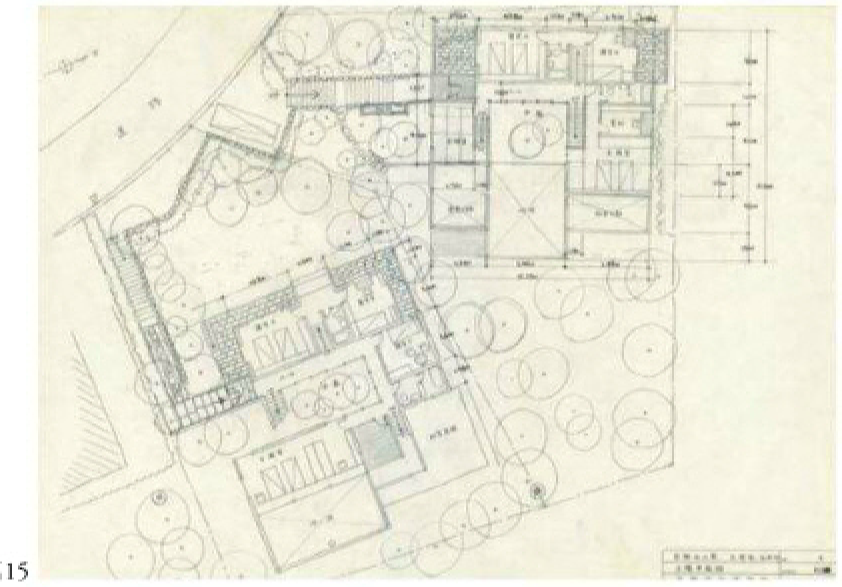
――本日お話しをうかがって、建築図面には、思想を建築として具体化する過程や、その時の建築の想いが読み取れると分かりました。美建と同じように竹原さんの事務所でも手描きで図面をつくられていますが、CADなどのデジタルツールがある中、手描きの図面にはどのような利点があるのでしょうか。

竹原　先生と同じ様に、僕も事務所の所員には職人がつくりたいと思える図面を描けといっています。手描きだと考えがよく伝わります。CADの図面も便利ですが、全然違うものです。他人の図面を見る時も、手描きだとどこから最初に描き始めたのか、どこを最後に描いたのか、基準線をどこに設定しているのかなど、何をつくりたいと考えているかが分かるし、伝わるから面白いんです。CADだと描いた時系列は分からなくなってしまいますよね。

石井　父には、施工図は定規で小綺麗に描くのではなく、フリーハンドで大事なことを分かりやすく描くようにいわれました。CADより手描き図面は数的な厳密性は劣りますが、そこまで厳密性が必要とされない場面での強弱がむしろ自由にできるので、見る人に設計意図がより伝わります。手描きの図面だからこそ、何を大事にして設計しているのかが、分かりやすいのだと思います。

竹原　先生は頭の中でエスキスをされていたそうで、ご自身の中で十分にイメージが定着してからスケッチをするといっていました。そのため、スケッチや設計の段階での先生の迷いのない太い線は、これをつくりたい、という強い意志が感じられた。その意志が図面を通して、所員、大工、そして建主に伝わることで、よい建築がつくられるのではないでしょうか。

（2012年5月7日　回帰草庵にて／文責：伏見唯）



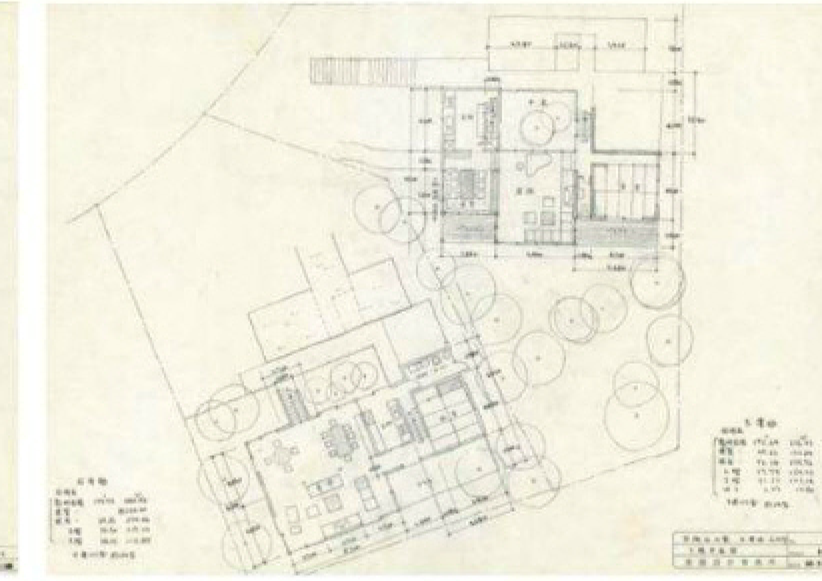


図14・図15

図11：「天と地の家」の上階平面スケッチ（部分）。茶ノ間の柱間寸法を960の倍数で検討している。
【A2変形：縮尺なし：日付なし】

図12：「目神山の家2」の軸組図。
【A2変形：1/40：日付なし】

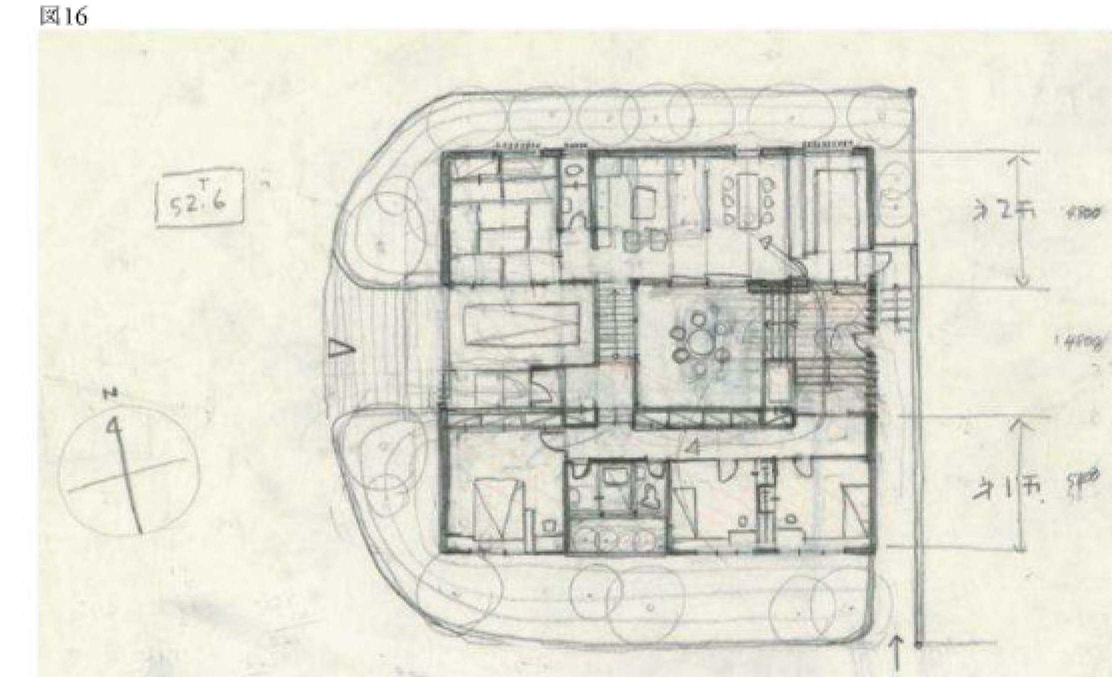
図13：「目神山の家2」の上階屋根トップライト詳細図。フリーハンドで描かれている。
【A1：1/2：1976.2.9】

図14：「回帰草庵」および「目神山の家2」の上階平面図。道路からの下り斜面に建つ住宅が石井修氏の自邸「回帰草庵」で、上り斜面に建つ住宅が友人宅の「目神山の家2」。フリーハンドで描かれている。
【A2：1/100：1975.9.16】

図15：下階平面図。それぞれの住宅の面積表が付記されていて、「回帰草庵」は580.98m²、「目神山の家2」は636.83m²とある。
【A2：1/100：1975.9.16】

図16：「天と地の家」の平面スケッチ。石井修氏の自筆。上階（2階）と下階（1階）を一枚にまとめ、下階の部分は薄く朱で塗っている。動線の矢印なども描かれている。
【A3変形：縮尺なし：日付なし】

図16





深川の家
House in Fukawa
広島県広島市

谷尻誠／Suppose Design Office＋
大野博史／オーノJAPAN
Makoto Tanijiri／Suppose Design
Office＋Hirofumi Ohno／Ohno JAPAN

エントランスの夕景。あえてオーバースケールとした建具は高さ4,300mm、幅1,000mm。内部正面の家型の開口部が階段室、上部手前に張り出したヴォリュームが子供部屋02。



テラス04より見下ろす。中央の階段室からレベル差をもって張り出す居室は開口をもち、上部のテラスや吹抜けなどの余白と関係してスケール感を曖昧にする。


テラス01から見る。右手の階段室から続く主寝室を正面に、左手にエントランスを見る。階段室から張り出すヴォリュームの外周は針葉樹合板仕上げ。



子供部屋02。居室内部を白く仕上げ、居室外部を針葉樹合板でくるむことで、外周壁との間の吹抜けを外部のように感じさせる。子供部屋02の天井高は2,130mm。

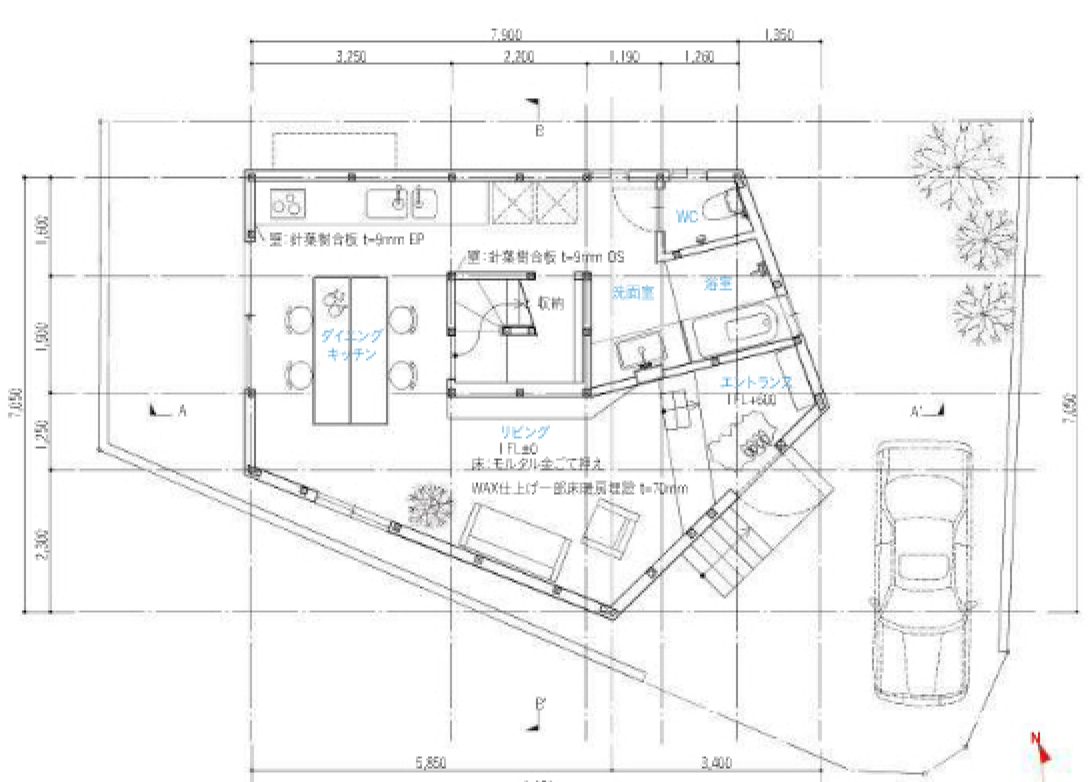
人によって大きい、広いという感覚はさまざまである。
広さや大きさを定義するひとつの基準として、平米やメートルなど数値化された単位が使われる。しかし空や海や山のような自然は、実際にその大きさが分からなくても誰もが大きいと感じている。つまり自然は大きさが計り知れないことが、大きさを感じさせているのである。

敷地は近くに三篠川が流れ、周囲を山々に囲まれている。建主は小さな頃から隣の母屋で暮らしていたため、周辺の自然は眺めるものではなく、慣れ親しんだ生活の一部になっているとのことだった。
しかし前面道路は車の往来が多く、素直には開けない状況でもある。そこで建主から求められたのは、開口部を大きく取るのではなく、閉じている中での開放的な場所であった。
そこでわれわれは敷地形状に沿うように外壁をつくり、その内部に大きな樹木のようなヴォリュームを配置した。木の幹の部分は階段室になっており、枝葉が伸びたようにさまざまな高さにある個室をつないでいる。
大きな木の周りは上下左右に自由につながる余白空間となり、余白の奥行は自然と同様な大きさの分からない状況をつくり出している。
1階の余白は木陰でくつろぐようにリビングやダイニングとして使われ、各個室の上は枝の上のテラスとして使われる。
面積を抑えた各個室には外壁側と同じように余白に向けた開口部を設けることで、三方向に視線の抜けができ実際の広さよりも広く感じる。部屋同士の関係や、余白空間との関係によって、室内のさまざまな風景を見ることが可能になった。

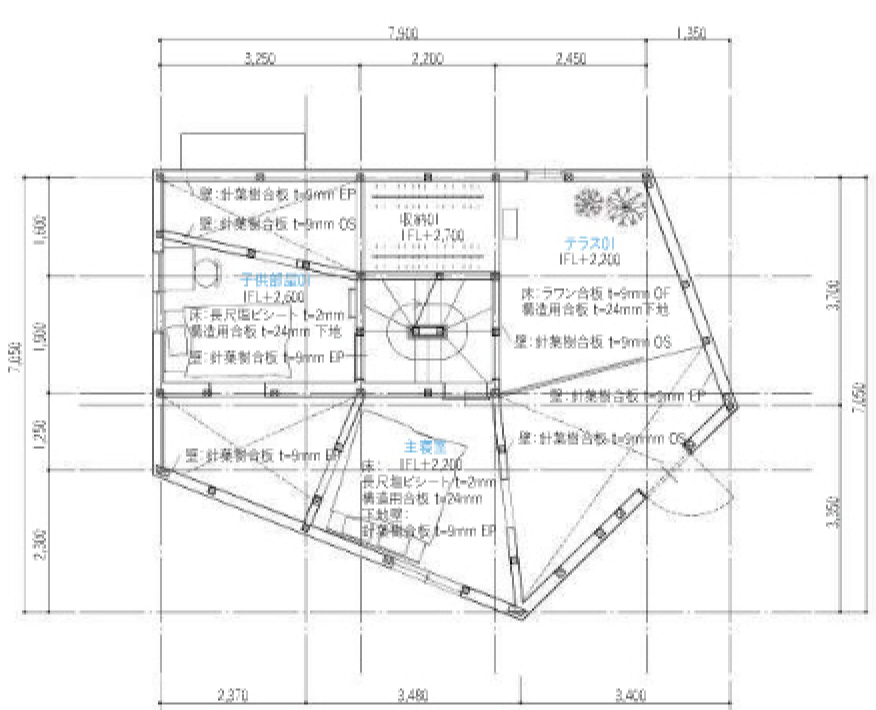
この建築では自然界で動物たちが木の上で居場所を探すように、住まい手は季節や時間により木の周りで心地よい場所を探し回ることができる。
建築をつくるうえで誰もが求める広さへの欲求に対し自然の概念を住宅に翻訳することで、新しい広さに出会うことができたのではないだろうか。
それは世の中にあるさまざまなスケールを見直すことであり、広い狭い、低い高いと人が感じる要因を丁寧に読み解いていくことである。そうしてこれからも新しい空間を考えていきたいと思う。
（谷尻誠）



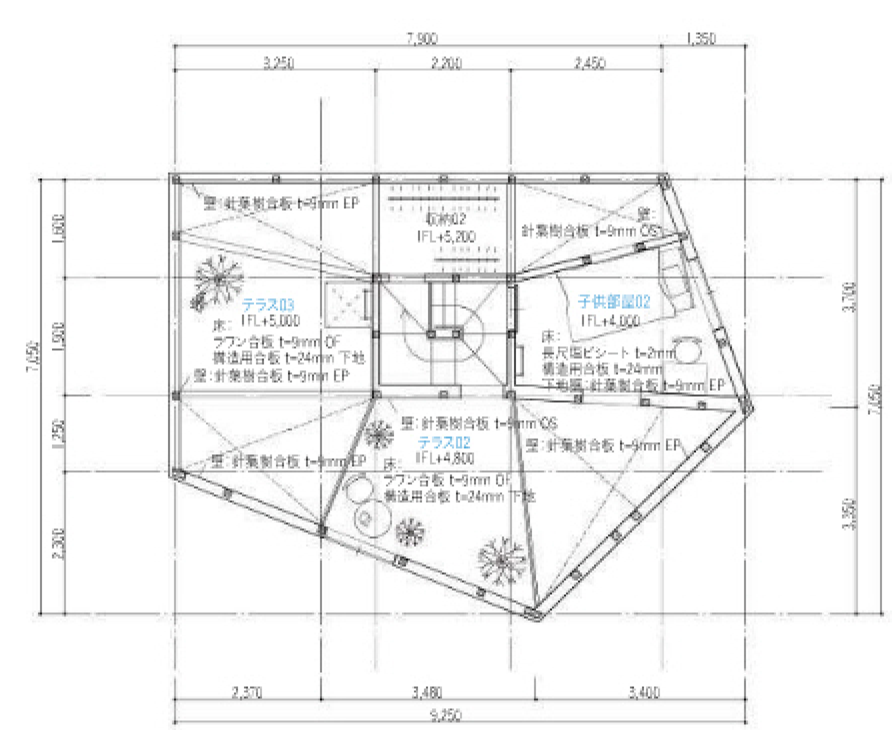
中央にコアとなる階段室を設け、そこから枝葉のように居室が張り出す構成。



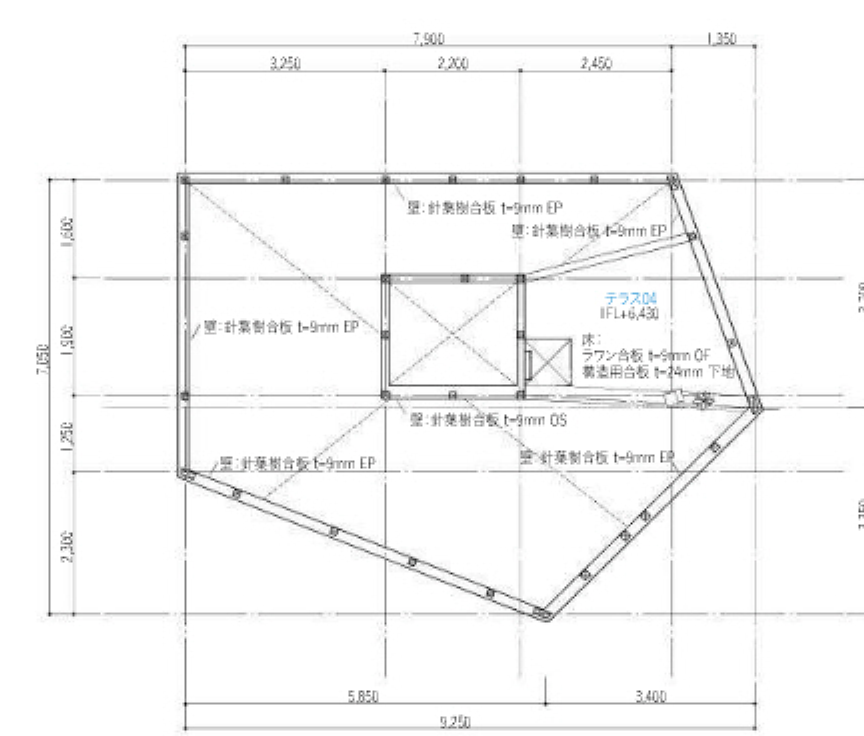
1階平面図　縮尺1：150



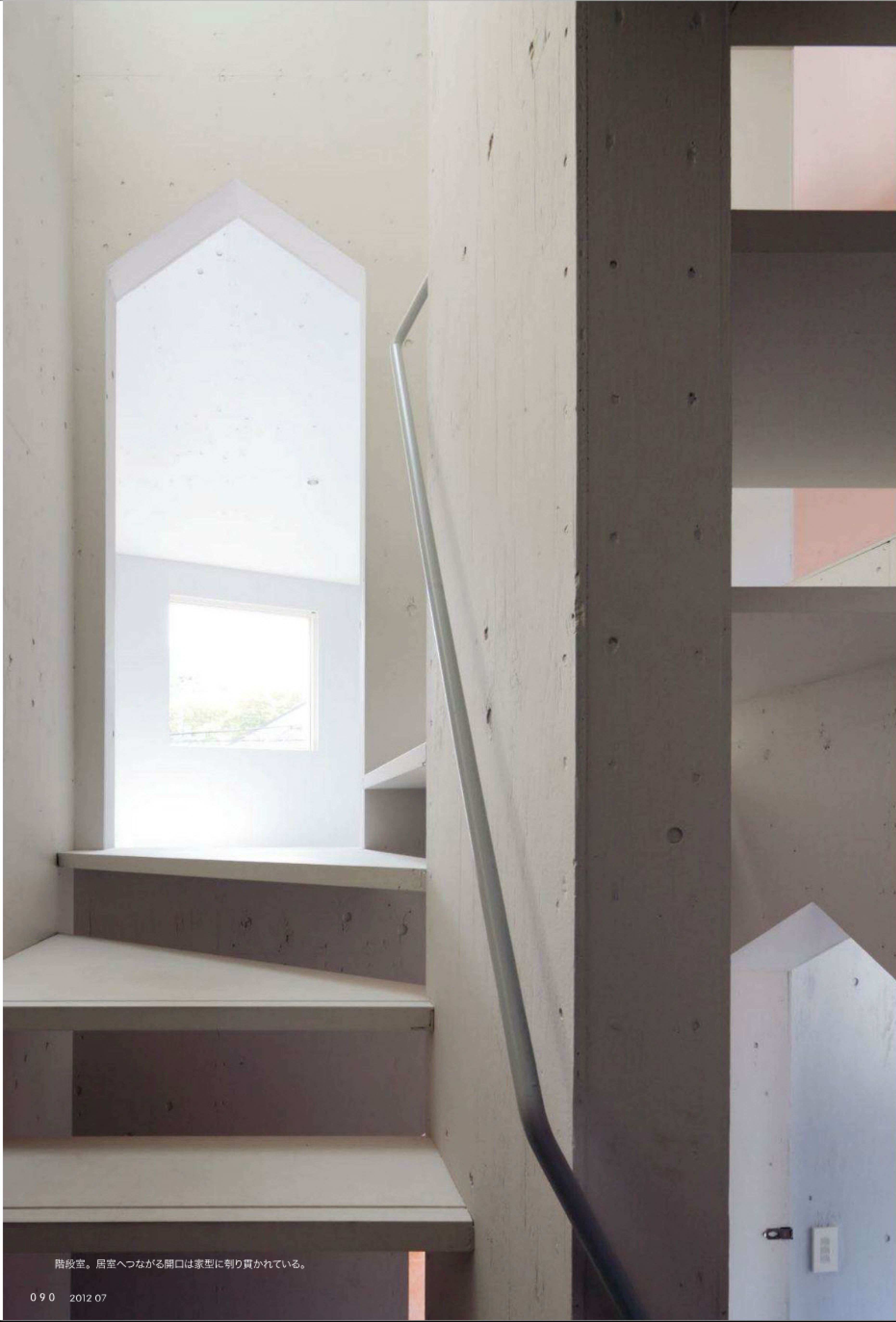
2階平面図



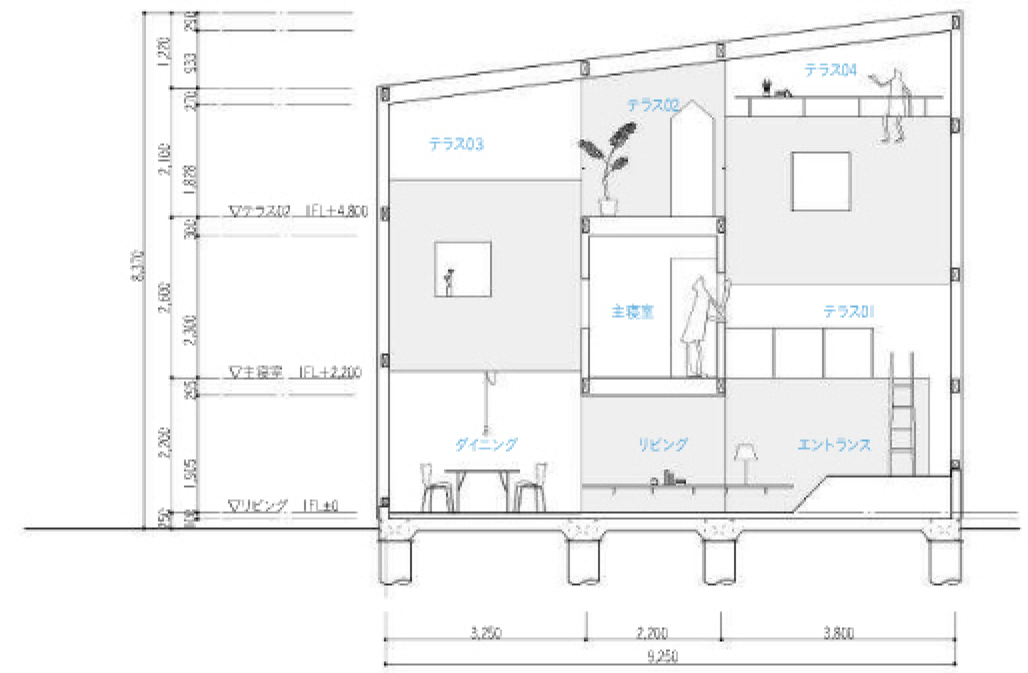
3-1階平面図



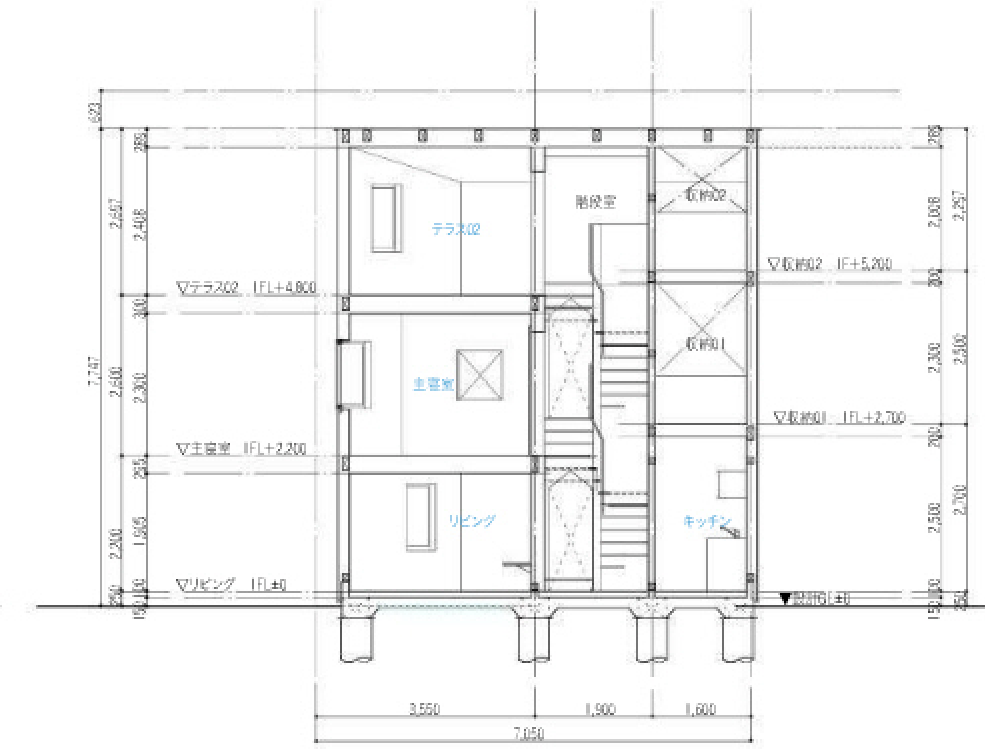
3-2階平面図



階段室。居室へつながる開口は家型に刳り貫かれている。



AA'断面図　縮尺1：150



BB'断面図

深川の家

所在地／広島県広島市
主要用途／専用住宅
家族構成／夫婦＋子供2人

設計

Suppose Design Office
　担当／谷尻誠　吉田愛　島田真梨子
構造　オーノJAPAN
　担当／大野博史　中原英隆

施工

野村建設　担当／三宅 友和
電気　広島電気興業　担当／吉川哲

構造・構法

主体構造・構法　木造在来工法
基礎　べた基礎

規模

階数 地上3階
軒高 8,221mm　最高の高さ 8,238mm

敷地面積　124.42m^2
建築面積　50.29m^2
　（建蔽率40.41％ 許容60％）
延床面積　114.27m^2
　（容積率91.84％ 許容200％）
　1階　50.29m^2　2階　32.53m^2
　3階　31.46m^2

工程

設計期間　2008年2月～2009年12月
工事期間　2010年1月～2010年5月

敷地条件

地域地区　法第22条地域
道路幅員　南7.0m　東4.1m
駐車台数　2台

外部仕上げ

屋根／ガルバリウム鋼板 竪はぜ葺き
外壁／モルタル（ノンクラック工法）t=20mm
　リシン吹き付け
開口部／アルミサッシ
外構／砕石敷き

内部仕上げ・使用機器

キッチン
床／モルタル金ごて押え ワックス
壁／針葉樹合板 t=9mm EP　一部St PL
　t=2.3mm貼り
天井／針葉樹合板 t=9mm EP
厨房機器（IHヒーター）／teka IQX635
　換気扇（シェード）／三菱電機 VD-20ZP7
　家具／キッチンカウンター（製作）
　照明／山田照明 DE-2667　NIPPO
　SAL-F1500
　シンク水栓金物／INAX SFHB420SX

浴室

床／モルタル金ごて押え＋撥水剤塗布
壁／フレキシブルボード t=8mm VP
天井／フレキシブルボード t=6mm VP
照明／山田照明 DF-2989
バスタブ／Tform FLN72-4373
シャワー水栓金物／TOTO TMJ40C3R
　GROHE 2841000J・28819000・28764000

寝室　子供部屋

床／長尺塩ビシート t=2mm
壁・天井／針葉樹合板 t=9mm EP
照明／山田照明 DE-2596

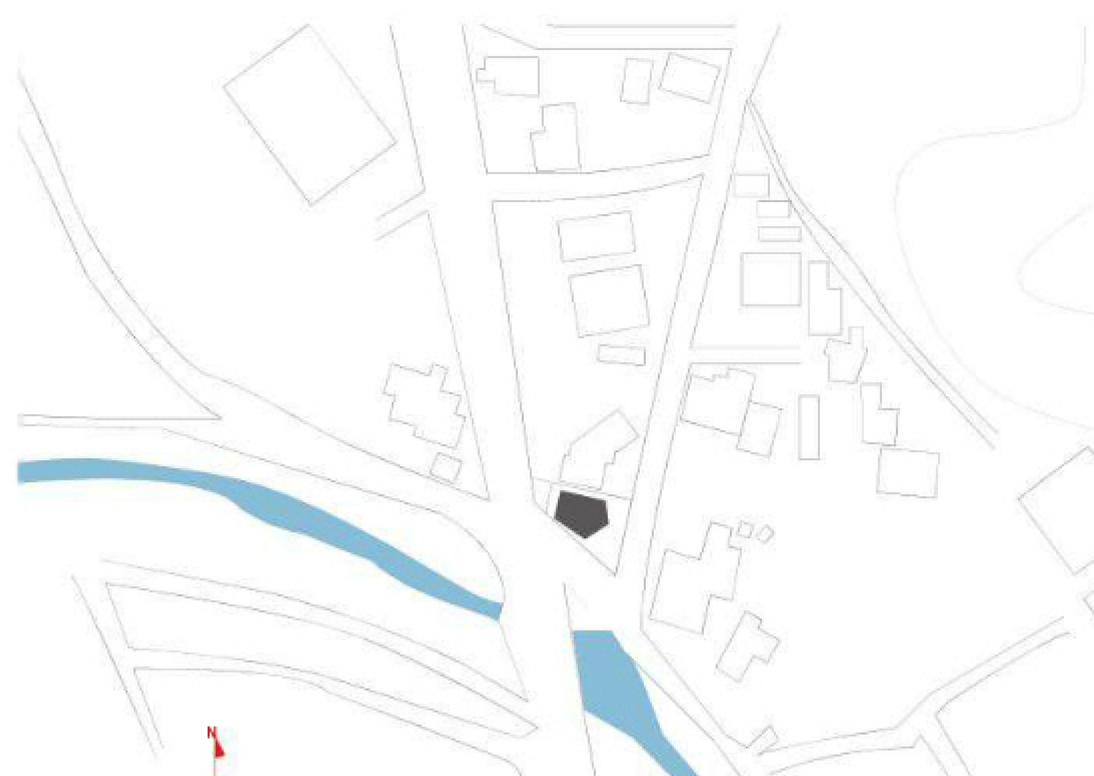
インナーテラス

床／ラワン合板 t=9mm OF
壁／針葉樹合板 t=9mm EP　針葉樹合板 t=9
　mm OS
天井／針葉樹合板 t=9mm OS
照明／東芝ライテック DC6222

設備システム

空調　冷暖房方式／エアコン
　換気方式／24時間換気
　その他／温水式床暖房
給排水　給水方式／井戸水
　排水方式／下水道放流
給湯　給湯方式／電気給湯器 エコキュート

撮影／新建築社写真部



配置図　縮尺1：2,000



南側外観。裏手に見えるのが母屋。

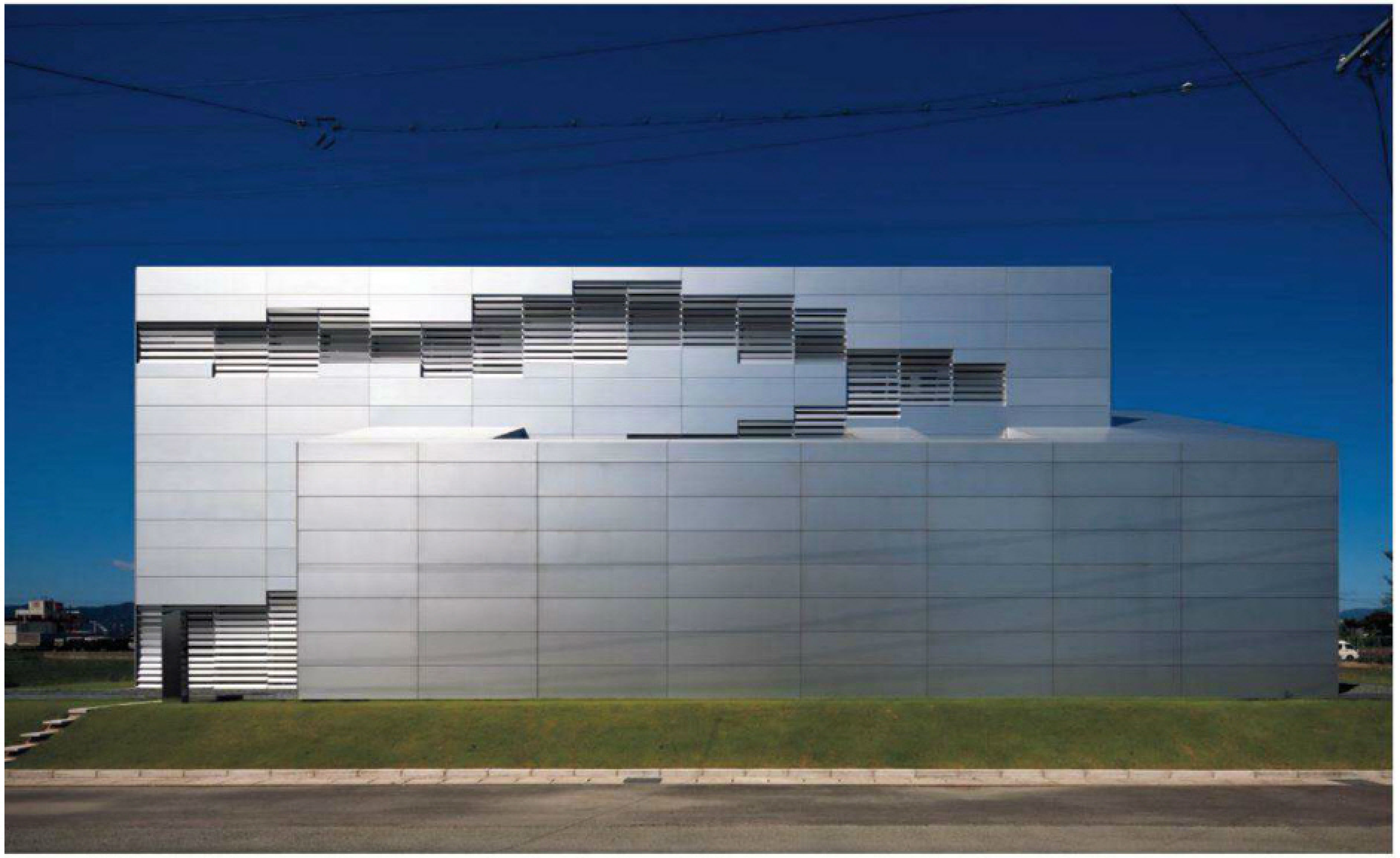
パラメトリック・フラグメント

三重県松阪市
PARAMETRIC FRAGMENT

山口隆
Takashi Yamaguchi



タイトルの「パラメトリック・フラグメント」とは光や風をパラメータとして幅や角度が変化する外壁パネルにより、建築の内外に表情を生み出すことである。



東側外観。鉄骨造の躯体と300mmの隙間をおいてアルミパネルが設置され、隙間を通る空気の流れをつくり出す。

単一素材を用いて、内外に豊かな表情を与える

今回の計画においては、単一の素材でありながら、変化のある表情を生み出すことを狙った。寸法、角度をパラメトリックに変化させることで、部分が全体へと緩やかに連続していく非分節の形式を取るものである。マッスなヴォリュームを覆う外側のアルミパネルは、均質な壁面パターンから徐々に大きさを変え、フラグメント化し、ルーバーへと姿を変えていく。部屋開口部、屋根裏開口部、排煙窓、換気および空調吹き出し口の位置と共に、パネルの角度、幅、長さは変化し、開口率が決定されていく。

建物は主要躯体部と表層アルミパネルとのダブルスキン構造をもつ。夏場の輻射熱量を低減させるため、西側には窓開口部を設けず、閉ざされている。また西側壁部分と屋根部分ではダブルスキンの間隔を広めに取っている。このため壁のダブルスキン内部を熱風は上昇し、傾斜屋根裏内部を通って、ルーバーから外部へと排出されていく。

敷地は、三重県の伊勢湾にほど近い田園地帯に位置し、広大な稲田が周辺に広がる。田植え時期には一面水に覆われ、秋には稲穂が金色に輝く。この地域は降雨量が多く、しばしば洪水に見舞われる。

そのため、建物は盛り上がった緑の基壇上に置かれる。この基壇によって洪水から建物を守ると同時に、基壇に植えた緑の芝生によって田園風景と緩やかに連続することを求めた。

建物全体は大小異なるふたつのヴォリュームからなる。ヴォリュームを相互にずらし、水平・垂直のヴォイドを貫入させることにより、建物内部に外部と連続する空間を形成させている。

東側の小さなヴォリュームを垂直方向に貫くヴォイドは、1階子供室・バスルームと2階ファミリールームに面する。それと直交する水平方向のヴォイドは、ダイニングにまで連続する1階テラスとなっている。このふたつのヴォイドから光、風、風景が建物の奥深く浸入する。

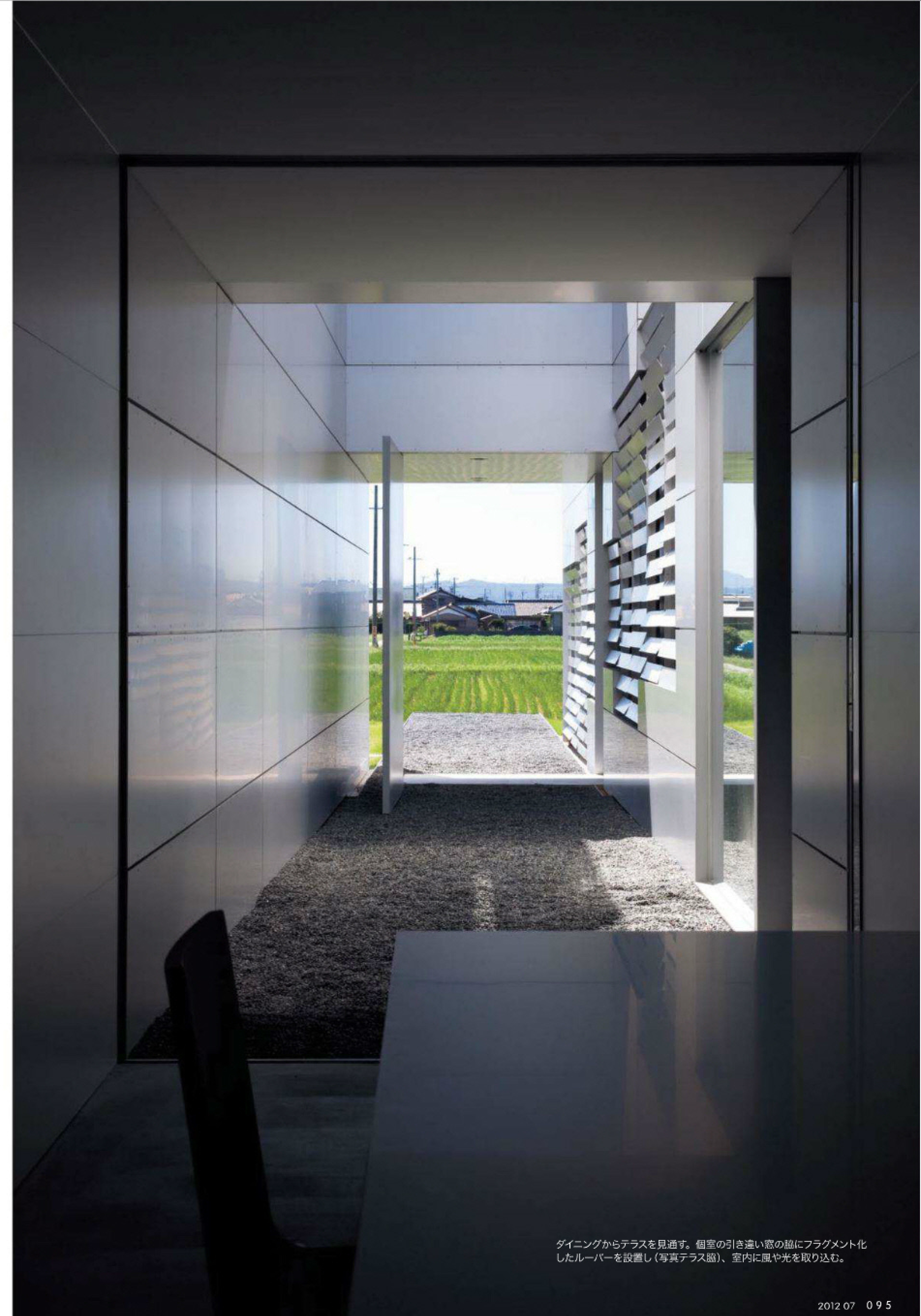
自律した空間を確保しつつも、豊かな外部環境を取り込むために、開口のあり方が検討された。ダイニングとエントランスのふたつの扉を開放すると、稲田にまで一直線に伸びるテラスを通してのどかな田園風景が建物内部にまで飛び込んでくる。四季折々に見せる田園の表情、ヴォイドに上から射し込む自然光、敷き詰められた豆砂利を踏み締める足音がこのヴォイド空間に変化のある表情を与えていく。

リビングからファミリースペースにかけては、天井に設けられた長いスリットから注ぎ込む柔らかな光が内部空間に充満する。日照の変化や時間の経過と共に、明暗のグラデーションが変化し、表情豊かな雰囲気が醸し出されていく。ファミリースペースからは抽象的な中庭を眺めることができる。

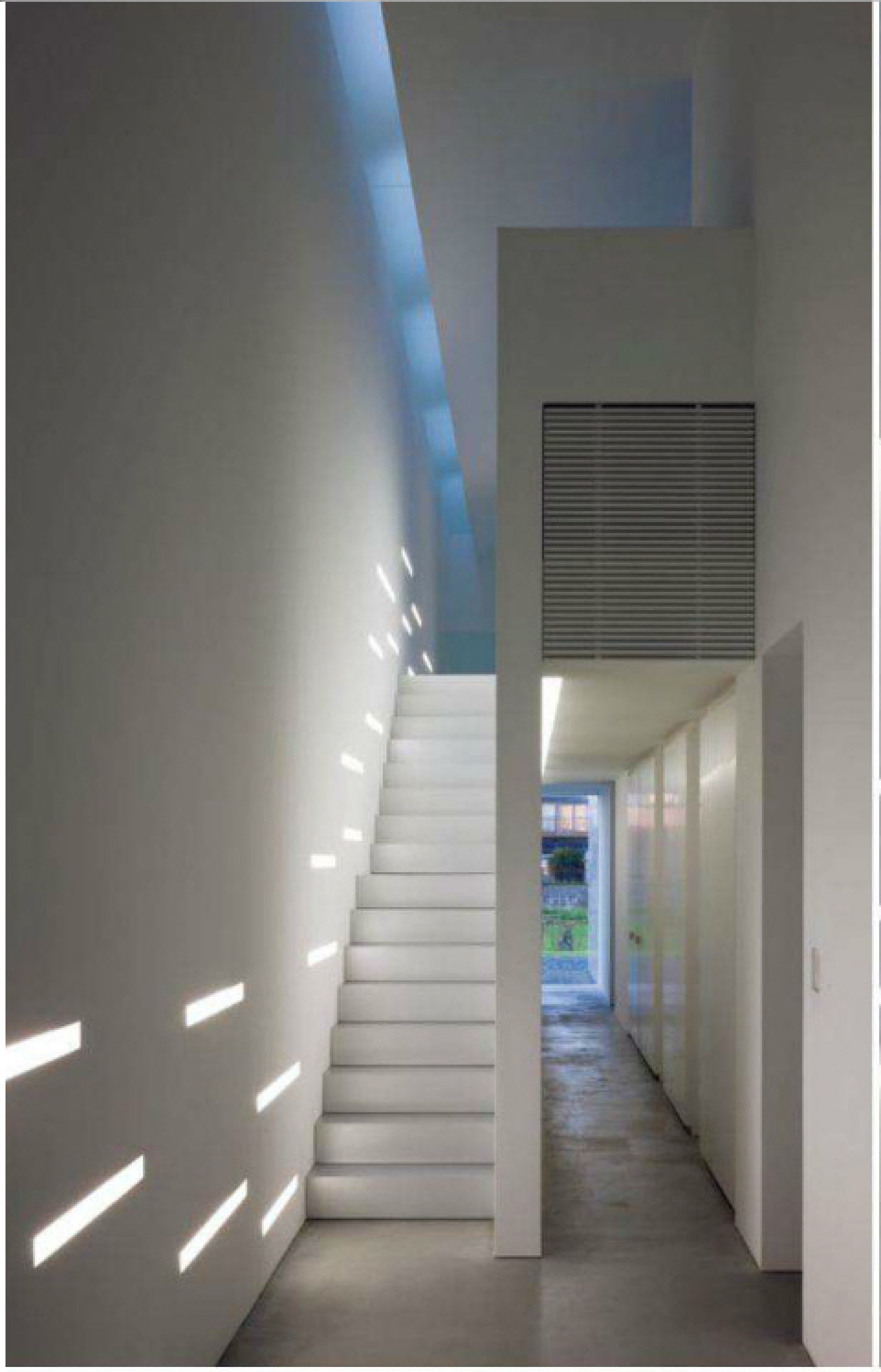
照明は西側の内部壁面に偏らせて配置した。ランダムにフラグメント化された光源として、均一化されない無数の光のセグメントとして現れ、空間の表情を豊かに演出し、空間の流動性と抽象性を一層増幅させていく。　（山口隆）

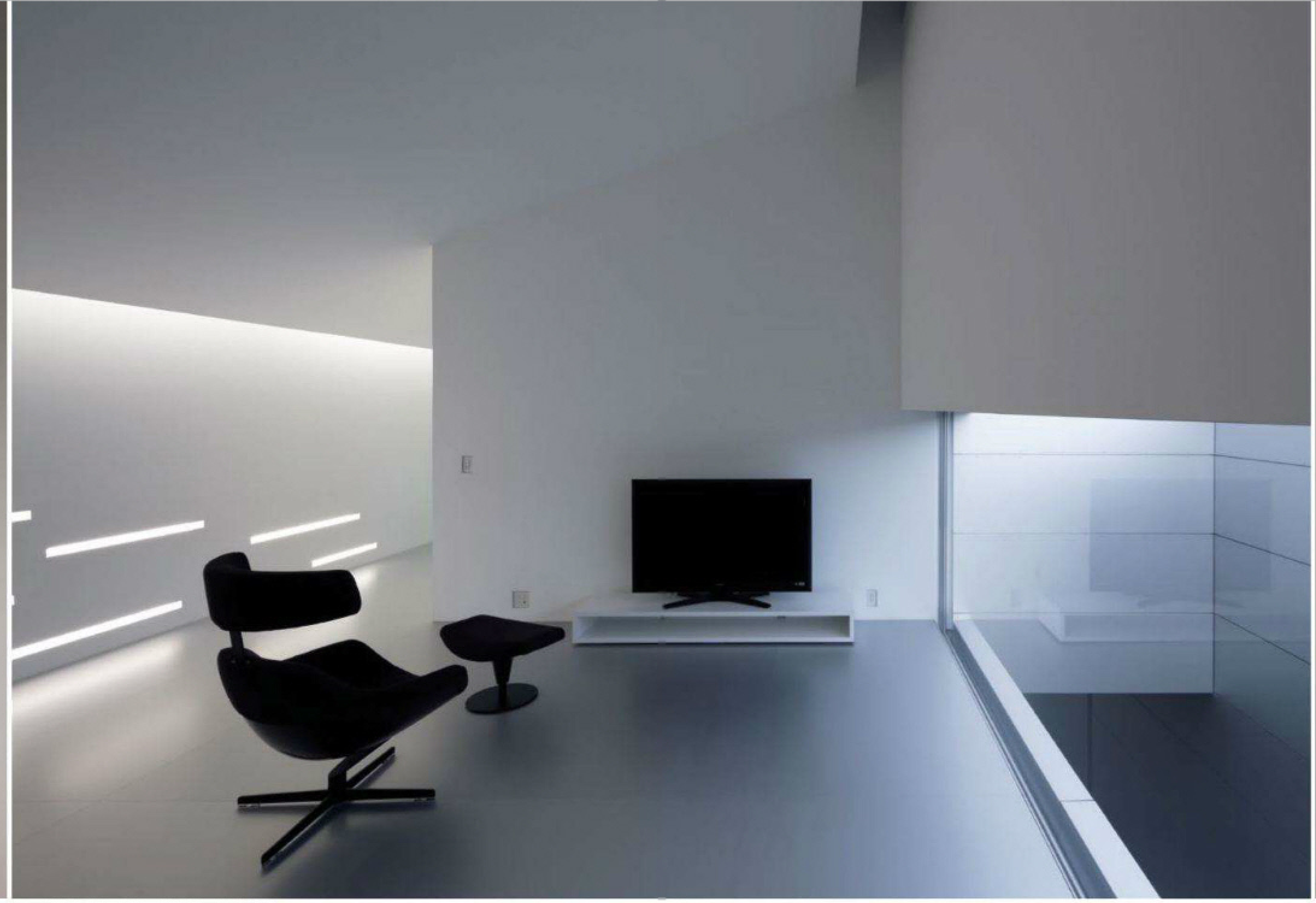


建物西側の鉄板を用いた設備機器の目隠しパネル。



ダイニングからテラスを見通す。個室の引き違い窓の脇にフラグメント化したルーバーを設置し（写真テラス脇）、室内に風や光を取り込む。

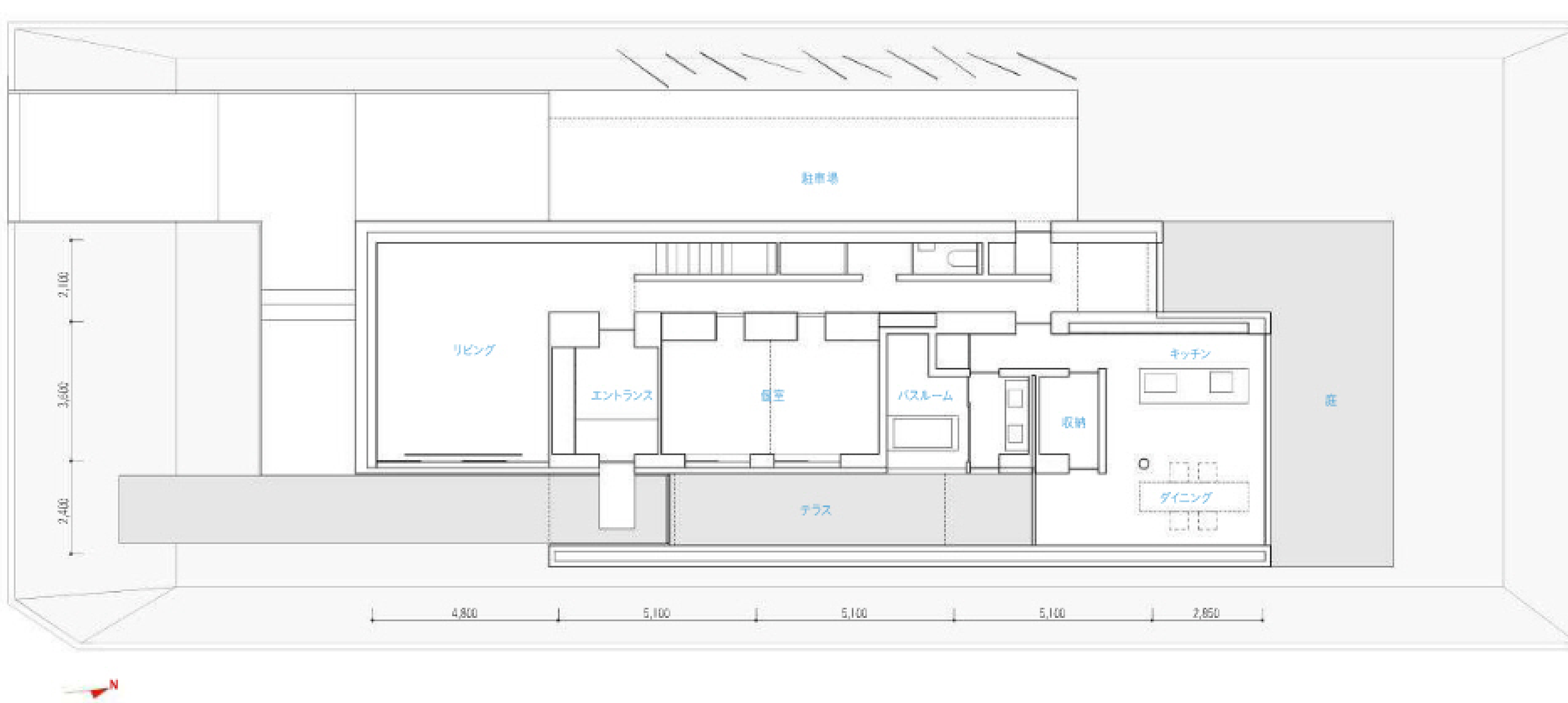




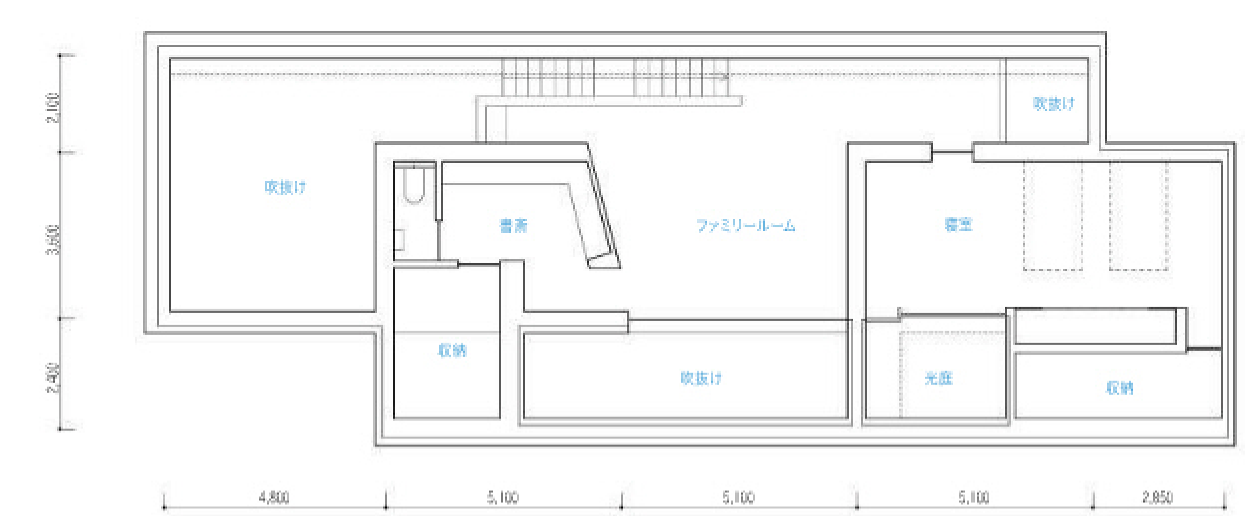
左：リビングから2階へ上る階段方向を見る。西側壁面には、ランダムに光源が仕込まれている。また磨りガラスを通した柔らかい光が落ちる。
右：ファミリールームは天井高2,150～4,450mmに変化。最後部の壁と天井と間に隙間を取り、換気・排煙に利用。



左写真の廊下を進んだところに位置する吹抜けとつながる1階部分。室内から庭、隣地の田園風景へと視界が抜ける。

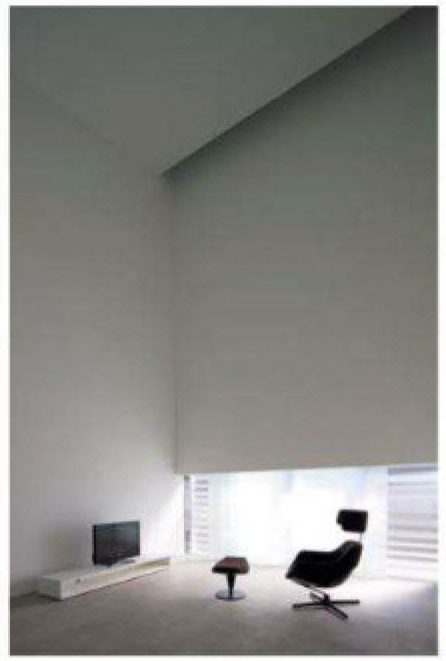


1階平面図　縮尺1：200

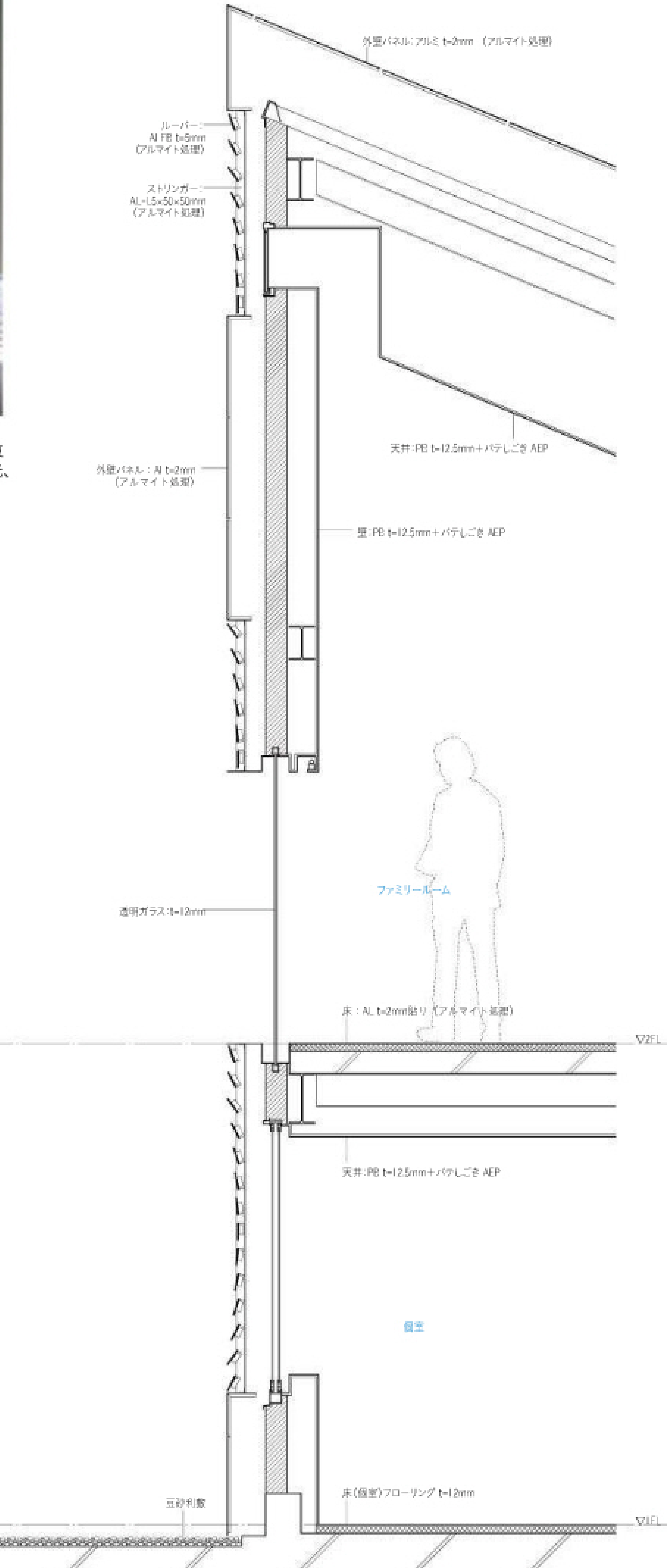


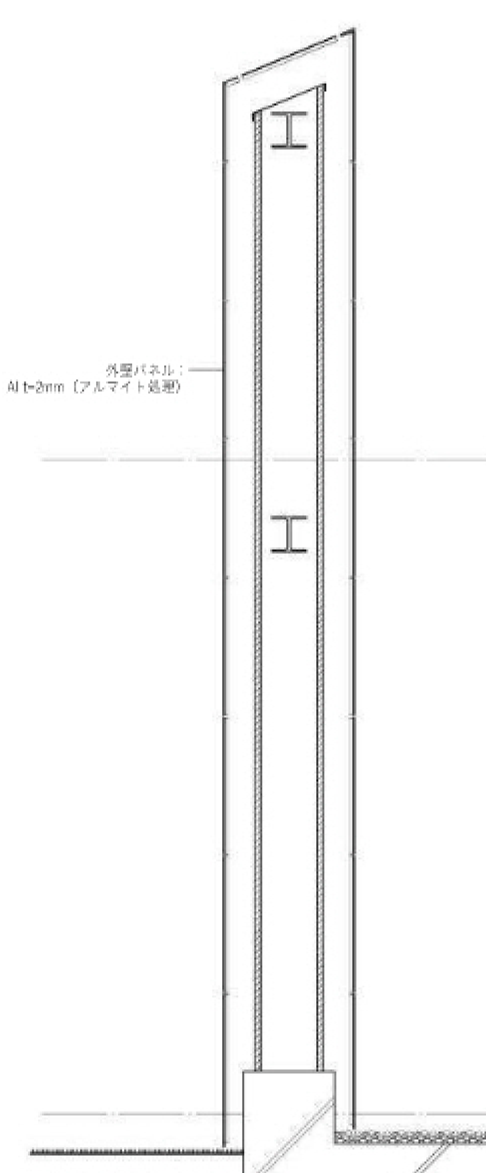
2階平面図





上：ダイニングから北側の庭を見る。
下：リビングは天井高5,000〜7,300mm。東面の地窓は開放でき、アルミパネルを介して光、風を取り入れる。



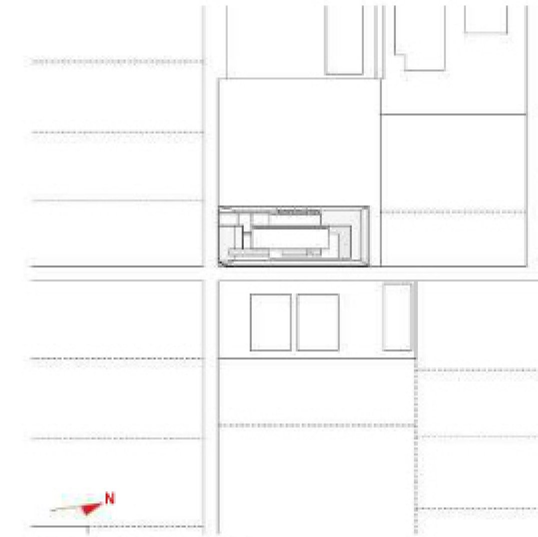


断面詳細図　縮尺1：40

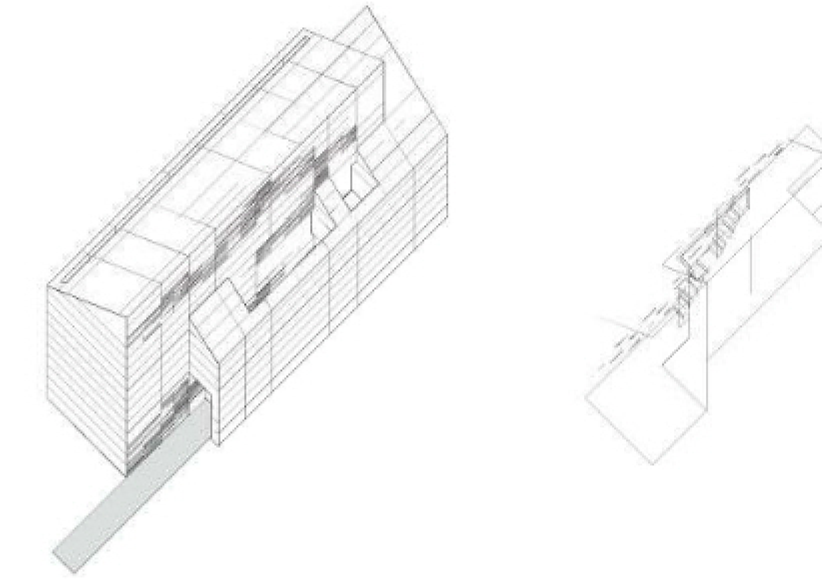
パラメトリック・フラグメント
所在地／三重県松阪市
主要用途／専用住宅

設計
山口隆建築研究所／ Takashi Yamaguchi & Associates　担当／村田純
構造　SD Room
施工
三陽建設　担当／田中俊文
構造・構法
主体構造・構法　鉄骨造
基礎　べた基礎
規模
階数　地上2階
軒高 9,050mm　最高の高さ 9,200mm
敷地面積　667.84m²
建築面積　189.15m²
（建蔽率28.32% 許容60%）
延床面積　293.19m²
（容積率38.30% 許容200%）
1階　189.15m²　2階　104.04m²
工程
設計期間　2008年6月〜2009年6月
工事期間　2010年6月〜2011年6月
敷地条件
地域地区　法第22条地域
道路幅員　東4m（東面）　駐車台数2台
外部仕上げ
屋根・外壁／アルミパネル t=2.0mm
開口部／ガラス t=10mm　アルミルーバー
外構／芝生
内部仕上げ
ファミリールーム
床／アルミ t=3mm
壁・天井／ PB t=12.5mmの上、寒冷紗パテしごき AEP
家具／カッシーナ
照明／パナソニック
建築金物／アルミサッシ（YKK）
ダイニング　リビング
床／モルタル金ごて押さえ
壁・天井／ PB t=12.5mm の上、寒冷紗パテしごき AEP
家具／カッシーナ
建築金物／アルミサッシ（YKK）
寝室
床／フローリング
壁・天井／ PB t=12.5mm の上、寒冷紗しごき AEP
家具／カッシーナ
照明／パナソニック
建築金物／アルミサッシ（YKK）
設備システム
空調　暖房方式／ルームエアコン
冷房方式／ルームエアコン
換気方式／機械換気　自然換気
その他／床暖房ヒートポンプ式温水床暖房
給排水　給水方式／上水道直結
排水方式／下水道放流
給湯　給湯方式／ガス給湯器

撮影／新建築社写真部



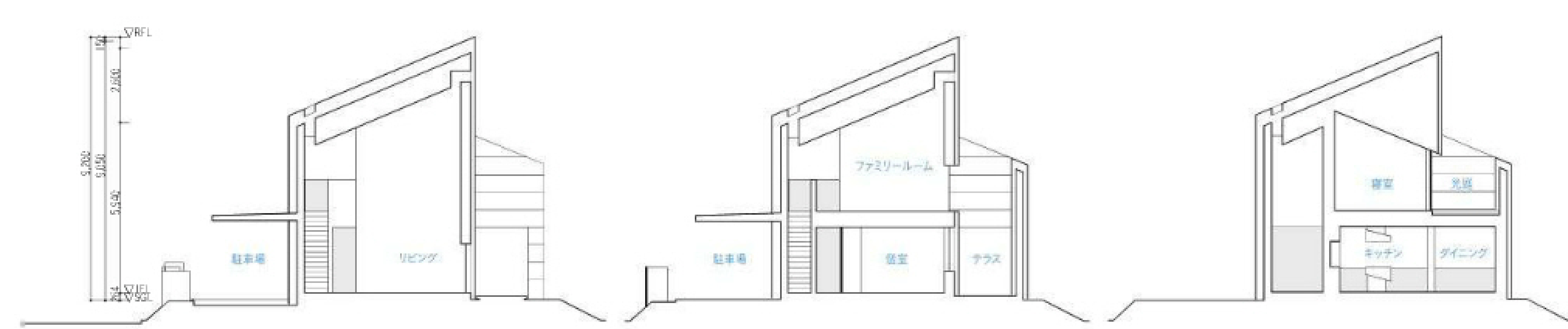
配置図　縮尺1：2,500



アクソノメトリック（左に外壁アルミパネルによるスキン、右に室内ヴォリューム）



周辺よりも800mm土を盛った基壇の上に置かれる。屋根勾配が異なる2つのヴォリュームが組み合う。

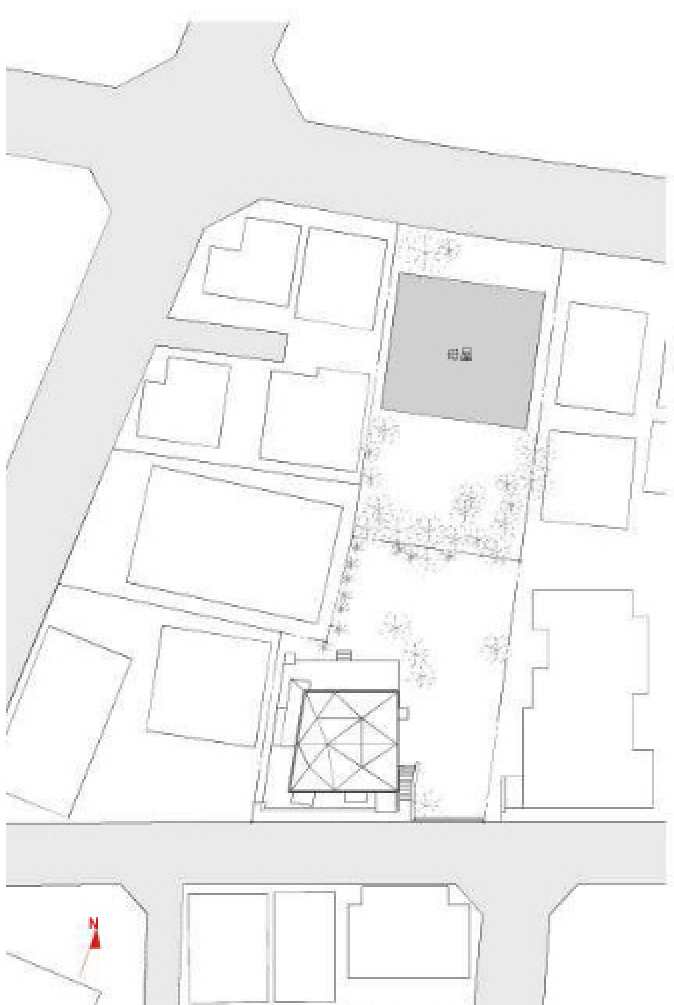


断面図　縮尺1：200

ヨシダセカンドハウス

東京都杉並区
yoshida second house

宇野求　青木豊実　竹内晶洋
Uno Motomu, Aoki Toyomi,
Takeuchi Akihiro



配置図　縮尺 1：800



母屋の南側に建てられた住宅。母屋と南面道路側からのふたつの玄関をもつ。東面（写真左手）のコンクリート部分が主要構造体。



左：構造から切り離れたリビング1の南面壁足下には、長さ5,025mmの開口を設置。／右：天井には芯のずれた梁が架かる。





1：地階の鉄筋コンクリート造のボックスから建ち上がる3つの壁柱（構造コア）。／2：3つの壁柱と鉛直力を支える木構造。主体構造ではないため、少ない部材で組み上がる。／3：鉄筋コンクリート造と木造の仕上げ面を調整する納まり。／4：多面体の屋根を架けるために、寝室1、2の天井レベルに作業用仮設床を設置。／5：現場で屋根部材を架ける順序をモデルをつくって検討。／6：多面体屋根の施工モデルを用い、現場主任、大工、構造設計者と一緒に検討した。／7：3D設計製作の鋼板製ジョイントを工場検査する。全部で17種類のジョイントを製作。／8：多面体屋根架け作業。3ヒンジの架構を幾方向か架け渡して、ジョイント同士の間に線材を架け、三角形の多面体をつくる。架ける順序を間違えると線材の方向が立体的に合わず、ジョイントに受結できなくなるため、ジョイントの形状には精度が求められた。／9：鋼板製ジョイントと線材の納まり。／10：仮組みを行い、刻みを調整し、本組みを行う。／11：母屋を入れて補強する。／12：コンパネの野地板取付前の上部からの見えがかり。／13：上棟時の屋根。上棟までには計30日。

東京の郊外住宅地に複合別荘をつくる

東京郊外の住宅地に建つ別荘である。

竣工直後の2011年3月11日、夕方、クライアントからメールが届いた。「あの地震の時、新居のリビングにいましたが、軽くて細い筒容器以外、何ひとつ倒れませんでした。隣に建つ母屋では家具の転倒はなかったものの、食器棚の戸が開き、ワイングラスがいくつか割れましたが、新居のワイングラスはカチリとも音を立てませんでした」。建築家冥利につきるありがたい知らせだった。

この「新居」が、「ヨシダセカンドハウス」である。

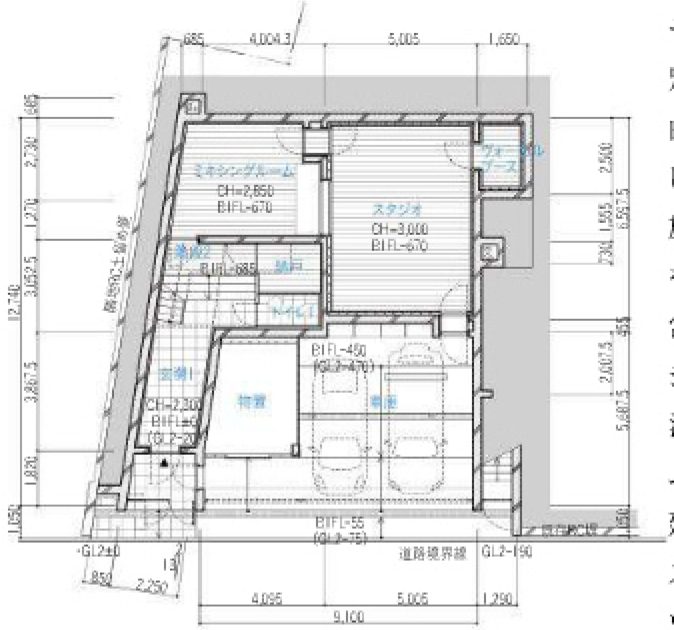
1年以上が過ぎたが、幸い、地下階の音楽スタジオではバンドの練習や録音、地上階では仲間の集まるパーティが行われ、上階では社会人や大学生となった子供たちが暮らしている。しゃれているのにリラックスできるとゲストから好評をいただいているとのことである。

「本宅のとなりに別荘を建てる」、そして「そこに音楽スタジオをつくる」。これが、クライアントから示された要望であり、このプロジェクトの目的だった。僕ら設計チームのミッションは、その夢を具体的な建築にすることである。検討の結果、東京の郊外住宅地のコンパクトな住宅スケールとかたちを尊重する配置、内部に別荘世界をつくるための素材と光と景色の構成、そして自然なかたちと空間を表象する三角形を分割した多面体の屋根に注力することとなった。

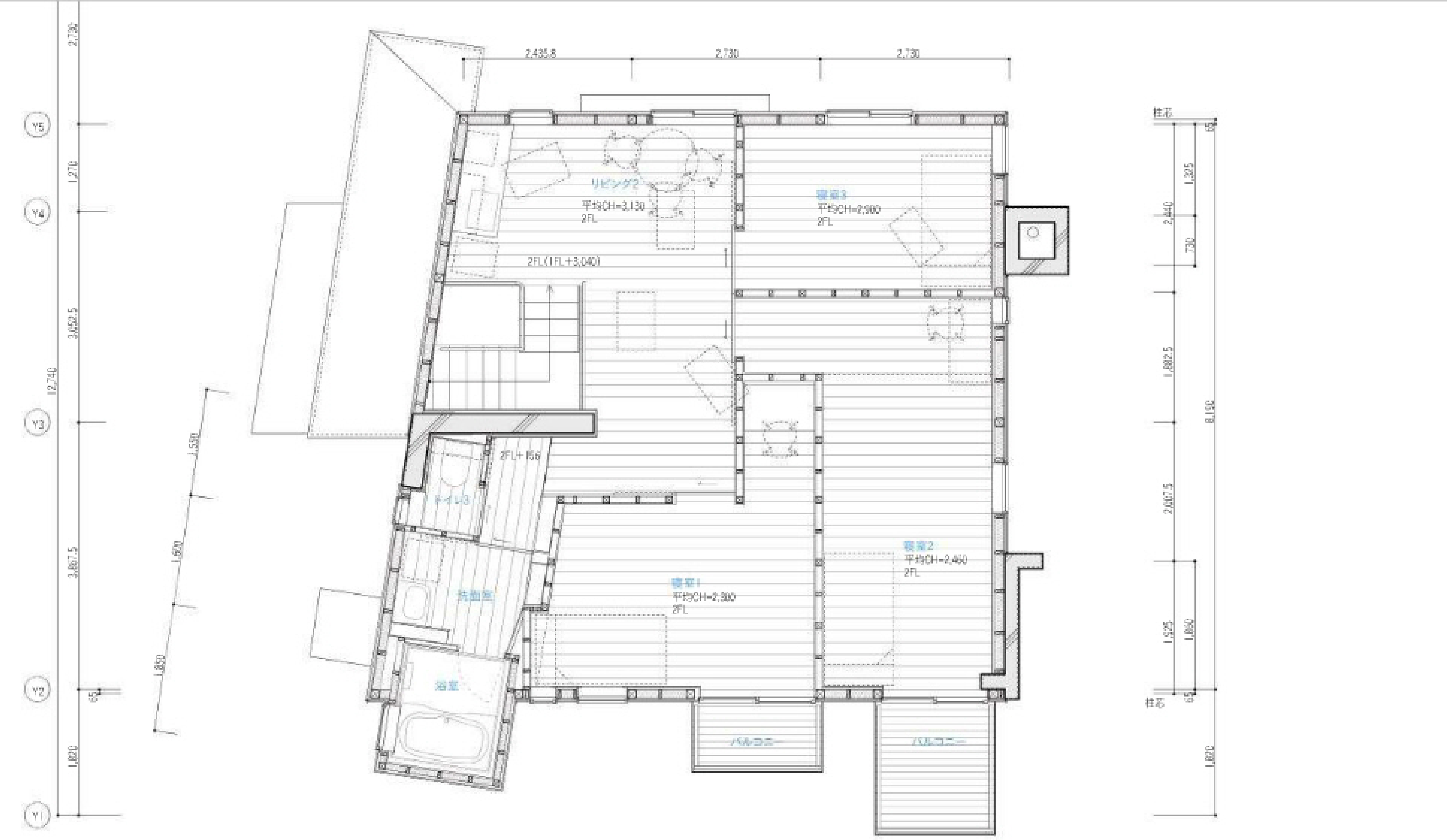
鉄筋コンクリート造で大音響を地下に埋め込み3本の壁柱で水平力をもつ、それらに絡む木造木質のインテリアと天空と向き合う異形の屋根にロマンを託してクライアントの夢に応えようと考えた。夢は技術が実現する。佐藤淳さん、三原悠子さんという優れた構造エンジニアと共に当初から設計が行われ、構造システムと構造モデルの検討が進められた。一方、建築、特に別荘は地場の施工者につくってもらうのが合理的との信念から、杉並区内で優良な施工者を探した。設計段階で施工者と情報交換を行い、施工方法の検討はじめフィージビリティ・スタディを行った。そして、南への薄い勾配の土地に、「日常と距離感をもって存在する別荘」、「音楽スタジオ、ゲストルーム、シェアハウスの混成する生活施設」、「音楽、くつろぎ、シェアの共感を呼ぶライフスタイル」、これら3つの質が追求され建築化された。隣接する非日常を楽しむライフスタイルを求めて、複合別荘「ヨシダセカンドハウス」が、生まれたのだった。（宇野求）

地階のスタジオ。

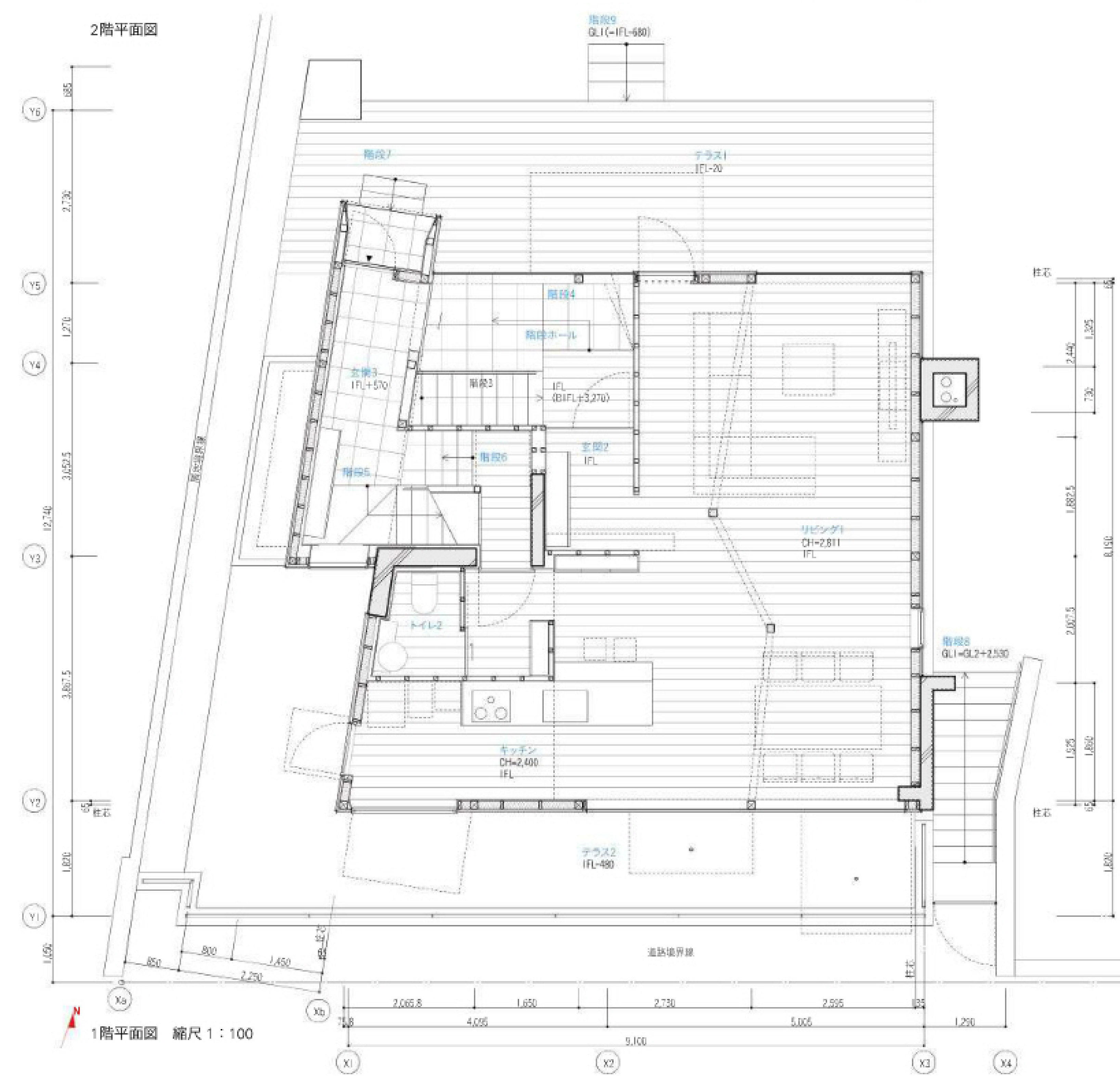




地階平面図　縮尺1：300



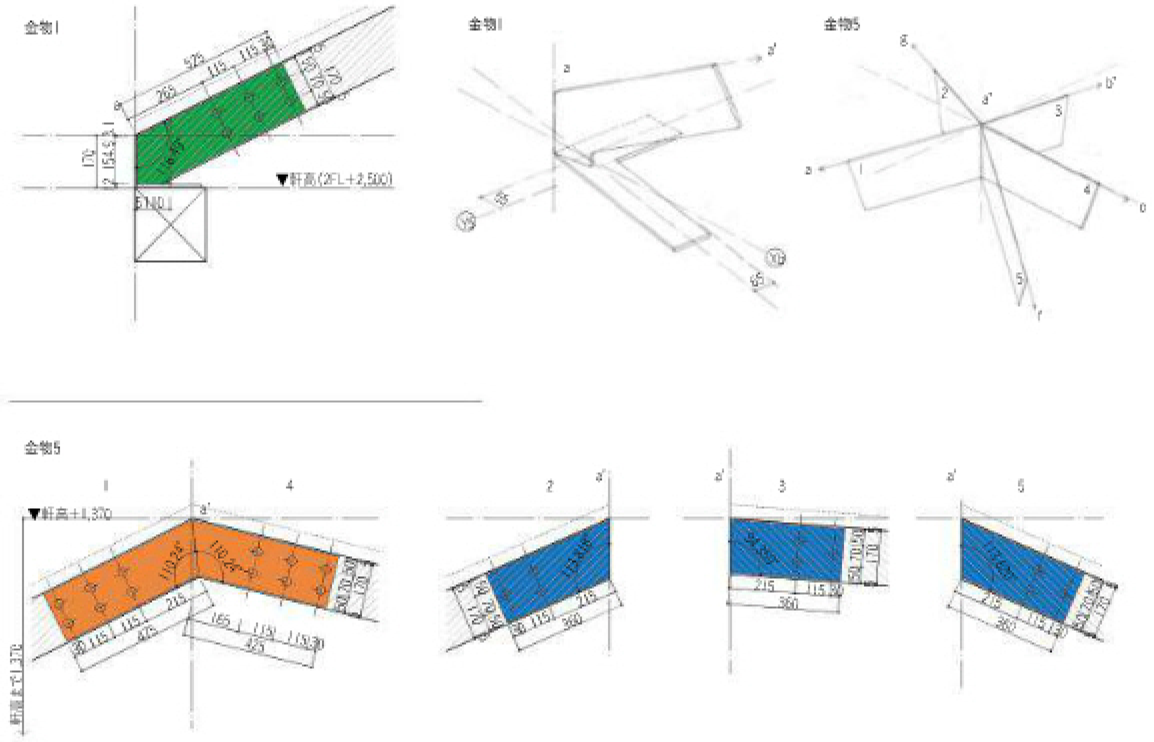
2階平面図



1階平面図　縮尺1：100

リビング1は北側の庭に対し開口を設置。

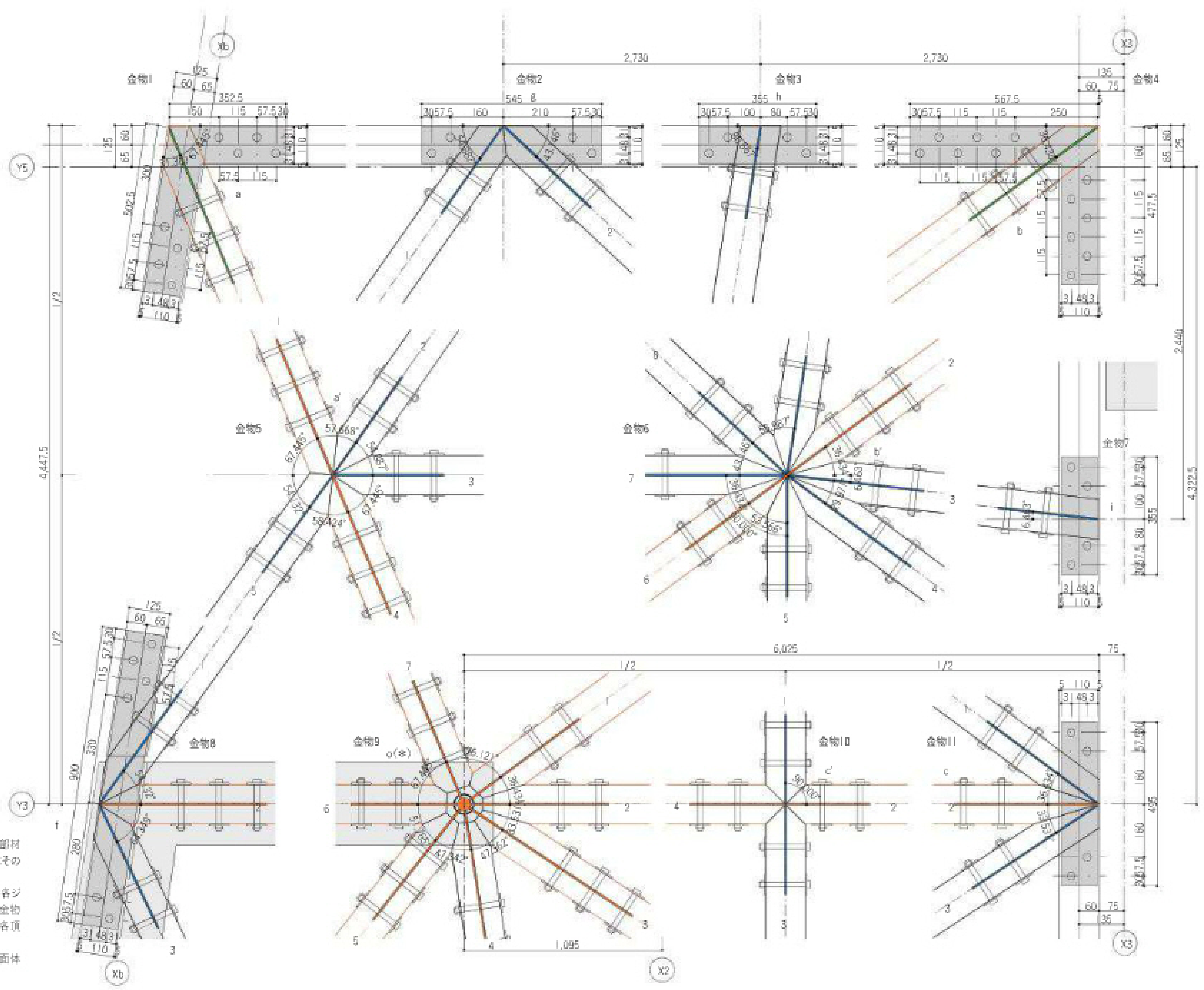




接合部金物詳細図（図は上から金物1、金物5、右上のスケッチは各金物の見取り図） 縮尺 1：30

建築の意図と構造

複合的ライフスタイルのための都市建築なので、かたちは東京的郊外住宅地に馴染ませ、コンクリートと木のハイブリット建築とすることで、ものとしての堅固さと柔らかさを与え、インテリアに光と風を自由に取り入れて別荘にふさわしい空間の室を獲得することを意図した。構造システムの設計は、このポリシーを実現する建築手法として重要な役割を担い演じた。堅固な下層部から上昇するにつれて軽快で自然な環境が現れる構成に対して、エンジニアから水平力を負担する鉄筋コンクリート造の3つの耐震コアに軽い木造を絡ませる構造システムが提案された。屋根は、紙をくしゃくしゃにして四角い建築を覆うイメージで不定形なかたちとして郊外住宅地の広い空に向かうのがふさわしい。構造のコンセプトモデルで検討を重ね、かたちとモデュールを決定し、耐震コアのひとつの頂部から多方向に鋼のジョイントと木の線材で組み立てた3ヒンジ架構をかけ渡し、さらにジョイント部に線材を架けて三角形分割された多面体を構成していった。意匠、構造、構法のスタディを、同時に、一貫して、コンピュータで作図解析する3D設計がこの屋根の建造を可能にしている。　（宇野）

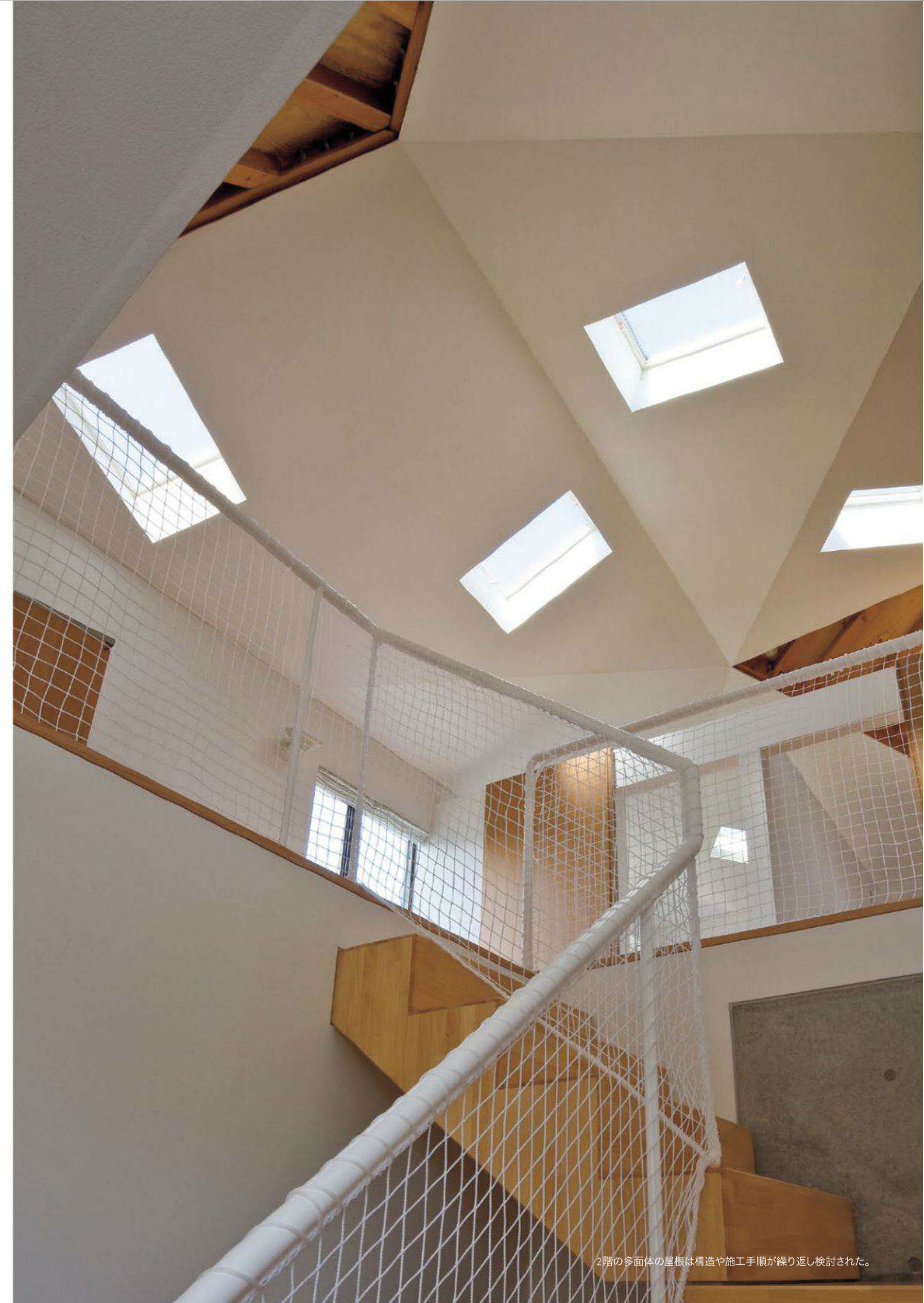


PL-6
PL-4.5
PL-9
B.PL-12

ベースプレートおよびジョイント部材からなる金物は全17種類。図はその11種類の配置を示す。
各金物の線材ごとに付く番号は各ジョイント部材に対応し（接合部金物詳細図参照）、アルファベットは各頂点を表す。
オレンジ色の線材が主要な多面体を構成する3ヒンジ架構。

＊階段脇の構造壁につながる丸鋼φ＝40mmの鉄骨柱が3ヒンジ架構の中心点(O)となる。

屋根面接合部詳細図　縮尺 1：20



2階の多面体の屋根は構造や施工手順が繰り返し検討された。



2階は高さ2,300mmの間仕切り壁で仕切られた個室の上に、多面体シェルの屋根が架かる。写真中央の白い鋼管の先端から3ヒンジの架構が6方向に架けられた。

煙突状のコンクリート耐震コアによる自由な木造形態

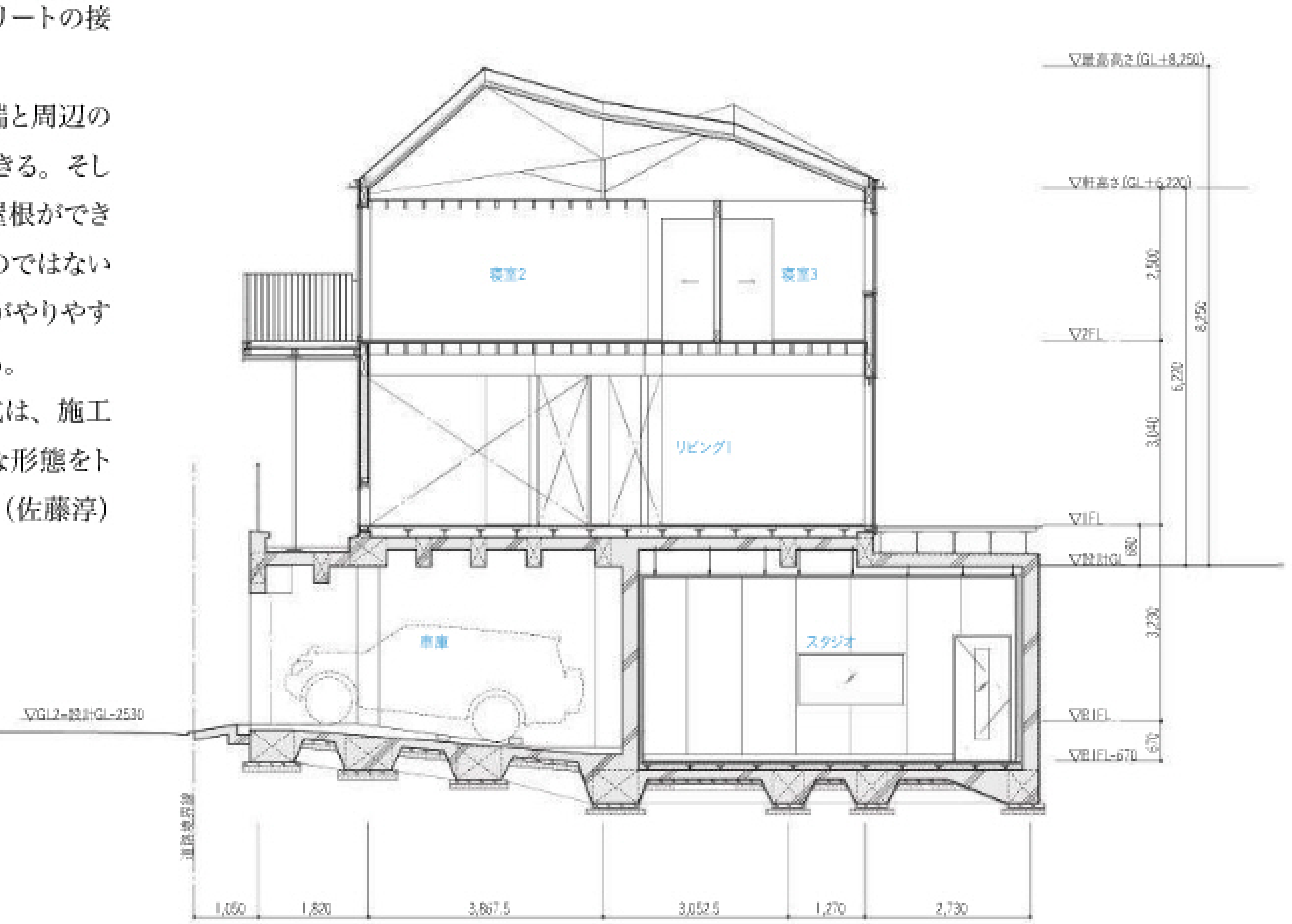
わずかに設けられたコンクリートの耐震コアによって、木造軸組を安定させる。木造部分が軽量なため、その地震力を負担する耐震コアを剛強なコンクリート造にすると、2層分の高さの煙突状のものが3本程度あれば足りる。木造の柱はこの耐震コアに梁でつなげば安定して立てられる。木同士、木とコンクリートの接合は共にヒンジ接合でよい。

こうして木造骨組が安定すれば、コンクリートコアの端と周辺の木造柱をつなぐ3ヒンジ架構も安定して載せることができる。そして放射状に並ぶ3ヒンジをつないでいくと、多面体の屋根ができ上がる。この形状なら三角形ごとのパネル形式がよいのではないかと大工に相談したところ、それなら軸組で刻んだ方がやりやすいという。刻みに対する大工の自信にこちらも嬉しくなる。

コンクリートコアを頼りに次々と安定させていく架構形式は、施工手順とも通ずるものとなっており、床、屋根共に自由な形態をトンと載せたような様子が現れている。　　　　　（佐藤淳）



南面道路と庭面の高低差は2,600mm。テラスはϕ=48.6mmの鉄柱で支持。



断面図　縮尺 1：150

ヨシダセカンドハウス

所在地／東京都杉並区
主要用途／個人スタジオ＋セカンドハウス
家族構成／5人

設計

フェイズアソシエイツ（設計監理）
　担当／宇野求　青木豊実　竹内晶洋（総括＋意匠設計監理）
構造　佐藤淳構造設計事務所
　担当／佐藤淳　三原悠子（構造設計監理）

施工

建築　渡邊技建
　担当／篠田千春　児玉賢二　市毛あすか
基礎・コンクリート工事　オオスミ工建
　担当／大庭剛之
プレカット工事　高山木材　担当／上田篤史
木工事　長谷川工務店
　担当／長谷川智之　山田貴士
屋根・板金工事　二階堂板金　担当／二階堂勲
鉄骨工事　芳永製作所　担当／芳永兼勝
木製建具工事　中原木工所
　担当／中原文雄　中原智宏
金属建具・硝子工事　松島屋硝子店
　担当／船田剣
塗装工事　スヤマ塗装　担当／陶山康　陶山健
内装工事　高島　担当／平案山良文
給排水設備工事　大応プラミング
　担当／宮田真　深井博文
電気・換気設備工事　中村電気商会
　担当／中村純夫
植栽工事　山渓　担当／永山李一
スタジオ音響設備工事　TIGER K PROJECT
　担当／川名昭
スタジオ鋼製建具工事　日本板硝子環境アメニティ　担当／長谷川博一

構造・構法

主体構造・構法　鉄筋コンクリート造　木造
基礎　べた基礎

規模

階数　地下1階　地上2階
軒高 6,920mm　最高の高さ 8,950mm
敷地面積　437.65m^2
建築面積　98.02m^2
　（建蔽率22.39% 許容50%）
延床面積　291.89m^2
　（容積率38.18% 許容100%）
　地階　143.05m^2　1階　78.02m^2
　2階　70.82m^2

工程

設計期間　2009年4月～2010年2月
工事期間　2010年4月～2011年2月

敷地条件

地域地区　第一種低層住居専用地域
　準防火地域　第一種高度地区
道路幅員　南5.45m　駐車台数2台

外部仕上げ

屋根／フッ素樹脂塗装ガルバリウム鋼板
　t=0.4mm 平葺き
外壁／フッ素樹脂塗装ガルバリウム鋼板
　t=0.4mm 角波
　コンクリート打放しの上、撥水材
開口部／アルミサッシ（TOSTEM）　スチールドア
テラスデッキ／イペ材 t=20mm

内部仕上げ

キッチン

床／フレンチパイン無垢板 t=21mm
壁／ PB t=12.5mm　ビニルクロス
天井／ PB t=9.5mm　ビニルクロス

スタジオ

床／フレンチパイン無垢板 t=21mm
壁・天井／グラスウール化粧吸音板 t=25mm
建築金物／スチール製防音ドア

リビング1

床／フレンチパイン無垢板 t=21mm
壁／ PB t=12.5mm　ビニルクロス
天井／構造用合板 t=12mm　ベイマツ根太現し
　OS（クリア）

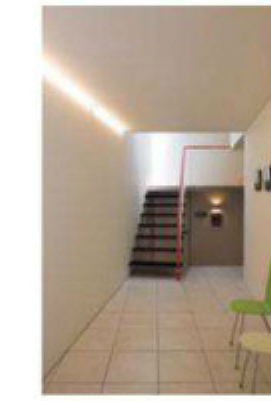
寝室1　寝室2　寝室3

床／フレンチパイン無垢板t=21mm
壁／ PB t=12.5mm　ビニルクロス
天井／ラワン合板t=9mm OS（クリア）

設備システム

空調　冷暖房方式／ヒートポンプエアコン
　換気方式／第三種換気（スタジオ：ロスナイ）
給排水　給水方式／上水道直結
　排水方式／下水道放流
給湯　給湯方式／自然冷媒ヒートポンプ給湯器

撮影／新建築社写真部





左：地階玄関1から見る。下に降りるとスタジオがある。
右：母屋側からつながる玄関3。

北立面には内部環境に合わせた開口がそのまま現れる。



吉川の家

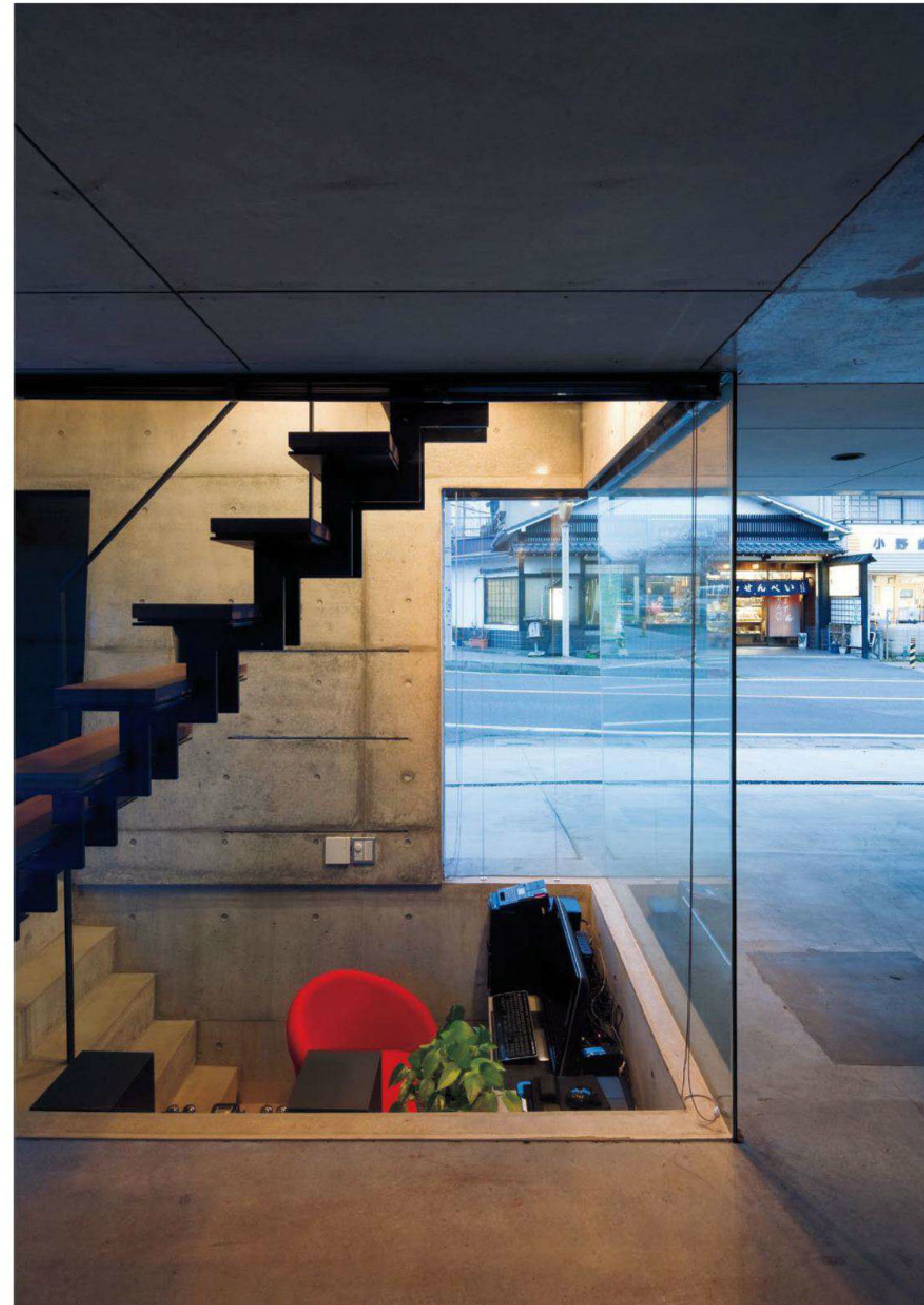
House in Yoshikawa

埼玉県吉川市

庄司寛建築設計事務所
Hiroshi Shoji Architect & Associates



西側外観の夕景。3枚のRC傾斜壁を立ち上げ、居住空間を2階にもち上げている。また西側と北側にスラブを跳ね出し、木架構で覆われた居住空間を確保すると共に、西側を全面開口として前面道路沿いの桜並木の景色を取り込む。1階はエントランスとホール、車3台を駐められるピロティで構成。

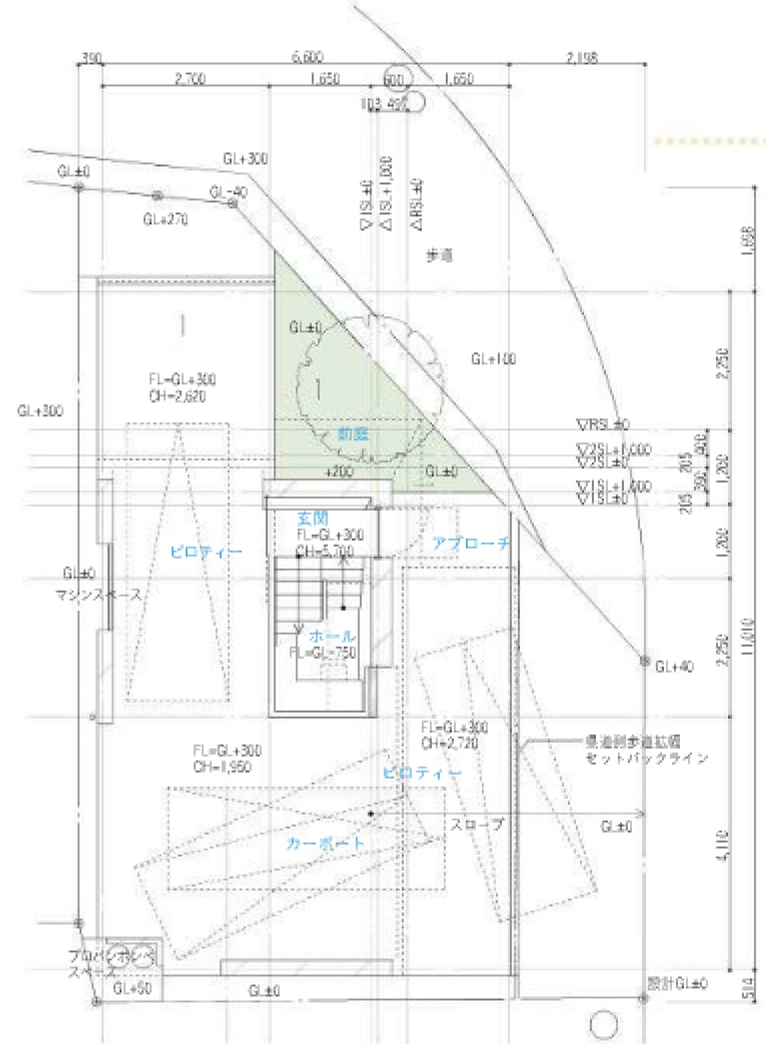


1階ホールはGLより750mm堀り込まれたレベルにあり、椅子に座ると目線の高さにピロティに駐車された車が見える。

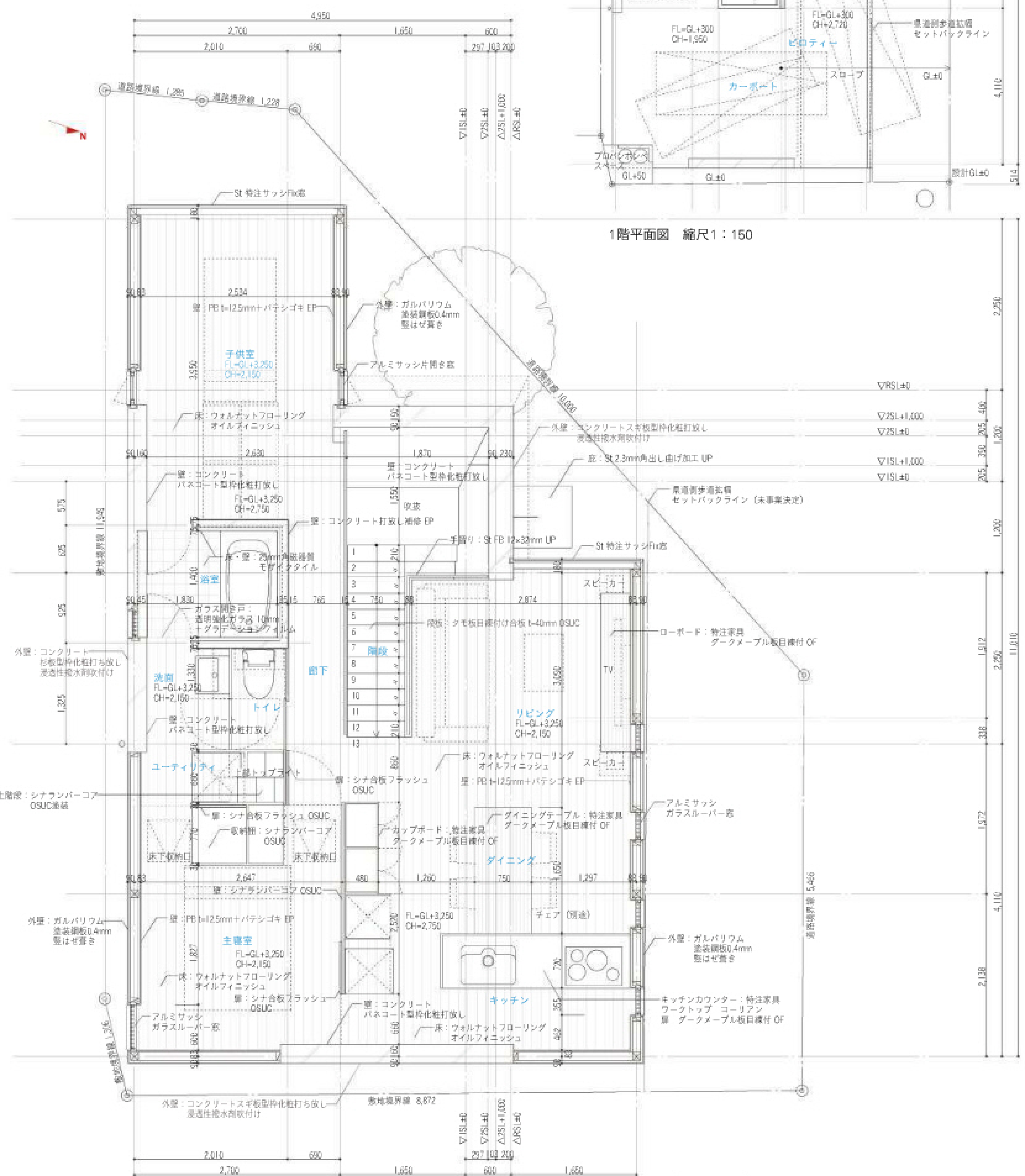




左：2階は回遊プランで洗面から子供室が浴室を介してつながる。／右：廊下からリビングを見る。



1階平面図　縮尺1：150



2階平面図　縮尺1：75

敷地に呼応する佇まい

大交差点に建つ

郊外に建つ若い夫婦のための住宅である。計画地は埼玉県吉川駅から徒歩15分ほどの場所にあり、将来の歩道セットバック部分を除くと24坪ほどの狭小敷地で、幅員22mの市道と幅員11mの県道が交わる大きな交差点の南東角に位置していた。周囲は郊外型の店舗などが　開するエリアということもあり、個人の住宅を計画する敷地としてはかなり特異なコンテクストをもつ場所であると感じられた。

西側市道の対岸には吉川市を5km近くにわたって南北に貫くサクラの並木道が存在し、敷地からは道路を挟んでその木々の緑を望むことができる。建主は夫婦＋子供の3人家族で、大きな交差点に面するロケーションがもたらす喧騒や外からの視線に直面するこの土地をあえて取得したうえで、そのコンテクストに呼応するような独自性の高い住宅に住むことを希望していた。

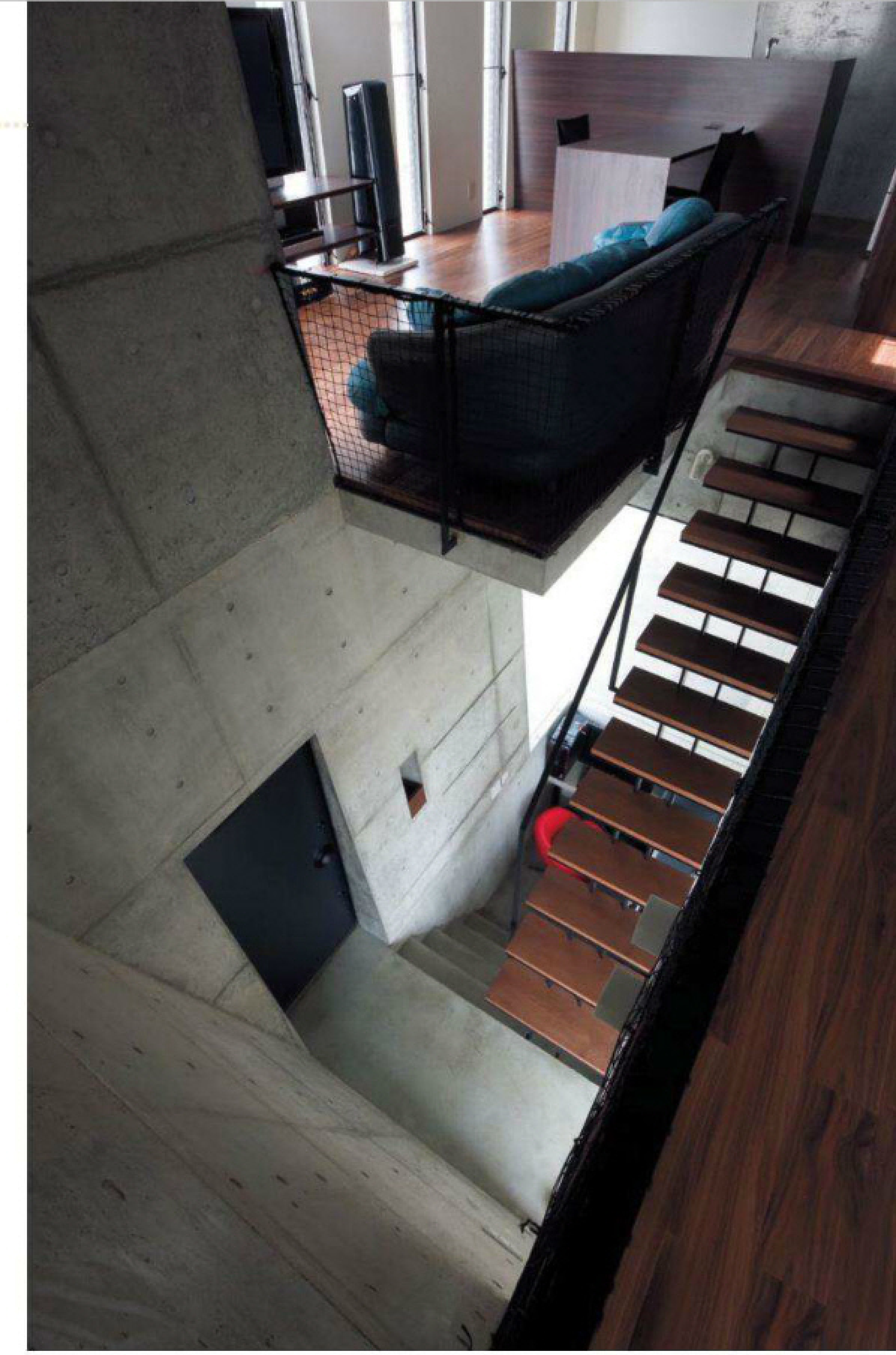
混構造が支えるスカルプチュアルな造形

本計画では、圧倒的なスケールをもつ大規模交差点と対峙することができるような、存在感のあるスカルプチュアルな造形の建築を提案したいと考えた。

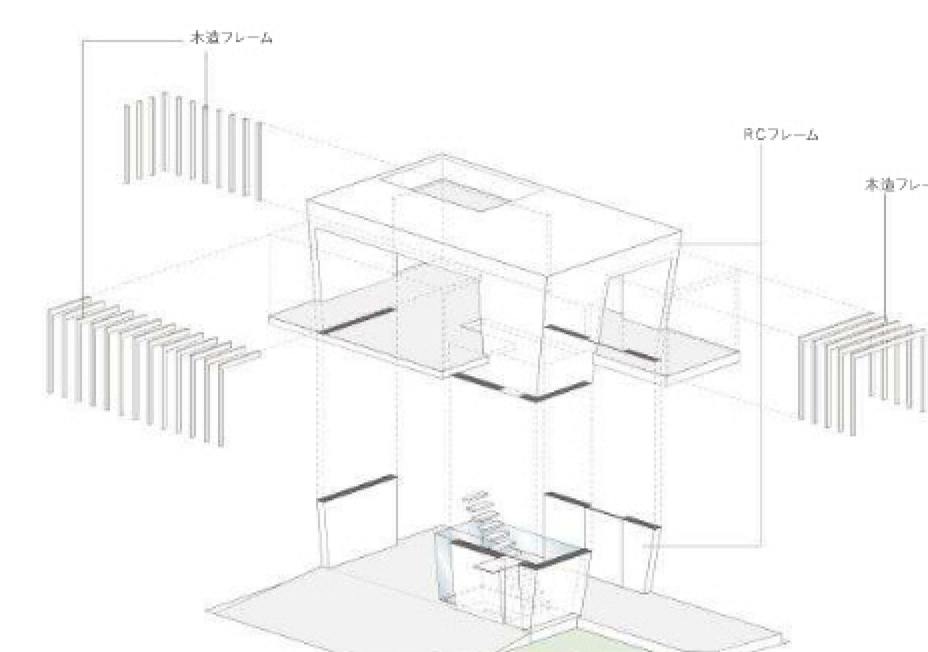
クライアントの要望である3台分の駐車場の確保という前提条件から、1階機能はエントランスとホールのみとし、その他のヴォリュームは外部に開放された駐車場のためのピロティ空間とした。この住宅における主な居住空間はすべて2階にプログラムしており、斜めに迫り上がる象徴的な3本の足（RC傾斜壁）によって2階へもち上げる構造形式を採用。そのフレーミングがこの住宅の建築造形を決定付ける大きな要素となっている。2階傾斜壁からは西側と北側へスラブを跳ね出させ、そのキャンティヴォリュームを木造の架構で包み込むことで必要な居室空間を確保すると共に、この住宅の建築造形を補完させている。

また主空間における各居室を構成する壁を外周壁から切り離し、回遊できる平面構成とした。動線の連続性をつくり出すことで、狭小スペースにおける空間的な広がりを表現した。開口部は西にオープン、北にクローズのイメージで、西方向に視覚的方向性をもたせ、サクラ並木への眺望を確保している。

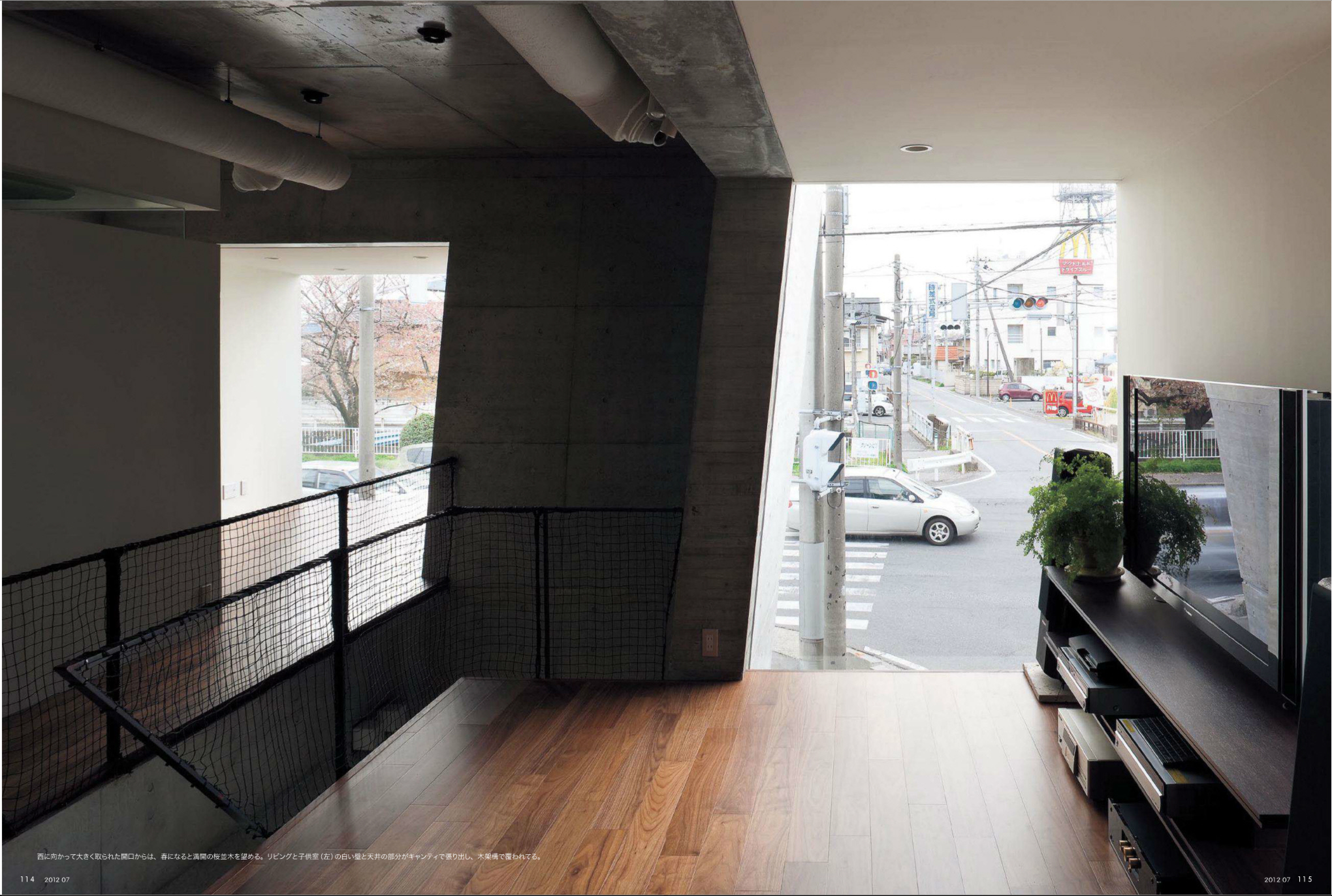
この住宅では、RCと木造による象徴的な構造フレームを採用し、そのスカルプチュアルな造形を実現させると共に、狭小住空間における快適性を追求した。　　　　（庄司寛）



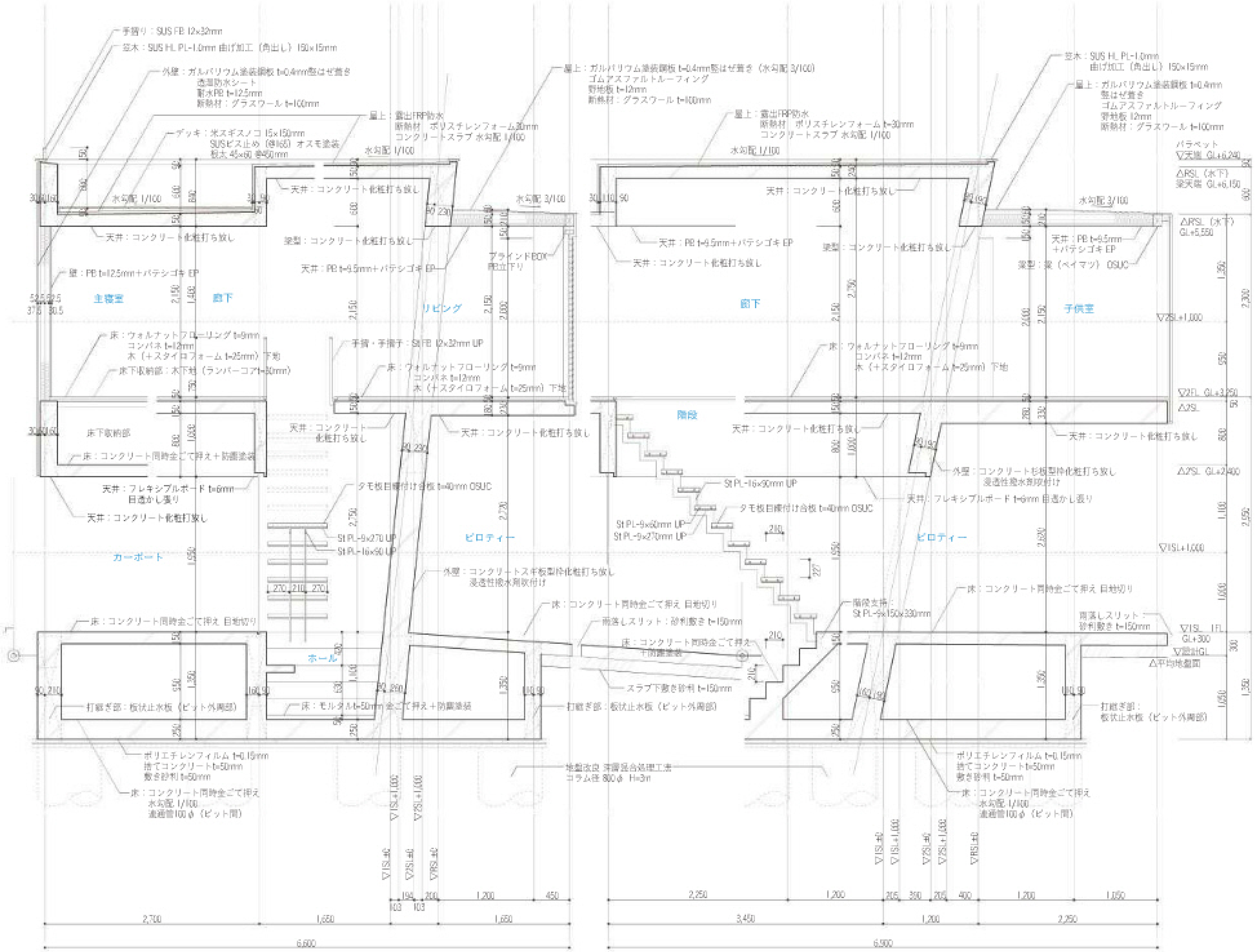
1階エントランスとホールを見下ろす。左手の2面の壁が傾斜して立ち上がる構造壁。



RCフレームと木架構の構成を表すアクソメ



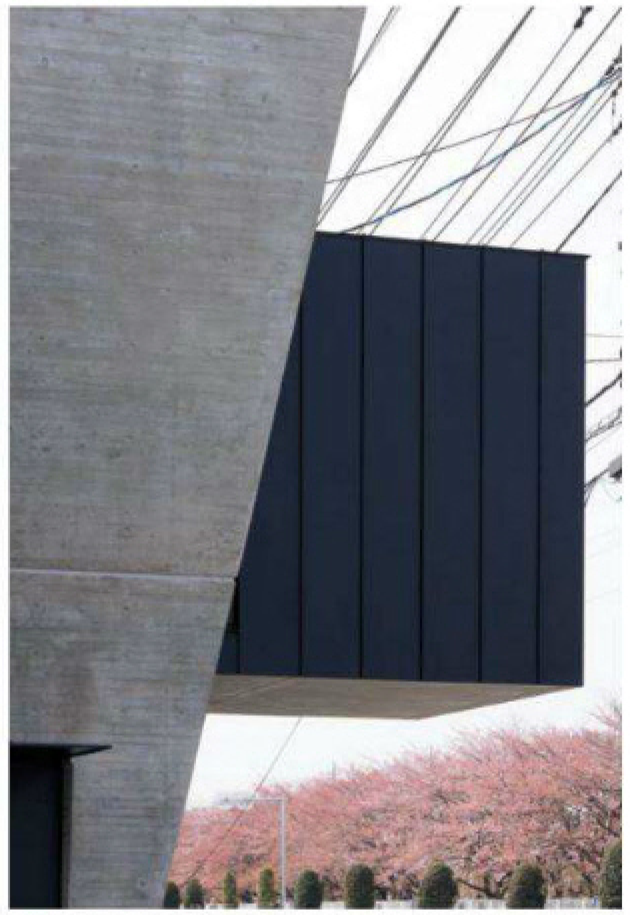
西に向かって大きく取られた開口からは、春になると満開の桜並木を望める。リビングと子供室（左）の白い壁と天井の部分がキャンティで張り出し、木架構で覆われてる。



断面詳細図　縮尺1：75



1階エントランスとホール。交通量の多い県道と市道の交差点に面する立地環境が見て取れる。



ガルバリウムで覆われた部分がRC傾斜壁からもち出した子供室。背景には市道沿いの桜並木。

吉川の家

所在地／埼玉県吉川市
主要用途／専用住宅
家族構成／夫婦＋子供1人

設計

庄司寛建築設計事務所　担当／庄司寛
構造　高橋構造設計事務所　担当／高橋秀成
設備　ピロティ

施工

辰建　担当／菅谷維剛　宮島広
電気　岡本電気　担当／土屋正和　佐藤昌英
給排水衛生　サン衛生設備　担当／松丸文男
空調　EBS　担当／武山恒義
ガス　河原実業　担当／加谷秀春
型枠　柳田工務店　担当／柳田拓美
鉄筋　荒井鉄筋　担当／荒井茂
木工　直営　担当／阿相新一
左官　左京左官工業　担当／左京政光
板金　高橋板金　担当／高橋勝義
金属建具　トスコ　担当／齊藤正雄
木製建具　木建工業　担当／遠藤茂
ガラス　川島ガラス　担当／立入幸文
鉄骨　十月メタルワークス　担当／吉澤十月
塗装　匠建装　担当／伏見勝己
撥水剤　パークス環境　担当／槇田参二
キッチン・特注家具　SSI
　担当／宇野雄司　長谷川広子
ブラインド　インテコ　担当／町田了一
柱状改良　正栄工業　担当／真仁田宣英
地盤評価　シマ地質　担当／嶋以樹

構造・構法

主体構造・構法　鉄筋コンクリート造＋木造
基礎　柱状改良杭（H=3m×30本）

規模

階数　地上2階
軒高 6,150mm　最高の高さ 6,240mm
敷地面積　94.03m²
建築面積　58.63m²
　（建蔽率62.35%　許容70%）
延床面積　111.83 m² ／ 89.46m²
　（容積率95.14% 許容200%）
　1階　57.00m²　2階　54.83m²

工程

設計期間　2010年9月〜2011年4月
工事期間　2011年6月〜2012年1月

敷地条件

地域地区　第二種住居地域
道路幅員　西22.0m　北11.0m
駐車台数　3台（最大5台）

外部仕上げ

屋根／シート防水外断熱工法
　ガルバリウム塗装鋼板 t=0.4mm 竪はぜ葺き
外壁／コンクリートスギ板型枠化粧打放し＋
　浸透性撥水剤吹付け
　ガルバリウム塗装鋼板 t=0.4mm 竪はぜ葺き
開口部／スチールサッシ　ビル用アルミサッシ
　トップライト：アルミサッシ＋複層ガラス＋日射（UV）抑制フィルム
外構／土間コンクリート同時金ごて押え
　那智黒砂利敷き

内部仕上げ

居室

床／ウォルナットフローリング オイルフィニッシュ　コンクリート同時金ごて押え＋防塵塗装
壁・天井／コンクリート化粧打放し
　PB t=12.5mm パテシゴキ EP
　シナランバーコア t=30mm OSUC
家具／特注 ダークメープル板目練付OF
金物／ HORI　KAWAJUN　BEST　ユニオン
　スガツネ
照明／ヤマギワ　コイズミ照明　パナソニック
　Keck

リビング　ダイニング　キッチン

床／ウォルナットフローリング t=9mm オイルフィニッシュ
壁・天井／コンクリート化粧打放し　PB
　t=12.5mm パテシゴキ EP
キッチン家具／人造大理石カウンター＋ダークメープル板目扉
厨房機器／
　コンロ（IH）／ GAGGENAU CI481-112
　食洗器／ Miele G1534Sci
　レンジフード／ステンレス特注制作
　シンク／ステンレス特注制作
　シンク水栓／ GROHE 32168

浴室

床・壁／磁器質25mm角モザイクタイル
天井／フレキシブルボード＋耐水光沢ペイント
バスタブ／ NOVA NVBA167ARA2V
シャワー・バス水栓／ FANTANI Riviera
　AGN73-2715

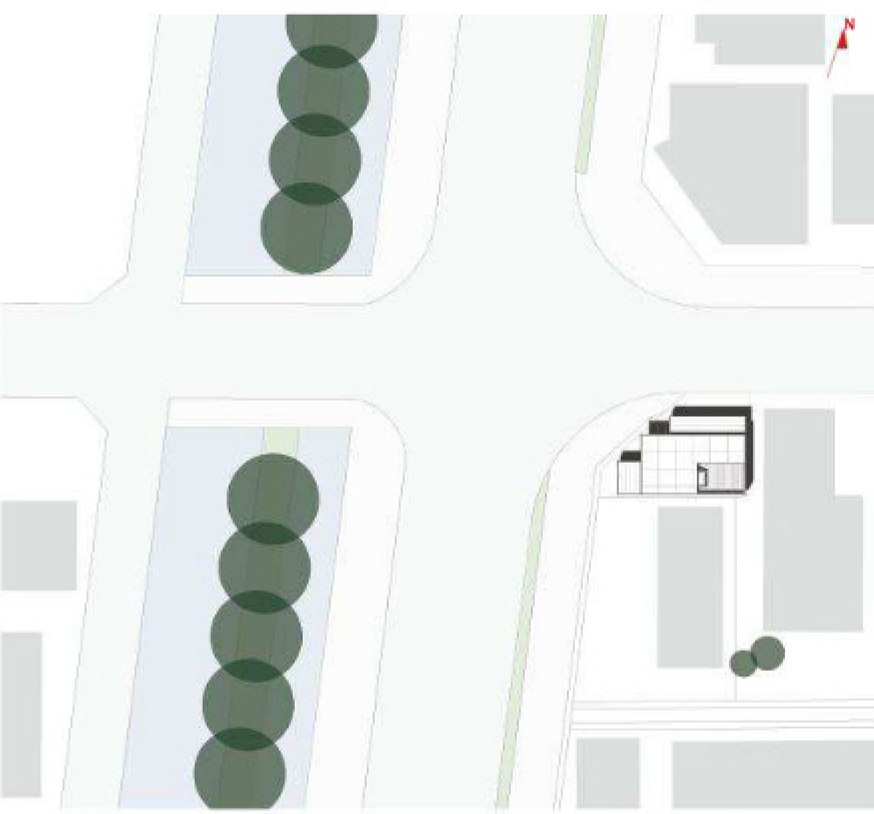
洗面　トイレ

床／ウォルナットフローリング t=9mm オイルフィニッシュ
壁／シナランバーコア t=30mm OSUC
天井／ PB t=9.5mmパテシゴキ EP
洗面器・便器／ INAX GL-A555 INAX
　D-S425S

設備システム

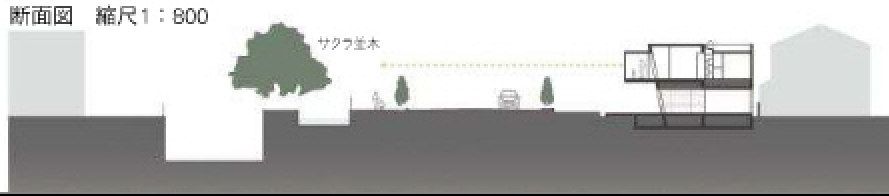
空調　冷暖房方式／空気熱源ヒートポンプ
　エアコン（ダイキン）　電気パネル式
　床暖房
　換気方式／第三種換気方式
給排水　給水方式／上水道直結給水
　排水方式／合流式公共下水道放流
給湯　給湯方式／プロパンガス給湯機

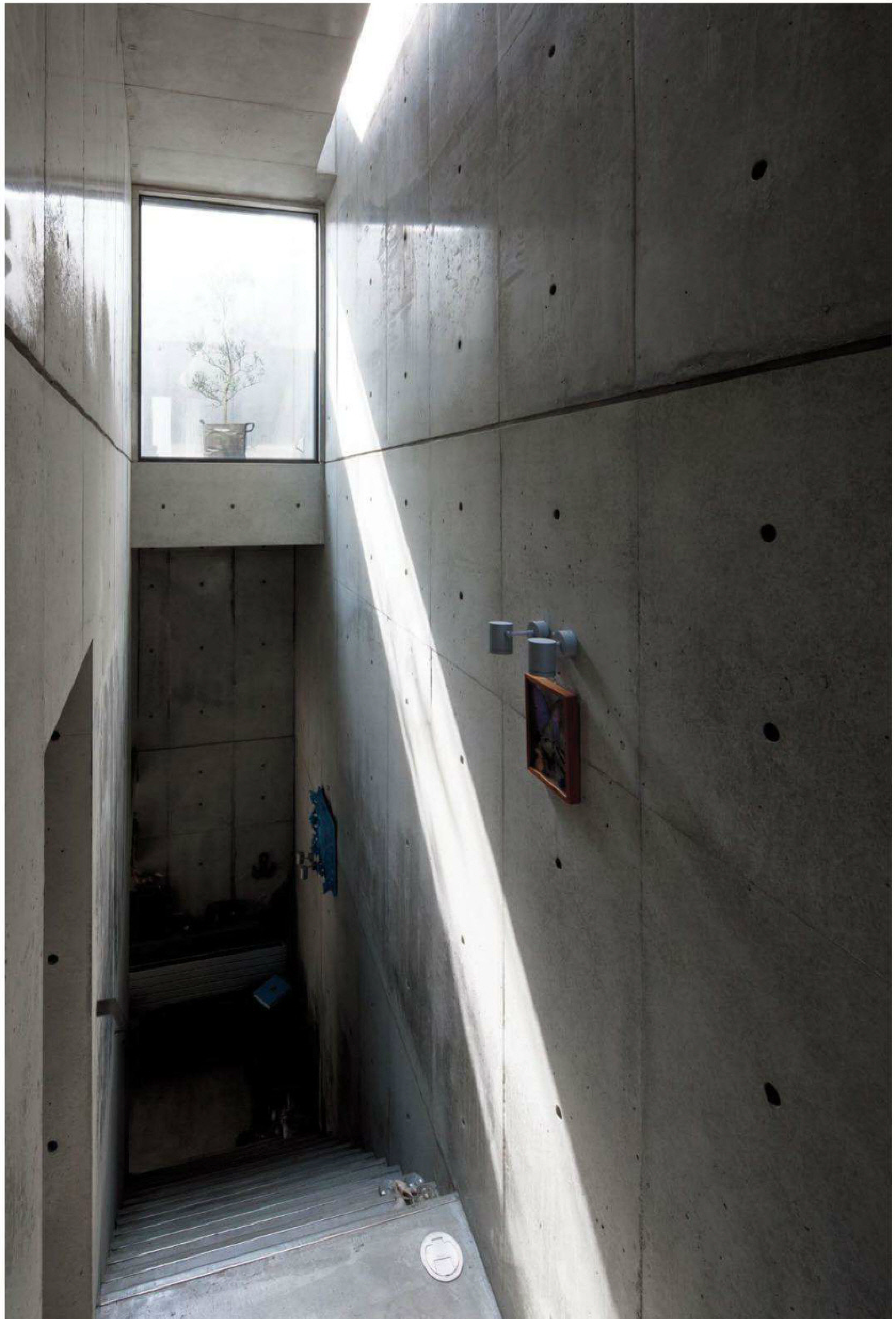
撮影／新建築社写真部



配置図　縮尺1：800

断面図　縮尺1：800





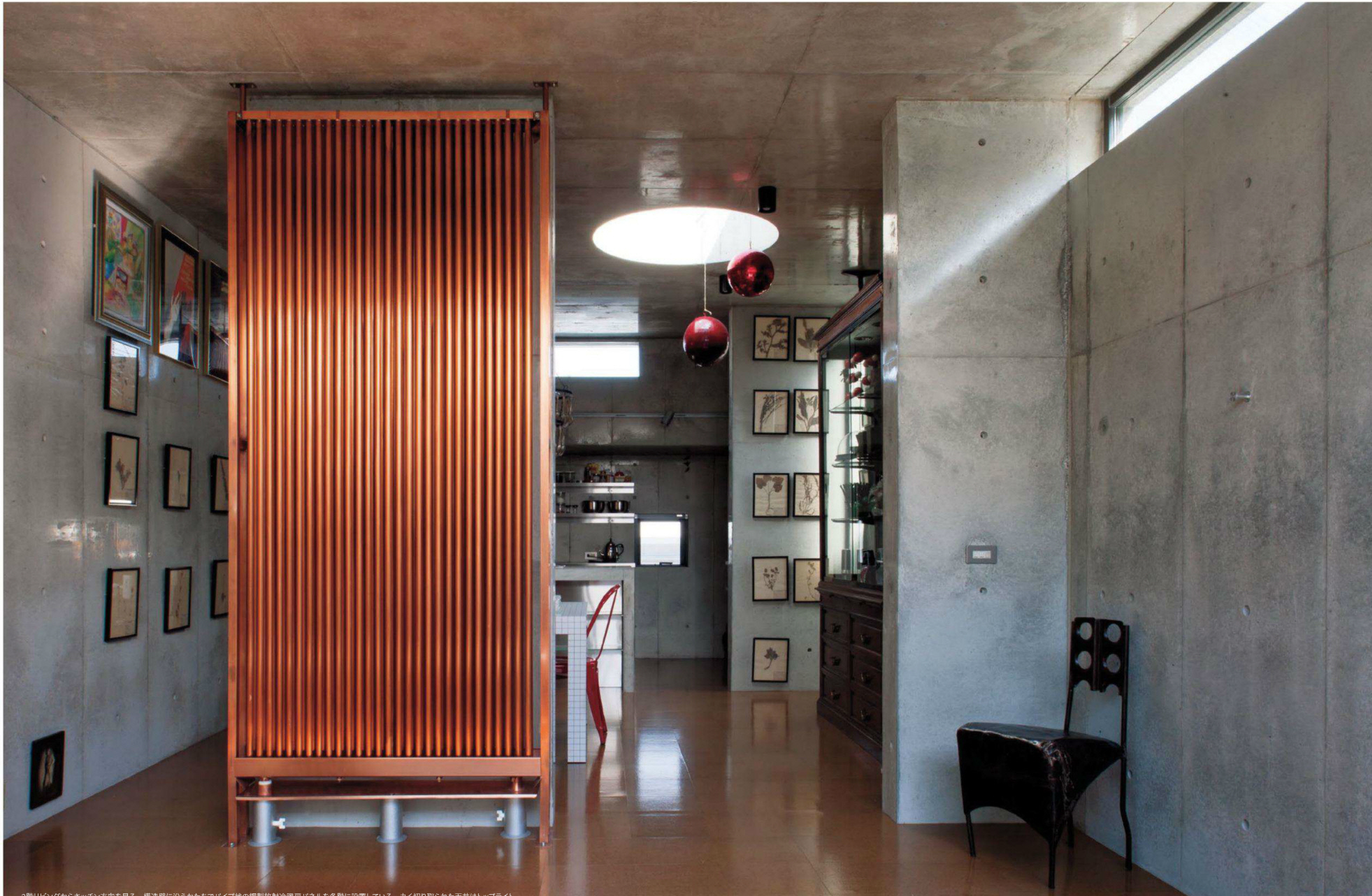
3階踊り場から階段室を見る。テラスからの光が落ちる。左に2階居室への扉。／右頁：3層吹抜けの階段室見上げ。スリットライトから光が落ち、幻想的な空間となる。
敷地形状に合わせて上階へいくほど幅が細くなり、奥行を感じさせるつくりとなっている。天井高さは1FLから7,100mm。



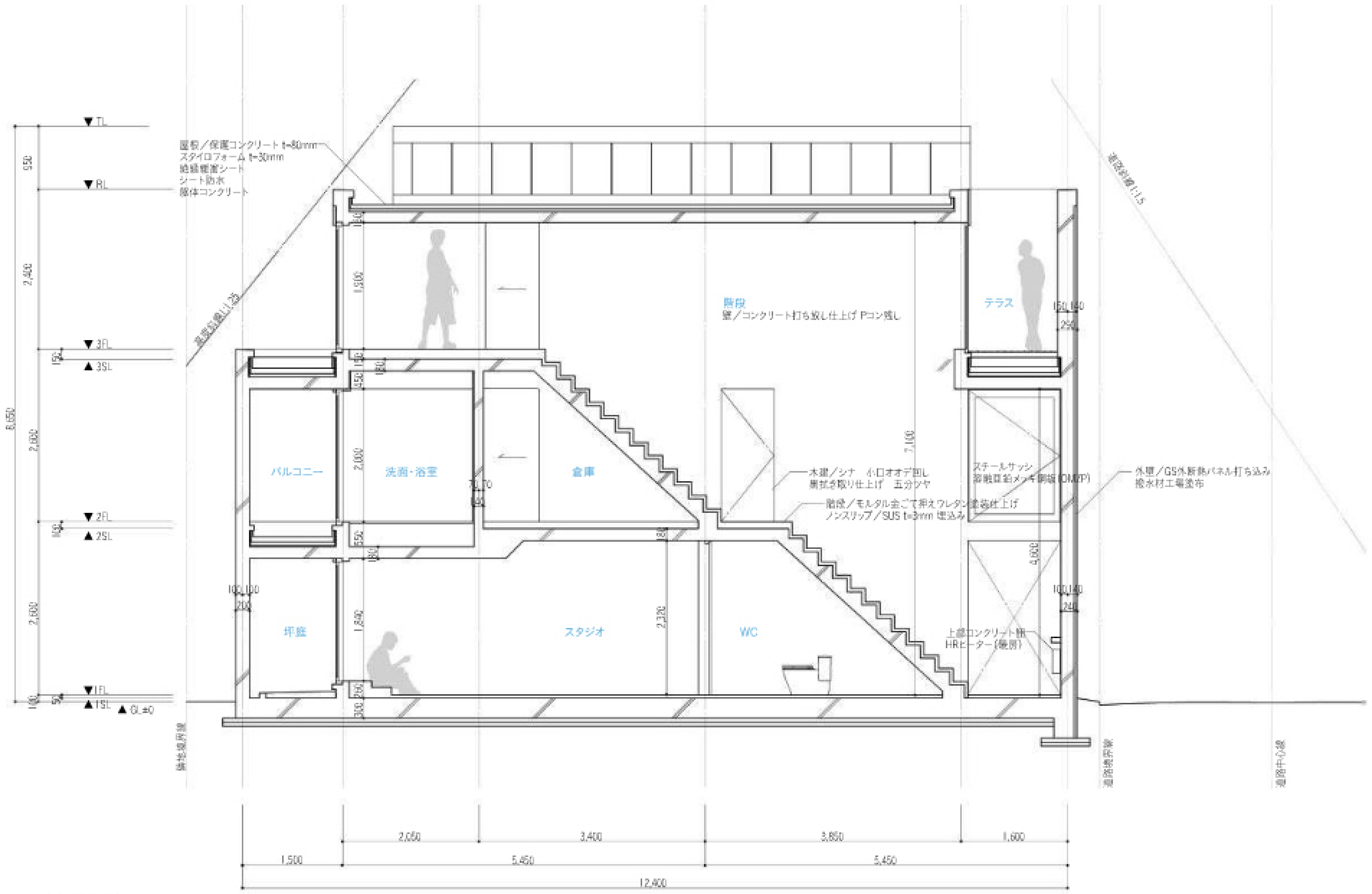
甲州街道の家

HOUSE on Koshu Road
東京都

エトルデザイン
Etre design



3階リビングからキッチン方向を見る。構造壁に沿うかたちでパイプ状の銅製放射冷暖房パネルを各階に設置している。丸く切り取られた天井はトップライト。



断面図　縮尺1：100

身体のエネルギーと空間のちからを呼応させる

身体を使う表現者である建主は、身体に強いエネルギーをたたえていた。その強さを受け止め、安らぎをもたらし、新たに覚醒させる住まいをつくりたいと考えた。

コンクリートの質感が好きとの言葉に、外断熱と輻射式冷暖房システムを勧めた。外断熱を施したコンクリートにより、夏は洞窟のようにしんと冷え、冬は太陽の陽を受けた石のように暖まる。やさしい快適さに保たれた空気は、身体のケアを気遣う建主には最適な環境である。

また、たくさんの骨董を集めてものや素材をディスプレイすることが日々の営みとなっており、空間を部屋単位で区切るのではなく、設えて変化させていきたいという。住まいのそこかしこが「舞台」となり得るような、シーンの重なりを考えて空間を構成した。

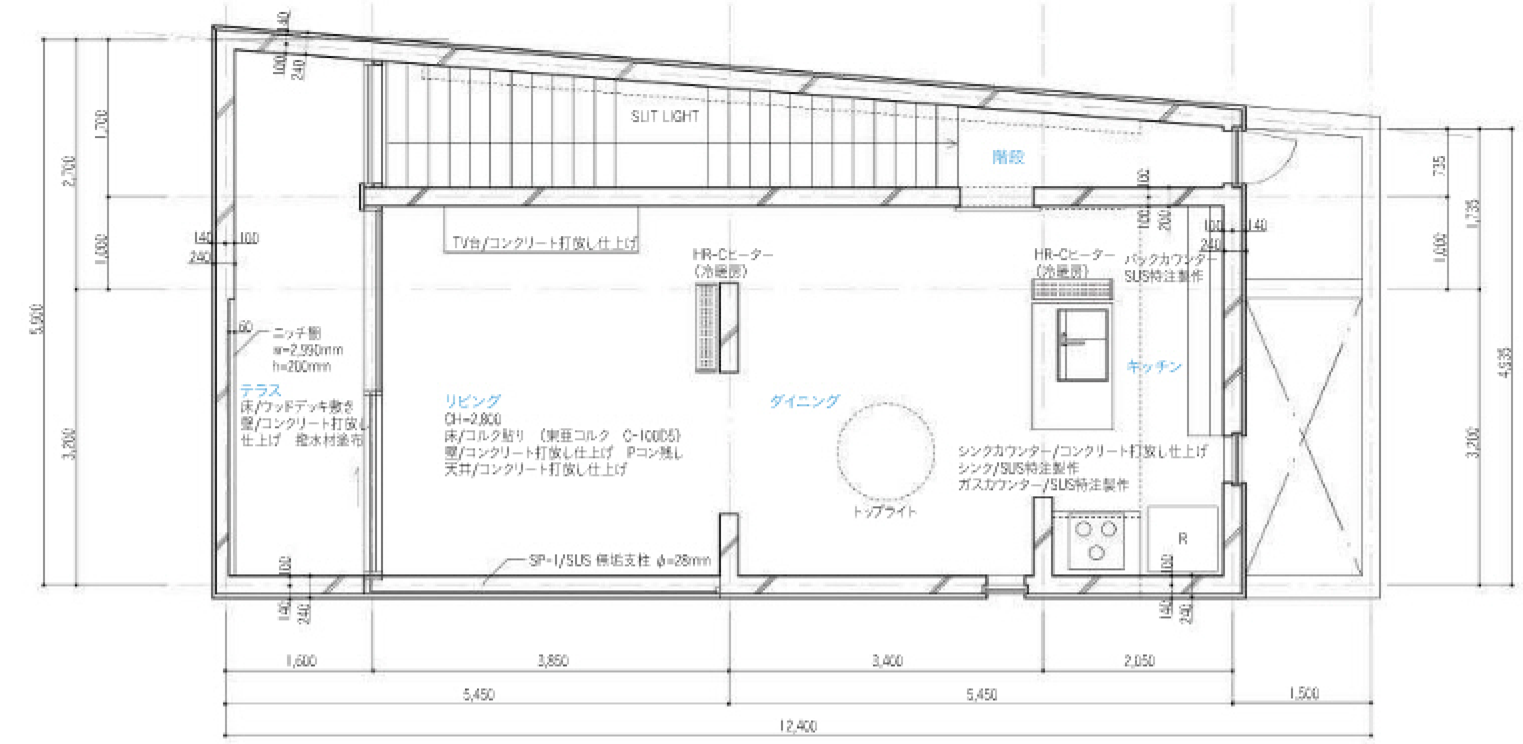
1階はエントランスと、独立して多目的にも使えるスタジオを設け、壁に囲まれた坪庭から地下室めいた闇を取り入れている。2階では、坪庭からの日射しと植栽の緑がもたらすコントラストある陰影の中、寝室で身体を休める。3階は天井高く光に溢れ、エネルギーに満たされる空間となる。南のバルコニーの大きな開口、円形のトップライトや天井を照らすハイサイドライトからは、空間を彩るさまざまな光が行き来する。光と影を受け止める素材はコンクリート、鉄、銅、コルク、木といった、素地でシンプルなものを選んだ。これらを結ぶ動線となる、3層吹き抜けた大階段はメインの「舞台」である。敷地に沿って上階にいくほど細くなり、騙し絵のような奥行をもつ。空に向かって切られた細いスリットライトと南の大きな開口から、外界の呼吸がダイレクトに侵入し、刻々と変化する自然と「舞台」が呼応する。陽射し、月灯り、闇、風、雨、時に雪。

都市にあって、太陽や月、宇宙の恵みを建築の中に招き入れ、空間をエネルギーで満たす。その空間に、身体のエネルギーと外界から連れてくる物質たちの生命が反応し、変化し続ける営みと共に生きる住まいができ上がった。

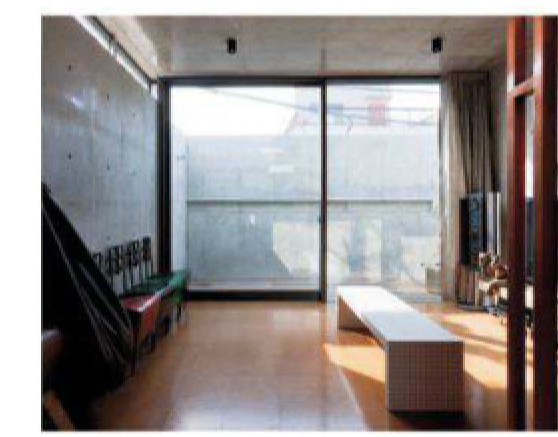
（高山正樹＋岡由実子）

キッチン脇から見る。コンクリート、銅、コルクタイル、木戸、ステンレスの水栓金物が独特の質感を生み出す。

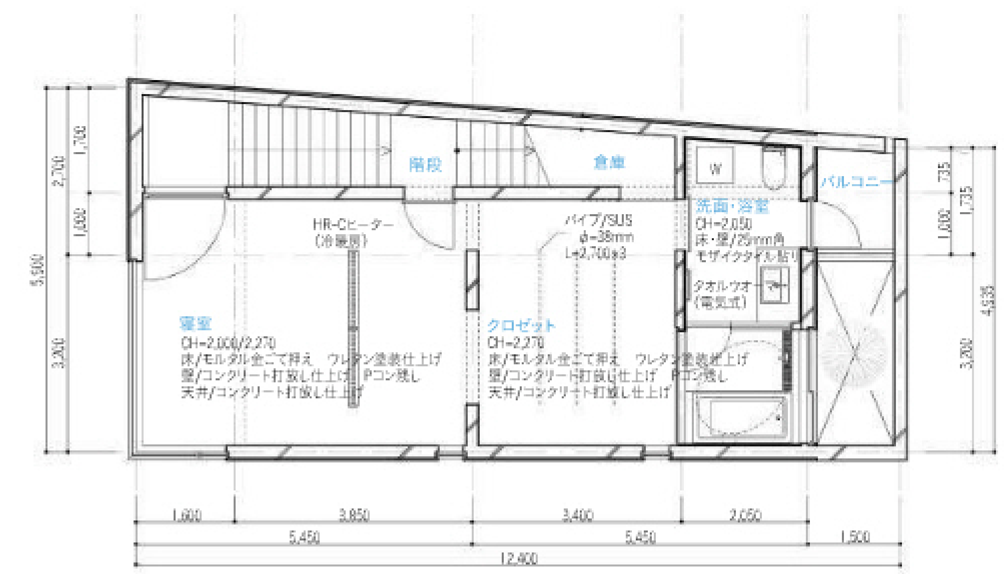




3階平面図　縮尺1：100



3階リビングを見る。壁面上部のスリット状の開口や、コンクリート壁の隙間から採光を得る。

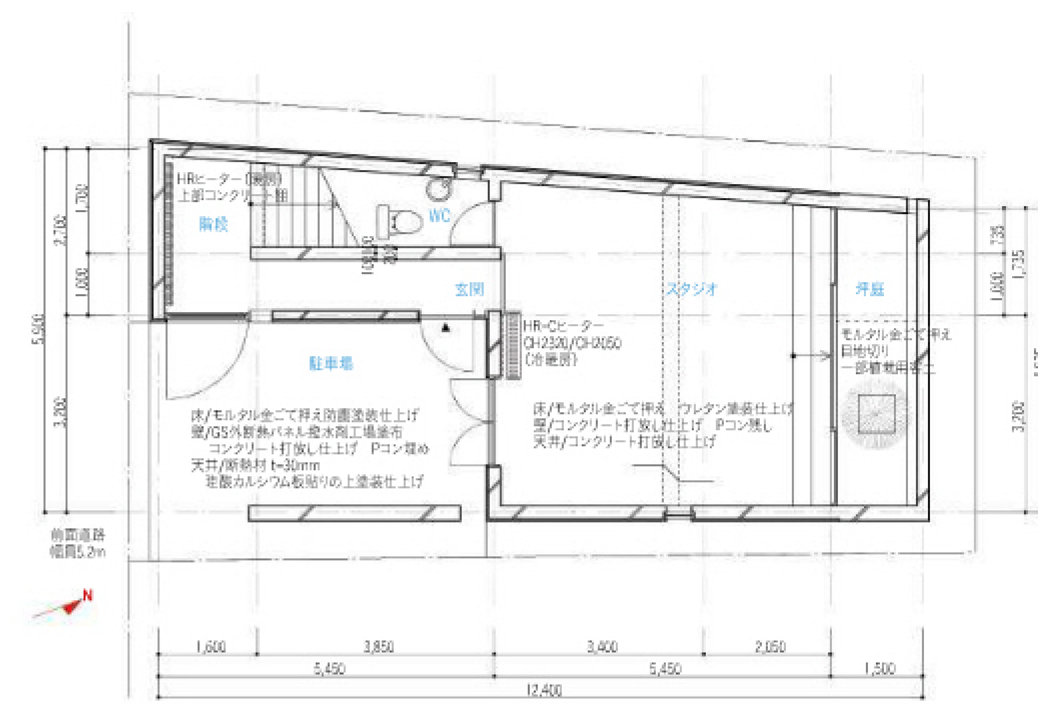


2階平面図

上：2階寝室。右側にクローゼット、浴室へと続く。
下：2階浴室。左側バルコニーからの光が入る。







1階平面図　縮尺1：150



南側外観。幅590mm、厚さ11mmGRCコンクリート板は、コンクリート打設時の型枠と外壁仕上げを兼ねる。GRCコンクリート板の内側に断熱材を付属させることで外断熱を実現。

甲州街道の家

所在地／東京都
主要用途／専用住宅
家族構成／2人

設計
エトルデザイン
　担当／高山正樹　岡由実子
構造　梅沢建築構造研究所
　担当／梅沢良三　梅澤恒介
設備　Comodo設備計画
　担当／山下直久
電気　EOS plus
　担当／遠藤和広　高橋翔

施工
辰　担当／中村勇行　奥村光寛
設備　共立設備　担当／高島領一
電気　初見電建　担当／小林勇
冷暖房　ピーエス暖房機
　担当／多賀谷聡　中沢剛久
外壁外断熱パネル　日本ハウス
　担当／岸宏史　富士忠行
鋼製建具　テクノ・ナミケン
　担当／小沼省英　福田憲二
造作家具　cosmo design
　担当／根田浩和
植栽　ナカハラガーデニング
　担当／中原俊昭

構造・構法
主体構造　鉄筋コンクリート造　壁式構造
基礎　布基礎

規模
階数　地上3階
軒高 8,210mm　最高の高さ 8,550mm
敷地面積　95.84m²
建築面積　62.37m²
　（建蔽率65.08% 許容80%）
延床面積　162.06m²
容積対象延床面積　144.62m²
　（車庫の緩和適用）
　（容積率150.89% 許容200%）
　1階　59.68m²　2階　57.22m²
　3階　45.16m²

工程
設計期間　2009年3月～2010年2月
工事期間　2010年3月～2010年10月

敷地条件
地域地区　近隣商業地域　準防火地域
　第二種高度地区　杉並区みどりの条例
道路幅員　西5.2m　　駐車台数1台

外部仕上げ
屋根／コンクリートスラブ
　シート防水の上モルタル金ごて押え
外壁／GS外断熱パネル打込み
　（撥水剤は工場塗布）　一部コンクリート打ち放し仕上げ　撥水剤塗布
開口部／スチールサッシ（溶融亜鉛メッキ OMZP）　アルミサッシ
外構／植栽　砕石敷き

内部仕上げ
キッチン　リビング　ダイニング
床／コルクタイル貼り
壁・天井／コンクリート打放し仕上げ
厨房機器／
　食洗器／Miele
　オーブン・ガスコンロ／東京ガス
　換気扇（シェード）／Arietta
　製作家具／ステンレスガスカウンター　コンクリートシンクカウンター　ステンレス棚
製作家具／TVコンクリートカウンター
カーテン／フラットカーテン（マナトレーディング）
洗面・浴室
床・壁／25mm角モザイクタイル貼り
　（名古屋モザイク）
天井／珪酸カルシウム板貼りの上塗装仕上げ
製作家具／洗面鏡収納
バスタブ・シャワー水栓金物／CERA TRADING
設備機器／ガス式浴室暖房乾燥機　PSタオルウオーマー
スタジオ　寝室　クローゼット
床／モルタル金ごて押え
壁・天井／コンクリート打放し仕上げ
階段
床／モルタル金ごて押え
　ノンスリップ SUS t=3mm 埋込み
壁・天井／コンクリート打放し仕上げ
手摺り／St FB加工 塗装仕上げ
全室共通
照明／コイズミ照明　ダイニングシャンデリア
　（オーナー所有・ダイニングのみ）
　Modular（階段のみ）
建築金物／ユニオン
水栓金物・バスタブ／CERA TRADING

設備システム
空調　冷暖房方式／放射冷暖房システム
　（ピーエス暖房機）
　換気方式／第三種換気
給排水　給水方式／上水道直結
　排水方式／下水道放流
給湯　給湯方式／ガス給湯器

撮影／新建築社写真部

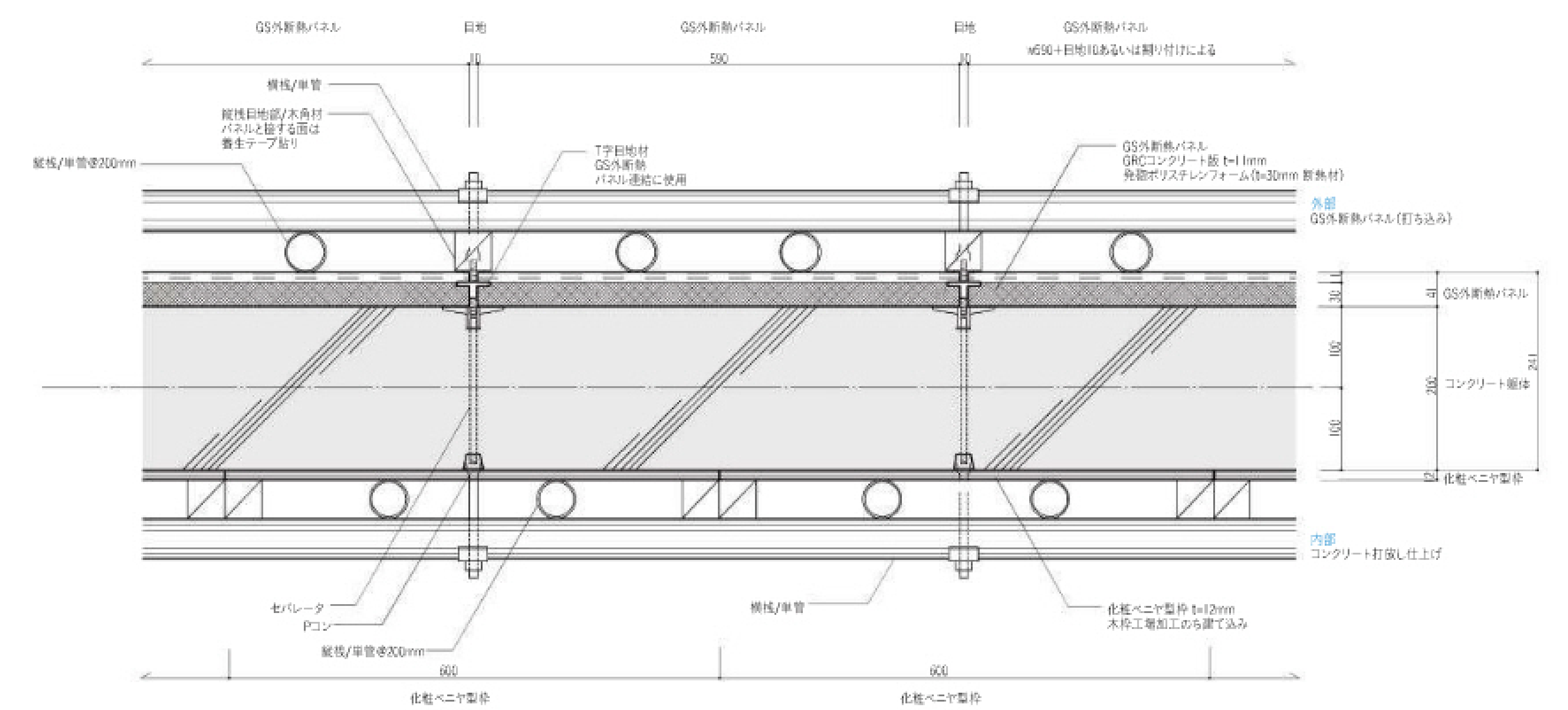
そのまま外壁となるPC板型枠

外断熱パネル（GS外断熱パネル／日本ハウス）を外部の型枠兼仕上げとして、コンクリートを打設した。厚み11mmのGRC（Glassfiber Reinforced Cement）コンクリート板と厚み30mmの断熱材が一体となったパネルは自重があり、w=590mm×階高の縦長サイズの方が建て込みの効率がよく、内側の化粧ベニア型枠との割り付けにもうまく対応する。
打ち込んだパネルがそのまま仕上げとなるため、建て込み、打設、養生には非常に神経を使う。最初のポイントは、T字目地部分をしっかり押さえることと、木桟からのあくがパネルに付くのを防ぐことである。この現場ではT字目地部分を木桟で押さえて連結部を安定させ、パネルと接する面に養生テープを貼る手間をかけて対応してもらった。　（岡由実子）

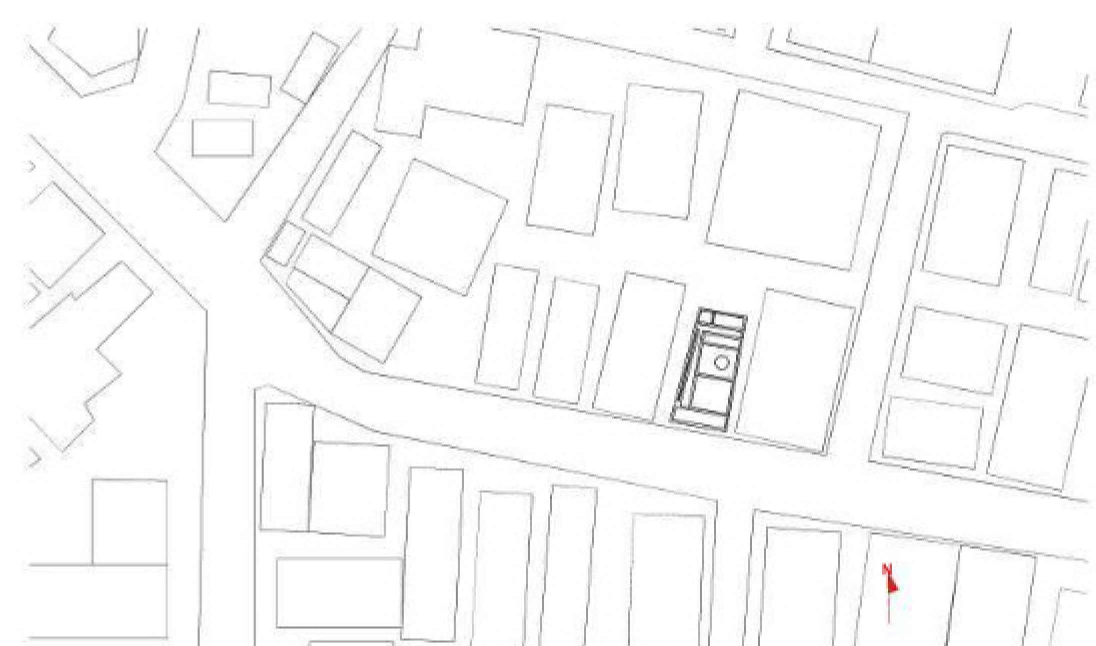


左：外断熱パネルのみ建て込んだところ。セパレーターが出ているところがパネルの目地部分。／右：壁上部から見下ろす。写真下が内部の化粧ベニヤ型枠、上がGRCパネルと外断熱パネル。間の配筋部分にコンクリートが流し込まれる。
本頁写真撮影／エトルデザイン

Making points



壁面コンクリート打設・平断面詳細図　縮尺1：10



配置図　縮尺1：1,000



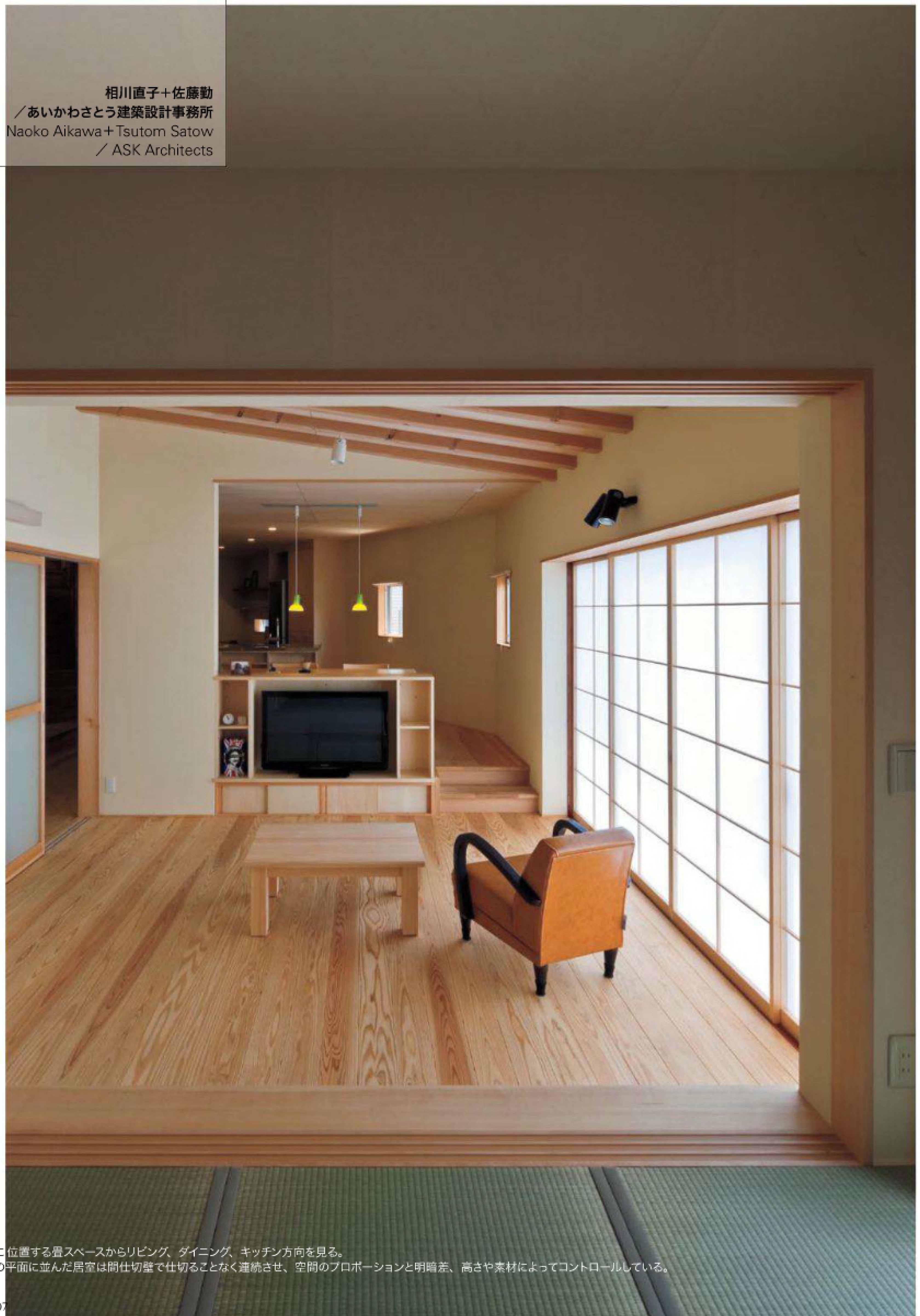
外壁見上げ。正面スリット窓はL型にしてコーナーを開放し、RC造に軽やかなシャープさをもたらす。スチールサッシは溶融亜鉛メッキ（OMZP）仕上げ。

埼玉の家／O邸

House in Saitama ／ house O

埼玉県上尾市

相川直子＋佐藤勤
／あいかわさとう建築設計事務所
Naoko Aikawa＋Tsutom Satow
／ ASK Architects

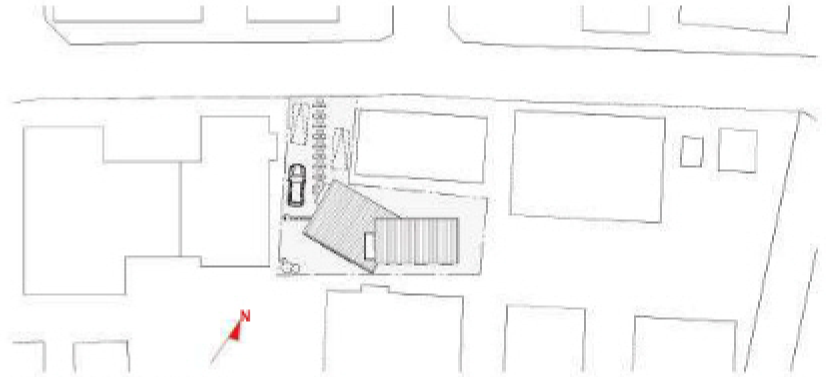


1階西端に位置する畳スペースからリビング、ダイニング、キッチン方向を見る。
くの字型の平面に並んだ居室は間仕切壁で仕切ることなく連続させ、空間のプロポーションと明暗差、高さや素材によってコントロールしている。

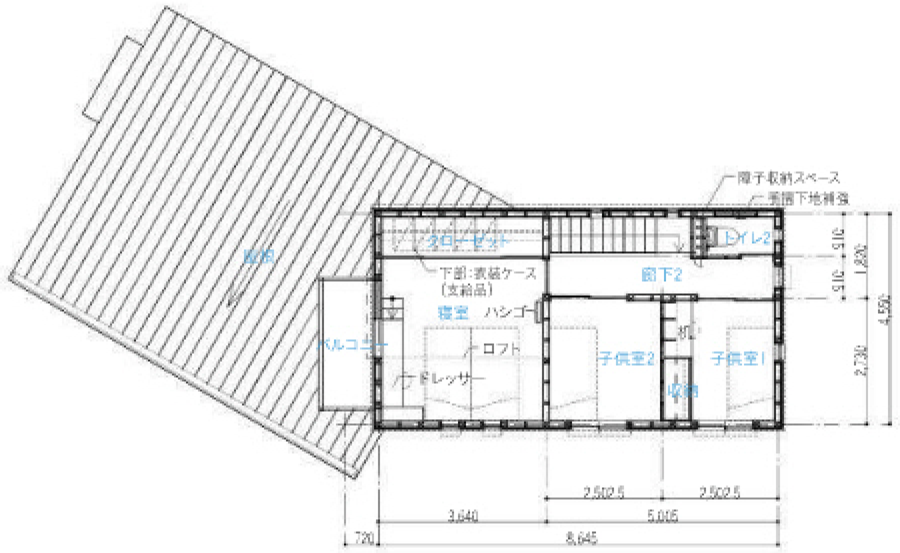


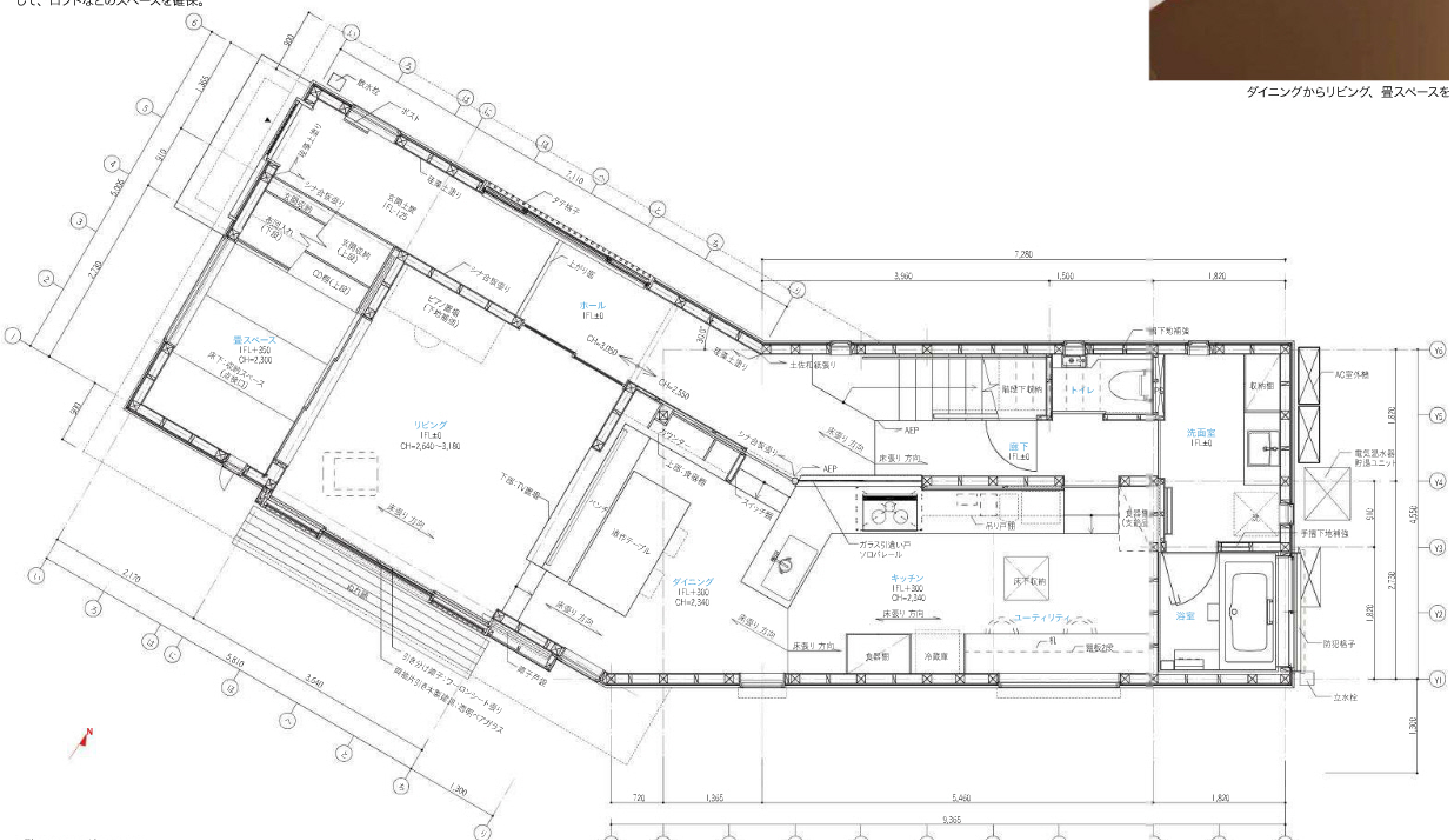
キッチンからダイニング、リビング方向を見る。右奥に見えるのは玄関の格子扉と土間。コミュニケーションが生まれるよう、キッチンからは居室だけでなく、開閉可能なガラス窓を介して廊下を見通せる。キッチン台の素材は1.2mm厚のステンレスとタモ集成材。シンク下はオープンでゴミ箱置き場となっている。


北側からアプローチを見る。平屋部分のみ見えている。


配置図　縮尺1：1,000


2階寝室。収納物の量を事前にリサーチして、ロフトなどのスペースを確保。


2階平面図　縮尺1：200


1階平面図　縮尺1：75


ダイニングからリビング、畳スペースを見る。ダイニングのベンチはリビングのテレビ台背面と一体化させて製作。左側の縁側は、隣接する家に住まう親世帯との交流の場となる。

L+D+K+αのつなげ方

敷地周辺は都内への通勤圏でありながら、戸建て住宅と農耕地が混在する。南側に建主の父と兄家族の二世帯住宅が、北側に建主親族所有のアパートがあり、その狭間が今回の敷地である。アパートの日照確保のために一部を平屋とし、個室を陽当たりのよい2階に、隣接する西庭を1階リビングから借景とする案が選択された。

まず3つの個室からなる2階を最小限に設定し、プライベートなスペースを完結させた。残りのスペースで家族が付かず離れずの関係を構築できるような、つくり込まない自由さをもたせようと思った。キッチンは窓のない壁に向かってひとり家事をする場ではなく、家族のコミュニケーションに寄与する場と位置付けている。そのためLDKを直線に配列するのではなく、Dを緩衝帯としてL+D、D+Kの関係性をつくってから、角度をふり、かつレベルを変えて接続し、曖昧さと複雑さが発生することを目指した。結果、細長い一室空間となったが、同時にキッチン正面のガラス窓を通して階段室→廊下→玄関土間とつながりが生まれた。ダイニング、リビング、畳スペース、そして小階段は、それぞれが直接見えないまでも、家族の気配をいつも感じられる、近くて遠い居場所となる。（相川直子＋佐藤勤）

リビングから南側の庭を見る。




ダイニングからキッチン方向を見る。上階がある部分の1階天井はシナ合板貼り。壁は珪藻土、床を八溝杉のフローリングを使用。

コミュニケーションの場となるキッチン回りの仕様

キッチンはフルオープンかつLDKが一室空間のため、LDとの色調・素材感の調和、天井面のあり方、視線の高さ・奥行感のコントロールなどの調整に時間を使った。模型による検討の結果、素材はメンテナンスを考えて珪藻土や土佐和紙と同系色のシナ合板とし、キッチントップの高さ(キッチンFL+875mm)や、目隠し(TV置場兼ベンチ)、袖壁などを組み合わせている。エネルギーインフラの今後について建主と共に検討した結果、ビルトイン機器は極力用いない、シンプルな構成にした。

キッチントップは贅沢ではないが高級感と耐久性のある仕様として、1.2mm厚のステンレスとタモ集成材で製作。システムキッチンではシンク下を塞ぐことが多いが、実際に使用法をシミュレーションすると、オープンにしてゴミ箱置場などにすると便利なケースが多い。キッチンのガラス引違い窓は、この階段の登り口の窓辺で立ち止まり会話をする、あるいは玄関戸をくぐるとすぐに家族が迎えてくれるような、コミュニケーションが生まれることを想起している。　(相川+佐藤)

埼玉の家／O邸

所在地／埼玉県上尾市
主要用途／専用住宅
家族構成／夫婦+子供1人

設計
あいかわさとう建築設計事務所
　担当／相川直子　佐藤勤
構造　池田昌弘+MISA
建築コーディネート　OZONE家づくりサポート

施工
坂上工務店　担当／坂上盛康　藤波精一
大工　久保田勝彦
板金　野口板金工業　担当／野口訓一
左官　及川左官店　担当／及川英樹
給排水衛生　良松　担当／大竹亮
電気　中央電工　担当／斉藤季位
家具・建具　樋口建具店　担当／樋口浩次

構造・構法
主体構造　木造在来工法
基礎　べた基礎

規模
階数　地上2階
軒高 7,300mm　最高の高さ 7,440mm
敷地面積　272.49m²
建築面積　75.88m²
（建蔽率27.84%　許容60%）
延床面積　115.21m²
（容積率42.28%　許容150%）
1階　75.88m²　2階　39.33m²

工程
設計期間　2010年5月〜2011年8月
工事期間　2011年9月〜2012年3月

敷地条件
地域地区　第一種中高層住居専用地域
道路幅員　北6m　　駐車台数3台

外部仕上げ
屋根／ガルバリウム鋼板t=0.35mm 竪はぜ葺き
開口部／木製建具　アルミサッシ
外構／飛石　砂利敷き　生垣

内部仕上げ
キッチン
床／スギ無垢板フローリング(八溝杉) t=15mm
壁／珪藻土　モザイクタイル(INAX)
天井／シナ合板 t=6mm
厨房機器／
　IHコンロ／IHクッキングヒーター：パナソニック(KZ-J75XS)ビルトインタイプ
　換気扇(シェード)／富士工業(USR-3A-901)
　製作家具／シンク：SUS t=1.2mm
　シンク水栓金物／GROHE (32445000)

浴室
床／パナソニックUB（ココチーノ）

リビング　ダイニング
床／スギ無垢板フローリング(八溝杉) t=15mm
壁／珪藻土
天井／シナ合板 t=6mm
障子／ワーロン(リビングのみ)

畳スペース
床／本畳
壁・天井／土佐和紙

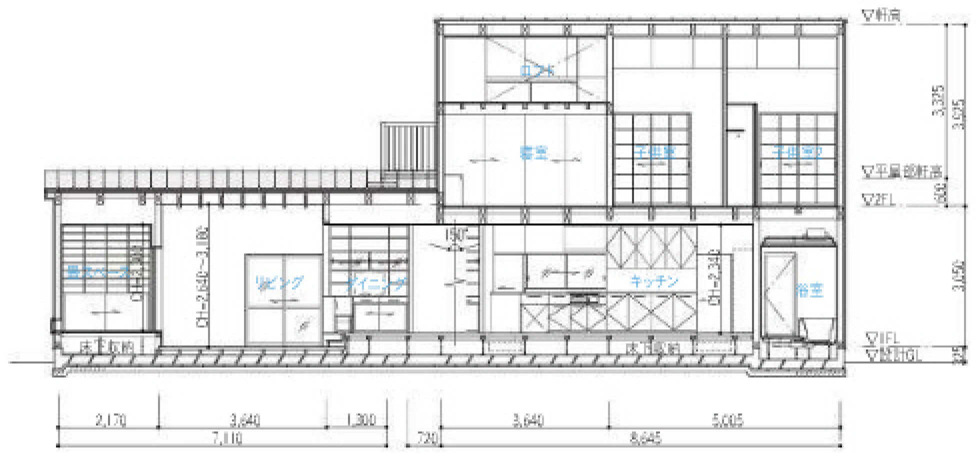
玄関土間
床／モルタル金ごて仕上げ
壁／珪藻土　シナ合板 t=6mm
天井／土佐和紙
建築金物／スガツネ(ハンガーレール　ドアボトム)　ベスト(ステンレス引手)

寝室・子供室
床／パイン無垢板フローリング t=15mm
壁／土佐和紙
天井／シナ合板 t=6mm

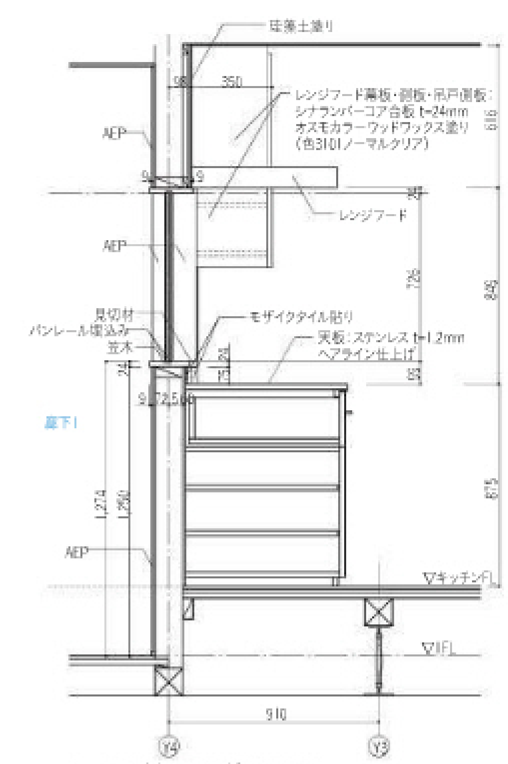
全室共通
製作家具／シナ合板 t=24mm、20mm
　タモ集成材・アンティークガラス(ダイニングのみ)
照明／コイズミ照明
　パナソニック(リビング・寝室のみ)

設備システム
空調　暖房・冷房方式／エアコン
　床暖房：蓄熱式電気床暖房
　換気方式／第三種換気
給排水　給水方式／市水道
　排水方式／公共下水道
給湯　給湯方式／電気給湯器：三菱電機

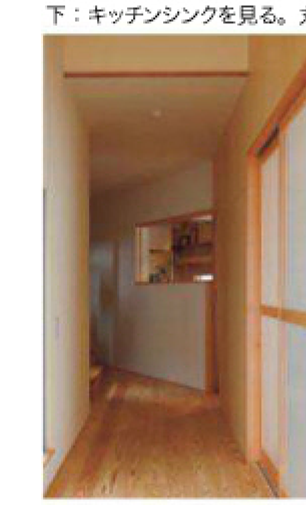
撮影／新建築社写真部



断面図　縮尺1：200



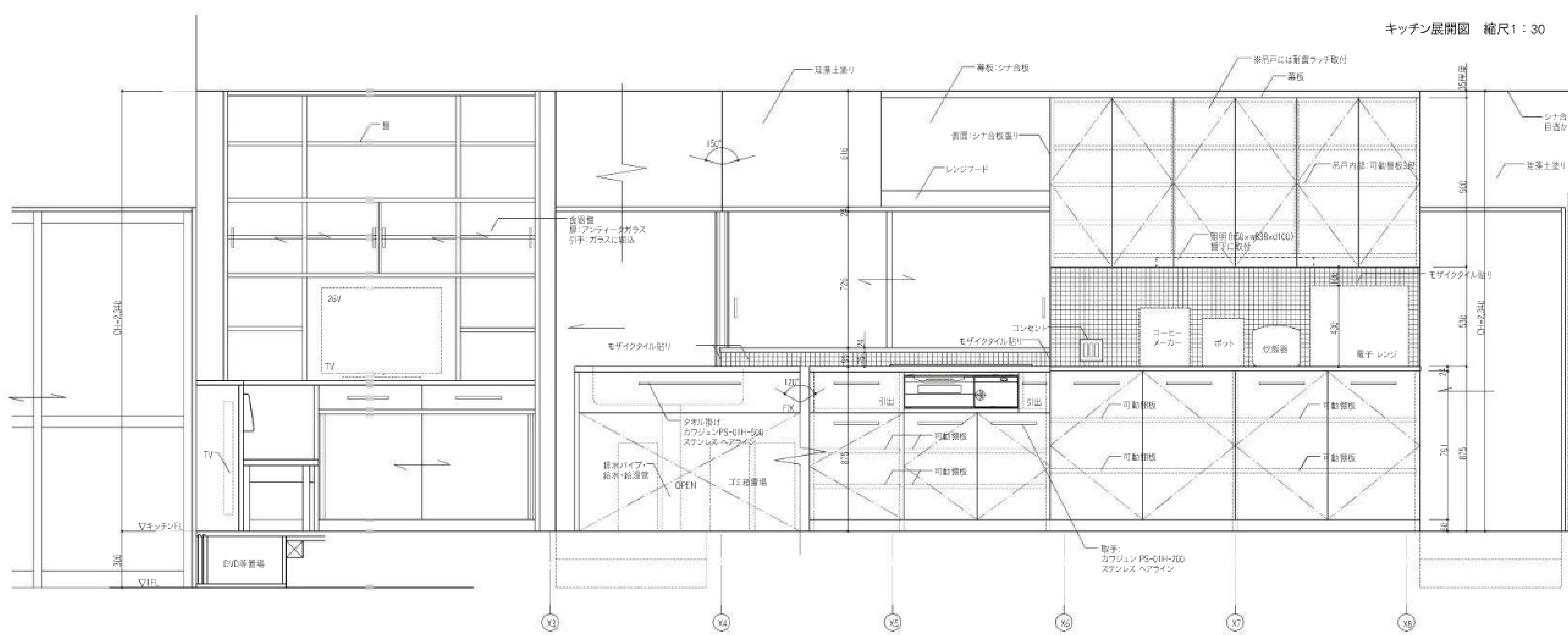
キッチン断面図　縮尺1：40





上：玄関土間から見る。左に階段。ガラス窓によって廊下からもキッチンの様子が分かる。
下：キッチンシンクを見る。丸柱はガラス窓の戸あたりとなる。

キッチン展開図　縮尺1：30





目神山のいえ

House in Megamiyama

兵庫県西宮市

須賀定邦
Sadakuni Suga

西側外観。外壁は4種類の長さの花崗岩を乾式小端積みとしている。コンクリート躯体と縁を切ることで、外断熱及びパラペットの見えない設えを実現（詳細は138頁）。正面玄関へ向かう階段の下は、建設にあたり土壌を掘削した際に出てきた花崗岩（御影石）。



南東庭から見る。北側には山の斜面と緑が広がる。1階は鉄筋コンクリート造、2階は木造。

緑溢れる傾斜地に建つ RC 建築として



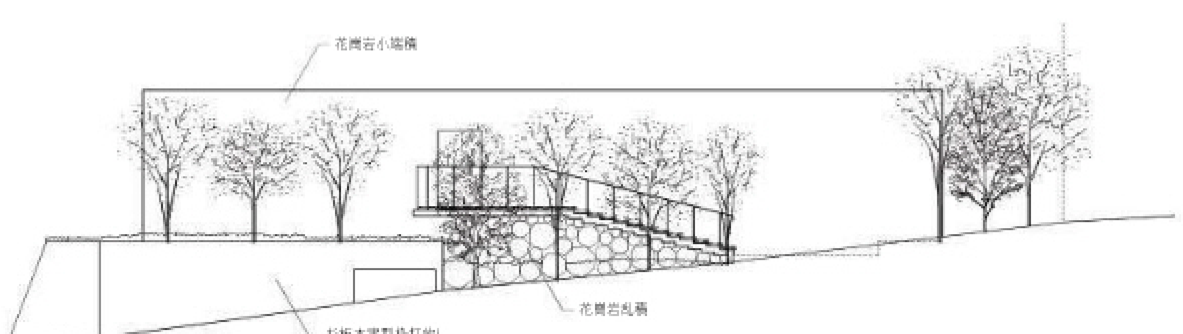
北側外観。敷地の高低差は最大5,000mm。石壁は道路をはさんだ西側高所に建つマンションから視線や音を遮る役割ももつ。右下は駐車場。

敷地は六甲山系東端の甲山の裾野に位置し、故石井修氏による一連の住宅作品で知られる甲陽園目神山地区に属する。敷地内高低差5mの複雑な地形のもつ潜在力に対して、「時と共に自然に覆われ見えなくなる家」という故人の設計哲学に敬意を払い、敷地の約3割を占める既存擁壁と木造屋根部以外はすべて緑化を施し、四季折々を彩る樹木と地被類で構成した。また北向き斜面の土地を約半層～1層掘り込むことで2階建ての存在感を平屋と同等に抑えた。

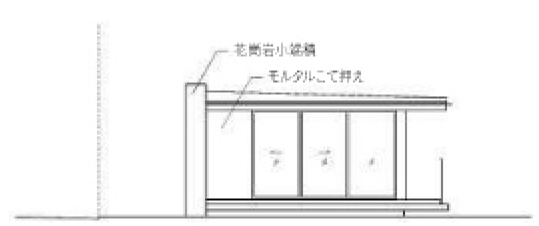
西側に巨大な集合住宅があるため、心理的な砦として1枚の象徴的な花崗岩小端積壁を設けた。建物は時の経過に耐え得るように単純明快を旨とし、この石壁の東側に2層をシンプルに配した。上階（2階）はリビング・ダイニング・和室からなる主空間、下階（1階）は寝室・水回り等の従空間である。石壁に唯一穿たれた開口部から引戸をくぐると、2階の木造屋根架構現しのワンルーム空間が広がり、全面ガラス開口部から南向き斜面の山の緑が飛び込んでくる。一方で1階は半地下空間らしい、天井・壁共にコンクリート化粧打放しの落ち着いた「静」の空間としている。

これらの空間構成と、ダイナミックな印象と好奇心の喚起の両立を図るための「引き算」のディテール、RC建築ならではの輻射ベースの空気環境を同時に実現するために、構造的には西側壁と2枚のスラブが「ヒ」型のRC躯体を構成し、これに木造の屋根が架かるハイブリッド架構になっている。1階床基礎、2階床板共にフラットスラブとし、2階テラス部分のはね出し部分はϕ=70mmとϕ=50mmの2本の鉄骨無垢柱により支持している。木造屋根は鉛直力のみを受ける東側木造柱に大梁を渡し、西側RC壁と大梁の間に60×240mmの垂木を@450mmで架けたシンプルな架構になった。

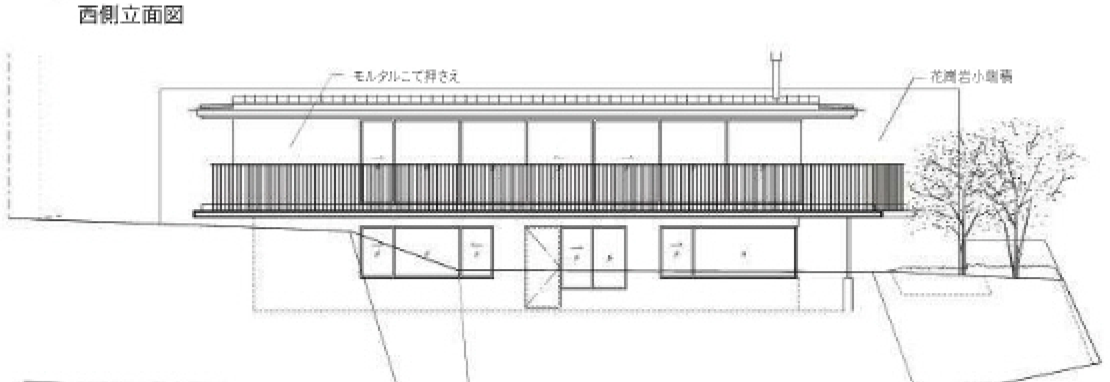
地層を想起させる石壁は、竣工時は家の「拠り所」として強い存在感をもつが、時と共に緑に主役の座を譲る。石壁が何度も四季の移り変わりを経て、いずれ緑の背景となる日を楽しみに暮らしている。　　　　（須賀定邦）



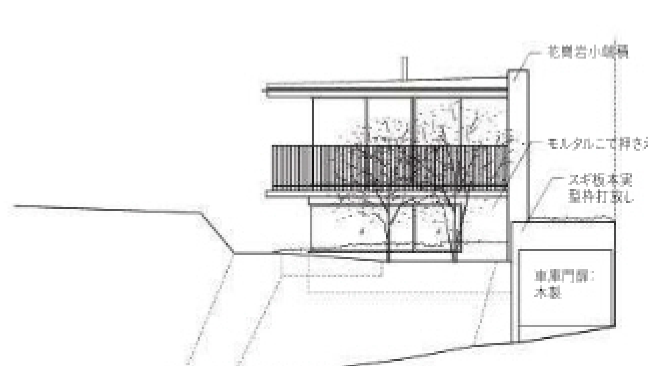
西側立面図



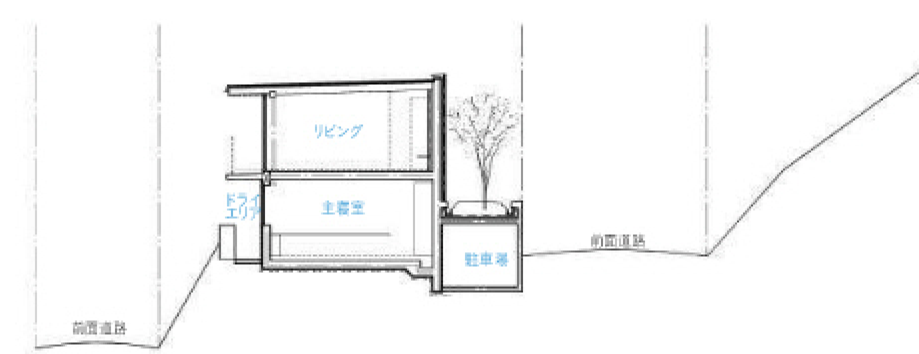
南側立面図



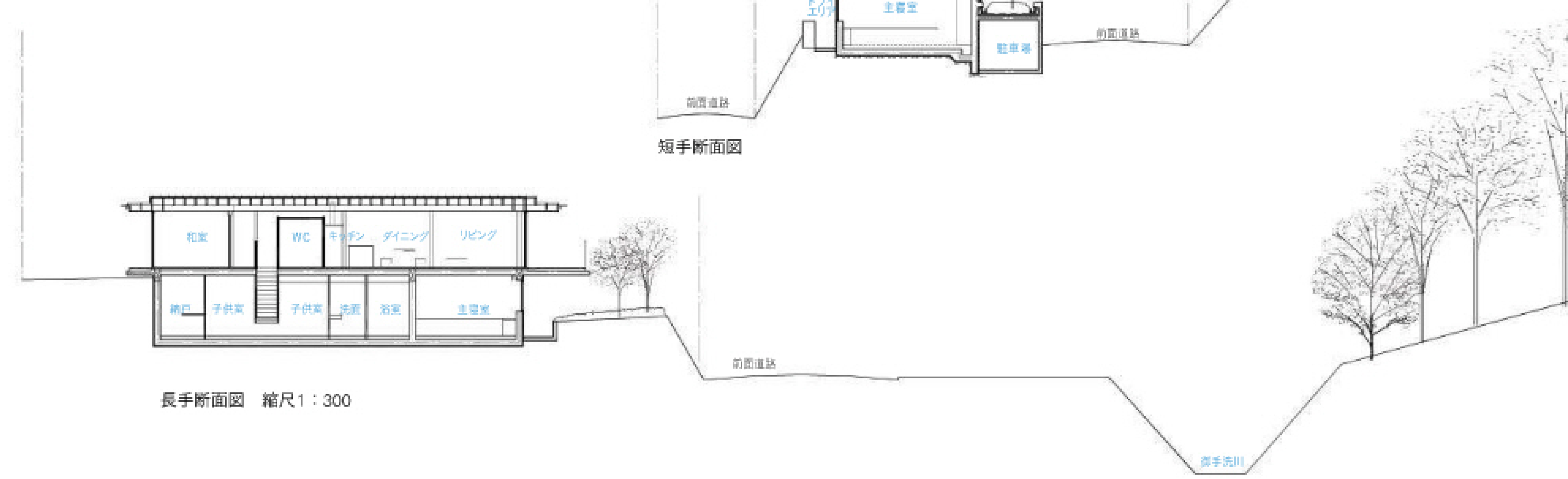
東側立面図　縮尺1：250



北側立面図



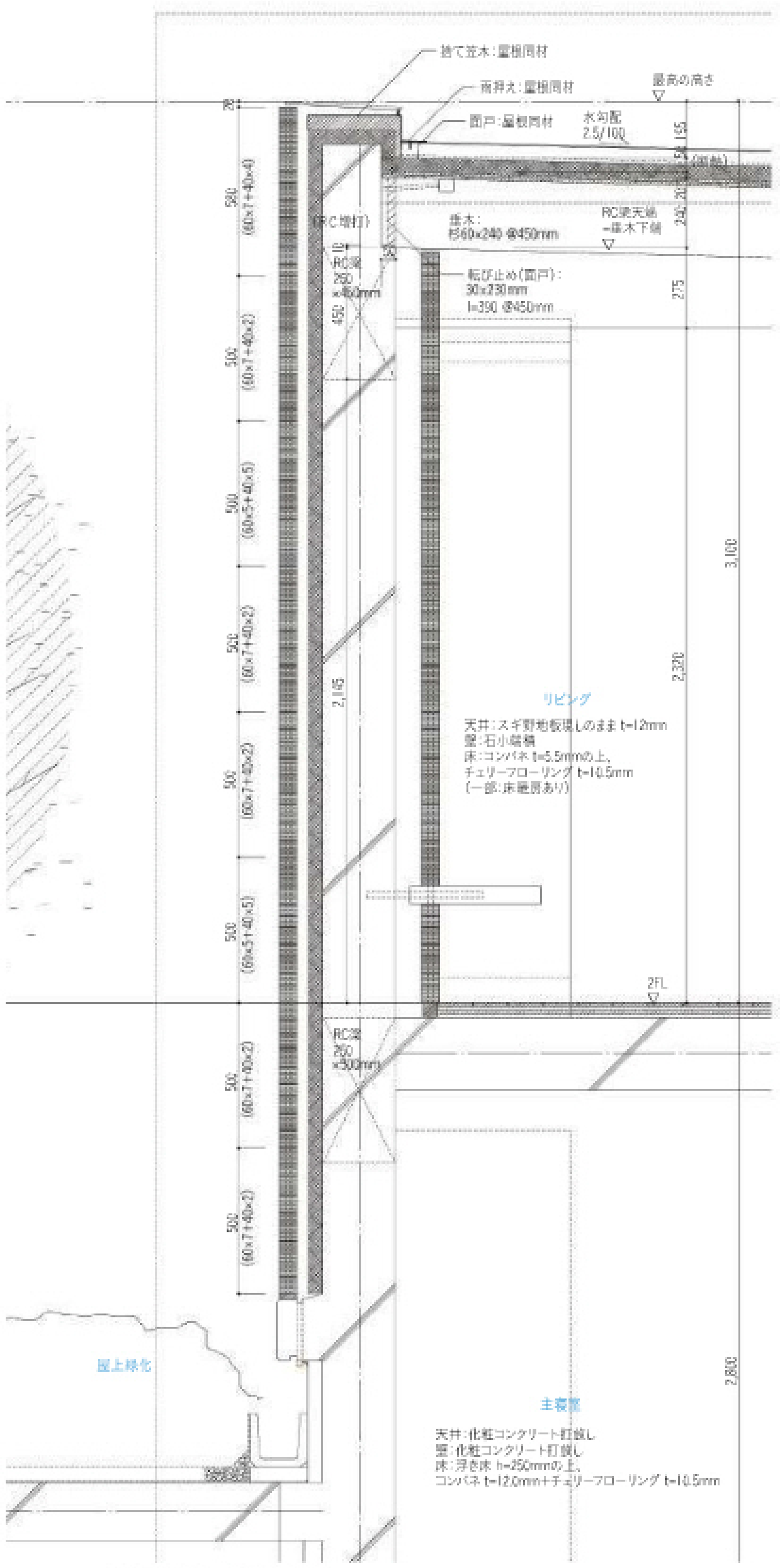
短手断面図



長手断面図　縮尺1：300

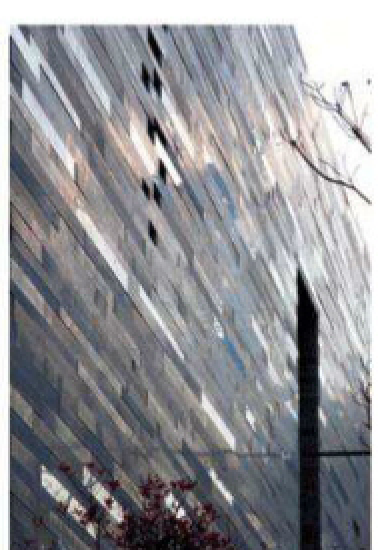


2階リビングから北側を見る。石壁が室内にも現れる西側のRC壁に、垂木60×240@450mmと120mm角の木柱、180×240mmの木梁が取り合う架構。

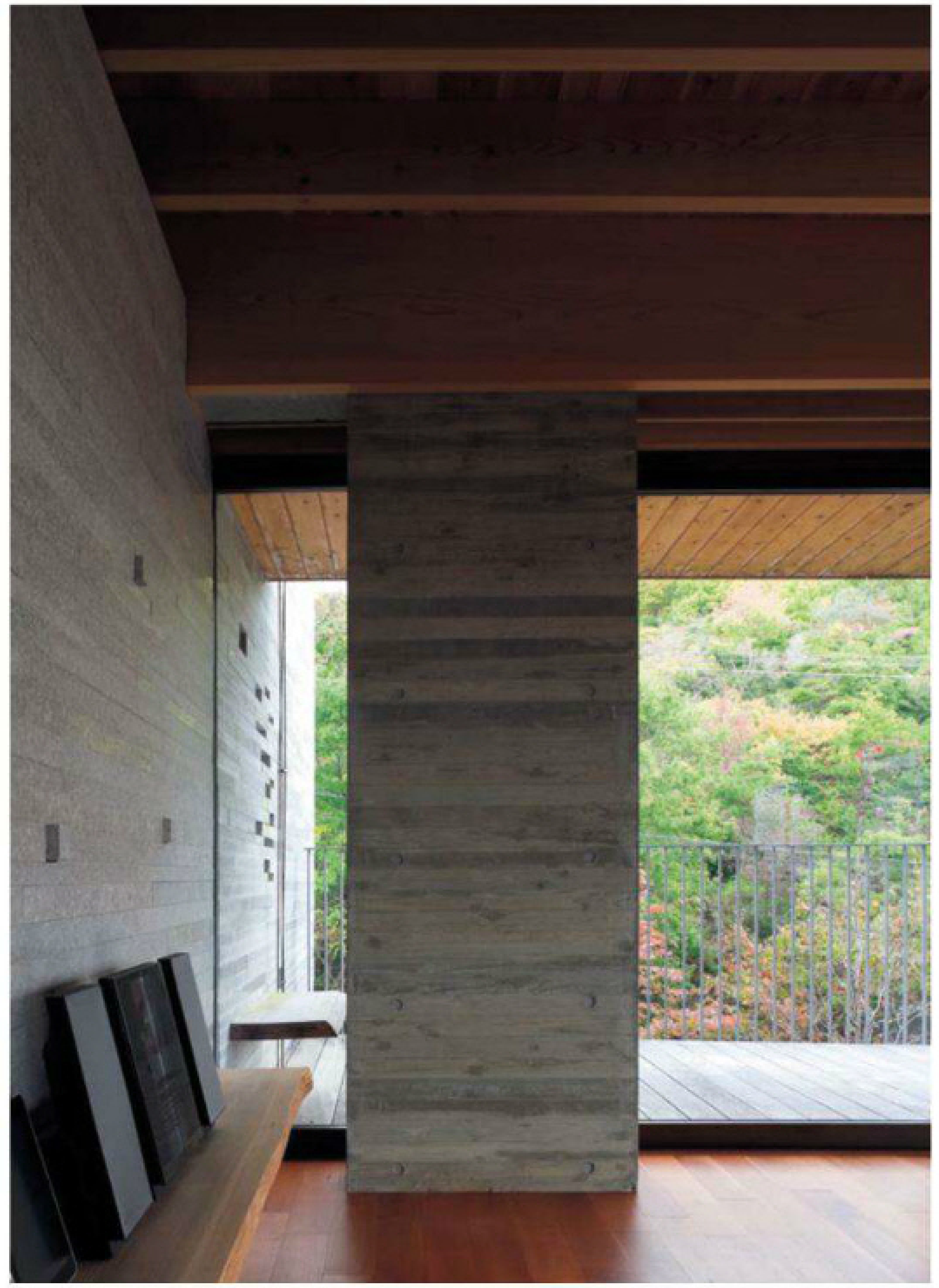


石壁矩計図　縮尺1：30

RC躯体はすべて断熱材で外部を取り囲んでいる。西側の壁は断熱材の外に空気層を設け、さらにその外部に花崗岩を乾式小端積みしている。RC躯体部分で止水ラインを形成することで、パラペットも目地もない「引き算」のディテールを実現した。RC躯体、屋根木架構、石積壁の接合部においても、異種素材が直接取り合うダイナミックな納まりを追求した。　（須賀）



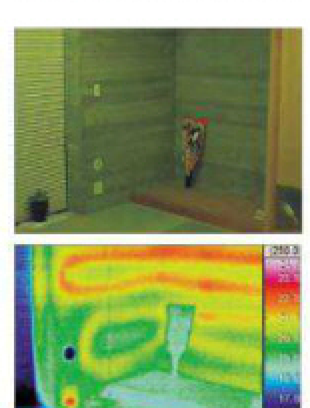
西側壁面。左上はテラスへ続く通風口。



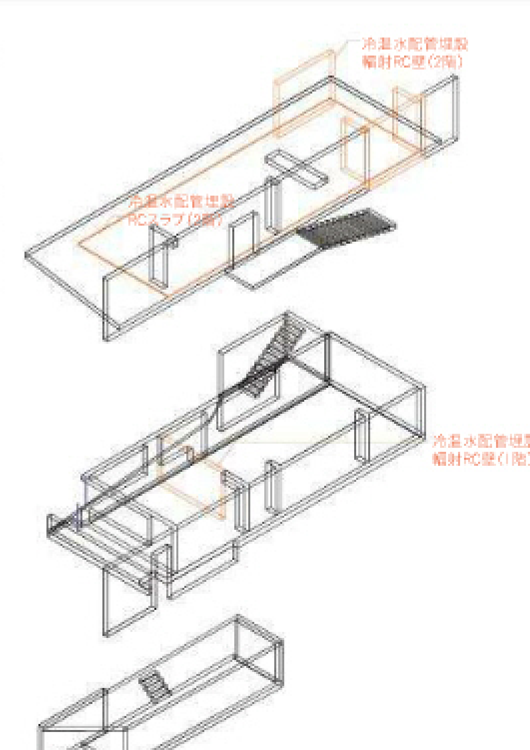
2階玄関入り口から北側を見る。跳ね出しているベンチと飾り棚は天井垂木、軒裏と同じ県産材のスギを使用。

Making points

環境的なチャレンジとして、RC躯体を利用した輻射冷暖房を建物全体にわたって導入している。RC躯体には床上・壁内共に埋設配管を仕込み、冬には温水を夏には冷水を流し、建物全体のベース空調環境を整えている。冬場にはそれに加えて薪ストーブとその暖気を1階床下まで送り込むファンにより、建物全体の空気環境の平準化を図っている。夏場には同一ファンを逆回転させ、半地下である1階の冷気を2階に導入する。　（須賀）



和室壁面をサーモカメラで撮影したもの。
／画像提供：須賀定邦



地階・1階・2階 アクソメ図

目神山のいえ

所在地／兵庫県西宮市
主要用途／専用住宅
家族構成／夫婦＋子供1人

設計

須賀定邦
構造　担当／大内山正英＋須賀順子
照明　AZU設計工房　担当／田村利夫

施工

深阪工務店　担当／田中和広
給排水衛生工事　阪和設備工業
　担当／坂本修一
電気　東屋電気サービス　担当／大植耕司
屋根　トリスミ集成材　担当／山中勇司
　木栄　担当／臼井和也
木製サッシ　キマド　担当／木原正進
石積外壁　旭ビルウォール　担当／水島泰
　明治大理石　担当／志船義人
内装床　昭和洋樽　担当／菅純二
キッチン　ワイズconstruct office
　担当／山崎晃嗣　山口賢浩
家具　大和工業　担当／西垣一浩
照明器具制作　鎌戸電機　担当／高橋邦彦
外構工事　昇栄　担当／阪東昇

構造・構法

主体構造　鉄筋コンクリート造　一部木造
基礎　直接基礎　柱状地盤改良

規模

階数　地下1階　地上2階
軒高 5,170mm　最高高さ 5,270mm
敷地面積　382.47m²
建築面積　93.94m²
（建蔽率24.56％　許容40％）
延床面積　190.71m²
容積対象床面積　166.86m²
（容積率43.62％　許容100％）
地下1階　23.85m²　1階　82.88m²
2階　83.98m²

工程

設計期間　2008年1月～2009年7月
工事期間　2009年8月～2010年5月

敷地条件

地域地区　第一種低層住宅専用地域　法22条指定地域　第一種高度地区　第三種風致地区　宅地造成工事規制区域　地区計画区域（甲陽園目神山地区）
道路幅員　北7.2m　駐車台数1台

外部仕上げ

屋根／ガルバリウム鋼板 t=0.4mm 竪はぜ葺き塗膜防水（FRP複合系）
外壁／花崗岩乾式小端積み　外断熱材の上モルタルこて押え t=15mm
軒裏／国産杉板間伐材 柿渋塗装
開口部／木製サッシ（キマド）
外構／中高木：ハナミズキ　イロハモミジ　ヒメシャラ　ソヨゴ　ヤマボウシ　シマトネリコ　ハクモクレン　センダン　レッドロビン　低木：コデマリ　ヤマブキ　ドウダンツツジ　サツキ　地被：ヒメコウライ芝　斑入りヤブラン　リュウノヒゲ　床：花崗岩（敷地内産）　木製（ジャトバ）デッキ t=25mm（昭和洋樽）

内部仕上げ

リビング　ダイニング　キッチン

床／チェリーフローリング t=10.5mm（昭和洋樽）
壁／花崗岩乾式小端積み　コンクリート化粧打放し（一部スギ板本実型枠）　タイル貼り（INAX）
天井／国産杉板間伐材現し
厨房機器／ワイズconstruct office
　食洗器／ Miele G1142SCi ステンレス
　オーブンレンジ／ Miele　H4020 BM
　ガスコンロ／東京ガス RN-P873A-AUL
　換気扇（シェード）／パナソニック FY-38BK7M 組込み特注品
建築金物／
シンク水栓金物／ GROHE Minta 32321 00J
浄水器／マルチピュア MODEL-D400BJ
照明／鎌戸電機特注品

和室

床／本井草畳 t=15mm
　（鳥本製畳 床暖房対応極薄品）
壁／コンクリート化粧打放し（スギ板本実型枠）
天井／国産杉板間伐材現し
製作家具／押入：マガシロ突板（大和工業）
照明／鎌戸電機特注品

寝室　子供室

床／チェリーフローリング t=10.5mm（昭和洋樽）
壁／コンクリート化粧打放し スタッコ（AICA ミラノモノトーン）
天井／コンクリート化粧打放し
製作家具／机：スギ板 t=60mm 一枚物（木栄）
照明／鎌戸電機特注品

浴室

床・壁／タイル貼り（INAX）
天井／バスリブ
照明／パナソニック（HGW-7460GL）
バスタブ／ Tform（FLN72-0901）
シャワー水栓金物／ Tform（QDH73-0222）

洗面・便所

床／チェリーフローリング t=10.5mm（昭和洋樽）
壁／タイル貼り（INAX）
天井／ GB-R EP
照明／ DNライティング シームレス照明器具
水栓金物・洗面器／ Tform

設備システム

空調　冷暖房方式／ RC躯体蓄熱式冷暖房
　ルームエアコン
　換気方式／第三種機械換気
給排水　給水方式／上水道直結
　排水方式／合流式
給湯　給湯方式／ガス給湯器

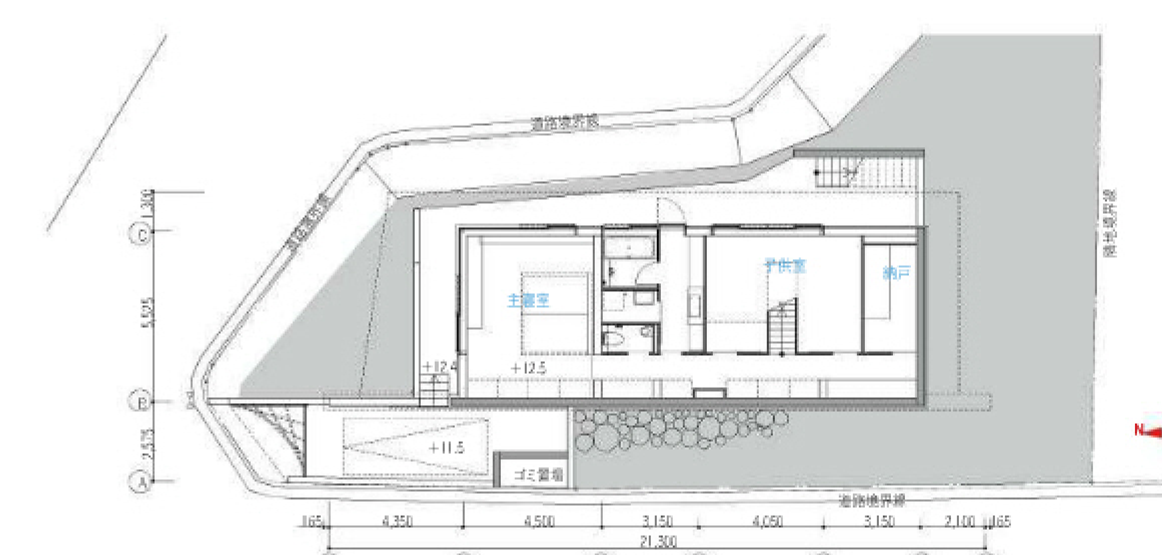
撮影／新建築社写真部



1階寝室。コーナー部に見える室内柱はφ=50mm、屋外柱はφ=70mmの鉄骨無垢柱。



2階平面図



1階平面図　縮尺1：300

ヒメシャラの森の家

神奈川県

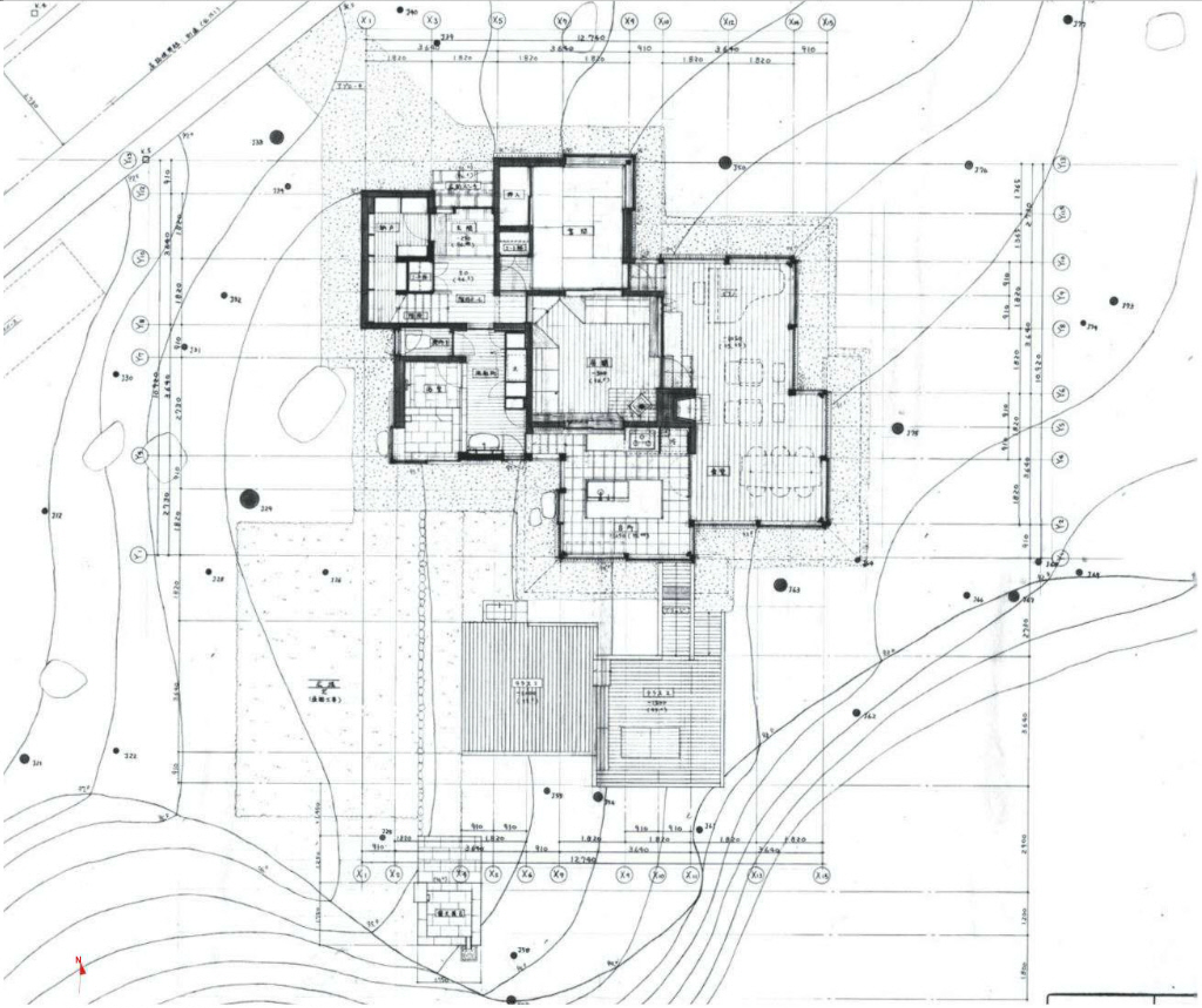
House in Stewartia monadelpha Woods

横内敏人建築設計事務所

Toshihito Yokouchi Architect & Associates



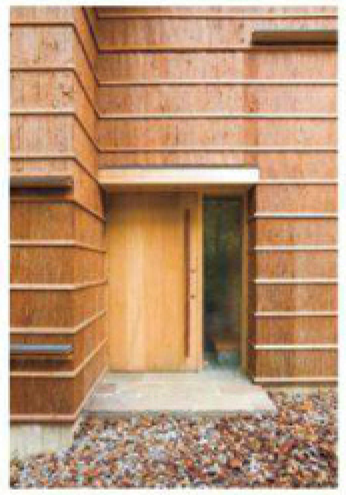
南側から見る。3,640mm角の正方形が910mmずつずれて集合する構成。ヒメシャラが点在する森をできる限り傷付けないようにヴォリュームを配置。



1階平面図　縮尺1：150（1：50の原図を33%に縮小）

自然に対する開放性と閉鎖性を併せもつ秩序

敷地は神々しい落葉樹の森の中にあった。別荘地にもかかわらず、周囲には建物がほとんどなく、ミズナラやカエデ、ヤマザクラに混じって樹高が15mを越すヒメシャラの大木が点在する原生の森の様相を呈していた。



北側の玄関。外壁はスギ皮張りにベイスギ材の押縁仕上げ。

この人の手が入るのをためらわせるほど美しい自然に対し、できるだけその秩序を壊すことなくその場に溶け込んでしまいそうな謙虚さをもつ建築としたいと、まず考えた。そして自然の美しい恵みを十分に満喫できる開放性をもち、一方で大自然の厳しさから身を守るための毅然とした建築的秩序の両方が求められるべきだと感じた。

最終的なプランは森が木々の集合で成り立っているように、3,640mm角の空間単位を910mmずつずらしながら集合させてつくられたものとした。それにより、外観も内部空間も親しみやすい大きさに分節化され、入隅出隅が自ずと多数できることで外部空間との関係が多様で柔らかいものとなり、室内空間にも変化を生み出すことができると考えた。

建物は、壁が多く閉鎖的な2階建て部分に玄関、個室、水回りを収め、ガラス張りで開放的な平屋部分を居間、食堂、台所としている。そして単位空間のズレによって生じた910mm角の部分は、前者では建物内に空気の流れをつくり湿気を抜くための吹抜けの風突とし、後者ではふたつの暖炉と調理用のグリルの排気のための煙突としている。270度のパノラマで風景を楽しむことができる開放的な平屋部分は、周囲の森の梢を下から見上げることができるよう軒高を3,200～3,600mmと高く設定し、上部を大きなガラス面としている。この開口部はすべて断熱ロールスクリーンを備えており、冬期でも使用できる温熱環境を確保している。　（横内敏人）



南側に面するガラス張りの食堂と台所。開口部には、柱に同幅の板材を張り付け、断熱性のあるロールスクリーンがその間を上下するように納まる。



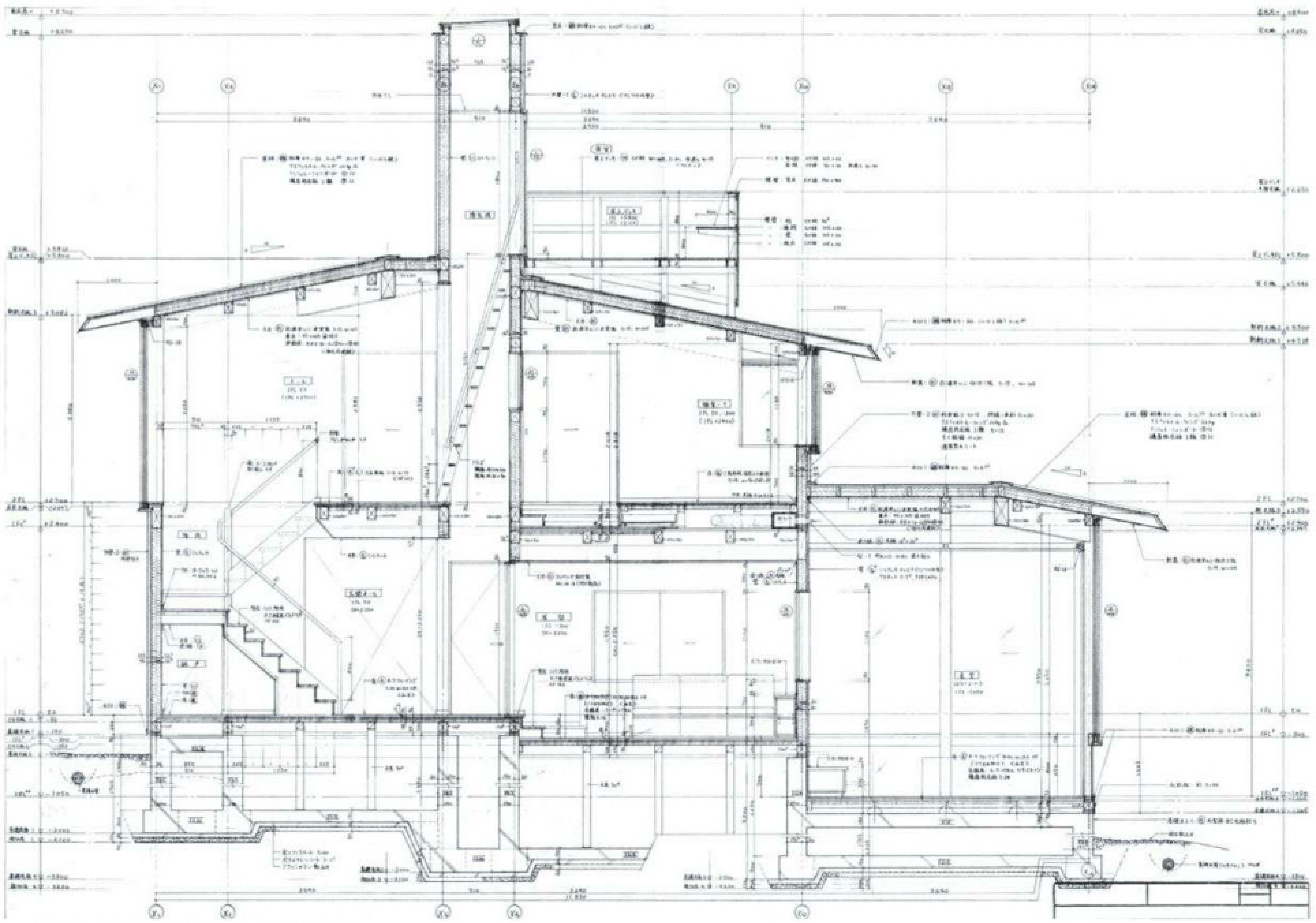
食堂と居間（写真右手）は床レベル差750mm。写真中央部にある煙突は、食堂と居間のストーブ両方から、またキッチンからの熱抜きに使用。


南に面するガラス張りの平屋部分は、矢車状に桁が架かる。

居間からは周囲を囲む食堂、台所、予備室の3方向に視界が抜ける。

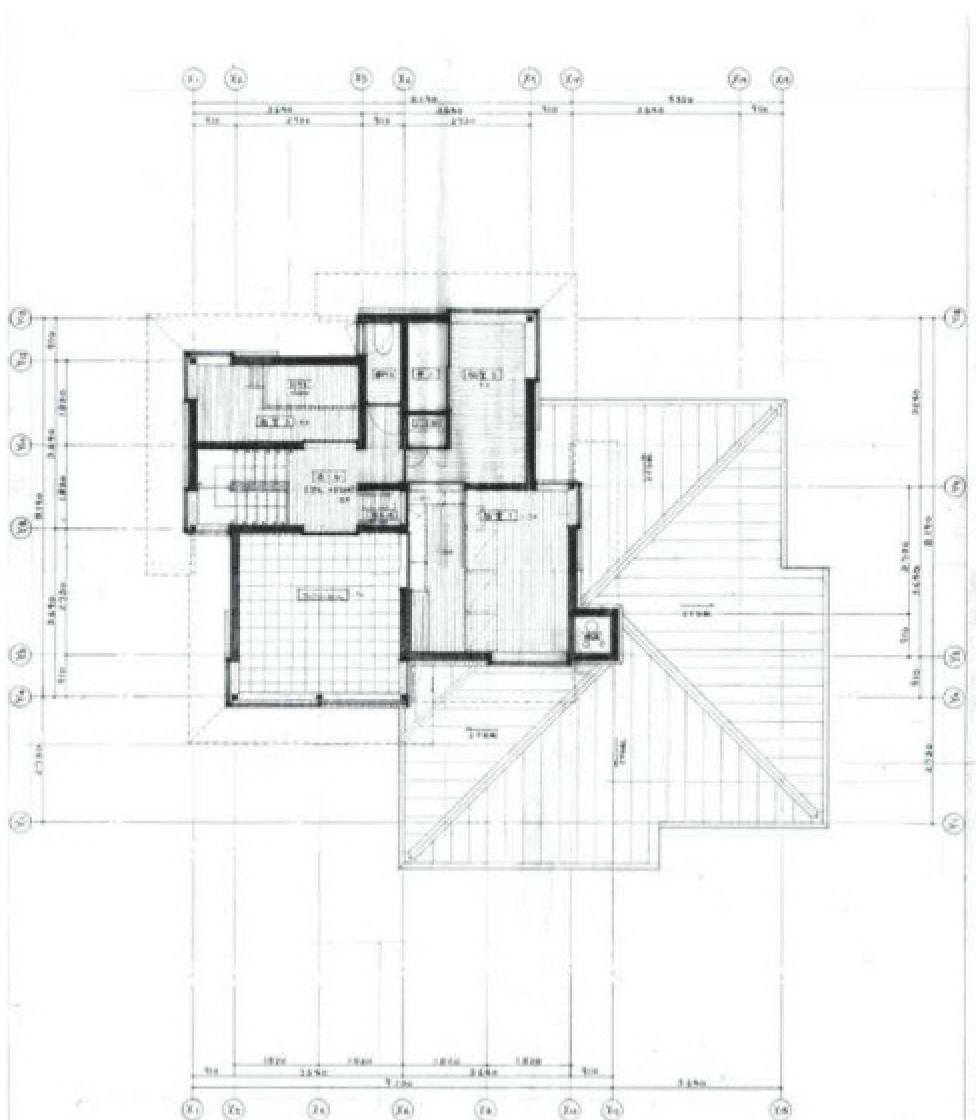


居間から300mm上がった予備室。天井高は2,100mmで、出隅の窓は床から450mmに設えている。

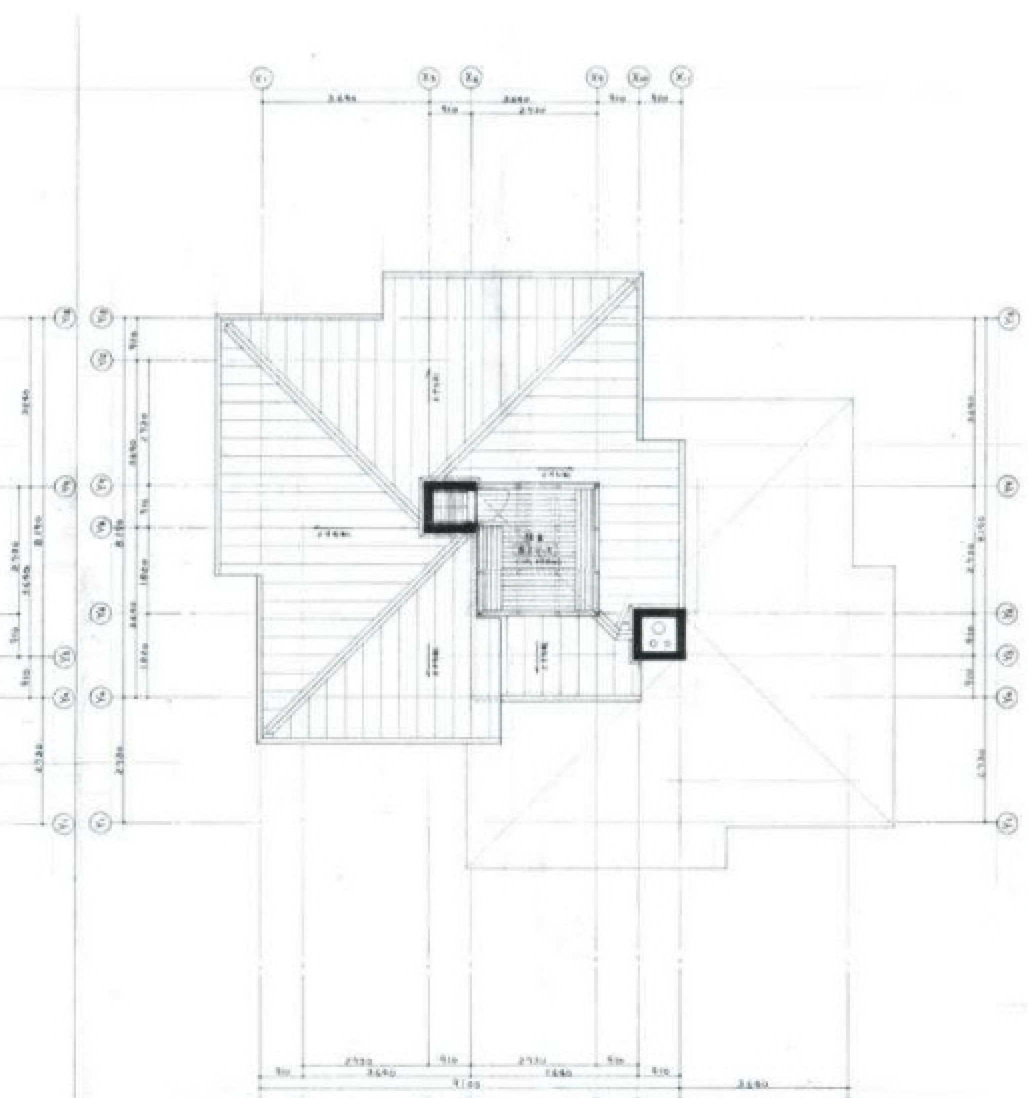

断面図　縮尺1：80（1：20の原図を25%に縮小）



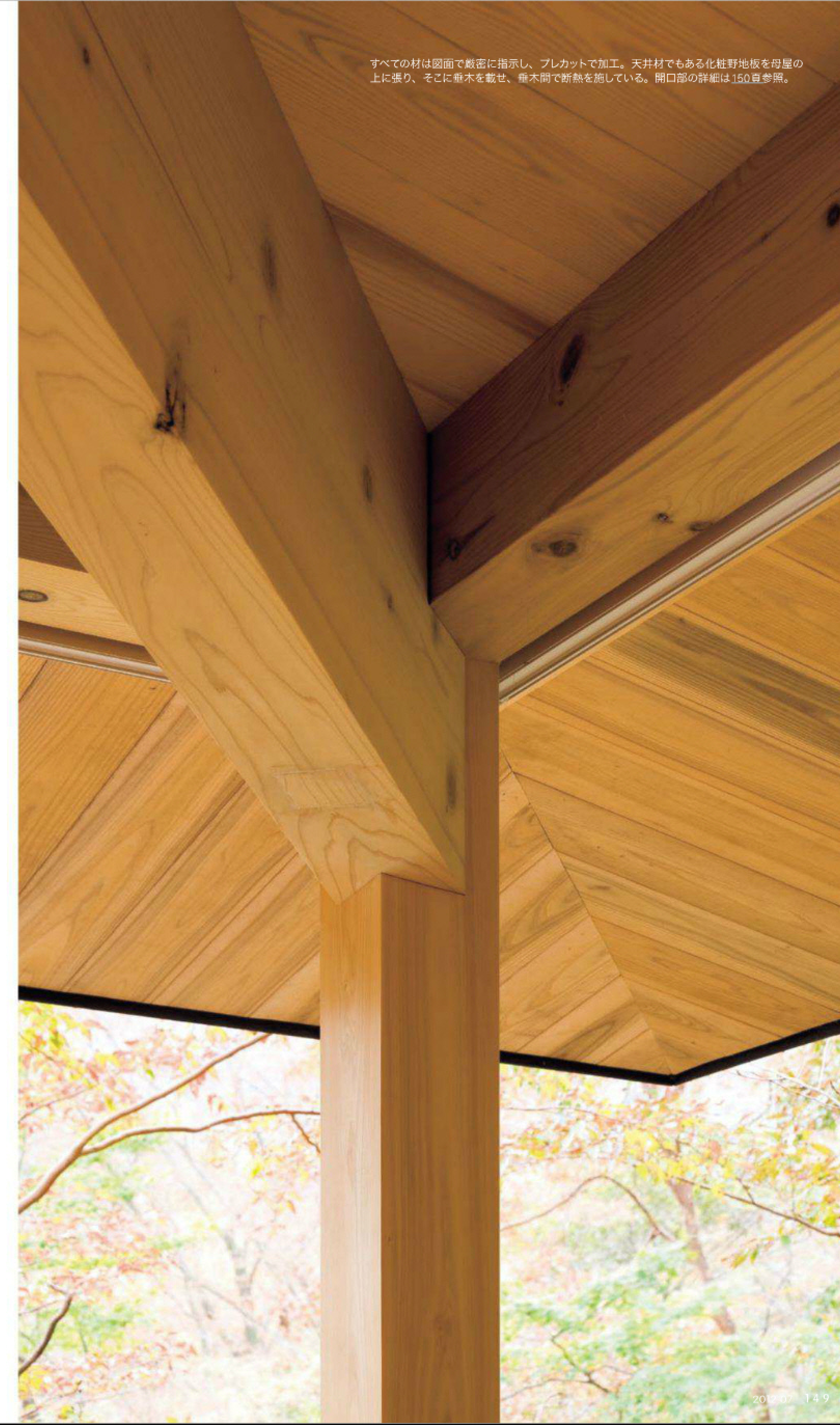
ファミリールーム。2階の窓は、窓枠を柱の裏に隠した引戸。角で枠同士がぶつかるため、窓台と窓枠下端に噛むように木栓を設置。



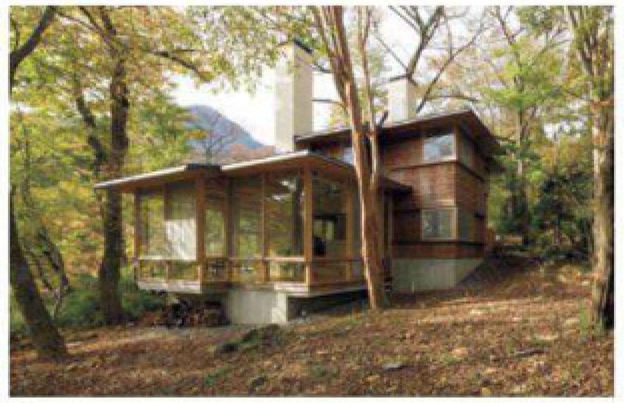
2階平面図　縮尺1：200（1：50の原図を25%に縮小）



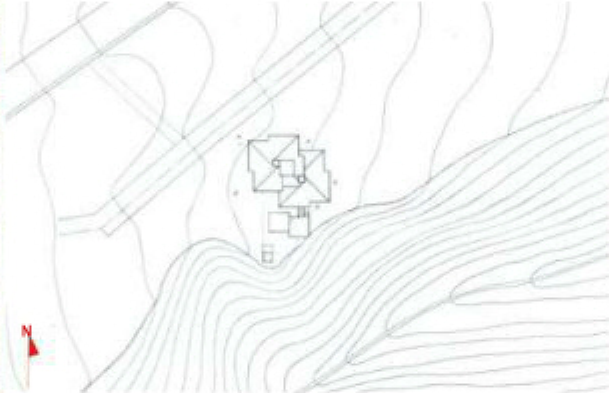
屋根伏図



すべての材は図面で厳密に指示し、プレカットで加工。天井材でもある化粧野地板を母屋の上に張り、そこに垂木を載せ、垂木間で断熱を施している。開口部の詳細は150頁参照。



東側外観。左の煙突はストーブなどの煙抜き、右は屋上デッキにも出られる換気塔。



配置図　縮尺1：10,000（1：1,200の原図を12%に縮小）

ヒメシャラの森の家

所在地／神奈川県
主要用途／別荘
家族構成／夫婦＋子供2人

設計
横内敏人建築設計事務所
　担当／横内敏人　鎌田秀章（元所員）
構造　金箱構造設計事務所
　担当／金箱温春　野田賢

施工
大同工業　担当／東本暁　駒井大祐
大工　佐々木建築　担当／佐々木俊美
左官　大堂工業　担当／大堂栄二
プレカット　マルホン　担当／桑原千波
設備　中央工業　担当／田中昌寛
電気　小林電気商会　担当／小林久
外構　富士箱根緑化　担当／小林欣也

構造・構法
主体構造・構法　木造在来工法
基礎　べた基礎

規模
階数　地上2階
軒高 7,064mm　最高の高さ 7,992mm
敷地面積　999.82m²
建築面積　96.05m²
（建蔽率9.61% 許容10%）
延床面積　149.87m²
（容積率14.99% 許容15%）
1階　96.05m²　2階　53.82m²

工程
設計期間　2008年7月〜2009年8月
工事期間　2010年1月〜2010年10月

敷地条件
地域地区　用途無指定地域　都市計画区域内区域区分非設定　法第22条区域
自然公園法第2種特別地域A地区
道路幅員　北6m

外部仕上げ
屋根／塗装ガルバリウム鋼板 竪はぜ葺き
外壁／スギ皮張り　押縁：ベイスギ／シルタッチティエラ（フジワラ化学）
開口部／木製建具
テラス／イペ材

内部仕上げ

キッチン
床／コリントスレート貼り（INAX）
壁／シルタッチティエラ（フジワラ化学）
天井／スギ源平無地 t=12mm 本実張り

浴室
床／鉄平石貼り（ロザン石材）
壁／鉄平石　抗火石
天井／抗火石
照明／パナソニック電工 LGW72200
　ODELIC　OW009332L
ドアハンドル／ユニオン
バスタブ／鉄平石
シャワー水栓金物／HANSGROHE

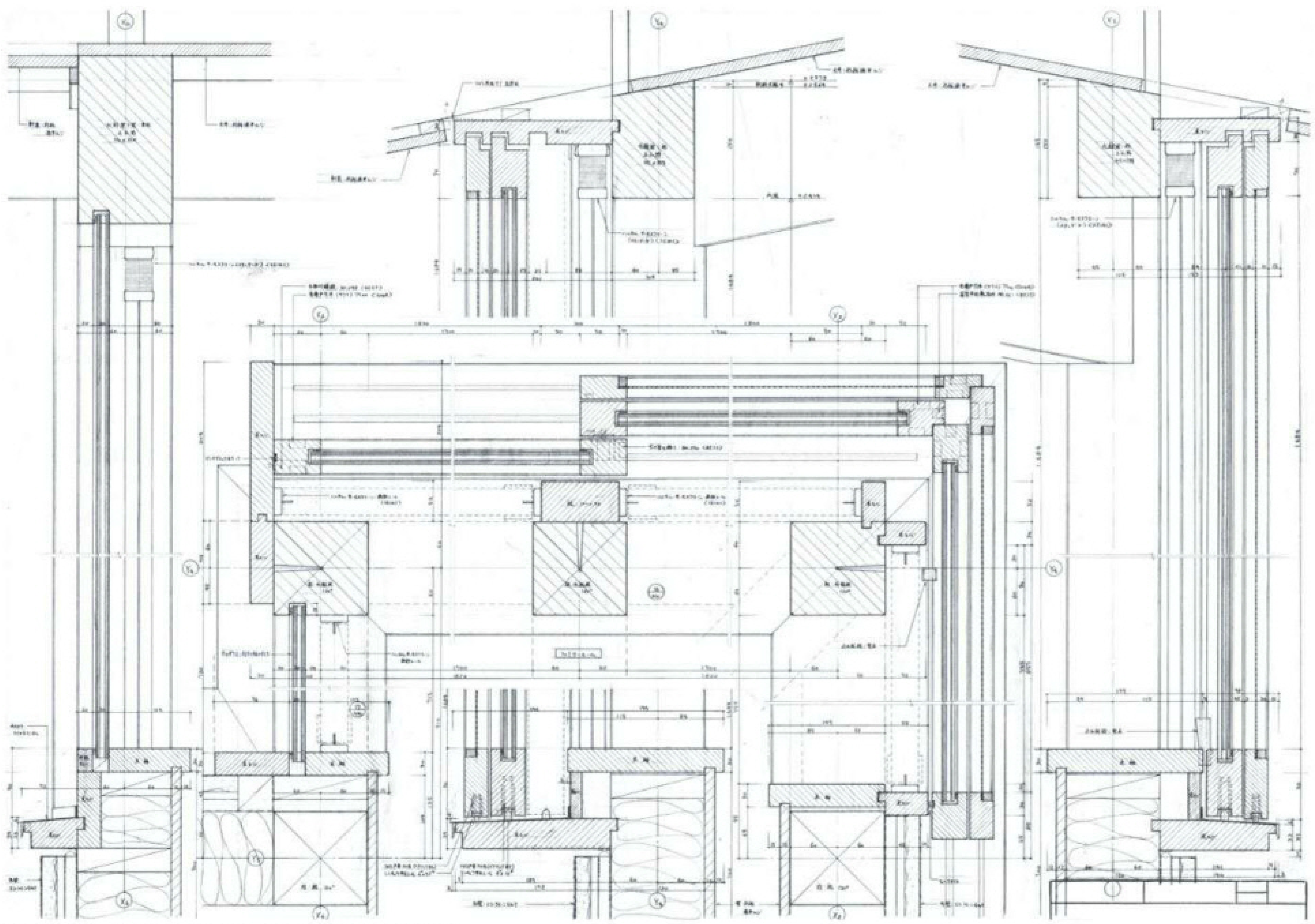
食堂
床／オークフローリング（山王）OF仕上げ
壁／シルタッチティエラ（フジワラ化学）
天井／スギ源平無地 t=12mm 本実張り
家具／ダイニングテーブル・ベンチ（ニングル）
　ダイニングチェア（フレデリシア）
照明／山田照明 SR-4193
建築金物／美和ロック

居間
床／オークフローリング（山王）OF仕上げ
壁／シルタッチ（フジワラ化学）
天井／よしベニヤ突付け張り（竹六商店）
家具／造作家具
照明／パナソニック LB74662
建築金物／ベスト　SOWA

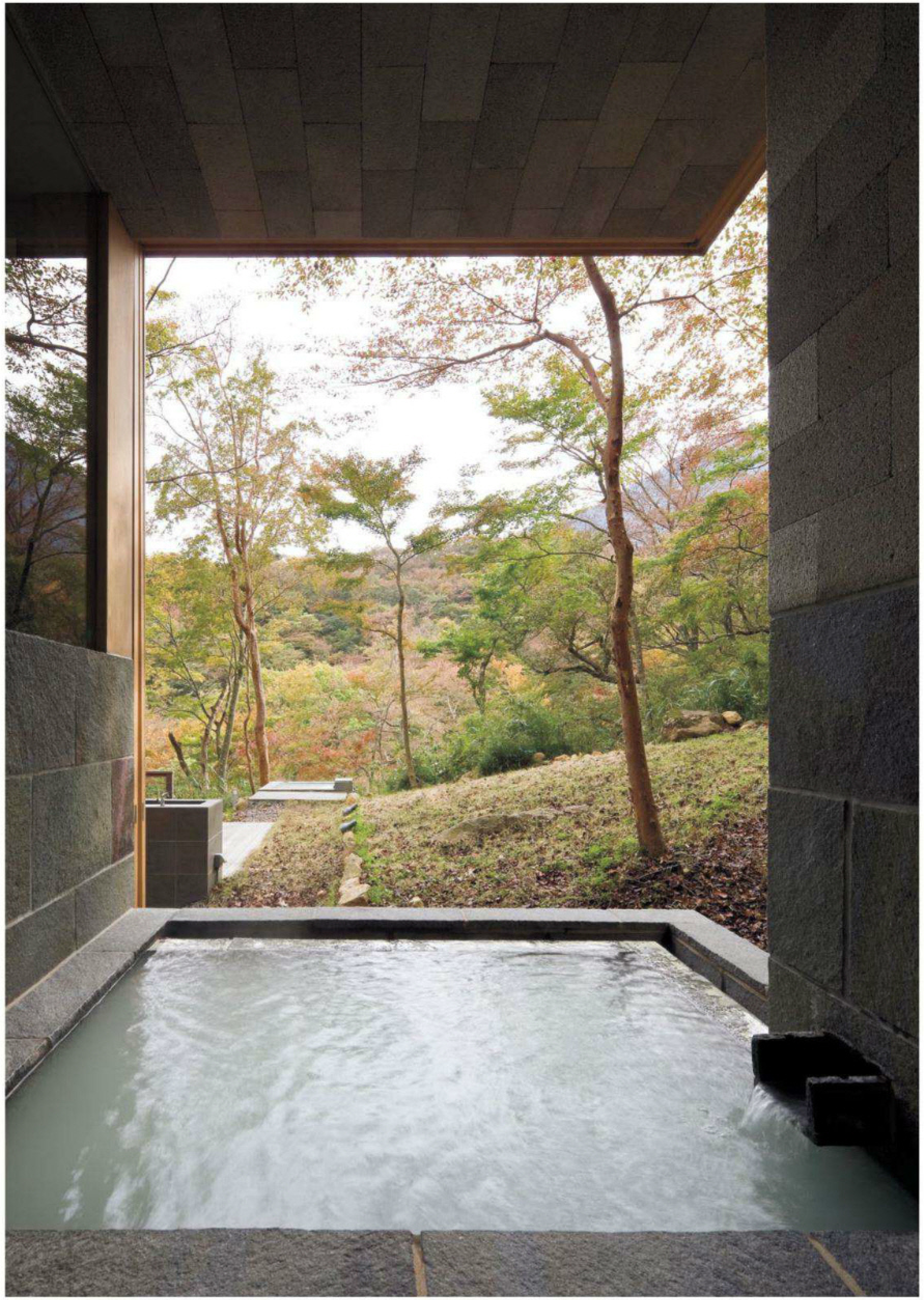
客間
床／畳
壁／シルタッチ（フジワラ化学）
天井／よしベニヤ突付け張り（竹六商店）
照明／ODELIC OL004023L
建築金物／美和ロック　ベスト　室金物

設備システム
空調　暖房方式／電気式床暖房（タフ）
　冷房方式／エアコン
　換気方式／自然換気
給排水　給水方式／上水道直結
　排水方式／合併浄化槽
給湯　給湯方式／プロパンガス給湯器

撮影／新建築社写真部



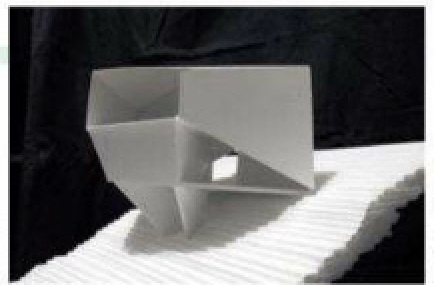
2階ファミリールーム開口詳細図　縮尺1：8（1：2の原図を25%に縮小）



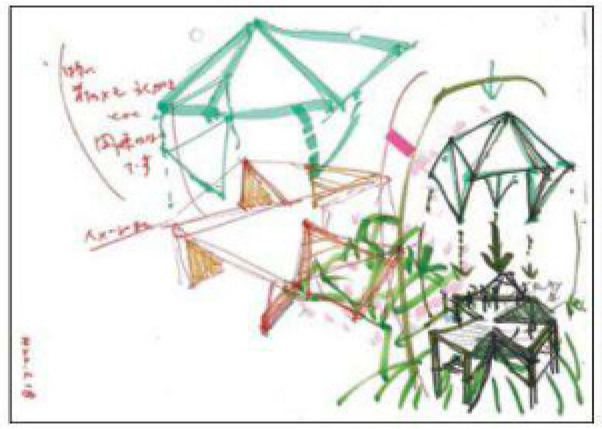
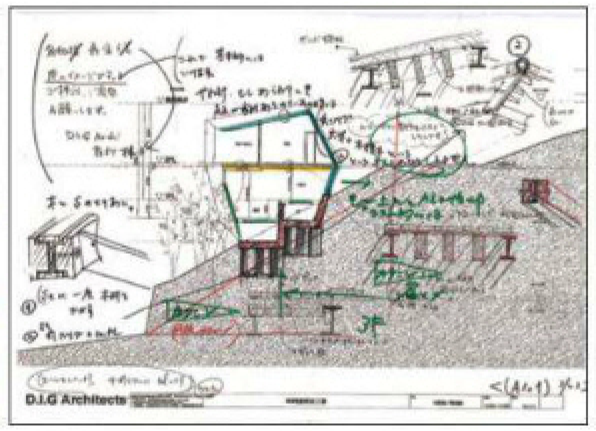
温泉を引いた浴室。酸性が強いため、浴槽は酸に強い鉄平石、壁天井は抗火石を使用。オーバーフローした温泉水を地中を通るパイプで露天風呂に注ぐことができる。隅柱をなくし、窓枠を浴槽縁より落とすことで、開放感のある浴室としている。

K HOUSE 吉村昭範＋吉村真基／D.I.G Architects　名和研二／なわけんジム (本誌22頁)

1. 敷地へのアプローチ・構造計画の変遷



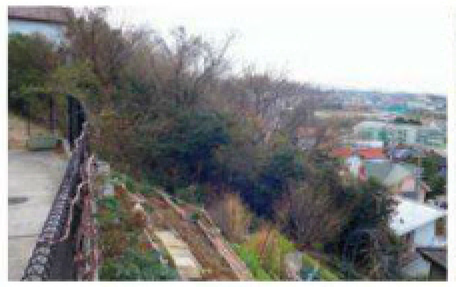

左：初期案の模型。地面の掘削をなくすための高基礎と多面体が融合した斜め基礎案。／右：ほぼ最終案に近づいた模型。左案がコスト高だったことを受け、地下部分をつくり、堀り込む量を最低限にするため先端をキャンティレバーとしている。



左：3点とも打ち合わせ時の名和さんのスケッチ。RCの土台に覆い被さるような架構を架けるアイデアは同じだが、プランは施工性と構成を優先している。／中：フロアを3段設けている案。これだとコストが合わなかった。／右：最終案に近いフロアを2段設けている案。キャンティレバーの張り出しが大きく、また2階レベルが斜面から接続するように設えられている。

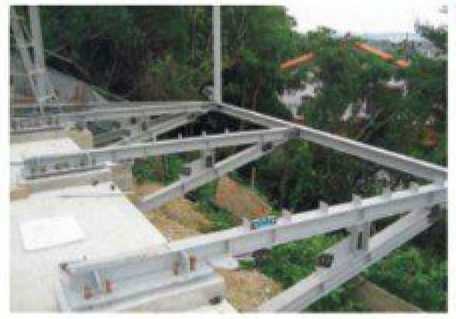
2. 建て方風景



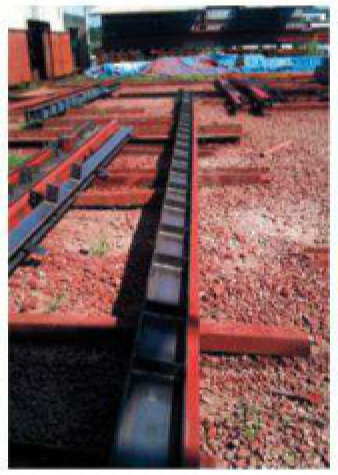

左：着工前の敷地の様子。ほぼ崖のような状況。／右：平らな敷地を最小限確保し、杭を打設。



1階と玄関レベルにコンクリートを打設。




左：1階の土台からキャンティレバーで張り出し、上部の架構を支える。／右：梁が複数集まる柱頭ピース。写真は鉄骨製品検査時のもの。




左：ブリッジに用いられた長さ10mのH鋼。梁成199mm、幅150mm。／右：鉄骨の架構が組み上がってきた。屋根を受ける柱は仮設。




左：下地を設置していく。屋根を受ける仮設の柱はなくなった状態。／右：竣工後、傾斜地より見上げる。

PATIO 矢板建築設計研究所 (本誌32頁)



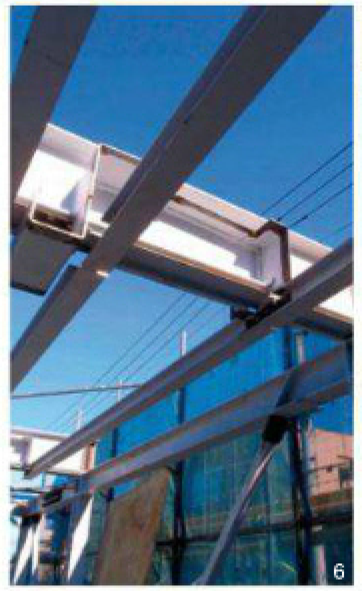


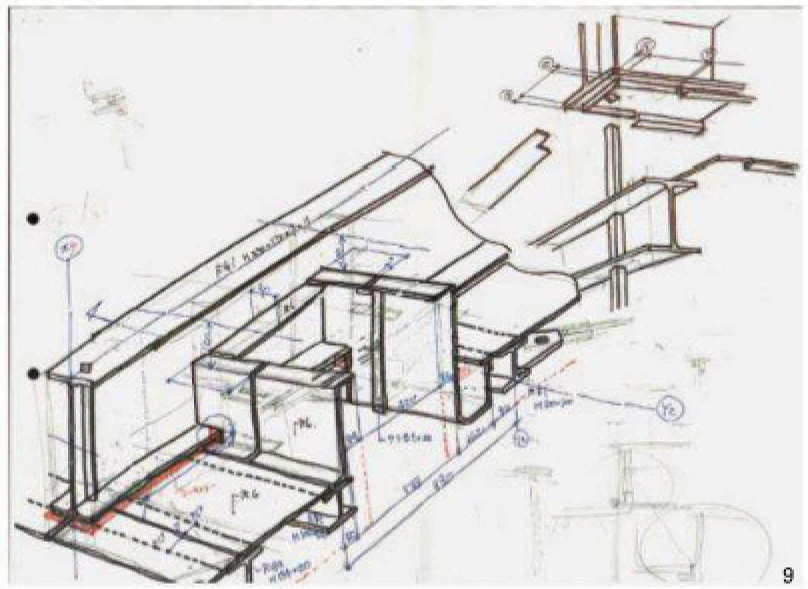

今回、2階が一体の空間として連続した壁によって囲まれていることを表現するため逆梁としている。
1：ピン柱と取り合う部分の大梁の加工。H鋼のフランジ下端とウェブが、差し込まれるピン柱の形状に切り欠かれている。
2：事前に工場で梁に溶接されたピン柱。■-40×40mmの無垢の鋼材を45度回転し、材の対角の長さを利用することで、軸組方向の剛性を高めている。
3：現場でピン柱に大梁を差し込み、組み立てている様子。
4：接合部。組み立て後、現場溶接としている。／5：鉄骨建て方の全景。



1. 大梁（逆梁）とピン柱の取り合い

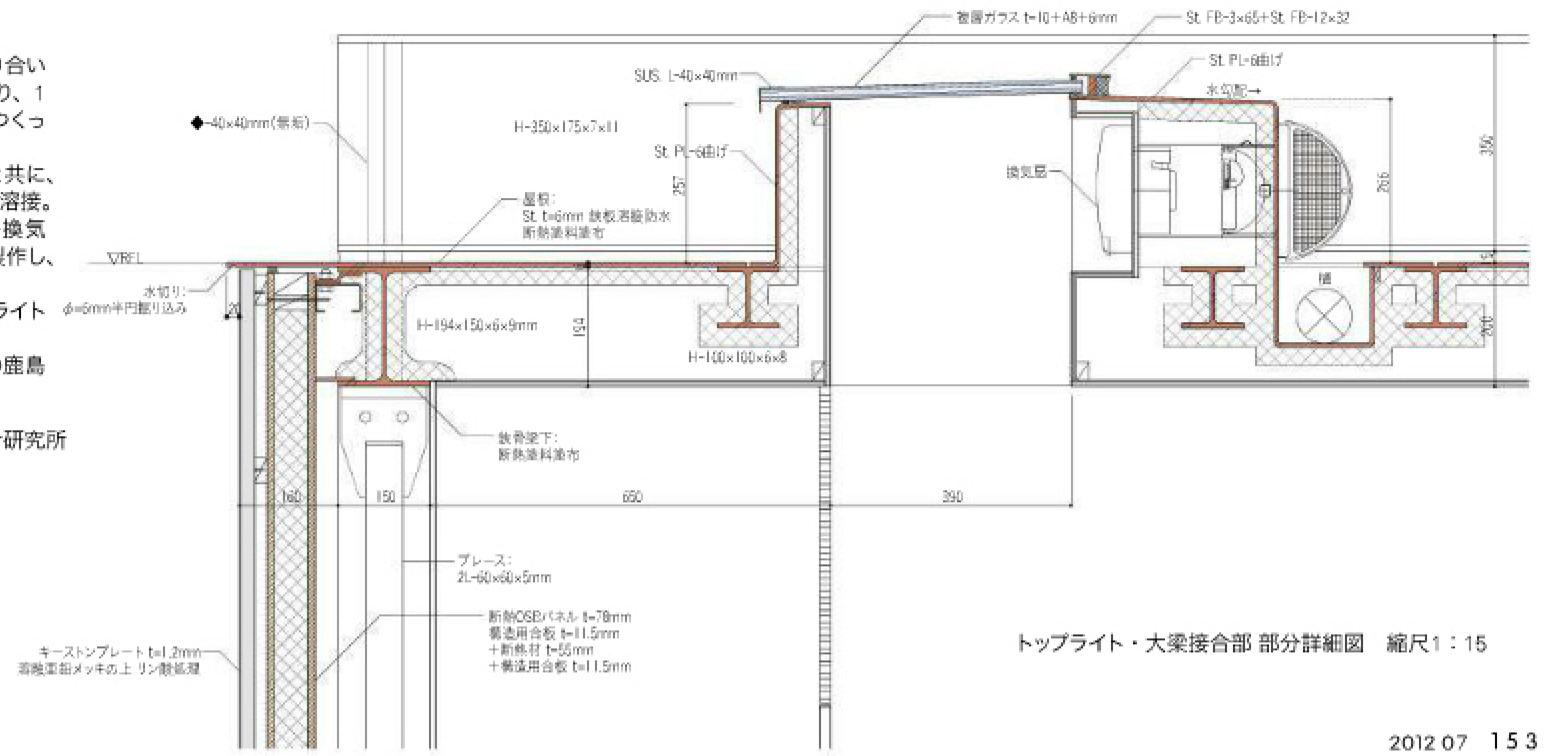
2. 屋根と一体の鋼鉄製トップライト



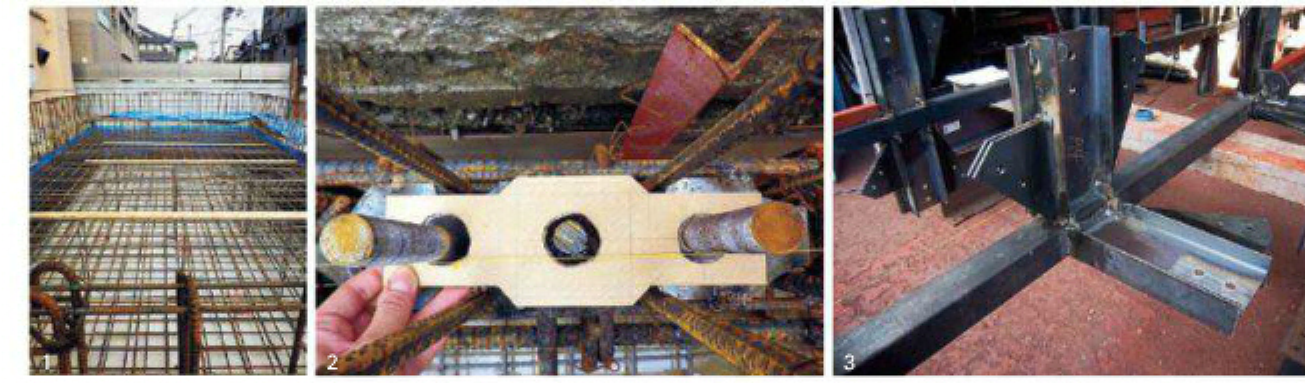
6：トップライトと大梁との取り合いは、あらかじめ溶接されており、1枚のプレートを曲げて樋までつくっている。
7：厚さ6mmの屋根の鋼板と共に、トップライトの三方枠を現場で溶接。写真手前の円柱はキッチンの換気扇用スリーブで、スチールで製作し、屋根に溶接した。
8：ガラスを取り付けたトップライトの完成形。
9：施工を担当した日南鉄構の鹿島正社長による施工スケッチ。

本頁写真提供／矢板建築設計研究所



トップライト・大梁接合部 部分詳細図　縮尺1：15

1. 基礎工事



1：交通量の多い幹線道路からの振動対策のため、地盤改良の代わりに基礎耐圧版の厚さを1,200mmと厚くしている。基礎より立ち上がるのは1階の腰壁となる根巻柱脚用の鉄筋。／2：ベースプレート原寸模型を用い、柱アンカーボルトの施工誤差をチェック。薄い壁厚を実現するため、柱の精度管理を通常よりも厳格化する必要があり、その一環として行なった。／3：■75mmの柱とH-150×75×5×7の梁が接合される同断面の梁ブラケット部。鉄骨製作工場にて事前に加工。精度管理の厳格化の一環として、柱の曲がりの管理許容値は通常よりも1mm小さい、4mmとした。

2. 建て方工事



4：建て方状況。／5：柱と一体になったH型鋼の梁ブラケットへ、高力ボルトでH-150×75×5×7の梁を取り付け、柱同士をつないでいく。／6：内外仕上げを含んだ腰壁上部の壁厚106.5mmに対応するため、ブレースにはフラットバーを採用している。ブレースのサイズは階によってそれぞれに異なる。／7：腰壁以外の部位を対比的に薄くするため、柱は75mm角の無垢鋼材を使用。また梁幅、仕口共に75mm幅。／8：柱脚と鉄筋取り合い部分の施工状況。柱脚部には、柱を根巻柱脚用コンクリートと一体化し、柱に発生する引張力を基礎に定着された鉄筋へ伝達できるように、スタッドボルトが取り付けられている。



9、10、11：左から順に1階、2階、3階をほぼ同位置から撮影したもの。地面からの高さ、階高、周辺環境の違いに合わせ、天井高や腰壁高さを変化させ、場所の質が異化させている。腰壁高さは行為・身体、まちのスケールに合わせた。／12：3層をつなぐ螺旋階段は建て方完了後に据付け、手摺りは現場溶接にて取り付けている。また踏板・ブラケット共に端部をr=30mmのフィレット加工、手摺りは曲げ木椅子のような大きなカーブをもたせることで家具に似たフォルムとし、インテリアとの親和性を高めている。*

3. 開口部製作

13：ステンレス製作建具モックアップ。一体でありながら上下に異なる機構となるため、強度と水密性能を確保しつつ最小限の見付けになるように、加工可能寸法とディテールの関係に注視した。／14：チームによる打合せを繰り返しながら製作。金属部材製作所による仕上げと使用感への視点、精密板金加工所による技術的な視点により、建具の完成度を上げていく。／15：厚さ250mmの腰壁上に「置く」ように開口部を設置する。製作サッシの本体厚さは最大部で73.5mm。

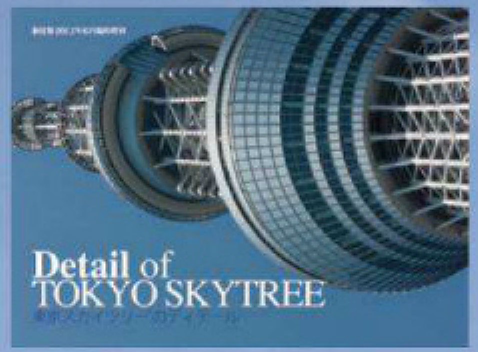


1〜11、13〜15写真提供：木村松本建築設計事務所　12写真撮影：新建築社写真部

新建築2012年6月臨時増刊

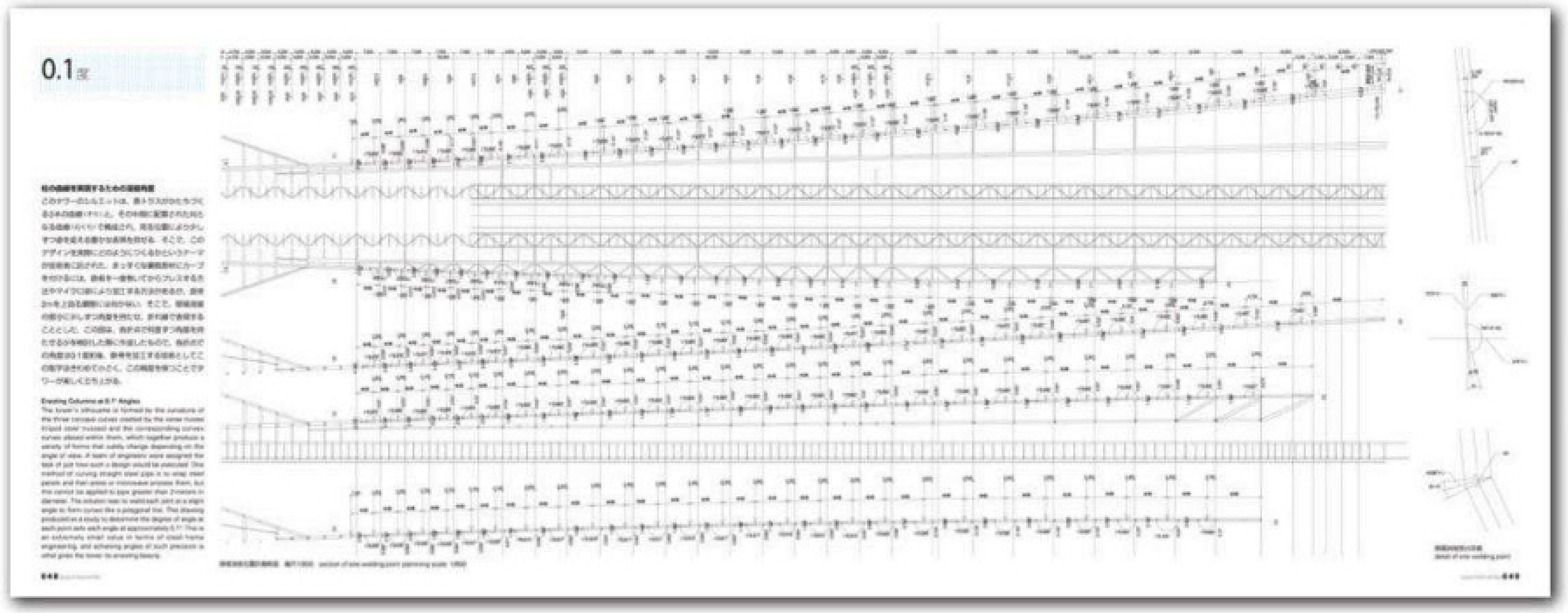
Detail of TOKYO SKYTREE®

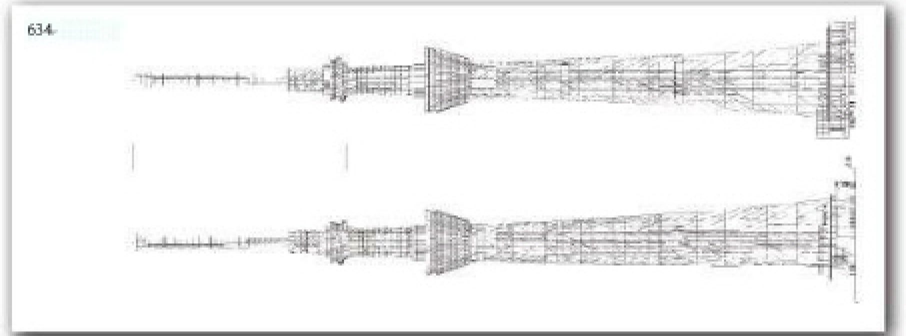
東京スカイツリー®のディテール

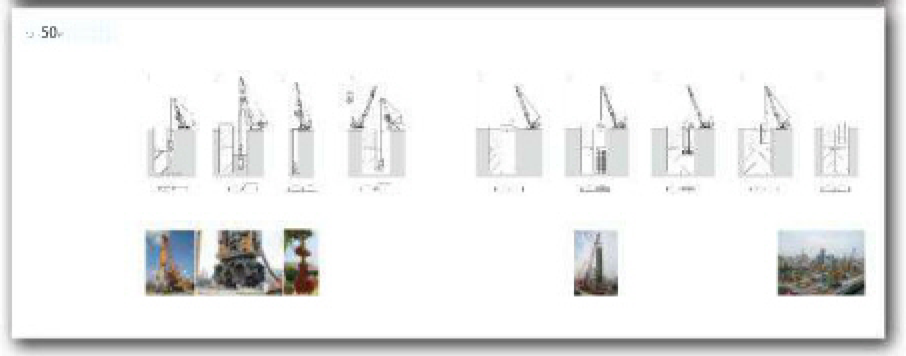


好評発売中
定価3,500円（税込み）
A4変型判横／168頁／和・英併記

東京スカイツリー®公認

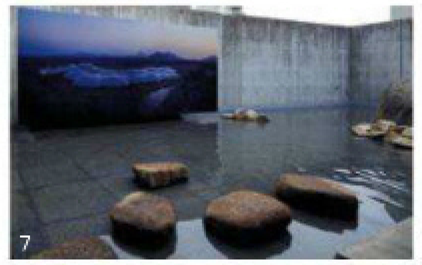






2012年，世界一の自立式電波塔が竣工した——「東京スカイツリー」は634mという高さもさることながら，そこに注がれる技術やデザインなど，特筆すべき点が数多くあり，建築界でも注目を集めるものです．そうした他の建築に比類なき技術を建築のデザインへと昇華した，日本発のタワーとして注目されています．このプロジェクトを建築的な専門の視点を生かし，図面を主体とした誌面にまとめました．
「東京スカイツリー」にまつわる数字をキーワードに，図面，撮り下ろし写真，和・英併記のテキストなどでタワーを徹底解剖．設計コンセプトである「時空を超えたランドスケープの創出」にふさわしい，完全保存版となる1冊です．（編）

発行：株式会社新建築社　〒100-6017　東京都千代田区霞が関三丁目2番5号　霞が関ビルディング17階
tel. 03-6205-4380（代表）fax. 03-6205-4386　e-mail: shinkenchiku@japan-architect.co.jp　URL: http://www.japan-architect.co.jp/





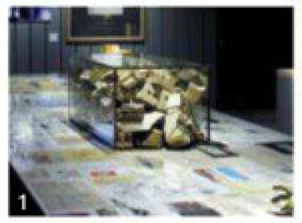
7：会場中庭。「ゲストハウス PODO Hotel」の写真と合わせて水が張られた。／8：伊丹氏の書斎や愛用品も展示。

「伊丹潤展　手の痕跡」開催中

会期　6月23日まで
会場　TOTOギャラリー・間（東京都港区）
URL　http://www.toto.co.jp/gallerma/ex120417/index.htm

昨年6月に急逝した伊丹潤氏の回顧　。処女作「母の家」（1971年）から、韓国・済州島で現在も進行しているプロジェクトまで、24作品を　示している。
「手の痕跡」という　覧会タイトルに表れているとおり、自らを手の建築家だと語った伊丹氏の作風がA2サイズに描かれた作品のドローイングや、基本設計の段階で描かれたA4サイズを主とするスケッチ、さらに手近にあったのであろう裏紙やレシートに描かれた無数のスケッチが、会場内に　開される。
会場上階は主に2000年以前につくられた日本における作品、下階は1998年以降に韓国で建てられたプロジェクト紹介となっているが、氏の描くスケッチはさまざまな描き方はあるものの、一貫している印象を覚える。
そのほかドローイングの横に置かれた縮尺1/50の模型や写真、上映されている映像が作品理解を助けてくれる。　示方法はシンプルであり、特徴的な取り組みは見当たらない。しかし逆にそのことが、造形美をもちつつ力強い氏の作風をストレートに伝えるものとなっている。

写真撮影／
1、3〜8：Nacása & Partners
2：本誌編集部

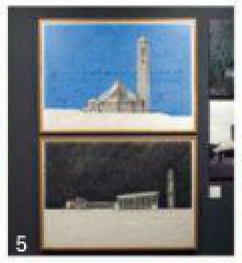












1：事務所で実際にあった「ジャンクボックス」。設計中につくられた1/200の模型が入れられている。／2：テーブルにところ狭しと並べられた大量のスケッチ。／3：「空の教会」の模型、写真、ドローイング。模型の設置方法は、「空の教会」をはじめとする会場下階は「天から吊すように」、6など上階のものは「地から支えるように」それぞれ検討された。／4：会場風景。中心の壁は「3つの美術館〈風〉」を再現。／5：ドローイング近景。／6：「彫刻家のスタジオ」の展示。模型足下には伊丹氏が多用した庵治（あじ）石が置かれている。

「大辻清司フォトアーカイブ 写真家と同時代芸術の軌跡 1940-1980」開催中

会期　6月23日まで
会場　武蔵野美術大学美術館 展示室2（東京都小平市）
URL　http://mauml.musabi.ac.jp/museum/archives/1406







左：1953年に連載された『アサヒグラフ』の「APN」連載頁。誌面右上の口絵写真が大辻氏が撮影したもの。／中：第2部「表現の現場から」。／右：並立して展示された「間もなく壊される家」（左）のスライドと、「上原通りの住宅」ができる過程を収めた動画。

戦後の多分野の芸術と関わり、多くの作品を残してきた写真家、大辻清司氏。彼が半世紀に渡り収めた膨大なネガフィルムや作品は、2008年にご遺族により武蔵野美術大学に寄贈され、この4年間、同学にて分析、調査がなされてきた。本　では、そのうち大辻氏が少年期にまとめたアルバムを発端とした1940〜80年のアーカイブを3部構成で紹介。また同時代芸術と深く関わってきた大辻氏の写真を通し、時代の潮流を辿る試みでもある。コレクションの中にはプリントとして発表されていないものもあり、デジタルアーカイブ化し、プロジェクターやタブレット端末などで観賞できる　示形態も試みられている。
はじめに「写真家の誕生」と題された第1部では、初期代表作「陳列窓」、造形作家の斎藤義重らと共作した『アサヒグラフ』の連載「APN」などを　示。ものを凝視する特有の視点が活動初期から垣間見える。第2部では、毎回多分野のアーティストと共作した「ストロンチュウム 90」、前衛美術グループ「具体」の活動スナップを通じ、氏が記録した同時代芸術の活動を紹介する。徐々にものから環境へと意識が変遷したその活動を追うように、第3部では建築や風景写真を紹介。中でも興味深いのは「間もなく壊される家」「そして家がなくなった」と、それに並列して　示される自邸「上原通りの住宅」（『新建築』7701）竣工当時の姿を収めた「住まいができたら」である。家が壊される姿、また建ち上がる姿の両方をつぶさに観察する視点は、来場者に家が人格化されていくような感覚を与える。
これまであまり公開されてこなかった多くのフィルムや映像を通じ、大辻氏の多彩な視点、また時代を築いてきた前衛的芸術を迫力をもって感じられる　覧会である。









1：「少年期のアルバムより」1940年頃／2：「陳列窓」1956年。1、2は第1部にて展示されているもの。／3：村上三郎「通過」1956年。／4：「そして家がなくなった」1975年。
1〜4写真提供：武蔵野美術大学 美術館・図書館

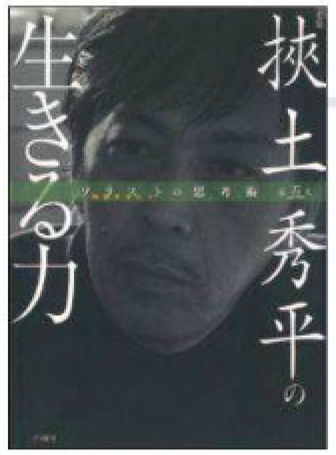


ねじれた家、建てちゃいました。
建築家アトリエ・ワンとすすめた家建て日記

橋本愛子 永井大介 著

（A5変型判／216頁／1,680円／平凡社）

「スウェーハウス」（本誌0810）の建主夫婦が、家を建てると決めてからアトリエ・ワンに設計を依頼し、竣工して住まうまでの日々を8コマのイラスト形式で描いている。多くの人にとって一生に一度の大きな買い物であるにも関わらず、家づくりは未知の世界である。本書では土地の選定・購入から始まり、ハウスメーカーや工務店、建築家の検討など、相当な試行錯誤の様子が描かれる。また何かが決まってできていくたびに「達成感」のような感情が、かわいいイラストから伝わってくる。自分の納得のいく家をつくるには膨大なエネルギーが必要だということを再認識させられると同時に、建築は建主がいるからこそできるもの、という当たり前でシンプルなことを本書は思い出させてくれる。さまざまな人の、実にポジティブな熱意から生まれた「スウェーハウス」という住宅は幸せものである。

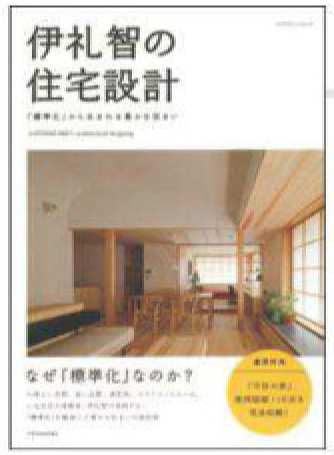


【ソリストの思考術】第五巻
挾土秀平の生きる力

挾土秀平 著

（四六判／224頁／1,680円／六耀社）

国民生活を豊かなものにしたと思われてきた資本主義経済の中で、その原理に載らない日本の伝統文化が多々失われつつある。左官という職業もそのひとつ。語る術のない職人が多い中、土の仕事に夢や希望や未来を純粋にもち続け、自らの考え方を発信し続けている左官職人、それが挾土秀平である。
本書には、彼の波瀾万丈な人生、猪突猛進してきた生き方、信じるものへの敬意と愛情が書かれている。そこに通底しているのは、挑み続けてきた左官の可能性と未来を信じようとする一途な思いである。絶滅危惧種だという自分が夢を実現するために何ができるのか。高山の森林を切り開いてつくり続けている「歓待の西洋室」の話や、親ばかならぬ親方ばかになるという4人の弟子たちへの想い。数年先ではなくさらに先の未来へ希望をつなごうとする姿に、生き抜くことを教えられる。



伊礼智の住宅設計
「標準化」から生まれる豊かな住まい

伊礼智 著

（A4判／480頁／3,990円／エクスナレッジ）

建築家が住宅を設計する時、建主と向き合いその敷地を読み込み、世界にひとつだけの住まいをつくろうとする。しかし設計者が経験を積む中でたどりついた優れた仕組みは一度限りとするのではなく、その完成度を上げていくべきではないか。それは効率につながるだけでなく、建築家の「作風」とも呼べるべきものとなるはずである。そうして設計の標準化に取り組んできた伊礼氏の設計手法が本書に凝縮されている。標準化は、たとえば玄関周りの扉と収納の関係、階段室なら廻り階段と直進階段の場合、リビング回りの家具や木製建具などさまざまな納まりや部屋単位で行われ、状況に応じて柔軟に対応できる。そうした標準化と優れた設計から生まれた「守谷の家」（本誌1005）の実施設計図、現場詳細図一式が特別付録として掲載されており、見応えも十分。多くの設計者に参考となってほしい。



がっこう

大迫 弘和 文と詩／高松 伸 絵

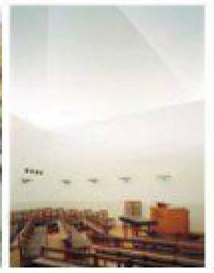
（四六判／240頁／2,100円／学芸出版社）

建築家高松伸氏のドローイングといえば、初期作品ARK（『新建築』8307）やSYNTAX（『新建築』9005）のファサードを鉛筆の濃淡で塗り込めたものが思い浮かぶ。本書では、それらとは趣の異なる「がっこう」を描いた静謐ながら楽しげな挿絵が教育者大迫弘和氏のストーリーに添えられている。主人公ミカパーオと重い病気を抱えたルンが旅の途中で出会い、「ほんとうのがっこう」を探しに行く。彼らが訪れるのは先生が生徒である「逆転の学校」、すべての教師がことばを教える「ことばの学校」といった不思議な学校ばかり。そして最後にたどり着く「希望の学校」。東日本大震災を機に書かれた本書は今もち得る希望を力強くうたっている。淡々と交わされる会話は、学校について考えさせると同時に自分自身と向き合うきっかけを与えてくれる。子どもだけでなく、大人たちへおすすめしたい。

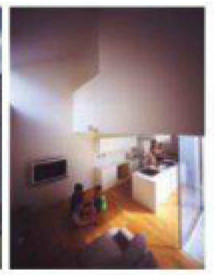
JIA近畿 第7回関西建築家新人賞発表

日本建築家協会近畿支部は、45歳以下の建築家を対象にした第7回目の新人賞の受賞者を発表し、魚谷繁礼氏と堀部直子氏が受賞した。
魚谷氏の受賞対象作品は「西都教会」、堀部氏は「はつが野の家」。
今回の新人賞には21点の応募があり、審査は出江寛氏（審査委員長）、竹山聖氏、宮本佳明氏の3氏が努めている。


魚谷繁礼氏。

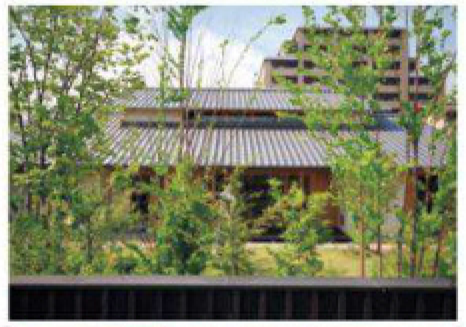


西都教会。


堀部直子氏。



はつが野の家。

第8回（平成23年度）中国建築文化賞発表

日本建築学会中国支部では、中国地方の建築文化の発　に顕著な貢献が認められる活動を表彰している。
平成16年度に創設され、第8回目（平成23年度）となる今回は、次の3作品の表彰が決定した。
【意匠部門】▷「川崎祐宣記念講堂」（岡山県倉敷市）＝門谷和雄　田代真也／竹中工務店広島一級建築士事務所
【住宅部門】▷「今の家」（岡山県岡山市）＝神家昭雄／神家昭雄建築研究室
【住宅部門】▷「閉じて開く家」（広島県広島市）＝古本竜一／古本建築設計
今回の審査委員は、在永末德氏、清田誠良氏、松島日出雄氏、松本静夫氏、山田暁氏、山本春行氏の6名。
意匠部門は周囲の景観に調和し、意匠性、独創性に優れている一般建築作品。住宅部門は地域の特性を活かし、意匠性、独創性、居住性に優れている住宅を対象としている。



「今の家」（設計：神家昭雄）。

第32回 東北建築賞作品賞発表

東北地方においてその建築文化や環境形成の向上に貢献し、地球環境時代に相応しい優れた建築作品、東北地方で発表された将来性が期待される研究活動、その他建築分野にかかわる重要な業績を表彰する東北建築賞が発表された。
小規模建築物部門10点、一般建築物部門13点の全23点の作品が審査対象。審査は、作品賞、研究奨励賞共に10名程度の選考委員により実施される。下記が受賞一覧。
【作品賞】▷「森を奔る回廊」（宮城県仙台市）＝都市建築設計集団／UAPP　▷「新田の家」（青森県青森市）＝フクシアンドフクシ建築事務所　▷「長楽寺禅堂」（福島県福島市）＝竹中工務店設計部　▷「鶴岡まちなかキネマ」（山形県鶴岡市）＝設計・計画高谷時彦事務所　▷「ねぶたの家　ワ・ラッセ」（青森県青森市）＝molo・ディーディーティー（仲田康雄）・フランク・ラ・リヴィエレ アーキテクツ　▷「村山市総合文化複合施設『甑葉プラザ』」（山形県村山市）＝計画・設計工房＋日総建　▷「水の町屋　七日町御殿堰」（山形県山形市）＝本間利雄設計事務所＋地域環境計画研究室
【特別賞】▷「旧仙台領内の300年継承住宅」（岩手県胆沢郡金ケ崎町）＝大沼正寛＋伊藤邦明都市建築研究所　▷「あきたチャイルド園」（秋田県秋田市）＝サムコンセプトデザイン一級建築士事務所

ゼロ・エネルギー住宅に補助金
——環境共創イニシアチブ、日本サステナブル建築協会、環境共生住宅推進協議会が共同事業

環境共創イニシアチブと日本サステナブル建築協会、環境共生住宅推進協議会は3者共同事業による補助制度を発表した。建築主または所有者を対象とする「ネット・ゼロ・エネルギー・ハウス支援事業」（1戸あたり350万円以内）と、中小工務店を対象とする「住宅のゼロ・エネルギー化推進事業」（1戸あたり165万円以内）のふたつがある。いずれも住宅のゼロ・エネルギー化を目指し、ZEB実現のための高性能設備機器や、制御機構の導入に対して補助を行うもの。
http://www.zero-ene.jp/



塚田眞樹子　Makiko Tsukada

1961年北海道生まれ／1986年北海道大学工学部建築工学科卒業／1986～89年大林組構造設計／1989～93年竹山実建築綜合研究所／1993～94年坂茂建築設計／1995年塚田眞樹子建築設計設立／2004年「V&V HOUSE」で第25回INAXデザインコンテスト金賞受賞／2008年「KONDO HOUSE」で第29回INAXデザインコンテスト銅賞受賞／2009年「S&S HOUSE」で第54回神奈川建築コンクール優秀賞受賞

塚田眞樹子建築設計　〒177-0042 東京都練馬区下石神井6-12-15　tel. 03-5372-7584　fax. 03-5372-7862
info@makikotsukada-architects.jp　http://makikotsukada-architects.jp



吉村昭範　Akinori Yoshimura　　吉村真基　Maki Yoshimura

（吉村昭範・右）1975愛知県生まれ／1998年早稲田大学理工学部建築学科卒業／2000年早稲田大学大学院古谷誠章研究室修士課程修了／2000～04年鈴木了二建築計画事務所／2005年D.I.G Architects設立／現在、早稲田大学芸術学校非常勤講師、名古屋市立大学非常勤講師
（吉村真基・左）1975年東京都生まれ／1998年早稲田大学理工学部建築学科卒業／2000年早稲田大学大学院石山修武研究室修士課程修了／2000年～04年FOBA（梅林克）一級建築士事務所／2005年D.I.G Architects設立／現在、名古屋市立大学非常勤講師、愛知淑徳大学非常勤講師

2006年「House Seven Steps」で日本建築学会東海賞／2006年「SHOP Y」でSDレビュー 2006 鹿島賞／2008年「フクシマモデル」でSDレビュー 2008 SD賞（吉村真基）／2010年「M HOUSE」で第17回愛知まちなみ建築賞／「Sunlight of Calm」で2011年すまいる愛知住宅賞入賞、2012年第19回愛知まちなみ建築賞

D.I.G Architects　〒464-0832 名古屋市千種区山添町1-10-3　tel. 052-753-7777　fax. 052-753-7778
bureau@dig-arch.com　http://www.dig-arch.com/



矢板久明　Hisaaki Yaita　　矢板直子　Naoko Yaita

（矢板久明・右）1955年生まれ／1982年東京大学大学院修士課程修了（廣部研究室）／1982 ～ 93年谷口建築設計研究所／1994年矢板久明建築設計研究所設立／1995 ～ 99年工学院大学非常勤講師／2004年～矢板直子と共同主宰／2005年矢板建築設計研究所に改組
（矢板直子・左）1958年生まれ／1982年日本女子大学家政学部住居学科卒業／1982 ～ 2002年アーキブレーン建築研究所／2002年内田直子建築研究所設立／2005年～矢板建築設計研究所共同主宰

1999年「ケアハウス・リバティーガーデン」（『新建築』9908）で彩の国さいたま景観賞・越谷市建築景観賞受賞／2000年『CASA TRIADE』（本誌9806）で住宅金融公庫賞受賞

矢板建築設計研究所　〒150-0001 東京都渋谷区神宮前3-42-8-402　tel.03-5775-7217　fax.03-5775-7218
mail@yaita-associates.com　http://www.yaita-associates.com/



寳神尚史　Hisashi Hojin

1975年神奈川県生まれ／1997年明治大学理工学部建築学科卒業／1999年同大学大学院修了／1999年～ 2005年青木淳建築計画事務所／2005年日吉坂事務所設立／2010年「house T」で東京建築士会住宅建築賞受賞

日吉坂事務所　〒108-0072 東京都港区白金6-14-15-101　tel. 03-6666-1011　fax. 03-6666-1022
office@hiyoshizaka.com　http://www.hiyoshizaka.com

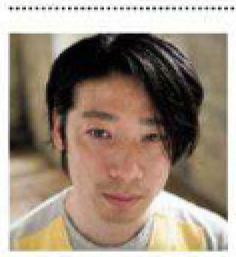


木村吉成　Yoshinari Kimura　　松本尚子　Naoko Matsumoto

（木村吉成・左）1973年和歌山県生まれ／1996年大阪芸術大学芸術学部建築学科卒業／1997年同大学根岸研究室研究生／1997～98年狩野忠正建築研究所／2003年木村松本建築設計事務所設立／2009年～大阪工業技術専門学校・大阪市立大学非常勤講師
（松本尚子・右）1975年京都府生まれ／1997年大阪芸術大学芸術学部建築学科卒業／1999年同大学根岸研究室研究生／2003年木村松本建築設計事務所設立／2009年～大阪市立大学、2011年～滋賀県立大学非常勤講師

「3人の作家のためのアトリエと住宅」で2008年SD review入選

木村松本建築設計事務所　〒558-0011　大阪市住吉区苅田3-10-30-702　tel. 06-6691-3220
kimura@kmrmtmt.com（木村）　matsumoto@kmrmtmt.com（松本）　http://kmrmtmt.com



谷尻誠　Makoto Tanijiri

1974年広島県生まれ／1994年穴吹デザイン専門学校卒業／1994 ～ 99年本兼建築設計事務所／1999 ～ 2000年HAL建築工房／2000年建築設計事務所Suppose design office設立／現在、穴吹デザイン専門学校非常勤講師／2003年JCDデザインアワード新人賞受賞／「毘沙門の家」で2003年GOOD DESIGN賞、ひろしま街づくりデザイン賞受賞／2006年「LA.TERRASSE」でGOOD DESIGN賞受賞／2009年「アルティアム 谷尻誠展」でJCDデザインアワード銀賞受賞／2009年「守山の家」でAR award特別賞受賞／「上大須賀の家」（『新建築』0912）で2009年INAXデザインコンテスト銀賞、2010年住まいの環境デザインアワード/環境デザイン優秀賞受賞／2010年「Nature Factory in DIESEL denim gallery」でTHE INTERNATIONAL ARCHITECTURE AWARD ／「豊前の家」で2010年モダンリビング大賞、2011年福岡県美しいまちづくり建築賞大賞受賞／「深川の家」で2012年INAXデザインコンテスト銀賞受賞／その他受賞多数

suppose design office　本社：〒730-0843 広島県広島市中区舟入本町15-1 725ビル　tel. 082-961-3000　fax. 082-961-3001
東京オフィス：〒151-0063 東京都渋谷区富ヶ谷1-21-8-403　tel. & fax 03-6416-8581
info@suppose.jp　http://www.suppose.jp



山口隆　Takashi Yamaguchi

1953年京都府生まれ／京都大学工学部建築学科卒業／安藤忠雄建築研究所を経て独立／1988年ピーター・アイゼンマン、ダニエル・リベスキンドのパートナーやコロンビア大学大学院 の理論家達と共に研究グループARXを結成。ニューヨーク・ジュネーヴ・ベルリン・リスボン・日本を結んだネットワーク上で活動を始める／1996年山口隆建築研究所設立／コロンビア大学GSAPP客員教授、ハーバード大学GSD客員研究員を経て、現在に至る／現在、大阪産業大学大学院工学研究科教授。日本建築学会正会員、日本建築家協会正会員JIA登録建築家、ルーマニア科学アカデミー名誉会員／1992年ドイツ ベルリンシュプレーボーゲン都市開発国際コンペ（国際建築家連盟公認）にてARXとして入賞／2001年ベネディクタス賞入賞・大賞受賞（アメリカ建築家協会主催、国際建築家連盟協賛、DuPont共催）／2004年リキッド・ストーン：アーキテクチャー・イン・コンクリート展入選（全米建築博物館主催）／2005年AD 5 ans Exposition入選（フランスVOGUE主催）／2005年パドヴァ国際建築ビエンナーレ バーバラ カポキン賞（国際建築家連盟公認）／2006年ザルツブルグ国際招待指名コンペSTERNBRAUEREI入選／2007年ワールドメディアフェスティバル　Public Relation（広報）部門銀賞受賞／2011年「BREATHING FACTORY」（『新建築』0905）にてデダロ・ミノス国際建築賞入選

山口隆建築研究所　〒572-0862　大阪府寝屋川市打上宮前町3番2-904
ya@yamaguchi-a.jp　http://www.yamaguchi-a.jp/index.html



宇野求　Motomu Uno

1954年東京都生まれ ／1978年東京大学工学部建築学科卒業／1984年同大学院博士課程修了／1984～85年アトリエファイ建築研究所／1985年～フェイズアソシエイツ設立／1994年千葉大助教授、2001年千葉大教授、2007年東京理科大学教授、現在に至る／1992年「MURAMATSU HOUSE」（本誌9107）で第9回吉岡賞／1998年「豊橋駅東口駅前広場」（『新建築』9812）で日本建築美術工芸協会特別賞／2002年「VILLA FUJII」（『新建築』0010）で日本建築学会作品選奨、American Wood Design Award Best Residential of the Year ／主な著書に『東京計画2001』（共著、2001年、鹿島出版会）、『ストリートスマートな建築へ』（2008年、鹿島出版会）

フェイズアソシエイツ／東京理科大学　〒106-0046 東京都港区元麻布3-4-29-601　tel. 03-5423-5861　fax.03-5423-5861
muno@gol.com　http://www.phase-a.com



竹内昌洋　Akihiro Takeuchi

1955年東京都生まれ／1979年東京大学工学部建築学科卒業／1981年同大学院修士課程修了／1981～85年安藤忠雄建築研究所／1985年～93年フェイズアソシエイツ（現在、兼務）／1993年竹内昌洋設計研究所設立、現在に至る／NPO地域再創生プログラム会員

竹内昌洋設計研究所　〒151-0053 東京都渋谷区代々木3-5-7シグマロイヤルハイツ406号



青木豊実　Toyomi Aoki

1975年静岡県生まれ／1998年千葉大学工学部建築学科卒業／2000年同大学院修士課程修了／2003～09年フェイズアソシエイツ（現在、兼務）／2006年～同事務所パートナー／2010年EAA inc設立／2006年～千葉大学工学部都市環境システム学科非常勤講師

EAA inc　〒103-0025 東京都中央区日本橋茅場町2-13-8第一大倉ビル3階　tel. 03-6206-2615　fax.03-6206-2616
aoki@eaa-inc.com　http://www.eaa-inc.com

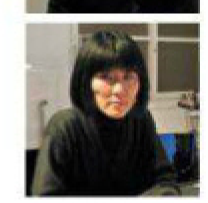


庄司寛　Hiroshi Shoji

1961年東京都生まれ／1984年早稲田大学理工学部建築学科卒業／1984～86年フォルム設計／1986～2002年ESPAD環境建築研究所（1994年同取締役・Partner）／2002年庄司寛建築設計事務所設立、主宰／2007年日本建築学会「ユビキタス建築・都市特別研究委員会」委員／2008年日本建築学会「建築・都市分野における情報インフラ構築特別研究委員会」委員／2010年～日本建築学会「建築・都市の情報基盤と社会システム特別研究委員会」委員／2012年～日本建築学会「震災復興・スマートシティ特別研究委員会」委員／「都筑の家」（本誌0711）にて2007年第52回神奈川建築コンクール特別賞、2008 年第11回TEPCO快適住宅コンテスト「作品部門」入賞、2009年住まいの環境デザイン・アワード2009 特別賞受賞／「守谷の家」（本誌0904）にて2009年日本建築家協会（JIA）優秀建築選／「吉祥寺南町の家」（本誌1107）にて2011年日本建築家協会（JIA）優秀建築選

庄司寛建築設計事務所　〒150-0043 東京都渋谷区道玄坂 2-15-1-1316　tel. & fax. 03-3770-3557
s-design@yd6.so-net.ne.jp　http://www.shoji-design.com



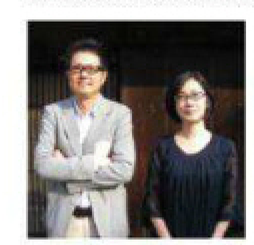


高山正樹　Masaki Takayama　　岡由実子　Yumiko Oka

（高山正樹・上）1967年東京都生まれ／1989～92年田原桂一氏に師事／1992～96年SESSA ／1996～2001年project Etre ／2001年～Etre Design主宰／2000年「シャトー・カミヤ八戸」にて八戸景観大賞受賞／2002年「シャトー・カミヤ牛久」にてフロントガラス大賞受賞
（岡由実子・下）1967年大阪府生まれ／1991年京都大学工学部建築学科卒業／1991～96年安藤忠雄建築研究所／1997～2003年東京大学大学院工学部建築学専攻安藤研究室、高山とproject Etreより協働／2003年～Etre Design

2008年「東京メトロ、新副都心線サイン計画」にてグッドデザイン賞受賞／2010年「hhhouse」にて第14回TEPCO快適住宅コンテスト作品部門優秀賞受賞

エトルデザイン　〒104-0061 東京都中央区銀座1-9-8 奥野ビル606号室　tel. 03-3563-3008　fax. 03-3563-3018
oka@etre.to　http://www.etre.to



相川直子　Naoko Aikawa　　佐藤勤　Tsutom Satow

（相川直子・右）1970年神奈川県生まれ／1994年法政大学経済学部経済学科卒業／1996年青山製図専門学校建築設計設備科卒業／1996～2003年設計事務所等勤務／2003～05年ぷらん・にじゅういち／2006年～青山製図専門学校非常勤講師
（佐藤勤・左）1965年愛知県生まれ／1990年関東学院大学工学部建築学科卒業後、新建築社／1997年SK+bb一級建築士事務所共同設立／1995年第16回SDレビュー入賞／1996年「阿蘇町農村公園アートプロジェクト」入選／1996年金津創作の森「センター施設」プロポーザルコンペコンセプト賞入賞

2005年あいかわさとうかねこデザインオフィス一級建築士事務所共同設立／2010年あいかわさとう建築設計事務所に改称／2005年第24回SDレビュー入賞

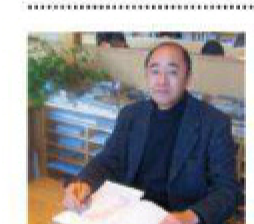
あいかわさとう建築設計事務所　〒113-0031 東京都文京区根津2-31-10 根津東邦ビル201　tel. 03-5832-9541　fax. 03-5832-9542
ask_inf@room.ocn.ne.jp　http://askdesignoffice.web.fc2.com/



須賀定邦　Sadakuni Suga

1972年東京都生まれ／1995年東京大学工学部都市工学科卒業／1996～97年カリフォルニア大学バークレー校留学／1998年東京大学大学院工学系研究科修士課程修了／1998年～竹中工務店大阪本店設計部所属／2005年「ストロングビルディング（新建築0604）」にて第50回BCS賞、第1回鈴木禎次賞大賞、第35回建築士会連合会作品展優秀賞、日本建築学会作品選集ほか受賞／2006年「全日空整備新棟（新建築0611）」にて日本建築学会作品選集／2008年「福寿園京都本店」にて日本建築学会作品選集、京都デザインアワード2010入選

竹中工務店　〒541-0053 大阪市中央区本町4-1-13　tel. 06-6252-1201（代表）　fax. 06-6263-9740
suga.sadakuni@takenaka.co.jp



横内敏人　Toshihito Yokouchi

1954年山梨県生まれ／1978年東京藝術大学美術学部建築科卒業／1980年マサチューセッツ工科大学建築学科大学院修了／1981～82年アークテクチュアル・リソーシズ・ケンブリッジ／1983～87年前川國男建築設計事務所／1991年横内敏人建築設計事務所設立／現在、京都造形芸術大学環境デザイン学科教授／1992年「飯島邸」、2001年「石和の家」で山梨県建築文化賞受賞／1996年京都市芸術新人賞、「姫路市水道資料館 水の館」（『新建築』9602）で兵庫県さわやか街づくり建築賞受賞／2002年「三方町縄文博物館」で日本建築学会北陸建築文化賞／2002年「七つの庭の家」ですまいる愛知住宅賞市長賞受賞／2004年「若王子のゲストハウス」で木の建築賞受賞／2008年京都府文化功労賞

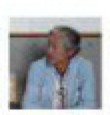
横内敏人建築設計事務所　〒606-8174 京都市左京区若王子町68番地　tel.075-761-1976　fax.075-752-3530
http://www.yokouchi-t.com/

執筆者

坪井宏嗣（つぼい・ひろつぐ）
1976年山形県生まれ／2001年東京大学工学部建築学科卒業／2003年東京大学大学院工学系研究科建築学専攻修士課程修了／2003年佐藤淳構造設計事務所／2006年坪井宏嗣構造設計事務所設立

満田衛資（みつだ・えいすけ）
1972年京都府生まれ／1997年京都大学工学部建築学科卒業／1999年京都大学大学院工学研究科建築学専攻修了／1999年佐々木睦朗構造計画研究所入所／2006年満田衛資構造計画研究所設立／2011年「中川政七商店新社屋」（『新建築』1005）にて第22回JSCA賞新人賞受賞／2011年「tomarigi 梅田阪急ビルスカイロビー」（同1009）JSCA関西2011構造デザイン発表会最優秀作品賞受賞／主な著書に『ヴィヴィッド・テクノロジー』（共著、2007年、学芸出版社）

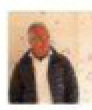
齋藤由和（さいとう・ゆわ）
1974年東京都生まれ／1997年日本大学生産工学部建築工学科卒業／1997年〜99年西沢大良建築設計事務所／2000年齋藤由和事務所設立／2003年アデザイン設立／2004年中之島新線駅企画デザインコンペ優秀賞受賞



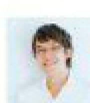
横河健（よこがわ・けん）
1948年東京都生まれ／1970年ワシントン州立大学交換留学生／1972年日本大学芸術学部美術学科卒業／1976年設計事務所クレヨン&アソシエイツ設立／1982年横河設計工房設立／現在、日本大学理工学部教授／1989年「日比谷公園前派出所」（『新建築』8706）で東京建築賞、都市計画局長賞受賞／1999年「グラスハウス」（同9812）で日本建築学会作品賞受賞／「CESS／埼玉県環境科学国際センター」（同0008）で2001年BCS賞、日本建築家協会環境建築賞受賞／2003年「武蔵野市立0123はらっぱ」（同0106）で日本建築学会作品選奨／2004年「トンネル住居」（同7905）で日本建築家協会25年賞受賞／「HIROO COMPLEX」複合ビルでCSデザイン賞受賞／2011年「多面体 岐阜ひるがの」（本誌1010）で日本建築家協会賞受賞



藤原徹平（ふじわら・てっぺい）
1975年神奈川県横浜市生まれ／1998年横浜国立大学工学部建設学科建築学コース卒業／2000年同大学大学院修了／2000〜12年隈研吾建築都市設計事務所／2009年〜フジワラテッペイアーキテクツラボ主宰／2010年〜NPO法人ドリフターズインターナショナル理事／2012年〜横浜国立大学大学院Y-GSA准教授



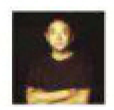
鈴木エドワード（すずき・えどわーど）
1947年埼玉県生まれ／1971年ノートルダム大学建築学科卒業／1974年バックミンスター・フラー&サダオ、イサム・ノグチ　ファウンテン&プラザ／1975年ハーバード大学大学院アーバンデザイン建築学修了／1975年〜76年丹下健三・都市・建築設計研究所／1977年鈴木エドワード建築設計事務所設立／「JR東日本 さいたま新都心駅」（『新建築』0007）で東京建築賞優秀賞、第9回公共建築賞優秀賞、第9回ブルネル賞受賞／「下鴨の家」（本誌0704）で2011年シカゴ・アテネウム・建築とデザインミュージアム 2011グリーン・グッドデザイン賞受賞



佐藤オオキ（さとう・おおき）
1977年カナダ生まれ／2002年早稲田大学大学院理工学研究科建築学専攻修了、nendo東京オフィス設立／2005年nendoミラノオフィス設立／2006年昭和女子大学非常勤講師／2009年桑沢デザイン研究所非常勤講師／2010年iFアワード（独）審査員／2012年nendoシンガポールオフィス設立、早稲田大学非常勤講師



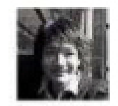
伊礼智（いれい・さとし）
1959年沖縄県生まれ／1983年琉球大学理工学部建設工学科卒業／1986年東京藝術大学美術学部建築科大学院修士課程修了／1986〜96年丸谷博男+エーアンドエー／1996年伊礼智設計室設立／現在、日本大学生産工学部居住空間デザインコース非常勤講師／「東京町家　9坪の家」（本誌0510）で2006年エコビルド賞受賞／「東京町家　町角の家」（本誌0610）で2007年エコビルド賞受賞／著者に『オキナワの家』（2004年、インデックス・コミュニケーションズ）、『伊礼智の住宅設計作法』（2009年、編集／新建新聞社　発行／アース工房）



名和研二（なわ・けんじ）
1970年長野県生まれ／1994年東京理科大学理工学部建築学科卒業／1998〜2002年EDH遠藤設計室／1999〜2002年池田昌弘建築研究所／2002年なわけんジム（すわ製作所）設立／主な著書に『ハニカムチューブの建築』（共著、2006年、新建築社）／『ヴィヴィッド・テクノロジー』（共著、2007年、学芸出版社）／『ハニカムダイナミクスの建築』（共著、2008年、新建築社）／2007年「2004」（『新建築』0612、中山英之と協働）で第23回吉岡賞受賞

竹原義二（たけはら・よしじ）
1948年徳島県生まれ／1971年大阪市立大学富樫研究室を経て、石井修／美建・設計事務所／1978年無有建築工房設立／現在、大阪市立大学大学院生活科学研究科教授／1996年第9回村野藤吾賞、2009年第8回芦原義信賞、2010年日本建築学会教育賞、2010年都市住宅学会・業績賞など多数受賞／著書に『無有』（2007年、学芸出版社）、『竹原義二の住宅建築』（2010年、TOTO出版）

石井智子（いしい・ともこ）
大阪府生まれ／1976年奈良女子大学家政学部住居学科卒業／1978年同大学大学院修士課程修了／1978〜79年高口恭行造家建築研究所／1979〜2000年石井修・美建設計事務所／2000〜02年高口恭行造家建築研究所／2002年石井智子美建設計事務所設立／現在、奈良女子大学非常勤講師



伏見唯（ふしみ・ゆい）
1982年東京都生まれ／2008年早稲田大学大学院創造理工学研究科修士課程修了／2008年新建築社入社、『新建築住宅特集』『新建築』編集部／現在、早稲田大学大学院創造理工学研究科博士後期課程在籍。フリーランスの編集者として活動



佐藤淳（さとう・じゅん）
1970年愛知県生まれ／1995年東京大学大学院工学系研究科建築学専攻修士課程修了／1995〜99年木村俊彦構造設計事務所／2000年東京大学工学部建築学科鋼構造研究室技術補佐員／2000年〜佐藤淳構造設計事務所／2010年〜東京大学大学院工学系研究科建築学専攻特任准教授

◎訂正
本誌6月号88頁において、「等々力の二重円環」のデータシート設計欄にて「植栽　溝口達也／Landscipe」の記載が抜けておりました。
訂正し、お詫び申し上げます。

編集後記

6月初旬の週末、飛騨高山で行われた「日本再発見塾」（http://www.e-janaika.com/）というイベントに出かけました。この催しは、日本各地の伝統文化や歴史に触れ、その魅力を改めて考えること「再発見」を通じて、地域活性への足がかりとなることを目的としています。
2005年に発足し、さまざまな分野の人たちが参加して、地元の行政や住民と一緒に議論が繰り広げられています。
今回は左官職人の挾土秀平さんが、小京都と呼ばれる高山の景観や街並みが崩壊の危機にあることを憂い、窮状を訴え、開催が実現したそうです。高山出身の挾土さんは、各地の仕事の中で出会う人びとが、自分を通して高山を見ていると話していました。そのイメージは、街並みは茅葺き屋根か立派な日本家屋の佇まい。美しい農村の風景や、長屋状に連なる店舗街など、古きよき日本の姿。そうした本物があると信じて疑われていないと。しかし実際は、資本主義経済が生み出した利便性や手軽さが望まれ、観光地化も進んだことで、気が付かないうちに街や風景は大きく変化していました。日本各所で起きていることですが、美しい景観や伝統がその場所の価値を支えていたことを考えると、そこに住まう人たちが変化に対してどう抑止力を発揮できるか、いま問われています。
都市部でさえ、資本主義経済の破綻を見据えて、新しい価値観を見つけるしかない状況に陥っているのですから、地域ごとに違うとはいえ、向き合うべき将来は同じだと思います。
そう思いながらまだ高山に残る素晴らしい家々の佇まいや、豊かな風景を見ていると、身近にあるものを大切にすることが、いかに社会全体の共有財産となるかを教えられます。
価値観の軸をどこに置くのか、それはそれぞれの地域の人が選択するべきなのだと分かってはいます。でも、目先の利益に左右されないことが成功する社会もあってほしいと切に願ってしまいます。自分のことを振り返ると、私たちの雑誌も、存続するための経済性を無視することはできません。でもその中身は、文化や伝統、人の思考という、そこから離れても伝えるべき価値観をひとつひとつ入れていきたい。そんなことを改めて考えました。　（pika）

バックナンバー・年間定期購読のご案内

新建築　新建築 住宅特集　JA THE JAPAN ARCHITECT

バックナンバーをお求めの方は最寄りの書店にてお申し込みください。また、下記のバックナンバー常備店にてお買い求めいただくことができます。
定期購読をご希望の方は最寄りの書店にてお申し込みください。書店でのご購入が不便な方は、弊社からお客様へ直送する「年間定期購読」をご利用ください。お申し込みは右記の年間定期購読係までご連絡下さい。

年間定期購読料（送料は弊社負担）

月刊『新建築』	¥24,000（税込）
月刊『新建築住宅特集』	¥24,000（税込）
季刊『JA』	¥10,000（税込）

株式会社 新建築社　年間定期購読係
〒100-6017　東京都千代田区霞が関3丁目2番5号
霞が関ビルディング17階
tel. 03-6205-4380　fax. 03-6205-4386
e-mail: business@japan-architect.co.jp

月刊『新建築』は1960年1月号より、月刊『新建築住宅特集』は1999年1月号より、季刊『JA』は1号（1991年春号）より目次などの内容が弊社ホームページにてご覧いただけます。

http://www.japan-architect.co.jp

バックナンバー取扱店　※書店により、在庫状況は異なります。事前にお電話で商品在庫をご確認ください。またお取り寄せも可能です。

北海道
MARUZEN & ジュンク堂書店 札幌店
（札幌市中央区）011-223-1911
コーチャンフォー ミュンヘン大橋店
（札幌市北区）011-817-4000

宮城県
ジュンク堂書店 仙台本店
（仙台市青葉区）022-716-4511
丸善 仙台アエル店
（仙台市青葉区）022-264-0151

新潟県
ジュンク堂書店 新潟店
（新潟市）025-374-4411

埼玉県
ジュンク堂書店 大宮ロフト店
（さいたま市大宮区）048-640-3111

千葉県
丸善 津田沼店
（習志野市）047-470-8313
巌翠堂書店
（習志野市）047-472-5011

東京都
三省堂書店 神田本店
（千代田区）03-3233-3312
南洋堂書店
（千代田区）03-3291-1338
丸善 丸の内本店
（千代田区）03-5288-8881
八重洲ブックセンター
（中央区）03-3281-8203
ブックファースト銀座コア店
（中央区）03-3573-8889
TSUTAYA TOKYO ROPPONGI
（港区）03-5775-1515
ブックファースト新宿店
（新宿区）03-5339-7611
○芳林堂書店 高田馬場店
（新宿区）03-3208-0241
紀伊國屋書店 新宿本店
（新宿区）03-3354-0131
デザインブックス
（品川区）03-3445-1341
ジュンク堂書店 池袋本店
（豊島区）03-5956-6111
紀伊國屋書店 新宿南店
（渋谷区）03-5361-3301
青山ブックセンター本店
（渋谷区）03-5485-5750

神奈川県
丸善 ラゾーナ川崎店
（川崎市幸区）044-520-1869

山梨県
○朗月堂本店
（甲府市）055-228-7356

富山県
BOOKSなかだ本店
（富山市）076-492-1192

長野県
□平安堂 長野店
（長野市）026-224-4545

愛知県
丸善 名古屋栄店
（名古屋市栄区）052-261-2251
ジュンク堂書店名古屋店
（名古屋市中村区）052-589-6321

京都府
大龍堂書店
（京都市中京区）075-231-3036
ふたば書房 ゼスト御池店
（京都市中京区）075-253-3151
ジュンク堂書店京都BAL店
（京都市中京区）075-253-6460

大阪府
柳々堂
（大阪市西区）06-6443-0167
□丸善 なんば OCAT店
（大阪市浪速区）06-6635-3225
旭屋書店 本店
（大阪市北区）06-6313-1192
ジュンク堂書店 大阪本店
（大阪市北区）06-4799-1090
アセンス アメリカ村店
（大阪市中央区）06-6258-3255
○紀伊國屋書店 梅田本店
（大阪市北区）06-6372-5821

兵庫県
ジュンク堂書店 三宮店
（神戸市中央区）078-392-1001

鳥取県
ブックヤードチャプター2
（米子市）0859-33-0222

広島県
○ジュンク堂書店 広島駅前店
（広島市南区）082-568-3000
○フタバ図書 MEGA祇園中筋店
（広島市安佐南区）082-830-0600
○フタバ図書 TERA広島府中店
（安芸郡）082-561-0770

福岡県
紀伊國屋書店 福岡本店
（福岡市博多区）092-434-3100
○GEN建築芸術書房
（福岡市中央区）092-524-2535
○丸善 福岡ビル店
（福岡市中央区）092-731-9000
ジュンク堂書店 福岡店
（福岡市中央区）092-738-3322

大分県
■ジュンク堂書店 大分店
（大分市）097-536-8181

書店名の頭についた記号は以下の通りです。

無印	『新建築』『新建築住宅特集』『JA』
○	『新建築』『新建築住宅特集』のみ
●	『新建築』『JA』のみ
□	『新建築住宅特集』『JA』のみ
■	『新建築』のみ
△	『新建築住宅特集』のみ
▲	『JA』のみ

新建築 住宅特集 バックナンバー

バックナンバーのお取り寄せは最寄りの書店へお申し込みください。
また、下記ウェブサイトからもご注文いただけます。
http://www.japan-architect.co.jp

株式会社 新建築社　〒100-6017　東京都千代田区霞が関3丁目2番5号
霞が関ビルディング17階
tel. 03-6205-4380（大代表）　fax. 03-6205-4386

2012 1月号

定価＝2,000円



[巻頭インタビュー]利用の構想力による“場”の生成へ　**松村秀一**　2012年以降の住まい　**島原万丈**
[作品]弘中邸(多面体・東京）／**横河健**　かみのきの家／**杉下均**　待兼山の家／**喜多主税**　Stone Roof／**隈研吾**　樹の家／**早草睦惠**　紫野／**川口通正**　東住吉の住宅／**魚谷繁礼**　西調布の家／**加藤詞史**　gate／**光本直人＋濱名直子**　シマトネリコの樹のある家／**井上尚夫**　クリスタル・ブリックⅡ／**山下保博**
[連載]建築家自邸からの家学び　第9回 前編　北嶺町の家　**真壁智治　武蔵野美術大学 高橋スタジオ　立川玲香　古田陽子　室伏次郎　室伏久子　室伏暢人**
素材再発見　第6回「植木」　**根來宏典**
[コラム]住宅の設計力　**城戸崎博孝**
近作を訪ねて　**田口知子　藤原徹平**
[エッセイ]住宅を読む　**堀越英嗣　前田圭介**
[PROCESS VIEW]クリスタル・ブリックⅡ　**山下保博**

2012 2月号

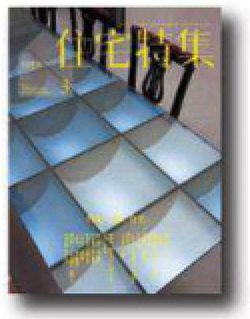
定価＝2,000円



[作品]villa A／**岡田哲史**　もみじの家／**鈴木エドワード**　Dual house／**甲村健一**　交差の家／**高砂正弘**　テラス・ハウス／**アトリエ・ワン**　国分寺の家／**谷尻誠　オーノJAPAN**　IN-IN-home／**服部信康**　K-HOUSE／**向山徹**　六甲の住居／**島田陽**　House in ABIKO／**布施茂**　法面庭の家／**井上玄**　笠の家／**長坂大**　小屋の家／**藤村龍至　オーノJAPAN**　倉庫の家／**藤村龍至**
[連載]いま、住宅をつくるときに考えること　018／**青木淳×佐伯聡子＋K.M. TAN**
建築家自邸からの家学び　第9回 後編　北嶺町の家　**真壁智治　武蔵野美術大学 高橋スタジオ　小室匡示　古田陽子　室伏次郎**
[コラム]住宅の設計力　**手嶋保**
近作を訪ねて　**堀越英嗣　前田圭介**
[エッセイ]住宅を読む　**眞田大輔　藤原徹平**
[PROCESS VIEW]六甲の住居　**島田陽**

2012 3月号

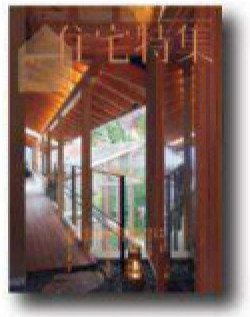
定価＝2,000円



[特集]**光と住宅**
Daylight House／**保坂猛**　ナチュラルイルミナンスⅡ／**遠藤政樹　名和研二**　ナチュラルストリップⅣ／**遠藤政樹　名和研二**　論考：光空間に試される脚本力　**遠藤政樹**
TUTANAGA HOUSE／**荒谷省午**　スキマノイエ／**富永哲史　横尾真**　HOUSE y／**河内一泰**　元浅草の住宅／**中央アーキ**　SLIT／**奥村和幸**　調布の家／**小川広次**　茅ヶ崎の家／**小川広次**　深大寺東の家／**小川広次**　寄稿：ある建築家の肖像　**高宮眞介**
[特集2]**軒先のデザイン**
樋口善信　益子アトリエ　川口通正　塩田能也　阪根宏彦　奥野公章　元良信彦　阿部勤　上野英二　城戸崎建築研究室　横内敏人　堀部安嗣　野沢正光
[コラム]住宅の設計力　**吉村篤一**
近作を訪ねて　**伊藤博之　藤原徹平**
[エッセイ]住宅を読む　**堀越英嗣　前田圭介**

2012 4月号

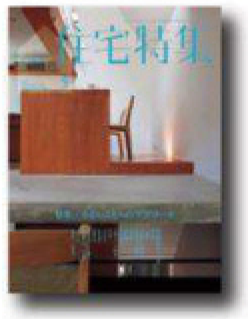
定価＝2,000円



[作品]伯翠荘／**吉村篤一**　ジオ メトリア／**原田真宏＋原田麻魚**　井原の家／**藤本寿徳**　荻窪の家／**早川邦彦**　成城の家／**岡田哲史**　Layer／**中原祐二**　MISHIMA HOUSE／**芦沢啓治**　新小岩の家／**飯田善彦**　中村の家／**加藤功**　Portico／**会田友朗＋久野紀光＋我伊野威之**　鞆の浦の住宅／**前田圭介**　鷹ノ巣の2世帯住宅／**納谷学＋納谷新**　牛久の家／**八島正年＋八島夕子**　郡の家／**神家昭雄**
[連載]素材再発見　第7回「再生素材・古材」　**安井正**
[コラム]住宅の設計力　**北山恒**
近作を訪ねて　**堀越英嗣　前田圭介**
[エッセイ]住宅を読む　**安田博道　藤原徹平**
[PROCESS VIEW]ジオ メトリア／**原田真宏＋原田麻魚**　Layer／**中原祐二**
[展覧会]「メグロアドレス—都会に生きる作家」／「土門拳写真展「和」—古寺巡礼第五集より—」／「ザ・タワー ～都市と塔のものがたり～」

2012 5月号

定価＝2,000円



[特集]**小さいことへのアプローチ**
志立別邸／**横河健**　43base／**三浦慎**　ZYX House／**中佐昭夫＋田中知博**　乃木坂ハウス／**岩岡竜夫＋渡邉光**　荏原の家／**荒木毅**　中崎の家／**榊原節子**　千歳船橋の住宅／**長谷川洋平**　YNH／**平瀬有人＋平瀬祐子**　東大泉の家／**杉浦英一**　川に寄り添う家／**水石浩太**　青戸の家／**田中秀弥**　梅島の建物／**齋藤由和**　BW3／**中辻正明＋中辻雅江**　Dig In the Sky／**竹口健太郎＋山本麻子**　南沢の小住宅／**若原一貴**　目黒本町の住宅／**鈴野浩一＋禿真哉**
[コラム]住宅の設計力　**曽正太郎**
[エッセイ]住宅を読む視線　**安部良**
つくり手とのコラボレーション　**城戸崎博孝×二ツ谷憲彦**
建築家の家具　**泉幸甫　斉藤名穂**
[展覧会]レポート：ハギエンナーレ2012　**宮崎晃吉**
「縮退時代における都市の記述法へ」／「甦った西本願寺「伝道院」と伊東忠太展」／「多様な光のあるガラス建築展」

2012 6月号

定価＝2,000円



[特集]**オリジナルメイキング2012**
凱風館／**光嶋裕介**　川越の家／**手嶋保**　アース・ブリックス／**山下保博**　N邸／**新田有平＋丸山美紀**　狭山丘陵の家／**佐藤武見**　等々力の二重円環／**藤原徹平**　HOUSE S／**芦沢啓治**
[作品]土橋邸／**妹島和世**　空の見える下階と街のような上階／**栗原健太郎＋岩月美穂**　石神井町の家Ⅲ／**高野保光**　大宮の家／**長坂大**　Folded W／**駒田剛司＋駒田由香**
[連載]建築家自邸からの家学び　第10回 前編　松原の家　**真壁智治　東京都市大学 手塚貴晴研究室　小室匡示　古田陽子　内藤恒方　内藤嬰子**
[コラム]住宅の設計力　**渡辺康**
[エッセイ]特集を読む　**東海林弘靖**
つくり手とのコラボレーション　**城戸崎博孝×二ツ谷憲彦**
住宅を読む視線　**荒谷省午**
[コンペ作品募集]第8回 ダイワハウスコンペティション


横河健 作品集
好評発売中
6月30日（土）17:30～19:30、高知講演会開催。申し込み受付中。
詳細はhttp://www.japan-architect.co.jp/jp/download/
●発行
株式会社 新建築社
東京都千代田区霞が関三丁目2番5号
霞が関ビルディング17階 〒100-6017
tel.03-6205-4380 fax.03-6205-4386
http://www.japan-architect.co.jp
定価：5,000円＋税
判型：B5変型
頁数：304頁
初期から最新の住宅、
20作品を収録
待望の初作品集